

『文殊師利根本儀軌經』所説の
パタの密教儀礼について

大正大学大学院仏教学部仏教学専攻 研究生

学籍番号 1407503

大塚 恵俊

目次

研究篇

<序論>

第1章 『文殊師利根本儀軌經』の概要

| | |
|------------------------------|---|
| 1.1. 『文殊師利根本儀軌經』について | 1 |
| 1.2. 『文殊師利根本儀軌經』の基本資料 | 1 |
| 1.3. 『文殊師利根本儀軌經』に関する主な先行研究 | 2 |
| 1.4. 本研究の目的と方法 | 4 |
| 1.5. 『文殊師利根本儀軌經』第1章から第10章の構成 | 6 |

第2章 パタについて

| | |
|-----------------------------------|---|
| 2.1. 梵語における「パタ(Paṭa)」の語義 | 9 |
| 2.2. 『文殊師利根本儀軌經』における「パタ(Paṭa)」の語義 | 9 |

<本論>

第1章 パタ作製儀則(1) — 画布の作製規定を中心として —

| | |
|----------------------------------|----|
| 1.1. 『文殊師利根本儀軌經』所説の主要なパタ作製儀則について | 13 |
| 1.2. 各章の構成 | 14 |
| 1.3. 最勝パタ | 16 |
| 1.3.1. 画布の作製規定 | |
| 1.3.2. 画布の作製を担う職人の浄化儀礼 | |
| 1.3.3. 三種のパタの画布の大きさ | |
| 1.4. 中位パタ・小位パタ | 22 |
| 1.5. 第四パタ | 24 |
| 1.5.1. パタ作製儀則説示の契機 | |
| 1.5.2. 六字真言の説示 | |
| 1.5.3. 画布の作製規定 | |
| 1.6. 各章の画布作製儀則の関係について | 29 |

第2章 パタ作製儀則(2) — 作画規定を中心として —

| | |
|-----------------------------|----|
| 2.1. 最勝パタ | 33 |
| 2.1.1. 最勝パタに描かれる尊格 | |
| 2.1.1.1. 十六菩薩 | |
| 2.1.1.2. 八如来 | |
| 2.1.1.3. ヤマーンタカとターラー | |
| 2.1.1.4. 行者 | |
| 2.1.2. 最勝パタに描かれる情景 | |
| 2.1.3. トンワトゥンデン図との比較 | |
| 2.2. 中位パタ | 47 |
| 2.2.1. 中位パタに描かれる尊格 | |
| 2.2.1.1. 菩薩 | |
| 2.2.1.2. 八如来 | |
| 2.2.1.3. 天衆 | |
| 2.2.2. その他の中位パタの特徴 | |
| 2.3. 『文殊師利法寶藏陀羅尼經』所説のパタ | 55 |
| 2.3.1. パタに描かれる諸尊 | |
| 2.3.2. 文殊の八字真言 | |
| 2.4. 小位パタ | 59 |
| 2.4.1. 小位パタに描かれる尊格 | |
| 2.4.2. 小位パタと六字文殊成就法のパタ | |
| 2.4.2.1. 六字文殊成就法の関連文献 | |
| 2.4.2.2. 六字文殊成就法のパタの画像について | |
| 2.4.2.3. 小位パタと六字文殊成就法のパタの比較 | |
| 2.5. 第四パタ | 65 |
| 2.5.1. 第四パタに描かれる尊格 | |
| 2.5.2. 第四パタの画像の特徴 | |
| 2.6. 各章のパタ作製儀則の関係について | 68 |

第3章 パタの密教儀礼について

| | |
|--|----|
| 3.1. パタを見る功德 | 77 |
| 3.2. パタと密教儀礼 | 81 |
| 3.2.1. 最勝パタ成就法 | |
| 3.2.1.1. 最勝パタ成就法の概要 | |
| 3.2.1.2. パタ成就法を實踐する資格 — 灌頂を受けることの必要性 — | |
| 3.2.1.3. 最勝パタに描かれる行者の意義 | |
| 3.2.1.4. 最勝パタ成就法による悉地について | |
| 3.2.1.5. パタ成就法と見仏 | |

<結論>

『文殊師利根本儀軌經』所説のパタの密教儀礼について 101

<参考文献>

————— 資料篇 —————

<テキスト>

第 4 章 Prathamapaṭavidhānavisaraḥ 1
第 5 章 Dvītiyaḥ paṭavidhānavisaraḥ 37
第 6 章 Tṛtīyaḥ kanyasapaṭavidhānaḥ 47
第 7 章 Caturthaḥ paṭavidhānapaṭalavisaraḥ 53
第 8 章 Uttamasādhānopayikakarmaṭalavisarāt prathamāḥ 71

<試訳>

第 4 章 最勝パタ作製儀則 1
第 5 章 中位パタ作製儀則 23
第 6 章 小位パタ作製儀則 29
第 7 章 第四パタ作製儀則 33
第 8 章 最勝パタ成就法第一 43

<復元図試案>

最勝パタ

最勝パタ諸尊表
最勝パタ復元図試案

中位パタ

中位パタ諸尊表
中位パタ復元図試案

小位パタ

小位パタ諸尊表
小位パタ復元図試案

第四パタ

第四パタ諸尊表
第四パタ復元図試案

<参考資料>

トンワトゥンデン図

—— 研究篇 ——

< 序論 >

第1章 『文殊師利根本儀軌經』の概要

1.1. 『文殊師利根本儀軌經』について

『文殊師利根本儀軌經』(*Mañjuśrīyamūlakalpa*¹, または *Mañjuśrīmūlakalpa*, 以下 MMK と略)は, Bu ston によって確立されたインド密教經典の四分類法に従えば, 所作タントラに位置づけられている². 周知の通り, この分類法はインド密教の發展過程とほぼ符合しており, この点を勘案すれば, MMK は最も初期の段階に位置づけられていることになる.

しかし実際には, 後代のインド密教の特徴を色濃くする章も含まれており³, 全 55 章を擁する現行の梵文出版本(下記 1.2.基本資料<D>)を一律にインド初期密教⁴經典に位置づけることはできない. また, 本經は膨大な分量をほこるだけでなく, 種々雑多な密教儀礼の儀則が集成されており, その教説内容が多岐にわたることも知られている. このような本經の性格をくみ取って, Przulski[1923, p.301]は本經を一種の「百科事典」と称している.

1.2. 『文殊師利根本儀軌經』の基本資料

MMK には, 20 世紀初頭に南インドで発見された Trivandrum 写本を中心とし, 数本の写本が現存している. 本經の写本に関する情報, 対応する蔵漢文献, および関連文献は, 『梵語仏典』(p.75-79)と, 最新の情報を加味した各写本の詳細を始めとして, 種々の文献資料に関する情報が網羅された Delhey[2012]があり, 筆者が新たに加えるべき事柄はない. そこで本研究では, 下記のように, MMK の基本資料として本經全体にわたって汎用性の高い文献資料のみを提示することにした. なお, 資料篇として付す MMK 第 4 章から第 8 章の試作テキストに関する文献資料に関しては, 資料篇冒頭の凡例の中で改めて提示している.

<梵文写本>

<A> Trivandrum MS. Deposited in the Oriental Research Institute and Manuscripts Library, Thiruvananthapuram (Serial no. 1867; Mss. no. C 2388)⁵. → (使用不可能)⁶

 Tokyo University MS. No. 275 in Matsunami's catalogue.⁷

<C> National Archives (Kathmandu) MS. Microfilmed by the NGMPP (no. A 39/4.)⁸.

<梵文出版本>

<D> T.Gaṇapati Śāstrī (ed.), *The Āryamañjuśrīmūlakalpa*, 3 volumes (Trivandrum Sanskrit Series vol.70, 76 and 84.), Trivandrum: 1920, 1922, 1925.

<E> P. L. Vaidya (ed.), *Mahāyānasūtrasaṃgraha part II (Āryamañjuśrīmūlakalpa)*, Buddhist Sanskrit Texts No.18, Darbhanga: 1964.

<チベット語訳>

<F> 'phags pa 'Jam dpal gyi rtsa ba 'i rgyud. (Derge edition no.543; Peking edition no.162.)⁹

<チベット語訳校訂本>

<G> Marcelle Lalou, *Iconographie des étoffes peintes(paṭa) dans le Mañjuśrīmūlakalpa*, Paris. 1930. (=Lalou[1930]).

<漢訳>

<H> 天息災¹⁰訳『大方広菩薩藏文殊師利根本儀軌經』大正 no.1191(vol.20).

これらの基本資料の詳細は、上記の Delhey[2012]において提示されているため、ここでは簡潔にふれておくことにしたい。まず本経には、唯一の完本である<A>Trivandrum 写本が現存する。それゆえ、<A>は資料的価値の最も高い資料といえるが、現在その入手は困難を極める状況にある。または、現行の出版本<D>における約4章分¹¹、<C>は、<D>における約14章分¹²に、断片的に対応している。

次に<D>は、その Preface¹³によれば、<A>のいわゆる転写テキストとして出版されたが、これまでの先学たちの<D>に対する評価は決して良好ではない¹⁴。実際、筆者も試作テキストの整定作業において、<D>には単純な写本の誤読を思わせる箇所をいくつも見いだしたことから、先学たちの意見に賛同せざるを得ない。この<D>に若干の校訂を加えた再版本が<E>である。ただし、<E>も saṃdhi の変更のみならず、文法的な解釈が加わる校訂に至るまで、その根拠を何ら提示していないことから、<D>、<E>の両出版本の取り扱いには十分な注意を払う必要がある。

また MMK には、対応するチベット訳<F>と漢訳<H>が現存している。この<F><H>と、<D><E>の対応関係は、飯塚[1997, pp.96–100]において文献対照表が提示されている。なお、この文献対照表には、先行研究において指摘された本経を構成する各章と個別に対応する漢訳文献の情報も提示されている。

最後に<G>は、本経第4章から第7章の仏語訳と、チベット大蔵経北京版およびナルタン版を校合せせたチベット語訳校訂本を報告している。その翻訳研究の中では、梵本<D>の読みに対する校訂案を提示する箇所もあり、本研究においても参照した¹⁵。また、<G>の研究成果は図像学の範疇にもわたっており、この点は次項においてふれることにする。

なお、本経には註釈類は見いだされておらず¹⁶、また若干の例を除いて¹⁷、本経の記述を教証として引用するような文献も報告されていない。

1.3. 『文殊師利根本儀軌經』に関する主な先行研究

では次に MMK に関する主な先行研究について整理していきたい。多岐の分野にわたる内容を有する本経の中でも、まず研究対象となったのが、成立年代をめぐる問題である。この問題に対して先駆的な成果¹⁸をあげたのが Przulski[1923]である。この Przulski[1923]を軸として、本経の成立問題は様々な形で取り上げられていくことになるが、その概要は、同じく本経の成立問題に言及する松長[1966, pp.412–415]、山下[1979, pp.1–3]によって整理されている。なお、両先学は、Przulski[1923]の成果を受けて展開していった、後の研究者による論考(Lalou[1930]、Macdonald[1962])にも言及している。

一方、MMK の成立問題に関する国内の研究では、上記の松長[1966]が、Przulski[1923]

の研究成果を評価しつつ、より詳細な文献学的アプローチによって、さらに一段階進んだ考察を提示している。すなわち、本経の特定の章を取り出し、梵本と漢訳の記述をその分量と教説内容(後代の密教的要素の有無)の視点から比較することによって、両本間の差異を見だし、一部の個別の章においても増広過程があることを指摘している。このような先行研究により、MMK は、その全体像を見ても、また本経を構成するある特定の一章を取り出しても、複雑な成立および編纂過程を経て現行の形態となったことが部分的に明らかにされてきた。なお、筆者(大塚恵[2011a][2011b])も松長[1966]の研究成果を補足する形で、本経第9章の編纂過程を考察したことがある。

次に本経の中で研究対象とされてきたのが、図像学の分野である。本経には、マンダラとパタ(Paṭa)¹⁹という二種の図像資料に関する種々の儀則が説かれている。それゆえ、図像学の分野においても、比較的古い時代から海外の研究者の研究対象として取りあげられている。まず、本経のマンダラの研究に本格的に着手したのが Macdonald[1962]である。Macdonald[1962]は、本経の中心となるマンダラとそのマンダラに関わる密教儀礼を説く本経第2章、および第3章を取り上げて仏語訳を提示し、さらに第2章のマンダラの復元図案を併せて報告している。

また国内では、山下[1979]が、本経第2章所説のマンダラと胎蔵マンダラとの密接な関係に言及すると同時に、本経所説のマンダラやパタを概観し、Przyluski[1923]の提唱する本経の段階的な成立過程を、図像学的視座から検証している。飯塚[1998]も、第2章のマンダラ造立儀則を取り上げて、胎蔵マンダラとの密接な関係を指摘している。そして、飯塚[1999]は、試訳とともにマンダラに描かれる諸尊表、尊容表、および復元図案も提示している。しかし、本経第2章所説のマンダラを最も精緻に考察してきたのが、田中博士による一連の研究であろう。田中[1987, p.89]において本経第2章のマンダラを胎蔵マンダラの一系譜として位置づけて以来、その研究を進展させ、田中[2010a, pp.96–102][2012]では、開華王如来を軸として、本経第2章のマンダラと胎蔵マンダラが密接な関係にあることを緻密に論証している。なお、田中[2010a, pp.96–102][2012]には、Macdonald[1962]、飯塚[1998]に対する批判的な見解が示されている。このように、本経のマンダラに関する研究は、第2章を中心になされており、いずれも胎蔵マンダラとの関係の中で論考されてきたといえよう。

次に本経において、マンダラと並んで重要な位置にあるのがパタである。言うまでもなく、本研究で扱うテーマであるが、このパタに関する先駆的な研究には Lalou[1930]があげられる。Lalou[1930]は、第4章から第7章のパタを作製するための儀則を説示するセクションを中心に提起して、仏語訳とチベット語校訂テキスト(=前節 1.1.<G>)を提示している。そして、その Introduction においてパタの図像の概要が整理され、末尾には各章所説のパタの復元図案が付されている。ただし、この復元図案は、後述する田中[2010b, pp.6–7]において本経第4章所説のパタに比定できる作例が見出されたことから、再検討の余地が指摘されている。また、Lalou[1936]は、チベット語訳の形で現存する *Tārāmūlakalpa* と本経の密接な関係を明らかにしており、*Tārāmūlakalpa* に見られる MMK 所説の一連のパタ作製儀則との平行を提示している(Lalou[1936, pp.332–337])。

一方、図像学的視座から距離を置き、パタの画布を作製する過程に注目した研究に Kapstein[1995]がある。Kapstein[1995, pp.245–256]では、第4章所説のパタ作製儀則の部分

訳と、その概要を整理している。

また国内の研究では、上記の山下[1979]が本経所説のパタを概観し、その図像学的特徴に言及している。さらに近年の画期的な研究成果として、田中[2010b]があげられる。田中[2010b]は、現存する作例が極めて乏しいパタにおいて、本経所説のパタをほぼ忠実に近代まで伝えていたことの証左となる貴重な作例を見いだした。この研究成果によって、文献と図像を対照させた研究が可能となり、本研究もその恩恵を受けている。

次に、密教儀礼を中心とした視座から本経に見られる特徴について言及したのが、前田[1972]である。前田[1972]では、本経第2章や第9章所説の真言を取り上げて呪術的な機能を考察しつつ、インド密教の形成過程に言及している。そしてその背景には、いわゆるヒンドゥー教の神々を仏教に導入する意図があった点を指摘している。さらに近年では、ヒンドゥー教と仏教のタントリズムにおける密接な関係が徐々に明確にされつつあり、たとえば、シヴァ教の儀軌を取り込んだ旨を示す本経第2章の記述は、Sanderson[2009, pp.128-132]、種村[2013, pp.78-79]において注目されている。このように、本経はヒンドゥー教とのパラレルな関係を模索する上で有益な情報を提供している。その他にも本経所説の種々の密教儀礼を中心に挙げたものとして Wallis[2002][2009]があり、本経の部分訳とともに諸儀礼の考察がなされている。

最後に、本経の梗概を提示したものとして、堀内[1996a, pp.3-82]、Wallis[2002, Appendix A]がある。前者は三分冊で発表された Gaṇapati 本(=前項文献資料一覧<D>)の第二分冊までの梗概を提示し、後者は梵本全55章すべての梗概を提示しており、本経の全体像を知る上で有益である。

1.4. 本研究の目的と方法

前項の先行研究の整理を通じて言及したように、MMK にはマンダラやパタといった密教儀礼の実践において重要な機能を有する資具の制作方法、およびそれに伴う種々の密教儀礼の儀則が数多く説かれている。周知の通り、前者のマンダラの研究は、本経のみならず、初期から後期にわたる幅広い密教文献に及んでおり、図像学の視座や密教儀礼を中心とした視座から、近年目覚ましい進展を見せている。その潮流の中、本経第2章のマンダラが胎蔵マンダラの形成過程において重要な位置にあることが明らかにされたのは、前項で言及した先行研究の通りである。しかしながら、後者の本経のパタに関しては、前項の Lalou[1930]、田中[2010b]に代表される研究があり、図像学の範疇から進展が見られるものの、未だ不明なところが多い。

そもそも本研究でいうところのパタ(pāṭa)とは、仏教固有の主題を画布に絵画的に表現した仏画であり、その原初形態は、定金[1994]によって礼拝用の仏画に求められている。また田中[2010a, pp.44-48]によれば、三尊形式を基調とした群像表現²⁰を特徴とするパタが、中央の楼阁内に三尊を配置し、風景描写を伴い鳥瞰的に描かれる叙景マンダラへと展開し、さらに幾何学的構造を有する本格的なマンダラへと発展していったという。そして田中[2010a, p.46]は、このようなパタからマンダラへの分岐点をインド初期密教經典である『牟梨曼陀羅呪経』²¹に見ている。

このように図像学の範疇からは、パタはマンダラの原初形態の一系譜に位置づけること

が可能なようである。ここで注意しておきたいのは、パタはマンダラに密教儀礼の資具としての役割を独占され、田中[2010a, p.46]が分岐点として設定する『牟梨曼陀羅呪經』以降のインド密教經典から姿を消すわけではない。すなわち、少なくともパタはマンダラと密教經典の中で共存しているわけである²²。しかしながら、管見の及ぶ限り、密教儀礼上の機能を考慮する視座からパタを総合的に研究し、さらにマンダラとの関係を明確に位置づけることはなされていない。マンダラにしてもパタにしても、密教經典の中では、常に何かしらの儀礼に用いられることでその役割を全うしているはずであり、密教儀礼の資具としての視座からも両者の関係が明確に位置づけられるべきであろう。

そこで筆者は、初期密教經典に位置づけられ²³、パタに関する情報が豊富であるMMKに注目し、前述したようなパタに関する問題点の解明の第一歩として、インド密教の初期段階においてパタがいかなる密教儀礼上の機能を有していたのかを考察していきたい。そのためには、本經所説のパタの図像の特徴を詳細に知ることが不可欠であり、この作業をふまえることで、パタを用いた密教儀礼に関するより精緻な論考が可能となるはずである。

その基礎作業として、本研究では第一に、現存する梵蔵漢の諸資料を用いたMMKの梵文テキストの整定、ならびに試訳の作成に取り組んでいる²⁴。現行の梵本は全55章からなるが、そのうちの第4章から第7章には本經の主要な四種のパタの作製法が説かれ、続く第8章にはパタを用いた密教儀礼が説かれている。そこで筆者は、当該箇所をパタの作製法とそのパタを用いた密教儀礼を説くセクションと位置づけて精読することにした²⁵。

第二に、前述の文献研究に基づき、パタ作製儀則の詳細を明らかにする。パタ作製儀則は、パタの画布を作製する工程と作画の工程に分かれているが、Kapstein[1995]が注目するように、特に第4章所説の画布の作製工程は実に詳細に記されており、重要な情報を提供している。したがって、この画布の作製工程を取り上げた後に、作画法で明かされる図像に関する記述を抽出し、図像学的見地から本經所説の主要な四種のパタの特徴について考察する。なお、その際には、先行研究によって指摘されている関連文献所説のパタとの比較も試みる。これら一連の考察によって、本經所説の主要な四種のパタを整理し、パタの密教儀礼を緻密に考察する手立てとしたい。

第三に、本經所説のパタに関する密教儀礼を取り上げて、その実態を解明する。パタの儀礼を中心に扱う論考はこれまでほとんどなされてこなかったため、本研究では、儀則に説かれる種々の要素を一つずつ取り上げて体系的に整理していく。

以上のような手段によって、本經の文献資料を精読し、パタの作製法からパタを用いる実践行に至るまでの種々の所作や儀礼的要素を取り上げて、本經所説のパタの密教儀礼を明らかにするのが、本研究の目的である。このような作業を経たとき、本經を通じて、インド密教の初期段階におけるパタがいかなる機能を有し、さらにはマンダラとどのように関係していたのかを知ることができるだろう。

1.5. 『文殊師利根本儀軌経』第1章から第10章の構成

本章の最後に、1.2.で提示した先行研究の中から MMK の梗概をまとめた堀内[1996a, pp.3–82], Wallis[2002, Appendix A]を援用し、本研究の対象となるパタや、パタの密教儀礼を説く第4章から第8章を含めた本経冒頭部10章分の構成を整理しておく。

<表1：MMK 第1章から第10章の構成>

| 各セクションの主題 | | 章 | 章末のコロフォン | 主な教説内容 |
|-----------|------------|---------------------------------|---|---|
| §1 | 導入 | ch.1 (pp.1–24) ²⁶ | saṃnipāta- parivartaḥ | 文殊の教説における無数の諸尊の集会。 |
| §2 | マンダラに関する儀則 | ch.2 (pp.25–52) | maṅḍalavidhi- nirdeśaparivartaḥ | マンダラ儀礼に用いられる真言の説示。 マンダラの制作法の説示 灌頂儀礼の説示。 |
| | | ch.3 (pp.53–54) | maṅḍalavidhāna- parivartaḥ | 簡素なマンダラの制作法の説示。 |
| §3 | パタの作製儀則 | ch.4 (pp.55–67) | prathamapaṭa- vidhānavisaraḥ | 最勝パタ作製儀則の説示。 |
| | | ch.5 (pp.68–70) | dvitīyaḥ paṭavidhānavisaraḥ | 中位パタ作製儀則の説示。 |
| | | ch.6 (pp.71–72) | trītiyaḥ kanyasapaṭa- vidhānaḥ | 小位パタ作製儀則の説示。 |
| | | ch.7 (pp.73–77) | caturthaḥ paṭavidhāna- paṭalavisaraḥ | 第四パタ作製儀則の説示。 |
| §4 | パタの密教儀礼 | ch.8 (pp.78–80) | uttamasādhānopayika- karmapaṭalavisarāt prathamah | 最勝パタ成就法の説示 |
| | | ch.9 (pp.81–84) | dvitīyaḥ uttamasādhānopayika- karmapaṭalavisaraḥ | 呪術的治病法の説示。 最勝パタ成就法の説示。 |
| | | ch.10 (pp.85–92) | uttamapaṭavidhāna- paṭalavisaraḥ | 種々の最勝パタ成就法の説示。 |

¹ Delhey[2012, pp.70–71.]は、本經の詳細な写本調査に基づいて、原初形態の經題が *Mañjuśriyamūlakalpa* であったことを指摘している。また Edgerton は、ī 語幹から a 語幹(-iya) への転化という Buddhist Hybrid Sanskrit の変則的な文法上の問題に関して、本經に確認される Mañjuśriya の形が語幹となっている用例を典拠としてあげている(Cf. BHSgram. 10.4.).

² Cf. Wayman[1973, p.237], 西岡[1983, p.57].

³ Cf. 松長[1966]

⁴ 本研究で用いる「初期密教」の語は、松長[1980, pp.135–138]において示されている解釈に基づいて使用している。

⁵ Cf. *Alphabetical Index of the Sanskrit Manuscripts in the University Manuscripts Library Trivandrum* (University of Kerala Trivandrum Sanskrit Series no. 186.), vol.1, p.75.

⁶ Trivandrum 写本の詳細は Delhey[2012, pp.56–58]を参照されたい。なお、Delhey 氏は Trivandrum 写本の閲覧権利を有しており、この写本に関する貴重な調査報告がなされている。その成果の一端によれば、Trivandrum 写本の年代は 11 世紀頃まで遡ることも不可能ではなく、その保存状態の良さから鑑みると、ネパールで書写された可能性もあるという。また Delhey[2012, p.57, n.14]に示される、インド政府によって立ち上げられた National Mission for Manuscript に関する情報は、今後の当写本の扱われ方を含めて注目されるべきである。

⁷ Cf. *A Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the Tokyo University Library*, Compiled by Seiren Matsunami. なお「東京大学総合図書館所蔵南アジア・サンスクリット語写本データベース」(<http://utlsktms.ioc.u-tokyo.ac.jp/index.html>)より写本の閲覧が可能であったが、2014 年 9 月現在、一時的に利用ができなくなっている。

⁸ Cf. 森口[1976], Moriguchi[1989, p.12], Delhey[2012, pp.62–70]. 特に Delhey は、森口[1976]の中で未解決だった当写本末尾に付されて書写されている文献を *Divyāvadāna*(ch.33)に包摂されている *Śārdūlakarṇāvadāna* に比定している(*Śārdūlakarṇāvadāna* の関連文献は平岡[2007b, p.304]を参照)。

⁹ このチベット語訳は、インド人学僧 Kumārakalaśa とチベット人翻訳官 Śākya blo gros によってなされおり、Macdonald [1962, pp.16–17]によれば、11 世紀前半に翻訳されたと考えられる。なお、チベット訳の經題(*'Jam dpal gyi rtsa ba 'i rgyud*)を還梵すれば、*Mañjuśrīmūlatantra* とするのが妥当であろう。なお、このチベット訳の經題に関する問題をめぐっては Seyfort Ruegg[1964, p.82(p.92 n.7)]が、Bu ston がその著作の中で MMK に言及する際に *'Jam dpal gyi rtsa ba 'i rtog pa* と示していることを指摘している。また本經のチベット語訳には、いわゆる旧訳の存在をめぐると論考もなされており、詳細は川越[1980, p.137, n.2], Imaeda[1981]を参照されたい。

¹⁰ 本經の漢訳者である天息災をめぐっては、史伝の記述に基づく、法天あるいは法賢との同人説がある。しかし、柴田[1965]によれば、「天息災改名法賢」説をとるべきだとする。

¹¹ Cf. 『梵語仏典』 p.76, Delhey[2012, p.56]

¹² Cf. 森口[1976], Delhey[2012, pp.62–70]

¹³ Preface の末尾には、“the text in this edition is adopted exactly as it is found in the original manuscript.”とある。

¹⁴ E.g. Lalou[1930, p.15–16], Jayaswal and Rāhula[1934, pp.2–3].

¹⁵ Cf. 資料篇<凡例>

¹⁶ Cf. 松長[1966, p.408]

¹⁷ Cf. Delhey[2012, p.59, n.27]. なお、本經第 53 章には、インド王朝史やインド仏教史に関

する内容が説かれており、いわゆる「プトン仏教史」に多大な影響を与えていたことが明らかにされている(Cf. Jayaswal and Sāṅkṛityāyana[1934], 塚本[1966, pp.67–69, pp.137–138.], 前田[1976], 川越[1980]).

¹⁸ 松長[1966, pp.411–413]は、本経の成立問題を扱う先行研究について整理しており、Bhattacharyya[1932, p.19], Dutt[1955, p.263–264], Snellgrove[1957, p.69]などによって言及されている本経の成立年代に対し、十分な論証がなされていないことを指摘している。

¹⁹ 本研究における「パタ(Paṭa)」の語義は、研究篇<序論>第2章を参照されたい。

²⁰ 肥塚[1985, pp.279–281]は、三尊形式から大乘経典の変相図(群像表現)への展開に言及している。

²¹ Cf. 高田[2000], 大塚伸[2004]

²² たとえば、インド中期密教経典から後期密教経典への架け橋として位置づけられる *Śrīparamādya*「般若分」各章には、マンダラとパタの両方が説かれている。Cf. 大塚恵[2012].

²³ 本章 1.1. で言及したように、本経を構成する各章を一律に初期密教の時代に成立したと見ることはできない。しかし、研究篇<本論>第2章で言及するように、本研究で扱うパタ作製儀則を説く第4章から第7章は、700年前後を活躍年代とする菩提流志によって漢訳された諸文献との密接な関係が見られる。それゆえ、第4章所説の最勝パタを用いた密教儀礼の儀則を説く第8章も、同時代に成立していたことが見込まれ、本研究が対象とする第4章から第8章は、いわゆる初期密教の時代に成立したと見て問題ないだろう。

²⁴ その成果として、本研究には資料篇に梵文試作テキストと試訳を付している。

²⁵ したがって、梵文試作テキストと試訳を作成する対象も、本経の第4章から第8章であり、この作業に関する詳細は、本研究に付した資料篇の凡例を参照されたい。

²⁶ 以下、()内は 1.2. の文献資料<D>の Gaṇapati 本のページ数を示す。

< 本論 >

第2章 パタについて

2.1. 梵語における「パタ(Paṭa)」の語義

研究の本題に入る前に、まず本研究で扱う Paṭa の語義について確認しておくことにしたい。梵語の語義や語源に詳しい辞書¹⁾によれば、Paṭa の語源は√paṭ に求められる。動詞√paṭ には「行く」「動く」や「割る」「裂く」などの意味があるが、第10類の変化、あるいは使役形の形である paṭayati には、「つなぐ」「結ぶ」「包む」「巻き付ける」の意味がある。したがって、この paṭayati の形から、「織物」「布」「衣服」「ヴェール」の意味を有する名詞形 paṭa が生じたと考えられ、さらに paṭa の有する意味が、文字や絵画の描かれる「画布」へと派生していったと考えられる。

なお、次項 2.2. で言及するように、密教儀礼の資具として用いられる「パタ」とは、綿糸を織り上げて作製した「画布」に描かれた仏画であることから、密教儀礼を実践する文脈の中で「パタ」の語が用いられる場合、「画布」の意味よりもそこに描かれた「画像」に重点が置かれる場合が多い。それゆえ、このパタの語は、その文脈の中で単なる「画布」を意味しているのか、あるいは転じて画布に描かれた「画像」までを含意しているのかを十分に考慮する必要がある。

2.2. 『文殊師利根本儀軌経』における「パタ(Paṭa)」の語義

では次に、前項におけるパタ(Paṭa)の語義解釈をふまえ、パタの語が、本研究で扱う MMK 所説のパタ作製儀則やパタの密教儀礼の儀則において、どのように用いられているのかを整理しておきたい。

① パタの下地となる「画布」を意味する用例

[ch.4, 3-2-3.]

yadi jyeṣṭhapaṭaṃ bhavati caturhastavistūrṇam aṣṭahastasudīrgham etatpramāṇam hi tantu-vāyopacitaṃ kuryāt /

もし最勝[パタ]の画布とするならば、横4肘(hasta)、縦8肘であり、織工師が、その長さに正確に織り重ねるべし。

[ch.4, 3-2-3, v.25cd]

anupūrvaṃ tato śilpī paṭaṃ vāyeta yatnataḥ //

次に、織工師は、順番に熱心に画布を織るべし。

[ch.4, 3-2-3, vv.31–32ab.]

vicāraśīlī yatnena paṭasyāśeṣavāyanān /

samāpte tu paṭe prokte pūrvakarmasu nirmite //

pramāṇasthe ahīne ca kuryād bhadre 'hani samam /

手順に熟達した者が、熱心に画布の全ての織る作業を[なし]、画布の作製におけるこれまでの諸々の作業の終了が示され、不足のない正しい長さになれば、吉兆な日に平滑になすべきである。

②-A 資具としての「パタ」を意味する用例

[ch.4, 4, v.60.]

etat**paṭa**vidhānaṃ tu uttamaṃ jinabhāṣitam /
 saṃkṣiptaṃ vistarākhyātaṃ pūrvam uktaṃ tathāgataiḥ //

過去に如来たちによって詳細に説かれた、この最勝のパタの儀則が、要略して勝者(釈迦牟尼)によって説かれたのである。

[ch.5, 1.]

asti mañjuśrīr aparaṃ api tvadīyaṃ madhyamaṃ **paṭa**vidhānaṃ /
 文殊師利よ。さらにまた、汝の中位のパタの儀則がある。

[ch.6, 1.]

asti mañjuśrīr aparaṃ api **paṭa**vidhānarahasyaṃ tṛtīyaṃ kanyasaṃ nāma yat sarvasattvā
 ayatnenaiva siddhiṃ gaccheyuḥ /

文殊師利よ、さらにまた、あるゆる有情が勞せずして悉地に至るために、「第三の小位[のパタの儀則]」というパタの秘密の儀則がある。

[ch.7, 1.]

teṣāṃ duḥkhitānāṃ arthāyāvaśānāṃ vaśam ānītāya vaśyānāṃ abhayaḥpradāya, upāyakausalya-
 saṃgrahayā mantra**paṭa**vidhānaṃ bhāṣatu bhagavān / yasyedānīm kālāṃ manyase //

そのような苦しめられた者たちの利益のために、支配されない者たちを支配下にするために、支配下にある者たちに無畏を与えるために、巧みな方便の摂受によって、諸々の真言やパタに関する儀則を世尊は説きたまえ。今やそのときと汝は思いたまえ。

[ch.8, 2-4.]

tato bhagavataḥ śākyamuneḥ raśmayo niścaraṃti samantāc ca **paṭa** ekajvālībhūto bhavati /

すると、[パタに描かれる]世尊釈迦牟尼から諸々の光明が現れ、パタが遍く一つの光輝となる。

②-B 特にパタに描かれる「画像」が強く含意される用例

[ch.4, 3-3-1.]

pūrvābhimukhaḥ kuśaviṇḍakopaviṣṭaḥ susthitabuddhiḥ sarvabuddhabodhisattvagatacittaḥ
 sūkṣmavartikāpratigrhītapāṇir anāyāsacittaḥ taṃ **paṭam** ālikhet //

東を向いてクシャ草座に座して、堅固なる智を有し、一切の諸仏諸菩薩に向けられた心を有し、微細な絵筆を手に持ち、倦怠のない心を有する者(画師)が、そのパタ(画像)を描くべし。

[ch.4, 4, vv.62cd-634.]

pañcānantaryakāriṇaṃ duḥśīlān jugupsitān //
 sarvapāpapravṛttānāṃ saṃsārāndhāracāriṇāṃ /
 gatiyoninikṛṣṭānāṃ **paṭam** teṣāṃ na vārayet //
 darśanaṃ saphalaṃ teṣāṃ **paṭam** maunīndrabhāṣitam /
 drṣṭamātraṃ pramucyante tasmāt pāpāt tu tatkaṣaṇāt //

五無間罪をなした者、誤った習慣を有す者たち、非難される者たち、あらゆる罪を犯した者たち、輪廻の暗闇の中で生活する者たち、死後の所趣や生まれの下劣な者たち、

そのような者たちに、パタ[を見ること]を妨げるべきでない。彼らにとって、最勝の牟尼によって説かれたパタを見ることは有果であり、見ただけでその瞬間に、その罪から解放されるだろう。

上記のように、Pata の主な用例を整理すれば、①パタの下地となる「画布」を意味する用例、②資具としての「パタ」を意味する用例の二種に大別できるが、後者の中には特にパタに描かれる「画像」が強く含意される用例を確認することができる。この「画像」の意味に重点が置かれる Pata の用例は、研究篇〈本論〉第 3 章で言及するように、MMK 所説のパタの有する機能を探る上で非常に重要な資料となる。研究篇における筆者の論考や、本研究に付した資料篇の試訳は、このような筆者の Pata に関する語義解釈を前提とするものであり、一般的な資具の意味で Pata に言及する際には「パタ」と表記することにしたい。

なお「パタ」は、ネパールやチベットにも伝えられており、今なおその制作がなされている。特にチベットにおいて、「パタ」は「タンカ」と称され、仏教美術の一つとして親しまれており、その作例の種類も非常に豊富である²。

¹ ここでは、Otto Böhtlingk und Rudolph Roth(Sanskrit-Wörterbuch), M.Monier-Williams (Sanskrit English Dictionary), Manfred Mayrhofer(Etymologisches Wörterbuch des Altindiarischen) を参照した。

² Cf. Jackson and Jackson[1984], 田中[2001].

第1章 パタ作製儀則(1) — 画布の作製規定を中心として —

梵本全 55 章からなる本経には、大小様々なパタとその成就法が説かれている。その中でも、複数の章にわたる一群の儀則として編纂されているのが、第4章から第7章のパタ作製儀則(*paṭavidhāna*)である。それゆえ、広汎な内容が説かれる本経において、第4章から第7章までを、パタ作製儀則のセクションとして位置づけることが可能である¹。本経と同じ初期密教経典に分類される経典においても、パタ作製儀則が散見されるが、その多くがマンドラ造立に関する儀則に付随する形で説かれている²。したがって、初期密教経典においてパタに関する儀則は比較的多く説かれるものの、パタ作製儀則を説くことに特化した本経第4章から第7章は、より多くの有益な情報を提供してくれる貴重な資料といえる。

そこで本章では、第4章から第7章のパタ作製儀則のセクションを中心に取り上げて、その内容について整理していきたい。このような作業を通じて、本経はもちろん、関連文献所説のパタに関する密教儀礼をパタ作製儀則の見地から考察していきたい。なお、各章のパタ作製儀則の中の画像に関する規定は、多岐にわたり煩雑となるため、次章にまとめて考察することにし、本章では、作画の規定の前段階に相当する画布作製の規定を中心に見ていくことにしたい。

1.1. 『文殊師利根本儀軌経』所説の主要なパタ作製儀則について

まず、各章のコロフォンに基づけば、第4章は *prathamapaṭavidhānavisaraḥ*、第5章は *dvitiyaḥ paṭavidhānavisaraḥ*、第6章は *ṭṭīyaḥ kanyasapaṭavidhānaḥ*、第7章は *caturthaḥ paṭavidhānapāṭalavisaraḥ* とあり、順次「第一の広大なるパタ儀則」「第二の広大なるパタ儀則」「第三の短編のパタ儀則」「第四の広大なるパタ儀則」と解釈できる。また各章の儀則の中で、それぞれのパタに対して用いられている形容句に注目すれば、第4章は *uttama*, *śreṣṭha*, *jyeṣṭha*、第5章は、*madhyama*、第6章は、*kanyasa*, *kṣudra* などの語を確認できる³。そして、パタの大きさやパタに描かれる尊格の数も、これらの梵語の意味に対応するように、第4章→第5章→第6章の順に減少する⁴。したがって、各儀則で用いられているパタの形容句の意味と各パタの規模を考慮すれば、順次「最勝パタ」「中位パタ」「小位パタ」と称するのが妥当であろう。本研究においても、この呼称を用いることにしたい。ただし残念ながら、第7章のパタ作製儀則には、当該のパタに対する適切な形容句を見いだすことができないため、コロフォンの記述を採用し、「第四パタ」と称することにしておきたい。以上を整理すれば、下記の表のようになるだろう。

〈表1：各章のパタの呼称〉

| | パタの呼称 (筆者による) | コロフォンの記述 | |
|-----|------------------|---|---------|
| | | Skt. | 天息災訳 |
| 第4章 | 最勝パタ | <i>prathamapaṭavidhānavisaraḥ</i> | 上品幃像儀則品 |
| 第5章 | 中位パタ | <i>dvitiyaḥ paṭavidhānavisaraḥ</i> | 中品幃像儀則品 |
| 第6章 | 小位パタ | <i>ṭṭīyaḥ kanyasapaṭavidhānaḥ</i> | 下品幃像儀則品 |
| 第7章 | 第四パタ | <i>caturthaḥ paṭavidhānapāṭalavisaraḥ</i> | 第四幃像儀則品 |

1.2. 各章の構成

次に、各章のパタ作製儀則の特徴を整理していく前提として、その構成を提示しておきたい。

[第4章]

1. 文殊の請願
2. 釈迦牟尼の回答
3. 最勝パタ作製儀則
 - 3-1. 綿糸の作製規定
 - 3-1-1. 綿の浄化
 - 3-1-2. 童女の選定
 - 3-1-3. 日時の選定(吉祥な兆候)
 - 3-1-4. 日時の選定(不吉な兆候)
 - 3-1-5. 綿糸の作製
 - 3-2. 画布の作製規定
 - 3-2-1. 織工師の選定
 - 3-2-2. 織工師の浄化・土地の浄化
 - 3-2-3. 画布の作製
 - 3-3. 作画の規定
 - 3-3-1. 画師の選定・画具の選定
 - 3-3-2. 諸尊の作画規定
4. 最勝パタの讃嘆偈

[第5章]

1. 導入
2. 中位パタ作製儀則
 - 2-1. 諸規定の略説
 - 2-2. 諸尊の作画規定
3. 中位パタの讃嘆偈

[第6章]

1. 小位パタ作製儀則
 - 1-1. 諸規定の略説
 - 1-2. 諸尊の作画規定
2. 小位パタの讃嘆偈

[第7章]

1. 文殊の請願
2. 釈迦牟尼の回答

3. 六字真言
4. 第四パタ作製儀則
 - 4-1. 画布の作製規定
 - 4-2. 作画の規定
 - 4-2-1. 日時の選定
 - 4-2-2. 諸尊の作画規定
5. 第四パタの讚嘆偈

上記の梗概が示すように、各章に一種ずつパタ作製儀則が説かれていて、第4章が最も詳細なパタ作製儀則を提示している。その第4章のパタ作製儀則の内容を見てみると、作画の規定に関する記述が最も多くの分量を有しているが、綿糸の作製規定や、画布の作製規定に関する詳細な説明もなされており、パタを作製する工程の貴重な情報を提供している。この第4章の最勝パタ作製儀則の各工程については、研究篇〈本論〉1.3.において詳しく見ていく。

続く第5章・第6章は、第4章のパタ作製儀則と比べると著しく小規模になっている。これは、パタの作画規定以外を第4章のパタ作製儀則に依拠し、その大部分を省略しているためだが、この点は、研究篇〈本論〉1.4.において具体的な記述を取り上げて見ていく。

最後の第7章は、第4章から第6章には見られない六字真言を説く。その他にも、前三章には確認することのできない要素を有しているため、第7章は、もともとは前三章とは独立して制作されたパタ作製儀則であったことが疑われる。この第7章をめぐる諸問題は研究篇〈本論〉1.5.において詳細な考察を試みる。

1.3. 最勝パタ

1.3.1. 画布の作製規定

前節 1.2. で言及したように、MMK 第 4 章に説かれる最勝パタ作製儀則が最も詳細な内容を有している。また後述するように、第 5 章・第 6 章のパタ作製儀則は、第 4 章の規定にその大部分を依拠しているため、しばしばその規定の内容に省略が見られる。

そこで以下では、まず第 4 章の最勝パタ作製儀則に基づいて考察を進めていきたい。パタ作製の工程を簡単に整理すると、「綿糸の作製」→「画布の作製」→「作画」という三段階にまとめることができる。それぞれの工程では、童女(kumārī), 織工師(tantuvāya / śilpin), 画師(citrakara)が重要な役割を担っており、その選定において、以下のように様々な条件が示されている。

(1) 童女(kumārī)の規定 [MMK ch.4, 3-1-2.]

tato 'viditagrāmyadharmakumārīm brāhmaṇakulakṣatriyakulaprasūtām vaiśyakule prasūtām nātikṛṣṇavarṇayonivarjitām avikalām sarvāṅgaśobhanām mātāpitranuṣṅṛtām upośadhaparigrhītām utpāditabodhicittām kāruṇikām avadātavarṇām anyavarṇavivarjitām saṃkṣepataḥ strīlakṣaṇasuprasastacihnām, ...

次に、処女の童女で、バラモン族やクシャトリア族に生まれ、[あるいは]ヴァイシュヤ族に生まれ、[肌が]過度の黒色の種族でなく、[身体が]欠けることなく、五体満足で健全な身体を有し、両親の許可を得て、齋戒を保ち、菩提心を生じ、悲心を有し、[肌が]白色で、他の色を除いた童女を、要略すれば、女性の相のすばらしい特徴を有する童女を、...

(2) 織工師(tantuvāya / śilpin)の規定 [MMK ch.4, 3-2-1, vv.5-9.]

tantuvāyaṃ tato gatvā mūlyaṃ dattvā yathepsitam /
avyaṅgam akṛśaṃ caiva śukladharmasadāratam // 5 //
avyādhyārtam avṛddham ca kāśaśvāsavinirmuktam /
keśaśvetavinirmuktam aṣaṅḍam yonisatyajam // 6 //
anavadyam akubjaṃ caivāpāṅgapativarjitam /
saṃmatalakṣaṇopetaṃ praśastaṃ cārudaśanam // 7 //
śubhabuddhisamācāraṃ laukikīm vṛttim āśritam /
siddhikāmo 'tra taṃ yāced uttame paṭavāyane // 8 //
praśastās śubhavarṇe vā buddhimanto suśikṣitāḥ /
atyutkṛṣṭatamaiḥ śreṣṭhaiḥ paṭavāyanaśreyasaiḥ // 9 //

5ab. 次に、織工師のもとに行き、[織工師の]意のままの報酬を与えて、

5cd. [その織工師は]五体満足で健康体であり、清浄な法を常に拠り所とする者であり、

6. 病を患っておらず、年老いておらず、喘息ではなく、白髪ではなく、去勢されておらず、すばらしい種族から生まれた者であり、

7. 卑下される者ではなく、背が曲がっておらず、肢分を欠いた者ではなく、一目置かれる特徴を伴い、称賛され、美しい容姿で、

8. すばらしい智と行いを有し、世俗の生活に身を置く者、その者に、ここに悉地を求める者は、最上パタを織ることに關して請うべし。
 9. 称賛され、よきヴァルナに[生まれ]、智を有し、よく学んだ者たちであり、きわめて勝れて秀でたパタの織工師たちによって[作製されるべきである]。

(3) 画師(citrakara)の規定 [MMK ch.4, 3-3-1.]

aśleṣakai raṅgaiḥ sarvojjvalaṃ raṅgopetaṃ varṇakaṃ gṛhya pūrvenaiva vidhinā yathātantu-vāyayāpanenaiva lakṣaṇasamanvāgatena citrakareṇa ...

... susthitabuddhiḥ sarvabuddhabodhisattvagatacittaḥ sūkṣmavartikāpratigrhītapānir anāyāsa-cittaḥ taṃ paṭam ālikhet //

固着していない顔料によって全ての鮮明な顔料を伴う絵具とし、前述した織工師として採用する規定のような特徴を伴う画師によって、 ...

... 堅固なる智を有し、一切の諸仏諸菩薩に向けられた心を有し、微細な絵筆を手に持ち、倦怠のない心を有する者(画師)が、そのパタ(画像)を描くべし。

引用文(3)の下線部の内容は、引用文(2)で示される織工師の条件や身体的な特徴を指していると考えられるため、画師を選定する規定も、織工師と同様であることがわかる。そこで、改めて引用文(1)から(3)を確認すると、総じて、健康状態の良い者、良きヴァルナに生まれた者、作製作業に精通した者、仏教に対して理解がある者、以上の点に、各々の職人の条件を集約することができるだろう。画師の従事する作画規定は、研究篇〈本論〉第2章において詳細に取り上げることにし、今は、作画に至るまでの、画布を作製する工程を中心として見ていきたい。

画布を作製する各工程において、しばしば、香を塗ることや焚くこと、真言を唱えることによって、各作製作業を行う職人の浄化や守護、作業を行う場所の浄化、画布(材料となる綿糸を含む)の浄化がなされている⁵。後代の密教儀礼を扱う文献のように、組織立てて説かれた儀則ではないために、しばしば解釈の困難な場合があるが、特に重要だと思われる箇所を以下に引用して考察しておきたい。

1.3.2. 画布の作製を担う職人の浄化儀礼

まず全ての作業に先立ち、パタの画布の原料となる綿を下記の真言によって浄化する。

(4)[MMK ch.4, 3-1-1]⁶

oṃ śodhaya śodhaya sarvaviḥnaghātaka mahākārunika kumārarūpadhāriṇe / vikurva vikurva / samayam anusmara / tiṣṭha tiṣṭha / hūṃ hūṃ phaṭ phaṭ svāhā //

言うまでもなく、当真言における śodhaya は浄化を目的とする真言の機能を示唆している。また下線部は梵語の文法的な問題を伴っているものの、各々の語は、守護を担うヤマーンタカとターラーに対する呼びかけと考えられることから⁷、当真言は、浄化と同時に守護の機能も果たしていると考えられる。パタを作製する工程で唱えられる真言は、必ずしも明

確に指示されていないが、第4章の最勝パタ作製儀則で浄化や守護の機能を有すると考えられる真言は、引用文(4)に示した真言のみである。したがって、一連の工程において唱えられる真言は、特別な指示がなされていない限り、引用文(4)の真言を指すと考えて問題ないだろう。

次に、綿を紡いで綿糸を作製する工程を担う童女に対して下記のような儀礼が行われる。

(5)[MMK ch.4, 3-1-2]

... pūrvanirdiṣṭām kumārīm snāpayitvā śucivastraprāvṛtena sunivastām kṛtvā anenaiva mantreṇa mahāmudropetarakṣām kṛtvā śvetacandanakuṅkumaṃ niṣprāṇakenodakenāloḍya tatpicuṃ tām ca kanyām tenaiva mantreṇa saṃśodhanenābhyukṣayet / caturdiśaṃ ca kṣipet śvetacandanakuṅkumodakaṃ ity ūrdhvam adhaś ca vidikṣu / śvetacandanakuṅkumakarpūraṃ caikīkṛtya pūrvam dāpayet /

... 前述したような童女を沐浴させて、清浄な衣服を着せることによって適切に衣服を身に付けさせて、この真言によって、大印を伴う守護をなし、白檀とサフランを虫のいない水と混合して、そして、その綿とかの童女に対して、まさにかの浄化の真言[を唱える]とともに、灌ぐべし。そして、白檀とサフランを和合した水を四方にまくべきだと言われているが、[この四方とは]、上方、下方、四維[にもまくべきだということ]である。そして白檀とサフランと龍腦香を一つに和合し、東を向いて焼香させるべし。

まず引用文(5)において、点線部のように童女を指す語が *kumārī* から *kanyā* に代わっているが、おそらく同一人物を指していると考えてよいだろう。また下線部の *mantra* は、引用文(4)の真言であり、後者の下線部では、当該の真言を「浄化の真言」と称している。この一連の工程では、主に白檀とサフランを混ぜた水が重要な役割を果たしており、「浄化の真言」が童女に対して唱えられるとともに、その水が灌がれる。また、白檀とサフランを混ぜた水を四方四維、上方下方にまくことによって、作業を行う場所の浄化を行っていると考えられる。

次に織工師に関わる儀礼を見ていきたい。

(6)[MMK ch.4, 3-2-2]

sarvatra bhāṇḍaṃ rajjvādyupakaraṇāni ca mṛḍgomayābhyāṃ prakṣālya pratyagrāṇi ca bhūyo bhūyo pañcagavyena prakṣālayet / tato niḥprāṇakenodakena prakṣālya śvetacandanakuṅkumābhyāṃ abhyāṣiñcet śucau pṛthivīpradeśe apagatakolāhale vigatajanapade viviktāsane prasanne gupte puṣpārcite // tataḥ sādhakena saṃśodhanamantreṇaivāṣṭaśatābhimantritaṃ kṛtvā śvetasarṣapān caturdikṣv ity ūrdhvam adho vidikṣu ca kṣipet / tato tantuvāyam sarsapaiḥ samtādyā mahāmudrām pañcaśikhām baddhvā śikhābandham kurvīta / mahārakṣā kṛtā bhavati //

全ての場合で、器や縄などの道具を土と牛糞で浄化させて、また[一つの工程の]始め[の所作]ごとに、牛からもたらされる五種の生成物によって何度も[道具を]浄化させるべし。次に、虫のいない水で浄化させて、清浄な土地で、騒音から離れ、人里から離れ、孤独な住処で、平穏で、隠密で、花で供養されたところで、白檀とサフラン[を混

ぜた水]をまくべし。次に行者は、まさに浄化の真言によって[織工師に対して]108 返真言を唱えて、白芥子を四方に[とされているが]、上方、下方、四維[にも]にまくべし。次に、[行者が]織工師に[白]芥子をたたきつけて、五髻の大印を結び、髻を結ぶならば、偉大な守護がなされるだろう。

引用文(6)では、作業に用いられる道具の浄化、作業を行う場所の浄化、そして最後には、織工師の浄化と守護をなしている。そこで特に注目したいのが、下線部の白芥子を織工師にたたきつける儀礼である。おそらくこの儀礼は、織工師の有する罪障や悪業を取り除き、無事に清浄な画布を織り上げさせる意図を読み取ることができる。というのも、下記の文献に同様の儀礼を見いだすことができるからである。

(7)[*Sarvadurgatipariśodhanatantra*, (Skorupski[1983, p.176, 16–17.]・高橋[1986, §151])]⁸

tādādimantraiḥ sitasarsapatādamānaiḥ prakṣālyam asthi sitavastrasahitam //

たたきつける[儀礼]など[に用いる]真言[を唱える]とともに、白芥子をたたきつけながら、白衣と一緒に、骨が洗浄されるべきである。

Sarvadurgatipariśodhanatantra は、『初会金剛頂経』と密接な関係にある *Sarvavajrodaya*、『略出念誦経』とパラレルな記述を多く有しており、インド中期密教の行体系を知る上で重要な文献である⁹。と同時に、葬送儀礼に関わる密教儀礼の儀則も有しており¹⁰、引用文(7)は、後代のインド密教の葬儀文献 *Mṛtasugatiniyojana* において援用されていることが、種村[2004]によって確認されている¹¹。そこでは、死者を悪趣へ進ませないために、真言を唱えながら、火葬された死者の骨や衣に対して白芥子をたたきつける儀礼が説かれている。

ここで、引用文(6)における織工師に対する儀礼と比較すれば、いずれも「打つ」「たたく」を意味する *√taḍ* が用いられており、芥子をたたきつけることによって当儀礼を行っていることがわかる。生身の人間に対する儀礼と死者に対する儀礼という相違はあるものの、対象者の浄化を目的とし、対象者に薰習してしまった悪影響を及ぼす因子を払う儀礼行為であることには変わりはないだろう。

このように、最勝パタの画布作製儀則には、画布を作製する工程に携わる職人の浄化の儀礼が随所に説かれている。このような背景には、清浄な状態にある職人によってのみ、得難い功德と悉地をもたらすパタが作製されるという当儀則の制作者たちの態度をうかがい知ることができる。

なお、本項の最後に、最勝パタの画布の作製過程のまとめとして下記の表を提示しておく。

<表 2：最勝パタ作製工程の概略>

| | 所作の工程 | 補記 |
|-------|---|--|
| 綿糸の作製 | ①原料となる綿の浄化 (ch.4, 3-1-1.) ¹² | マンダラ阿闍梨 ¹³ による浄化の真言の読誦 |
| | ②紡績作業を行う <u>童女</u> の選定 (3-1-2.) | 処女であること、良き種族であること、五体満足で健全な身体を有すること、両親の許可を得ていること、齋戒を保つこと、菩提心を生じ、悲心を有すること、などの条件が課せられる。 |
| | ③童女の浄化と守護 (3-1-2.) | 浄化の真言の読誦 白檀とサフランを和合した水による浄化 |
| | ④諸仏諸菩薩の加持の要請 (3-1-2.) | 祈願文読誦 |
| | ⑤日時の選定 (3-1-3.～3-1-4.) | 吉祥な兆候と不吉な兆候の説示 |
| | ⑥綿糸の作製 (3-1-5.) | 糸の重量の規定 |
| | ⑦綿糸の守護 (3-1-5.) | 真言の読誦 ¹⁴ |
| 画布の作製 | ①織工師の選定 (3-2-1.) | 良き種族であること、五体満足で健全な身体を有すること、去勢されていないこと、世俗の生活に身をおいていること、技術力の高いこと、などの条件が課せられる。 |
| | ②織工師に対する対価の授与 (3-2-1.) | 勇ましい購入 ¹⁵ |
| | ③日時の選定 (3-2-2.) | 吉祥なる日の説示 |
| | ④織工師と土地の浄化 (3-2-2.) | 浄化の真言の読誦 清浄な水、香、白芥子などによる浄化 |
| | ⑥織工師の守護 (3-2-2.) | 五髻の大印 ¹⁶ を結ぶ |
| | ⑤画布の作製 (3-2-3.) | 最勝パタの大きさ：横 4hasta 縦 8hasta 中位パタの大きさ：横 2hasta 縦 5hasta 小位パタの大きさ：縦横 1sugatavitasti ¹⁷ |
| 作画 | ①画師の選定 (3-3-1.) | 織工師に同じ |
| | ②画師の浄化の浄化と守護 (3-3-1.) | 浄化の真言の読誦や香による浄化 |
| | ③作画 (3-3-2.) | 詳細は資料篇<復元図試案>を参照 |

1.3.3. 三種のパタの画布の大きさ

次に、前項 1.3.2.の補足として、各パタの基本情報の一つである画布の大きさと、パタの使用用途を示唆する重要な記述について言及しておきたい。まず、最勝パタ作製儀則は、三種のパタの画布の大きさについて、下記のようにまとめて言及している。

(8)[MMK ch.4, 3-2-3]

yadi jyesthapatam bhavati caturhastavistīṅgaṃ aṣṭahastasudīṅgham etatpramāṇam hi tantuvāyopacitam kuryāt / madhyamaṃ bhavati dvihastavistīṅgaṃ pañcahastadīṅghatvam / kanyasaṃ sugatavitastipramāṇam ardhahastadīṅghatvam / tatra bhāgavato buddhasya vitasti

madhyadeśapurusaṣṣapramānahastam ekam eṣa sugatasya vitastir iti kīrtiyate / anena pramāṇena prāmāṇyam ākhyātam /

もし最勝[パタ]の画布とするならば、横4肘(hasta)、縦8肘であり、織工師がその長さに正確に織り重ねるべし。中位パタとする[ならば]、横2肘、縦5肘である。小位[パタとするならば]、仏の1搦手(vitasti)の長さであり、[仏の]半肘の長さである。その中で、尊き仏の1搦手とは、中部地域の人の大きさの1肘であり、これが「仏の搦手」と呼ばれる。この尺度によって規準が説かれる。

引用文(8)の下線部が示すように、最勝パタは、横4肘(hasta)×縦8肘、中位パタは、横2肘×縦5肘である。続く小位パタの大きさを示す記述には混乱が見られ、点線部は、筆者の解釈をもとに整定した一応の読みを提示している。異読の詳細は、資料篇<試作テキスト>第4章の当該箇所を参照されたいが、この不確定な読みに一応の解決を与えてくれるのは、下記の引用文(9)の第6章冒頭の記述である。

(9)[MMK ch.6, 1-1]

pūrvanirdiṣṭenaiva vidhinā śilpibhiḥ sugatavitastipramāṇam tiryak tathaiva samam caturasram pūrvavat paṭaś citrāpayitavyaḥ pūrvanirdiṣṭai raṅgaiḥ //

引用文(9)は、小位パタの大きさを再説しており、引用文中に確認できる pūrva の語は、第4章の最勝パタの画布作製儀則の規定を指している。この規定にもとづけば、小位パタは縦横ともに仏の1 vitasti(sugatavitasti)の長さの正方形であることが読み取れる。したがって、混乱している引用文(8)の点線部直前には sugatavitastipramāṇam の語があり、この一語によって基本的な大きさの説明は完結されるために、点線部の語は削除されるべきかもしれない¹⁸。

また sugatavitasti という語にも言及しておく必要があるだろう。一般的に、1肘(hasta)=2搦手(vitasti)の換算式が成立する。しかし、引用文(8)の二重線の箇所の記述が示すように、仏の身体尺度と人間の身体尺度には大きな差があり、「仏の1搦手(vitasti)=中部地域の人の1肘(hasta)」という換算式が適応されている。それゆえ、仏の身体尺度は、人間の身体尺度の倍ということになるだろう。このような尺度をめぐる問題は、平川[1993, pp.447-449]によって言及されているように、律文献の中に諸説あることが確認されている。これは、伝承されていた尺度の換算式が部派によって異なるためだが、引用文(8)の記述に依拠するならば、本経は、仏の身体が人間の倍であるという説を採用していることになるだろう。

そして、本節最後に言及したいのが、下記のパタの使用用途を示唆する記述である。

(10)[MMK ch.4, 3-2-3, v.33]

pariṣphuṭam tu paṭam gṛhya daśābaddhānuśobhanam₁ /
venuyastyāvanaddham₂ tu paṭam gṛhya tato vrajet //

広げられて、ふちに美しい結び目を有した画布を取り、竹の棒で覆われた画布を取って、それから移動すべし。

下線部1より、パタのふちには美しい結び目があることが読み取れ、下線部2からは、パタの外周部が竹の棒で覆われていることが読み取れる。あるいは後者は、veṇuyaṣṭi をパタの入れ物の竹筒と理解し、「竹筒によって覆われたパタを取って」と解釈することも可能かもしれない。いずれにしても下線部1, 2の記述より、行者が作製したパタを携帯し、密教儀礼を實踐する場にパタを安置しやすいような工夫がなされていたと考えられる。

なお、Jackson and Jackson[1984, pp.15–23]において現在のタンカの作製法が解説されているが、この解説によれば、織り上げた画布を4本のしなやかな枝木や竹を用いた枠にくくりつけて、画布の四辺を囲むように枠組みを作製するようである。このような手法は、引用文(10)の記述によく一致していることは明らかであり、現在にまで伝持されてきたこのような作製法に従うならば、引用文(10)は、パタの外周部が竹の棒で覆われているという理解で問題ないであろう¹⁹。

また、筆者は実物を見ることはできていないが、ペリオ探検隊が敦煌莫高窟で発見し、現在、東京国立博物館に所蔵されている「二菩薩立像幡」²⁰は、麻布2枚を縫い合わせて作られ、上方の縁には、棒状のものを通すための絹が縫いつけられているようである。当作例は、勝木言一郎氏のブログ²¹において詳細に解説されており、その解説によれば、「二菩薩立像幡」の前述した形状の特徴をふまえて、礼拝対象としての尊像画として考えられるようである。以上は、唐代の阿弥陀浄土図や観経変相の専門である勝木言一郎氏による解説であり、傾聴に値するものである。当該の「二菩薩立像幡」の形状が、上記の引用文(10)によって規定されるパタの画布と類似していることは言うまでもなく、敦煌莫高窟においてこうした作例が発見されたのは非常に興味深い。

1.4. 中位パタ・小位パタ

次に、第5章、第6章所説の中位パタ、小位パタの画布の作製法は、1.3.3.において言及した画布の大きさを始めとする個別の規定を除けば、第4章のパタ作製儀則に準ずる旨が述べられ、以下の引用文のように非常に簡潔な表現で省略されている。

(11) [MMK ch.5, 2-1]

ādau tāvat pūrvanirdiṣṭenaiva sūtrakeṇa pūrvoktenaiva vidhinā pūrvaparikalpitaiḥ śilpiḥ
pūrvapramāṇa eva madhyamaṭaḥ suśobhanena śuklena suvratena sadaśena, aśleṣakai raṅgair
apagatakeśasaṃkārādibhir yathaiva prathamam tathaiva kuryāt varjayitvā tu pramāṇarūpakān,
tatṭaṃ paścād abhikhāpayitavyam //

まず始めに、前に示した[綿]糸を用いて、まさに前述した儀則に従って、前に規定された織工師たちによって、まさに前に[示した]規準の中位のパタが、美しく、清らかで、規準に準じ、縁を有するものとして[作られるべきであり]、固着しておらず、毛や塵などのない顔料によって、最勝[パタ]のように、まさにそのように作るべきであるが、ただし、[画布の]大きさや[パタに描かれる諸尊の]尊容に関するものを除き、そのパタ(中位パタ)は後方から描かれるべきである。

(12) [MMK ch.6, 1-1]

pūrvanirdiṣṭenaiva vidhinā śilpibhiḥ sugatavistastipramāṇaṃ tiryak tathaiva samaṃ caturasraṃ pūrvavat paṭas citrāpayitavyaḥ pūrvanirdiṣṭai raṅgaiḥ //

まさに前述した儀則にしたがって、織工師たちによって、同様に仏の一搦手の長さの正方形[の画布が作られるべきであり]、前のように、パタが、前述した染料によって描かれるべきである。

引用文(11)(12)下線部の pūrva は、第4章のパタ作製儀則の内容を指していると考えられる。また上記の引用箇所以外でも、第4章のパタ作製儀則と重複する内容である場合は、下線部のような pūrva^o-という表現によって、その規定がしばしば省略されている。こうした点から、第4章に続く第5章、第6章のパタ作製儀則の大綱が、第4章の最勝パタ作製儀則に基づいていることを読み取ることができるだろう。

さらにここで、第4章から第6章のパタ作成儀則、あるいはそれらに基づいて作製された三種のパタがセットで扱われていたことを示唆する記述を取り上げておきたい。

(13) [MMK ch.4, 3-2-1, v.10]

uttame uttamaṃ kuryān madhyame madhyasādhanam /
itaraiḥ kṣudrakarmāṇi nikṛṣṭāny eva sarvataḥ //

最勝の[悉地を求める]場合、最勝[パタ成就法]をなすべきであり、中位の[悉地を求める]場合、中位の[パタ]成就法をなすべきである。その他、全ての場合に、下位である低位の儀礼行為(パタ成就法)をなすべし。

(14) [MMK ch.6, 2, v.1]

etat kathitaṃ sarvaṃ trividhaṃ paṭalakṣaṇam /
kanyasaṃ nāmato hy etat paṭaḥ śreyo kṣudrakarmasu //

この三種の全てのパタの仕様が説かれ、このパタは諸々の低位の儀礼行為に関して勝れており、「小位」と名付ける。

引用文(13)ではuttama, madhyama, kṣudra, すなわち最勝パタ、中位パタ、小位パタがセットで扱われ、成就法の目的によってパタが使い分けられていたことが読み取れる。次に引用文(14)のab句に注目したい。trividhaとは、最勝パタ、中位パタ、小位パタの三種を指しており、paṭalakṣaṇa, すなわち、パタの大きさや、描かれる尊格およびその配置などを始めとする三種のパタの仕様が、第6章を以て全て説かれたと解釈できる。

また、中位パタと小位パタの作画規定には、下記のように、最勝パタと同様に描くべきだとする記述が随所に確認できる。この作画の規定の内容は、後にも言及することになるが、三種のパタの強固な関係を証明する典拠として本項でも示しておきたい。

(15) [MMK ch.5, 2-2-4]

bhagavataś ca śākyamuner vāmapārśva āryāvalokiteśvaraḥ śarakāṇḍagauro yathaiva pūrvam tathavābhilekhyāḥ, kiṃ tu bhagavataś cāmaram uddhūyamānaṃ, tasya pārśva āryamaitreyaḥ

samantabhadro vajrapāṇir mahāmatiḥ śāntamatir gaganagañjaḥ sarvanīvaraṇaviṣkambhinaś ceti / ete 'nupūrvato 'bhilekhyāḥ / yathaiva prathamam tathaiva sarvālaṅkārabhūṣitāḥ citrāpayitavyāḥ //

また、世尊釈迦牟尼の左側に、観自在が、秋季の月のように輝かしく、まさに前述したように、そのように描かれるべきであるが、ただし、世尊に拂子を振り動かして、かの者(観自在)の側に、聖弥勒、普賢、金剛手、大慧、寂慧、虚空庫、除一切蓋がいる。かの者たちは、順番に描かれるべきである。[すなわち]、最勝[パタ作成儀則]のように、そのように一切の装飾によって飾られた者たちが描かれるべきである。

下線部中のpūrvaの語は、第4章の最勝パタ作製儀則の記述を指しており、中位パタ作成儀則の大綱が最勝パタ作成儀則に基づいていることを、作画規定に関する記述からも読み取ることができる。このように第5章、第6章のパタ作成儀則には、上記の引用文の下線部に類似する表現がしばしば用いられており、パタ作製に関する一連の工程は、第4章所説の最勝パタ作成儀則に依拠すべきことが説かれている。

1.5. 第四パタ

では次に、第7章所説の第四パタの画布の作製規定について見ていきたい。研究篇<本論>1.2.において言及したように、第7章は、前三章とは独立して制作された可能性が高い。というのも、前項引用文(12)(13)で確認したように、第4章から第6章は、明らかに一続きであり、三種のパタ作製儀則を以て一つの形態を有していたと考えられ、第7章はいわゆる“後付け”の感が否めないからである。そこで本項では、第四パタの画布の作製規定を説示する前段階に位置する、第四パタ作製儀則説示の契機、そして六字真言の説示という、前三章と異なる要素を取り上げて、その相違点について考察しておきたい。

1.5.1. パタ作製儀則説示の契機

まず第7章の冒頭には、導入として、第四パタ作製儀則説示の契機となる文殊の請願が示されており、文殊は釈迦牟尼に対して以下のように懇願している。

(16)[MMK ch.7, 1]

anāgate 'dhvani nirvṛte lokagurāv astamite tathāgatādityavaṃśe riñcite sarvabuddhakṣetre sarvabuddhabodhisattvāryaśrāvakaḥpratyekabuddhair andhakāribhūte lokabhājane vicchinna āryamārge sarvavidyāmantrauśadhimaṇiratnāpagate sādhujanaparihīṇe nirāloke sattvadhātau, sattvā bhaviṣyanti kusidā naṣṭasprhaṇā aśrāddhāḥ khalakā akalyāṇamitraparigrhītāḥ śaṭhāḥ māyāvino dhūrtacaritāḥ, te imaṃ dharmaparyāyaṃ śrutvā samtrāsam āpatsyante / ālasyakausīdyābhiratā na śraddhāsyanti, kāmagaveṣiṇo na pratīṣyanti, mithyādṛṣṭiratā bahvapūṇyaṃ prasaviṣyanti / saddharmapratikṣepakā avīciparāyaṇāḥ ghorataraṃ gatāḥ, teṣāṃ duḥkhitānām arthāyāvaśānām vaśam ānītāya vaśyānām abhayapradāya, upāyakauśalya-saṃgrahayā mantrapāṭavidhānaṃ bhāṣatu bhagavān / yasyedānīm kālāṃ manyase //

未来世において、世間主が滅した時、如来や太陽神の種族の系統が尽きた時、全ての仏、菩薩、聖声聞、縁覚たちによって全ての仏国土が放棄された時、器世間が暗闇になった時、聖なる道が切断された時、あらゆる明呪や真言や薬や摩尼宝が消失した時、善人がいなくなった時、有情界が光を奪われた時、有情たちは、怠惰となり、無気力になり、信心がなくなり、乱暴になり、悪友によってとらわれ、嘘つきになり、虚偽を有し、詐欺を行うだろうが、その者たちが、この法門を聞くと、恐怖に陥るだろう。怠惰で無精でいる者たちは信仰せず、愛欲を求める者たちは信頼せず、邪見にとどまる者たちは多くの不善を生み出すであろう。正法を誹謗する者たちは阿鼻地獄に落ちる運命にあり、この上ない恐怖に陥るのであるが、そのような苦しめられた者たちの利益のために、支配されない者たちを支配下にするために、支配下にある者たちに無畏を与えるために、巧みな方便を集成することによって、諸々の真言やパタに関する儀則を世尊は説きたまえ。今やそのときと汝は思いたまえ。

引用文(15)の内容を要約すれば、いわゆる末法の時代の様々な危惧が列挙されており、そのような恐怖、不安、苦しみから解放するために、文殊が、釈迦牟尼に対して、真言やパタに関する儀則を説くように懇願している。またここには、倫理・道徳に反するような者たち、正法(仏法)を誹謗する者たちを救済する目的も含意されており、少々過激な印象を受ける。

一方、これまで見てきた第4章から第6章は、第4章の最勝パタ作製儀則を中心とする構成になっていたために、後続の第5章、第6章では、引用文(16)のような作製儀則の導入部は、一切省略されていた。そこで、第4章の導入部分の記述を略述すると²²、文殊が、一連のパタの儀則を実践することによって得られる殊勝な功德や悉地を宣揚し、賞賛する旨が説かれている。しかし、第4章には、引用文(16)のような末法を連想させるような記述は見当たらず、第4章の最勝パタ作製儀則は、苦しみを抱えた様々な有情を救済するというよりも、宗教的レヴェルのより高みを目指す密教者を対象として説かれている印象を受ける。ここに、第4章を中心とする前三章と第7章の相違を確認することができるだろう。

1.5.2. 六字真言の説示

次に取り上げたいのは、六字真言を説示するセクションである。このような真言を説くセクションは、前三章には確認できなかったため、当該箇所を引用して考察してみたい。

(17)[MMK ch.7, 3]

atha khalu bhagavān śākyamunir mantram bhāṣate sma //

oṃ vākyaṛthe jaya / oṃ vākyaśeṣe sva / oṃ vākya kham jaya /

oṃ vākyaṇiṣṭhe ya / oṃ vākya ya namaḥ / oṃ vākya dam namaḥ /

ity ete mañjuśrīḥ kumārabhūta tvadīyaṣṭmantrāḥ ṣaḍakṣarā mahāprabhāvāḥ tulyabalavīryāḥ paramahrdayāḥ paramasiddhā buddha ivotpannāḥ sarvasattvānām arthāya sarvabuddhaiḥ

samprabhāṣitāḥ samayagrastasampracalitasārvakarmikā bodhimārgānudeśakāḥ tathāgatakule
mantrapravaraḥ uttamamadhyametaratridhāsamprayuktāḥ, suśobhanakarmaphalavipākpradāḥ
śāsanāntardhānakālasamaye siddhiṃ yāsyanti / ...

tasmim kāle tasmim samaye mahābhairave pañcakaṣāye sattvā alpapunyā bhaviṣyanti /
alpeśākyā alpajīvino 'lpabhogā mandavīryā na śakyante ativistaratarapatavidhāne
karmasādhanādīni karmāni prārabhantum / teṣām arthāya bhāṣiṣye samkṣiptataram //

そのとき実に世尊釈迦牟尼は真言を説いたのである。

- ①オーム。言説の義利を有する者よ、勝利よ。②オーム。言説の残余を有する者よ、スヴァ。③オーム。言説よ、カム、勝者よ。④オーム。言説に巧みな者よ、ヤッハ。⑤オーム。言説よ。ヤ。帰依致します。⑥オーム。言説よ。ダム。帰依致します。

以上のこれらは、文殊師利童子よ、汝の六首の真言であり、六字からなり、大力を有し、等しく力と強さを有し、最勝心呪であり、最勝の成就を有し、一切有情のために仏の如きものが生じたのであり、一切諸仏によって説かれたのであり、確立されたり混乱した三昧耶を有する者たちのあらゆる儀礼行為に関するものであり、菩提道に導くものであり、如来の部族の中で最勝なる真言であり、最勝・中位・その他(小位)の三種の[パタ儀礼]に用いられるものであり、とてもすばらしい儀礼行為の結果を果らせるものであり、教義が埋没した時であっても、悉地に至るであろう。...

そのときその機会に、大なる怖畏のある五濁のときに、有情たちの福德は少なくなるであろう。身分の低い者たち、短命の者たち、恵まれない者たち、弱者たちは、あまりに詳細なパタの儀則の場合、儀礼の所作を行うことを始めとする諸々の儀礼行為を始めることができない。[そこで]彼らのために、私は非常に要略して説くであろう。

引用文(17)において示される6首の六字真言の解釈は非常に困難であり、且つ、解釈すること自体がここでの考察に有益な情報を与えてくれるとも思えないので、各々の六字真言の解釈は省略したい。ただし、付言しておく必要があるのは、下線部1の6首目の六字真言である。詳細は、資料篇<試作テキスト>第7章の後註に示したが、この下線部1の六字真言は、本経以外にも、阿地瞿多訳『陀羅尼集経』『文殊師利菩薩法印呪』²³、菩提流志訳『六字神呪経』²⁴を始めとする六字文殊成就法の真言と一致する²⁵。したがって、本経第7章は、六字文殊成就法と密接な関係にあることがわかる。

一方、下線部2では、六字真言が最勝パタ・中位パタ・その他の三種のパタに関わる密教儀礼に適応することが説かれている。ここでは、三種目のパタをitaraという少々曖昧な語が使用されているが、おそらく文脈上、小位パタを指していると考えてよいだろう。しかし、それでは当該の第7章で説かれている第四パタを全く考慮していないことになる。この問題は、第四パタの画像にも関わる問題であるため、研究篇<本論>第2章において改めて考察するが、以下に筆者の考えを簡潔に示しておく。次章で後述するように、パタの画像に注目すれば、第6章所説の小位パタ、そして第7章の第四パタの画像は、六字文殊成就法において用いられるパタの画像と類似する。六字文殊成就法の関連文献は数多く現存しているため、この種のパタは、数多く存在していたことは明らかである。そこで、小位パタ・第四パタと同様のパタ全般、すなわち六字文殊成就法に用いられるパタ全般を指して、itaraの語を用いたのではないだろうか。このように考えれば、小位パタも第四パタも含意され

ることになり、六字真言の汎用性がより強調されることになるだろう。いずれにしても、下線部2の記述から、第7章の第四パタ作製儀則も、前三章との関連が少なからず意識されていたことを読み取ることができる。この点は、研究篇〈本論〉第2章において、パタの画像に関する考察を絡めて改めて考察することにしたい。

最後に下線部3には、前項1.5.1.で言及した内容と類似した特徴を見ることができる。すなわち、五濁の悪世に言及し、そのような末世の中で苦しむ社会的弱者や、機根の乏しい者たちに対して、当儀則が説示されることを釈迦牟尼が明かしている。このような記述の背景には、当時の密教者のみならず、幅広い一般民衆をも対象とし、パタの殊勝な功德、さらにはそれを得るためのパタの密教儀礼を宣揚しようとする意図があったように考えられる。

1.5.3. 画布の作製規定

では、前項の六字真言に続いて説示される第四パタの画布の作製規定について見ていきたい。

(18) [MMK ch.7, 4-1]

ādau tāvad vīrakrayeṇa sūtrakaṃ kṛtvā, palamātram ardhapalamātram vā, hastamātram dīrghatvenārdhahastamātram tiryak karpaṭam sadaśam tantuvāyena vāyayitavyam / apagata-keśam anyam vā navam karpaṭakhaṇḍam pratyagram ata ūrdhvam yathepsitaḥ dvihastacaturhastam vā ṣaṭ pañca daśa vāṣṭam vā suśuklam samgrhya, yathepsitaḥ citrakareṇa citrāpayitavyam aśleṣakai raṅgaiḥ candanakarpūrakūnkumavāsitaḥ paṭam, candanakūnkumakarpūram caikīkṛtya niṣprāṇakeṇodakena niṣkaluṣeṇāloḍya nave bhāṇḍe paṭam plāvayitvā, divasatrayam supidhānapihitaṃ sthāpayet / kṛtarakṣam śucau deśa ātmanaś ca śucir bhūtvā, śuklapakṣe pūrṇamāsyām paṭabhāṇḍasyāgrataḥ pūrvābhimukhaḥ kuśaviṇḍakopaviṣṭa ime mantrapadā aṣṭaśatavāram uccārayitavyāḥ / tadyathā

om he he bhagavan bahurūpadhara divyacakṣuse avalokaya avalokaya mām samayam

anusmara kumārārūpadhāriṇe mahābodhisattva kim cirāyasi / hūm hūm phaṭ phaṭ svāhā //

anena mantreṇa kṛtajāpaḥ tatraiva svapeta / svapne kathayati siddhim asiddhim vā //

tata utthāya mā vilambitaṃ siddhinimittaṃ svapnaṃ dṛṣṭvā taṃ paṭam likhāpayet / na ced siddhinimitāni svapnāni dṛṣyante, tatpaṭam tasmād bhāṇḍād uddhṛtyātape śoṣayet / śoṣayitvā ca bhūyo 'nye nave bhāṇḍe nyaset / suguptam ca kṛtarakṣam ca sthāpayet / tato bhūyo teṣāṃ paramahrdayānām anyatamaṃ mantraṃ grhītvā, yatheṣṭataḥ ṣaḍakṣarāṇām bhūyo 'kṣaralakṣam jayet / tata āśu tatpaṭam sidhyatīti //

まず始めに、勇ましい購入によって綿糸を買い、1パラあるいは半パラの重さで、縦1肘(hasta)、横半肘の長さで、縁を有する布地が織工師によって織られるべきである。あるいは、毛羽立ってなく他の新しい布地の断片を、[布地の断片の]前部(上部)の辺ごと、これ(織工師がつなぎ合わそうとしている当該の布地の一边)より上方に、望むままに、2肘や4肘、あるいは、6肘、5肘、10肘、あるいは8肘にきれいにつなぎ合わせて、意のままに、パタ[の画像]が、画師によって、白檀香、龍腦香、サフラン

香の香りがつけられた固着していない染料を用いて描かれるべきであり、そして白檀香やサフラン香や龍腦香を一つにして、虫がいなく塵のない水と混ぜ合わせて、新しい容器の中で、画布を洗い流して、三日間、適切な覆いで覆って安置させるべし。清浄な場所で[画布の]守護をなし、自身を清浄にして、白分の満月のときに、[行者は]画布の入った容器の前で、東を向いて吉祥草座に坐して、これらの真言が108遍唱えられるべきである。

「オーム。ヘーヘー。多種多様の姿を有する者よ、天眼を有する者よ、私を観察せよ、観察せよ、三昧耶を想起せよ、童子の姿を有する者よ、偉大な菩薩よ、汝は何をためらおうか。フーム。フーム。パット。パット。スヴァーハー。」

この真言を唱え、まさにそこで眠るべし。夢の中で、悉地の有無を告げるのである。そこで、起き上がり、悉地の兆候のある夢を見たならば、速やかに、かのパタ[の画像]を描かせるべし。もし悉地の兆候の夢を見ないならば、かの画布をかの容器から取り出して、日向で乾かすべし。そして乾かした後、再度、新しい容器に安置すべし。極めて人目につかず守護された[画布]を安置させるべし。次に再び、それらの最勝心呪のうちのいずれかの真言を選んで、願望に応じて、六字[真言]のうちの一字につき10万返繰り返して唱えるべし。それより、速やかにかのパタ[の画布]が完成する、と[世尊が述べた]。

まず注目すべきは、そもそも第7章が、簡潔ながらも引用文(18)のように、画布の作製儀則を説いていることである。前述したように²⁶、第5章、第6章の画布作製儀則は第4章に準ずるとし、その作製方法のほとんどを省略していた。ところが、第7章は省略されることはなく、第4章に準ずるといような記述も一切確認できない。

次に注目したいのは下線部の記述である。下線部中の最初の *vā* の理解の仕方によって当該箇所全体の解釈が変わってくると思われるので²⁷、以下に略述しておく。筆者は、この *vā* が、不自然な位置にあるものの、前文の内容を受けていると解釈している。すなわち当該箇所の趣意は、「新たに画布のために縦1肘(*hasta*)・横半肘に織った布地を用いるか、あるいは(*vā*)、もともと行者が持ち合わせていた新しく(いずれの目的にも使用されていない)毛羽立っていない布地の断片を、行者の望むままの大きさに縫い合わせる」という意味になるのではないだろうか。それゆえ筆者は、下線部の記述より、第7章の画布を作製する工程に二段階あると解釈している。つまり、布の断片(*karpaṭakhaṇḍa*)を用意する第一段階と、布の断片(*karpaṭakhaṇḍa*)を縫い合わせて(*saṃ-√grah*)、適切な大きさに仕上げていく第二段階である。

また下線部後半の記述からは、第四パタの大きさが定められていないことを読み取ることができる。おそらく、行者の資力に応じて、あるいは求める悉地のレベルによって、画布の大きさが調整されていたのではないだろうか²⁸。

一方、第4章の儀則の最勝パタを作製する場合には、下記のように、断片を縫い合わせる(*saṃ-√grah*)という指示はなく、規定された大きさに織り重ねる(*tantuvāyopacita*)と解釈できる指示がなされている。

(19) [MMK ch.4, 3-2-3]

yadi jyeṣṭhapaṭam bhavati caturhastavistīrṇam aṣṭahastasudīrgham etatpramāṇam hi tantuvāyopacitam kuryāt /

もし最勝[パタ]の画布とするならば、横4肘(hasta)、縦8肘であり、織工師がその長さに正確に織り重ねるべし。

第4章の最勝パタの画布を作製する儀則には、織り上げる工程に関わる具体的な記述はほとんど確認できず、有益な情報を得ることはできない。したがって、上記の引用文(19)の記述のみをもって、最勝パタの画布を作製する全工程を知ることは不可能であり、最終的にはある程度の大きさに織った断片を、第7章の儀則のように、縫い合わせて指定の大きさに仕上げるのかもしれない。ただし、第7章で確認された断片を縫い合わせる(saṃ-√grah)という表現と、織り重ねる(tantuvāyopacitam)という表現には、一定の区別が必要であろう。すなわち、前者の表現には、すでにある適切な大きさになっている布地の断片を縫い合わせる手順が含意されており、後者の表現には、何もない状態から、綿糸を織り上げて、指示された大きさの画布を作製していく手順が含意されていると考えられる。したがって、画布を作製する作業工程において、両者にはある一定の違いを見ることができるとはいえないだろうか。

また、引用文(19)で示されるように、最勝パタの画布の大きさは明確に規定されている。同様に中位パタ・小位パタも規定され、その規模は名前の通りに順次小さくなる²⁹。一方、第7章の第四パタは、引用文(18)のように、行者の望むままに(yathepsitah)作製されることから、定められた大きさはないことがわかる。この点も、前三章の儀則と第7章の儀則との重要な相違点として注目すべきであろう。

さらに引用文(18)の二重線の部分には、文殊に対して作製されたパタが靈驗あらたかになるよう促す意義を有すると考えられる真言が説かれている。このような真言を唱える密教儀礼は、前三章には確認できないものである。これらの点を考慮すれば、本項で取り上げた第7章の第四パタの画布作製儀則は、前三章には見られなかった独自の特徴を有していると考えべきであろう。

4567

1.6. 各章の画布作製儀則の関係について

本章では、各章のパタ作製儀則の中の画布作製規定を中心として取り上げてきたが、各章の儀則の関係を整理することで本章のまとめとしておきたい。

まず各章の関係で明らかなのは、第4章から第6章に説かれる儀則が、この三章を以て一つの大部の儀則として体裁をなしていたということである。そして、第4章から第6章の前三章の儀則と、第7章の儀則には隔たりを見いだせるということである。後者のように考えられる主な理由として、以下の二点をあげたい。

第一に、儀則が説かれる形式に注目した場合、第4章は、「綿糸の作製」→「画布の作製」→「作画」という三段階のパタの作製過程を詳細に説いていた。続く第5章と第6章は、画布作製に関する詳細な説明を省略し、その多くを第4章の儀則に依拠することが明確に示されていた。一方、第7章は、第5章と第6章のように、第4章の儀則に準ずることなく、改めて画布の作製儀則を提示する。もし第7章が、第5章と第6章のように、第

4章の画布作製儀則に依拠しているのならば、続く第7章が、新たに画布作製儀則を説くのは不自然であろう。

第二に、前三章と第7章の儀則の記述には、明らかに異なる要素を確認できる。まず、第7章には、前三章には見られない六字真言を説き、六字文殊成就法との密接な関係を示唆していた。また画布を作製する手順において、初めから綿糸を織り重ねていく手順を示す前三章に対し、第7章は綿糸を織って作製した布地の断片、あるいは、持ち合わせていた布の断片から、適切な大きさの画布へとつなぎ合わせていく二段階の手順を指示する。そして織り上げる工程においても、前三章の最勝パタ・中位パタ・小位パタは、画布の大きさが明確に定められていたのに対し、第7章は原則的に行者の望むままに作製すべきだとし、一定の大きさを指示していなかった。

以上、各儀則の画布作製規定に注目すれば、第4章から第6章の儀則はセットで保持されていたと考えられる。そして、第7章の儀則は、前三章の儀則と一定の距離があったことは否めない。ただし、第7章が前三章を意識していた記述が確認される点は注意を要する必要があるだろう。このような前三章と第7章の関係は、次章においてパタの画像に視座を置いて考察し、さらなる検証を試みたい。

¹ Cf. 研究篇<序論>1.5.

² 研究篇<序論>1.5.で整理しているように、本経も広い視野で見れば、マンダラに関する儀則に続いてパタの作製儀則が説かれている。また、初期密教経典を代表する『牟梨曼陀羅呪経』も、マンダラの造立儀則、続いてマンダラの諸尊に関する印契や真言の儀則が説かれた後に、パタ作製儀則が説かれている。Cf. 大塚伸[2004].

³ Cf. 資料篇<試作テキスト> [ch.4, 3-2-1; 3-2-3; 4] [ch.5, 1; 2-1; 3] [ch.6, 1-1; 2]

⁴ Cf. 研究篇<本論>1.3.3.

⁵ Cf. 資料篇<試作テキスト> ch.4, 3-1-2; 3-2-2; 3-3-1.

⁶ 当真言の前には、諸仏諸菩薩に対する帰命句が説かれているが、ここでは省略した。

⁷ Cf. 資料篇<試作テキスト> ch.4, 3-3-2-17, 3-3-2-18.

⁸ なお、当引用文は、種村[2004]の註26において提示されている、高橋[1986]と Skorupski [1983]の読みを校合せたテキストを援用している。

⁹ Cf. 高橋[1981][1982].

¹⁰ Cf. 川崎[2003], 種村[2004], 中島[2005].

¹¹ 種村[2004] [2012]では、後代のインド密教の葬儀文献について精緻な論考がなされているが、これらの研究によれば、Sūnyasamādhivajraの著作である *Mṛtasugatiniyojana* の一セクション(種村[2004]に提示されているシノプシスでは、6.「死者の悪しき存在領域からの救済」)は、*Sarvadurgatipariśodhanatantra* に依拠していることが明らかになっている。その他、*Mṛtasugatiniyojana* の文献情報は種村[2004]を参照されたい。

¹² ()内の表記は、資料篇<テキスト>の対応箇所を示す。

¹³ MMK 第2章では、本経における中心的なマンダラとそれを用いた灌頂儀礼が説かれており、マンダラの阿闍梨(*maṇḍalācārya*)がマンダラに関する種々の密教儀礼を取り仕切ることが説かれている。ただし、マンダラに描かれる諸尊の尊容は、画師(*citrakara*)によって描かれるべきだとしている(Vai p.27, 14-17). Cf. 伊藤[2009].

¹⁴ 当該箇所では唱える真言は明確に指示されていない。引用文(4)の浄化の真言には、守護の

役割も内包しているため、この浄化の真言が唱えられるのだろう。

¹⁵ Tanemura[2004, p.237, n.52]は、MMK の当該箇所を確認される定義から、その要点を以下の三点にまとめている。①織工師が要求する価格で購入すること②価格交渉をしないこと③直ちに支払うこと。このような購入態度、購入方法に対して、*vīrakraya* という語が用いられているようであり、本経第7章(資料篇<試作テキスト> ch.7, 4-1)にも確認できる。

¹⁶ *Nāmasaṃgīti*(v.93cd)において、*pañcaśikha* が文殊のエピテットとして用いられていることから、五髻の大印が文殊を指していることは間違いない。MMK 第2章のマンダラ造立儀則においても、五髻の大印を結ぶことが指示されていることから(E.g. Vai p.26-1; p.26-15)、本経所説の密教儀礼において五髻の大印を結ぶことは重要な意義があったと考えられる。この五髻の大印を始めとする諸印の名称とその略説は、MMK 梵本第35章(*mudrāvidhipāṭalavisarāḥ*)においてまとめて説かれている(Cf. 堀内[1996b])。当該箇所の五髻の大印に関する略説(Vai p.279, vv.40–42.)によれば、「全ての儀礼行為に適用される(*prayuktaḥ sarvakarmikāḥ*)」とあることから、マンダラやパタに関するあらゆる密教儀礼の実践において用いられる印であったと考えられる。なお、頼富[1988]において、パーラ朝期の作例として五髻を有する文殊菩薩像がいくつも見出されている。五髻という数字に注目すれば、後代の文殊の主要な一形態であるアラパチャナ文殊との関係が疑われるが、作例上は、必ずしもアラパチャナ文殊が五髻を有しているとは限らないようである(Cf. 頼富[1988, 表5])。

¹⁷ 詳細は次項 3.3.3.を参照されたい。

¹⁸ なお、問題となる小位パタの大きさを Lalou[1930, p.25; p.47]では、横：仏の *1vitasti*, 縦：*1hasta+1aṅguṣṭha* とし、Kapstein[1995, p.246]では、横：半 *hasta*, 縦：*1hasta* としている。おそらく Lalou の解釈は自身の提示しているチベット訳テキストに基づくものではなく、*Gaṇapati* 本の読み(*kanyasaṃ sugatavīstapramāṇa aṅguṣṭhahastadīrghatvam*)に基づくものと思われるが、*aṅguṣṭhahastadīrghatvam* の複合語の扱いには問題があるだろう。一方 Kapstein は、最勝パタ作製儀則を取り上げる中で三種のパタの大きさにふれているが、上記の解釈の典拠となるものは提示されていない。

¹⁹ 同様に、田中[2000, p.60]は、敦煌莫高窟の蔵経洞から発見された「不空罽索五尊曼荼羅」(田中博士の論考を参照する限り、本研究で扱っているパタと同質のものと思われる)と称される作例において、画布の表装の上下に軸を通したと考えられる布片が縫い付けられていることを指摘している。

²⁰ ペリオ探検隊が敦煌莫高窟蔵経洞において発見し将来した作品で、もともとはフランスのギメ美術館に収蔵されていたが、交換品として現在は東京国立博物館に所蔵されているようである。Cf.「東京国立博物館 1089 ブログ(勝木言一郎)」URL: www.tnm.jp/modules/rblog/index.php/1/2013/09/18/二菩薩立像のみどころ/。

²¹ Cf. 註 20. 勝木言一郎氏は、唐代の阿弥陀浄土図や観経変相の専門家であり、筆者も本研究を進めるにあたり勝木氏の先行研究(勝木[1992][1994])を参考にさせていただいた。

²² Cf. 資料篇<試作テキスト> ch.4, 1.

²³ 大正 no.901, vol.18, p.838c–p.839b.

²⁴ 大正 no.1180, vol.20, p.779b–p.780a.

²⁵ 本経所説の小位パタと第四パタが、六字文殊成就法に用いられるパタと類似していることは、すでに山下[1979, p.12]において言及されている。また、飯塚[2002, n.35]において、引用文(17)の真言が文殊の六字真言であることに言及している。

²⁶ Cf. 研究篇<本論>1.4. 引用文(11)(12)。

²⁷ Cf. 資料篇<試訳> ch.7, 4-1

²⁸ 第7章の儀則の補足事項を列挙する箇所(Cf. 資料篇<試作テキスト> ch.7, 4-3-7)には、「yathālabdha(得られるだけの)」という表現を用いて、行者の資力や状況に応じてパタの画布を作製すべき旨が示唆されている。また、第4章第10偈の記述によれば、悉地のレベルに応じて、使用するパタが使い分けられていたことを読み取ることができる。

²⁹ Cf. 資料篇<試作テキスト> ch.4, 3-2-3.

第2章 パタ作製儀則(2) — 作画規定を中心として —

本章では、前章において整理したパタの画布の作製規定に続き、作画規定について見ていきたい。この作画規定は、パタに描く諸尊に関する詳細な規定を提示しており、各儀則の中で最も多くの分量を有している。そして作画規定の記述は、各パタの特徴を視覚的に捉えるための基礎となる重要な部分である。それゆえ、パタの作画規定は、そのパタを現前に安置して実践する成就法(パタ成就法)と密接に関わっていることは言うまでもない。

そこで本章では、パタの作画規定に基づき、各パタの画像上の特徴について、①画像に描かれる尊格、②画像全体の構成、これらを中心とした視点から整理していきたい。またこのような作業に並行して、各パタと類似する構図を有する他の文献¹のパタも取り上げて、その相互関係を考察したい。

2.1. 最勝パタ

2.1.1. 最勝パタに描かれる尊格(Cf. 資料篇<復元図試案>)

2.1.1.1. 十六菩薩

まず最勝パタの画像に描かれる尊格について整理していきたい²。基本的な構図は、釈迦牟尼、文殊、弥勒の三尊形式であり、本尊の釈迦牟尼を取り囲むように計十六尊の菩薩が描かれている。すなわち、主尊釈迦牟尼の左辺には、①文殊師利(Mañjuśrī)³を筆頭に、②月光菩薩(Candraprabha)、③善財菩薩(Sudhana; 妙財菩薩)、④[除]一切蓋菩薩(Sarvanīvaraṇa; 能除一切蓋菩薩)⁴、⑤虚空庫菩薩(Gaganagañja; 虚空蔵菩薩)、⑥地蔵菩薩(Kṣiṭigarbha)、⑦無罪菩薩(Anagha; 無價菩薩)⁵、⑧妙眼菩薩(Sulocana; 妙眼意菩薩)、右辺には、①弥勒菩薩(Maitreya; 慈氏菩薩)を筆頭に、②普賢菩薩(Samantabhadra)、③観自在菩薩(Avalokiteśvara)、④金剛手菩薩(Vajrapāṇi)、⑤大慧菩薩(Mahāmātī; 大聖意菩薩)、⑥寂慧菩薩(Śāntamātī; 善意菩薩)、⑦遍照蔵菩薩(Vairocanaṅgarbha)、⑧滅罪菩薩(Apāyajaha)、以上の十六尊である。この十六尊という数字に着目すれば、先ず始めに思い当たるのが、金剛界マンダラにおける十六大菩薩、および賢劫十六尊のグループである。しかし、田中[2010b, p.4]が指摘するように、最勝パタに描かれる十六尊と金剛界マンダラの両グループの尊格群には、個々にはいくつかの共通する尊格を見いだせるものの、全体としては一致しない。

そこで、注目したいのが八大菩薩と称されるグループである。先行研究⁶によって明らかにされているように、この八大菩薩を構成する諸尊、さらには諸尊の配置や尊容には、何通りものパターンがあり、一定の形式に整理することは極めて困難なようである。しかし、その中でも最も一般的な組み合わせは、観音(Avalokiteśvara)⁷・弥勒(Maitreya)・虚空蔵(Ākāśagarbha)・普賢(Samantabhadra)・金剛手(Vajrapāṇi)・文殊(Mañjuśrī)・除蓋障(Sarvanīvaraṇaviṣkambhīṇa)・地蔵(Kṣiṭigarbha)の八尊であり、この八尊は、頼富[1990a, p.609]において「標準型八大菩薩」⁸と称されている。この標準型八大菩薩の諸尊と、上記の最勝パタの十六菩薩を比較した場合、虚空庫(Gaganagañja)と虚空蔵(Ākāśagarbha)の若干の不一致があるものの⁹、標準型八大菩薩の諸尊が最勝パタの十六菩薩に含まれていると考えて問題ないだろう。その対応関係をまとめれば下記の表のようになる。

[表 1：最勝パタの十六菩薩と標準型八大菩薩]

| | | 最勝パタの十六菩薩 | 標準型八大菩薩 |
|---|---|------------------------------|-------------------------------|
| ① | 左 | 文殊師利(Mañjuśrī) | 文殊(Mañjuśrī) |
| | 右 | 弥勒(Maitreya; 慈氏) | 弥勒(Maitreya) |
| ② | 左 | 月光(Candraprabha) | |
| | 右 | 普賢(Samantabhadra) | 普賢(Samantabhadra) |
| ③ | 左 | 善財(Sudhana; 妙財) | |
| | 右 | 觀自在(Avalokiteśvara) | 觀音(Avalokiteśvara) |
| ④ | 左 | [除]一切蓋(Sarvanīvaraṇa; 能除一切蓋) | 除蓋障(Sarvanīvaraṇaviṣkambhīṇa) |
| | 右 | 金剛手(Vajrapāṇi) | 金剛手(Vajrapāṇi) |
| ⑤ | 左 | 虚空庫(Gaganagaṇja; 虚空蔵) | 虚空蔵(Ākāśagarbha) |
| | 右 | 大慧(Mahāmāti; 大聖意) | |
| ⑥ | 左 | 地藏(Kṣiṭigarbha) | 地藏(Kṣiṭigarbha) |
| | 右 | 寂慧(Sāntamāti; 善意) | |
| ⑦ | 左 | 無罪(Anagha; 無價) | |
| | 右 | 遍照蔵(Vairocanagarbha) | |
| ⑧ | 左 | 妙眼(Sulocana; 妙眼意) | |
| | 右 | 滅罪(Apāyajaha) | |

したがって、最勝パタの十六菩薩は、標準型八大菩薩に影響を受けて、独自の十六尊のグループへと展開していったと見るできないだろうか。というのも、標準型八大菩薩と共通する八尊のうちの五尊が、本儀則において、詳細に尊容が説かれているのに対し、残りの十一尊は、簡略的に名称のみが列挙されるだけだからである。おそらく、本儀則の制作者の考える尊格の重要度が、そのまま諸尊の尊容の記述に反映されていると思われる。そして、善財(Sudhana)という名前の菩薩が含まれていることを鑑みると、「入法界品」などの文殊との関係が深い大乘經典から、その他の菩薩を選出して十六尊へと拡大させたのであろう。そこで、少々煩雑になるが、以下に尊格に関する記述の分量の差が顕著な箇所を一例として提示しておきたい。

(1)[MMK ch.4, 3-3-2-4.]

dakṣiṇapārśve bhagavato 'ṣṭau mahābodhisattvāḥ sarvālaṅkārabhūṣitā varjayitvā tu maitreyaṃ, bhagavataḥ samīpa **āryamaitreyo** brahmacāriveśadhārī jaṭāmakuṭāvabaddhaśiraskaḥ kanaka-varṇo raktakaṣāyadhārī raktapaṭṭāṃśukottariyāḥ tripuṇḍrakakṛtacihnaḥ kāyarūpī daṇḍa-kamaṇḍaluvānavinyastapāṇiḥ kṛṣṇasāracarmavāmaskandhāvakṣiptaḥ dakṣiṇahastagrhitākṣa-sūtraḥ tathāgataṃ namasyamānaḥ tadgatadṛṣṭir dhyānālanbanagatacittacaritaḥ / dvitīyasmiṃ padme **samantabhadraḥ** priyaṅguvarṇaśyāmaḥ sarvālaṅkāraśarīraḥ vāmahaste cintāmaṇi-ratnavinyasto dakṣiṇahaste śrīphalavinyastahastavaradaḥ cārurūpī tathāivam abhilihkhitavyaḥ / tṛtīya **āryāvalokiteśvaraḥ** śaratkāṇḍagaurāḥ sarvālaṅkārabhūṣito jaṭāmakuṭadhārī śveta-

yajñopavītaḥ sarvajñaśirasīkr̥ta āryāmitābhadaśabalajaṭāntopalagnopaviṣṭaḥ cārurūpo vāma-
hastāravindavinyasto dakṣiṇahastena varado dhyānālambanagatacittacaritaḥ samantadyotita-
śarīraḥ / caturtha **āryavajrapāṇir** vāmahastavinyastavajraḥ kanakavarṇaḥ sarvālaṅkārabhūṣito
dakṣiṇahastoparuddhaphalo varadaḥ ca cārurūpiṇaḥ saumyadarśano hārārdhahāropaguṇṭhita-
deho muktāhārayajñopavīto ratnojvalavicchuritamakuṭaḥ paṭṭacalanānivastaḥ śveta-
paṭṭāmsukottariyāḥ / tathavāryāvalokiteśvaraḥ samantabhadraḥ tūrthanivāsanottarāsaṅgadehaḥ/
ākārataś ca yathāpūrvanirdiṣṭam / pañcamasmiṃ tathā padma **āryamahāmatih**, ṣaṣṭhe
śāntamatih, saptame **vairocanagarbhaḥ**, aṣṭame **apāyajahaś** ceti / ity ete bodhisattvā
abhilekhyāḥ / phalapustakavinyastapāṇayaḥ sarvālaṅkārasuśobhanāḥ paṭṭāmsukottariyāḥ
sarvālaṅkārabhūṣitāḥ paṭṭacalanikānivastāḥ //

引用文(1)は、主尊右辺の八菩薩を描くための記述であるが、標準型八大菩薩に含まれる弥勒・普賢・観自在・金剛手の4尊と、含まれない大慧・寂慧・遍照蔵・滅罪の4尊の記述には明白な差がある。したがって現段階では、最勝パタの十六菩薩は、標準型八大菩薩から展開した一形態と見るのが妥当であろう。なお後述することになるが、最勝パタに続く中位パタも同様の構図であり、標準型八大菩薩のうち、地藏菩薩以外の七尊が描かれる。さらに、最勝パタ、中位パタの両者と類似関係にある『文殊師利法寶蔵陀羅尼經』(大正no.1185A/B)所説のパタも、同様に標準型八大菩薩との密接な関係を確認することができる。この点は、研究篇<本論>2.3.において再び取り上げることにしたい。

また、この標準型八大菩薩の諸尊は、『金剛手灌頂タントラ』に登場し、そして『大日經』所説の胎蔵マンダラにおいて、重要な位置を与えられることになる点も見過ごすことはできない¹⁰。こうした展開過程を考慮すれば、標準型八大菩薩をベースとした尊格群を描く最勝パタは、胎蔵マンダラの系譜と決して無関係ではないだろう。実際、本經第2章所説のマンダラが胎蔵マンダラの成立に影響を与えていることから¹¹、本經と『大日經』には、図像学的見地より密接な関連を見いだすことができる。

2.1.1.2. 八如来

次に、釈迦牟尼の左辺には、開華王如来などの他方仏国土の諸仏を表すと思われる八如来が描かれ、後述する成就法との関連からも注目される。最勝パタ作製儀則では、以下のように、八如来とその住する場所を示している。

(2)[MMK ch.4, 3-3-2-6.]

bhagavataḥ śākyamuner vāmapārśva āryamañjuśriyasyopariṣṭād anekaratnoparacitaṃ
sudīrghākāraṃ vimānamaṇḍalam śailarājopaśobhitaṃ ratnotpalasaṃchannaparvatākāraṃ
abhilikhet / tatrasthān buddhān bhagavato 'ṣṭau likhet / tadyathā ratnaśikhivaidūryaprabhā-
ratnavicchuritasamantavyāmaprabhaṃ padmarāgendranīlamarakatādibhir vaidūryāśma-
garbhādibhir mahāmañiratnaviśeṣaiḥ samantato prajvālyamāṇam īśadādityodayavarṇaṃ
tathāgatavigrahaṃ pītacīvarottarāsaṅginaṃ paryaṅkopaviṣṭaṃ dharmaṃ deśayamāṇaṃ

pītanivāsitoparivastam mahāpuruṣalakṣaṇakavacitadeham aśītyanuvyañjanopaśobhitamūrṭim
 praśāntadarśanam sarvākāravaropetaṃ **ratnaśikhiṃ tathāgatam** abhiliḥhet / dvitīyaṃ
saṅksumitarājendraṃ tathāgatam kanakavarṇam abhiliḥhet / sutarāṃ nāgakesara-
 vakulādipuṣpair abhyavakīritam abhiliḥhet / āryam abhinirīkṣamāṇam samantaprabham
 ratnaprabhāvicchuritadyotiparyeṣam / tṛtīyaṃ **sālendrarājaṃ tathāgatam** abhiliḥhet /
 padmakiñjalkābham dharmam deśayamānam / caturthaṃ **sunetraṃ tathāgatam** abhiliḥhet /
 pañcamaṃ **duḥprasaham** / ṣaṣṭhaṃ **vairocanaṃ jinam** / saptamaṃ **bhaiṣajyavidūrya-
 rājaṃ** / aṣṭamaṃ **sarvaduḥkhaṇaprasāmanam rājendraṃ tathāgatam** abhiliḥhet iti / sarva
 eva kanakavarṇaḥ tathāgatavigrahāḥ kāryāḥ abhayapradānakarāḥ //

引用文(2)の太字部分で示されるように、宝頂如来、開華王如来、娑羅樹王如来、妙眼如来、難勝如来、遍照如来、薬師瑠璃王如来、断一切苦王如来、以上の八尊が描かれることがわかる。しかし、宝頂如来と開華王如来を除けば、その名称が列挙されるだけであり、前項で考察した八菩薩の例に従えば、当儀則の制作者たちにとって重要な、あるいは制作当時有力であった如来が、宝頂如来と開華王如来だったことを示唆していると考えられる。

そこで宝頂如来と開華王如来に注目してみたい。まず宝頂如来の性格について、他の文献の記述を探ってみると、*Divyāvadāna*第3章¹²では、宝頂如来は過去仏として登場し、仲違いしていた二人の王から食事の布施を受け、各々の誓願に対し、転輪王となる授記とマイトレーヤという如来応供正等覚者となる授記を与えている。同様に、*Suvarṇabhāsa*第17章の冒頭¹³においても、過去仏として登場している。次節で取り上げる中位パタにも宝頂如来は八如来の一尊として描かれることから、本経のパタ作製儀則の制作者たちが宝頂如来を重要視していたことは間違いないだろうが、文殊との関係を示唆するような記述は、現在のところ見いだせていない。したがって、本経のパタと宝頂如来の関係には、疑問の余地が残るところである。

一方、開華王如来は、胎蔵マンダラの系譜を外れれば、ほとんどその名前を確認できない尊格であるものの¹⁴、文殊との関係が非常に深い尊格である。というのも、本経第1章に、文殊が東北方の開華王如来の仏国土に住するという記述を確認できるからである¹⁵。また本経第2章所説のマンダラでは、開華王如来は中心となる三尊の中の一尊として重要な位置を与えられ、開華王如来と文殊はマンダラの垂直方向の同一直線上に位置している。さらに研究篇<本論>3.2.1.4.において後述するパタ成就法では、成就法の完成によって、行者が開華王如来の仏国土に赴き、そこで文殊とまみえるという悉地を得ることが説かれている。このように、本経には随所に開華王如来と文殊の密接な関係を示す内容が説かれている。

引用文(2)では、開華王如来の尊格が具体的に示されているが、特に注意すべきは、「聖者を観察しつつ(āryam abhinirīkṣamāṇam)」という記述であろう。梵本の記述を読む限り、この「聖者(ārya)」がどの尊格を指しているのかは明確ではない。そこでチベット訳と天息災訳を参照すると、チベット訳は、当該箇所に対応する部分を欠いているが、天息災は「聖者」を「聖妙吉祥菩薩」と漢訳している。梵本の当該箇所の記述から、āryaを文殊と解釈するには些か飛躍があるように思われるが、前述したような本経に散説される開華王如来と文殊の関係を前提とすれば、決して無理な解釈ではない。おそらく天息災は、本経に示

される開華王如来と文殊の密接な関係に基づいて意識したのではないだろうか。いずれにしても、現状では天息災の訳出に従って、開華王如来の視線が文殊に向けられていると理解しておくことにしたい。

さらに、他の如来に目を向ければ、東方浄瑠璃世界の教主として著名な薬師如来がいる。そして難勝如来は、文殊と関係の深い『維摩経』において、ヴィマラキールティの神変によってマリーチ(marīci)世界の教主として登場する¹⁶。こうした如来が八如来に名を連ねていることを鑑みると、最勝パタの八如来は、他方仏国土を象徴する如来が中心となって構成されているように思われる。

次に引用文(2)の下線部に注目したい。当該箇所(vimānamaṇḍala(宮殿のようなマンドラ)は、八如来の住する場所だと考えられる。最勝パタの現存する作例に比定されている「トンワトゥンデン図」(Cf.資料篇<参考資料>)を見ると、八如来は、儀則の指示する通り、主尊釈迦牟尼の左辺やや上方に位置する二階建ての宮殿の中に描かれている。この「トンワトゥンデン図」において描写される宮殿が、vimānamaṇḍalaの意味する内容をどれだけ忠実に表現しているかは不明であるが、筆者はこのvimānamaṇḍalaを他方仏国土に住する諸如来を描写した表現であると解釈したい。その理由は以下である。

研究篇<本論>第3章で後述するように、第4章の儀則によって作製された最勝パタは、第8章所説の成就法において用いられる。すなわち、最勝パタは、成就法を実践する行者の目の前に安置され、視覚的な補助手段として用いられるわけである。この成就法によって得られる悉地の中でも、密教儀礼上の重要な意義を有するのは、諸仏諸菩薩の加持によって、それまで行者の視覚的補助手段に過ぎなかったパタの画像の世界(象徴としての存在)が、本体として実際に行者に現前し、開華王如来の仏国土において文殊を目の当たりにできるという悉地である¹⁷。このような成就法を実践するための資具として、最勝パタの画像が描かれるのであるから、その画像には、行者に与えられる悉地が、パタの画像に対して何らかの形で象徴的に表現されていても不思議ではない。したがって、そのような悉地を象徴的に表現した描写が、上記引用文(2)のvimānamaṇḍalaに住する開華王如来なのではないだろうか。このように、主尊を釈迦牟尼とする同一の画像上に開華王如来などの八如来が描かれることによって、娑婆世界にいながらも他方仏国土の諸如来に見えることが可能であることを含意していると考えられる。

2.1.1.3. ヤマーンタカとターラー

次にパタ下方に目を向ければ、ヤマーンタカ、ターラーという密教的な尊格が描かれる。この両尊は、儀則の記述によれば、パタ下方の岩山に左右対称に配置されるように描かれると考えられ¹⁸、主尊の釈迦牟尼周辺に描かれる諸尊とは明らかに一線を画していることを、最勝パタの構図から見て取ることができる。

まずヤマーンタカは、後代のインド密教文献では文殊の忿怒相の化身とされ¹⁹、日本の真言密教では五大明王の一尊である「大威徳明王」として広く知られている。本経の中でも成立年代の下る第50章から第52章において、ヤマーンタカの成就法に関わる密教儀礼が説かれている²⁰。しかし、その起源の詳細はいまだ明らかにされておらず、最勝パタの作画規定におけるヤマーンタカに関する記述は、文殊とヤマーンタカの関係を超える上で重

要な資料となるであろう。では最勝パタ作製儀則のヤマータカに関する記述を取り上げて考察してみたい。

(3)[MMK ch.4, 3-3-2-13.]

tasya parvatasyottuṅge₁ yamāntakaṃ krodharājānaṃ mahāghorarūpiṇaṃ pāsadaḥśiṇahastaṃ
vāmahastagrhitadaṇḍaṃ bhṛkuṭivadanam ājñāṃ pratīcchamānaṃ āryamañjuśriyagatadr̥ṣṭim₁
bṛhadudaram ... sarvavighnaghātakaṃ₂ mahādāruṇataraṃ mahākrodharājānaṃ samantajvālaṃ
yamāntakaṃ krodharājānaṃ abhiliḥket //

その山の高く盛り上がったところに、忿怒の王で、非常に恐ろしい姿を有し、[右手に] 縋索を手に持ち、左手に棍棒を持ち、眉をしかめた表情で、教令を受けつつ、聖文殊師利に視線を向けて、膨れてたれた腹で、... 一切の作障者を殺す者であり、非常におぞましく、大忿怒王で、普く光炎を有するYamāntaka忿怒王を描くべし。

(4)[MMK ch.4, 3-3-2-18.]

sarvavighnavināśāya₂ kathitaṃ jinavarātmajaiḥ /
mahāghoro mahāvandyo mahācaṇḍo mahādyutiḥ // 50 //
śāsane dviṣtasattvānām nigrahāya₂ prakalpate /
sādhakasya tu rakṣārthaṃ₂ sarvavighnavināśakāḥ // 51 //

50.[ヤマータカは]一切の作障者を滅するために、偉大な怖畏を有す者であり、偉大な尊崇されるべき者であり、偉大な暴悪を有す者であり、偉大な威厳ある者と勝れた勝者の息子によって語られる。

51.[ヤマータカは]教法に関して、敵対する者たちを抑圧するために、行者の守護のために、一切の作障者を滅する者(ヤマータカ)と定められる。

まず、引用文(3)の下線部 1 より、ヤマータカは文殊との密接な関係が意識されて描かれることを読み取れる。前部の下線部 1 の tasya parvatasya とは、主尊釈迦牟尼の左辺下方に描かれる山のことであり、すなわち文殊を筆頭とする八菩薩側の下方にヤマータカが位置することを示している。したがって、最勝パタが、釈迦牟尼・文殊・弥勒の三尊形式を基調とすることを考慮すれば、ヤマータカは文殊との関係が強固であることを示唆していると解釈できる。また後部の下線部 1 の教令(ājñā)は、文脈より文殊による教令であると考えられるために、ヤマータカは文殊に従って活動していると解釈できる。以上の二カ所の下線部 1 より、ヤマータカと文殊の密接な関係が最勝パタに表現されていると理解できる。さらに引用文(3)(4)の下線部 2 より、ヤマータカは、様々な作障者や敵対者から行者を守護する働きを有することがわかる。すなわち、最勝パタを用いて様々な密教儀礼を実践する行者を守護するのであり、行者が無事に悉地を得られるようにするための役割を担っていると考えられる。

次にターラーは、観自在菩薩との関係が深い女尊であり、様々な密教經典に登場する尊格である²¹。特に Lalou[1936]は、チベット語訳の形で現存する *Tārāmūlakalpa* と本經の密接な関係を明らかにしており、*Tārāmūlakalpa* に見られる MMK 所説の一連のパタ作製儀則とのパラレルを提示している²²。では、最勝パタ作製儀則のターラーに関する記述を取り上

げて考察してみたい。

(5)[MMK ch.4, 3-3-2-16.]

tatrāpāsritām devīm āryāvalokiteśvarakarunām₁ āryatārām sarvālaṅkāravibhūṣitām rakta-
paṭṭāmśukottarīyām ...

nātibālām nātivṛddhām dhyānagatacetanām ājñām praṭicchayantīm₁ dakṣiṇahastena varadām
īṣadavanatakāyām paryaṅkopaniṣaṅṅām āryāvalokiteśvareṣadgatadr̥ṣṭim₁ samantajvālāmālā-
paryeṣitām /

そこ(大宝石山王)に住し、天女であり、聖観自在菩薩の悲を有し、一切の飾りによつて飾られ、雑色の繒綵がついた赤い上衣を身につけ、...

幼すぎず、あまり年老いておらず、禅定に入った意識の状態で、教令を受けつつ、右手で施願をなし、少しかがんで、結跏趺坐で座し、聖観自在菩薩に少しく視線を向けて、普く光輪によって包まれている、聖ターラーを[描くべし]。

(6)[MMK ch.4, 3-3-2-17.]

sarvaviḥnaghātakī₂ devī uttamā bhayanāsinī /

sādhakasya tu rakṣārtham₂ likhed varadām śubhām // 46 //

strīrūpadhāriṇī devī karuṇādaśabalātmajā₃ /

śreyasaḥ sarvabhūtānām likheta varadāyikām // 47 //

kumārasyeha mātā devī mañjughoṣasya₃ mahādyuteḥ /

sarvaviḥnavināśārtham sādhakasya₂ tu samantād // 48 //

rakṣārtham manujeśānām śreyasārtham paṭe nyaset / 49ab /

46.最勝の女尊(ターラー)は、一切の作障者を殺し、怖畏を滅する。行者の守護のために、施願をなし、美しい姿を有する[ターラーを]描くべし。

47.女尊は女性の姿をとり、悲の十力の娘であり、あらゆる者たちに幸福の施願をなす女尊を描くべし。

48.ここにおいて、女尊は偉大な威厳を有する妙音童子の母であり、普く、行者の全ての作障者を滅するために、

49ab.守護のために、幸福のために、支配者の娘をパタに布置すべし。

まず、引用文(5)の下線部1より、ターラーは観自在との密接な関係が意識されて描かれることを読み取れる。この関係は前述した文殊とヤマータカの関係と合致しており、特に「教令を受けつつ(ājñām praṭicchayantīm)」という記述や「観自在に少しく視線を向けて(āryāvalokiteśvareṣadgatadr̥ṣṭim)」という記述は全く同一である。したがって、ここでの教令は、観自在菩薩より受ける教令と解釈できるだろう。

また、ヤマータカと同様に、引用文(6)の下線部2より、行者を守護する役割を読み取ることができる。ただし、ターラーは、引用文(5)(6)を通じて説かれているように、観自在の悲を有することや、怖畏を滅する働きを有することから、ヤマータカのような暴力的な守護ではなく、救済的な守護であると考えられる。このようなターラーの性格は、引用文(6)下線部3で示す「悲の十力の娘」や「妙音童子の母」と位置づけられていることにも

通じるのではないだろうか。おそらく、ターラーが文殊の母であるという記述は、ヤマーンタカとともに守護の役割を担いつつも、ヤマーンタカとは対照的に慈悲にもとづく活動を行う女尊としての性格を強調するために、当儀則の制作者たちが付加した内容だと思われる。

しかし、最勝パタの画像全体の構図を考慮した場合、ターラーの配置に問題がないわけではない。すなわち、研究篇<本論>2.1.1.において取り上げた十六菩薩との関係に目を向けると、ターラーは弥勒を上首とする釈迦牟尼の右辺下方に描かれる。前述したヤマーンタカが、文殊を筆頭とする八菩薩側の下方に描かれる点を考慮すれば、このターラーと弥勒の位置関係には少なからず違和感を感じる。確かに、弥勒を筆頭とする世尊右辺側の菩薩の三番目に観自在が描かれることより、ターラーは、観自在とおおまかに垂直方向の位置関係にあると理解することも可能であろう。しかし、引用文(5)(6)で確認したような、観自在との強固な関係を強調して救済的な守護を担うことを示唆する意図があったならば、観自在を上首とした八菩薩の配置の方がよいだろう。このような矛盾点については、次節の中位パタに描かれる菩薩を取り上げる際に改めて考察するが、おそらく弥勒は、初期の大乗経典から菩薩の上首として登場することが多く、この最勝パタの不自然な構図は、そのような大乗経典の影響を根強く受けたと思われる。

以上の両尊の最勝パタにおける役割を整理すれば、作障者や敵対者から行者を守護し、パタ成就法が妨げられることなく、行者が悉地を得るように見守る役割を担っていると考えられる。このような守護者としての役割を有するために、主尊釈迦牟尼周辺に描かれる諸仏諸菩薩を始めとする上位の尊格とは一線を画し、パタ下方に描かれる行者に近い位置に描かれるのだろう。またこうした役割は、研究篇<本論>1.3.2.において取り上げた下記の浄化の真言からも読み取ることができる。

(7)[MMK ch.4, 3-1-1.]

om śodhaya śodhaya sarvavighnaghātaka₁, mahākārunika₂, kumārarūpadhāriṇe₃ / vikurva vikurva / samayam anusmara / tiṣṭha tiṣṭha / hūṃ hūṃ phaṭ phaṭ svāhā //

オーム。清浄にならしめよ、清浄にならしめよ。一切の作障者を殺す者よ。大悲を有する者よ。童子の姿を有する者(文殊師利)よ。神変せよ、神変せよ。三昧耶を想起せよ。立て、立て。フーン、フーン、パット、パット、スヴァーハー。

当真言は、パタの画布を作製する工程で、職人たちを浄化する際に唱えられる真言であった。と同時に、下線部1はヤマーンタカ、下線部2はターラーに対応することから、守護の機能も有していたと考えられる。下線部3の kumārarūpadhāriṇi が、当儀則の制作者たちの主な信仰対象であった文殊への呼びかけであることを考慮すれば、並列的に呼びかけられているヤマーンタカとターラーも、その役割が重視されていたと見るべきであろう。このようなパタに関する一連の密教儀礼において、ヤマーンタカとターラーの両尊は重要な役割を担っており、それが最勝パタの構図に投影されていると考えられる。

2.1.1.4. 行者

次に注目したいのが、最勝パタの右下方に描かれる行者である。初期密教經典所説のパタの下方に、行者が描かれることは決して珍しいわけではなく、すでに先行研究によってその事例の見られるパタの報告がなされている²³。しかし、その行者の描かれ方や、行者の描かれる意義について詳しく言及した論考は、管見の及ぶ限り、これまでなかったようである。

そこでまず、本經の最勝パタにどのように行者が描かれるのかを考察し、その他の初期密教經典所説のパタに描かれる行者との比較を行いたい。最勝パタに描かれる行者は、以下のような規定がなされている。

(8)[MMK ch.4, 3-3-2-14.]

tasya parvatasyādhasṭāc chilātalopaniṣaṅgaṃ pṛthivyām avanatajānudehaṃ dhūpakaṭacchukavyagrahastam yathāveśasamsthānagr̥hītaṅgam, yathānuvrttacaritam āryamañjuśriyagata-dṛstim, sādhakam abhilikhet //

その山の下で、岩場に座し、地面に膝を曲げた体勢(蹲踞)で、香炉を手に取り、[依頼者である行者の]装いや外見が捉えられた特徴のままに、[文殊の]信奉者のように、聖文殊師利に視線を向けた行者を描くべし。

まず、引用文(8)下線部1のyathāveśasamsthānagr̥hītaṅgamという語句によって、行者の装い(veśa)や外見(samsthāna)が、捉えられた特徴のままに描くべきだと解釈できる。すなわち、決して抽象的な一行者の姿ではなく、今まさにパタの作成を依頼しており、その完成したパタを用いて成就法を行う目の前の行者の姿を描くことが示されていると考えられる。このような実在の行者をパタに描くという規定は非常に興味深い。実際の作例であるトンワトウンデン図(Cf. 資料篇<参考資料>)を確認すると、パタの右下方の岩山の麓で蓮池の岸辺に、蹲踞の体勢で合掌している顔のない者が描かれている。テキストに示される位置関係の規定から、これが行者であるとみなすことができるが²⁴、おそらく実際の人物を描くことを示唆するために、あえて顔の部分を描いていないのだと思われる。すなわち、下線部1のyathāveśasamsthānagr̥hītaṅgamという記述に依拠して、実在の行者の顔の特徴を捉えた似顔絵を描き入れることを示唆するために、意図的に顔が描かれていないのだろう。喩えるならば、観光地でよく見かける、記念写真のための顔をくり抜いたパネルのイメージであろうか。このように実際の行者をパタに書き入れることによって、そのパタは具体性を持ち、行者にとってより視覚的なイメージに直結しやすい画像となる効果が見込まれるのではないだろうか。以上のような行者がパタに描かれる意義については、研究篇<本論>3.2.1.3.において、成就法との関係から再び考察することにしたい。

また下線部2では、文殊の信奉者のように、行者の視線が文殊に向けられることを規定していることから、行者が文殊を主な信仰対象とする点を強調していることがわかる。本經の經題を考慮すれば、この規定は当たり前のことではあるが、最勝パタの作製儀則や最勝パタを用いた成就法を實踐する密教者の集団が、文殊を信奉する集団であったことを再確認できる重要な記述であろう。

では次に、本經以外の初期密教經典に説かれるパタには、どのように規定されて行者が描かれるのかを見ていきたい。

(9)[*Mahāmañivipulavimānasupraṭiṣṭhitaguhyaparamarahasyakalparājā*, D: 306a5–6.]
rdzing de'i 'gram du rig pa 'dzin pa₃ | lag pa na pog phor dang | me tog gi mgo lcogs thogs la
lag pa cig shos na bgrang phreng thogs te | pus mo btsugs nas de bzhin gshegs pa la gyen du
blta ba bya'o ||

その池のほとりに持明者(行者)がいる。手に香炉と花束を持ち、もう一方の手に数珠を持ち、膝を着いて如来を仰ぎ見ている。

(10)[*Amoghapāśakalparāja*, 密教聖典[2000, 45b2–3]・木村[2001, p.22 1-2.]]²⁵
āryāvalokiteśvarasya pādāmūle vidyādharam₄ jānuprapatitaṃ kartavyam / puṣpadhūpakaṭa-
cchukahastaṃ bhagavantaṃ mukham ullokayamānaṃ kartavyam /
 聖観自在の足下に、膝を着いた持明者(行者)が描かれるべきである。花と柄香炉を手
 に持ち、世尊の顔を仰ぎ見る[持明者]が描かれるべきである。

(11)『菩提場莊嚴陀羅尼經』(vol.19, p.674b2–4.)
 於佛下當中畫四大天王。皆被甲冑作威怒形。天王下畫持誦者₅左手執香爐右手把念珠。
 瞻視世尊。

引用文(9)(10)では、下線部3, 4のように、「持明者」と訳される *vidyādhara* / *rig pa 'dzin pa* という語が用いられているが、本經の引用文(8)の *sādhaka* と同義語、すなわち行者を指す語と考えると問題ないだろう。また引用文(11)下線部5の「持誦者」も同様である。そこで、引用文(9)(10)(11)に確認できる行者の特徴を整理すれば、行者を描く際の必要事項として、以下の三点をあげることができる。①パタの下方に描くこと²⁶(描かれる位置)②蹲踞の体勢や手に香炉を持っていること(外見の特徴)③主尊を仰ぎ見ること(主尊との関係)。以上の三点は、引用文(8)に示される最勝パタに描かれる行者と一致していると見て問題ないが、いくつかの点を補足して言及しておきたい。

まず、①の行者の描かれる位置に関して、パタ全体を俯瞰してみると、ここで取り上げている諸經典の儀則は、総じて守護を担うと思われる天部の尊格の下方に、行者を描くように指示している。これらの天部の尊格は、研究篇<本論>1.2.1.3.において言及した最勝パタのヤマーンタカとターラーに当てはめることが可能であり、パタ成就法を実践する行者が守護されていることを示唆していると思われる。

次に、②の行者の外見の特徴は、おそらくパタ成就法を実践する行者の姿を反映したものであろう。パタ成就法では、香や花によって供養する方法が説かれていることから、香炉や花を持った行者を描くことは、こうした成就法の次第に合致するといえる。

最後に、③は最勝パタとの若干の相違を見いだすことができる。引用文(9)–(11)は「如来」に視線を向ける、あるいは「世尊」に視線を向ける、という指示であり、すなわちパタの主尊を仰ぎ見るという規定がなされている。一方、引用文(8)では、最勝パタの主尊釈迦牟尼ではなく、文殊を仰ぎ見ると規定されている。このような相違は、前述したように、最勝パタ作製儀則を制作していた集団が、文殊に対する信奉を強調する意図があったために生じた相違だと思われる²⁷。最勝パタ作製儀則の説者は、あくまで釈迦牟尼であることが

ら、形式上、主尊を釈迦牟尼としつつ、行者の主な信仰対象が文殊であることを示唆する構図であることがわかる。

以上、最勝パタ作製儀則と、その他の初期密教經典に説かれるパタ作製儀則の行者を描く規定を比較してきたが、①パタの下方に描くこと②蹲踞の体勢や手に香炉を持っていること③主尊(あるいは信仰対象)を仰ぎ見ること、以上の三点は、様々な初期密教經典に確認できるため、定型的に規定されていたと見て問題ないだろう。ただし、引用文(8)で見たように、行者の外見的な様子を捉えられた特徴のままに描くべきだとする規定は、最勝パタ作製儀則独自の規定であり、成就法との関係において非常に重要な規定である。というのも、引用文(9)–(11)に見られる行者をめぐる記述からは、抽象的な一行者の姿として解釈せざるを得ないが、引用文(8)の規定によって、初期密教經典所説のパタに描かれる行者は、実際にそのパタを使用して成就法を実践する実在の行者をモデルとするべきだと考えられるからである。パタに行者自身の姿を描くことによって、成就法を実践する自身の姿を投影することになり、その姿には計り知れない効果があったことは想像に難くない。

2.1.2. 最勝パタに描かれる情景

前節では最勝パタに描かれる諸尊に注目してきたが、最勝パタ全体に視野を広げると、蓮池から生じた広大な蓮華を中心とする情景を描写したような画像として捉えることができる。こうした情景の特徴は、諸仏諸菩薩が住し、仏典に描写されたワンシーンを表現するような説法図や浄土図に近いものと考えられる²⁸。特に本尊の坐す蓮台の茎が中心となって枝分かれし、諸菩薩の坐す蓮台となっている特徴的な構図(同根多枝蓮華)²⁹は、「舎衛城の神変」の一つである「千仏化現」を表現する図像の作例³⁰や阿弥陀浄土図の作例³¹に見出されている³²。それゆえ、田中[2010b]は、最勝パタの同根多枝蓮華のモチーフが、このような両作例に影響を受けていたことを示唆している。そこで筆者は、文献上の記述を頼りに、最勝パタに確認される同根多枝蓮華のモチーフを検証してみたところ、両者のうち、「千仏化現」の作例の典拠として指摘されている *Divyāvadāna* 第12章 *Prātihāryasūtra* の一節と本経の最勝パタに、興味深い共通点を確認することができた。本項では、この共通点を中心に考察していきたい。

(12)[*Divyāvadāna*, p.162, 5–28.]

atha brahmādayo devā bhagavantam triḥ pradakṣiṇīkṛtya bhagavataḥ pādaḥ śirasā vanditvā dakṣiṇam pārśvam niśritya niṣaṇṇāḥ / śakrādayo devā bhagavantam triḥ pradakṣiṇīkṛtya bhagavataḥ pādaḥ śirasā vanditvā vāmaḥ pārśvam niśritya niṣaṇṇāḥ / nandopanandābhyām nāgarājābhyām bhagavata upanāmitam nirmitam sahasrapatram śakaṭacakramātram sarvasauvarṇam ratnadaṇḍam padmam / bhagavāṃś ca padmakarnikāyām niṣaṇṇāḥ paryānkam ābhujya ṛjuḥ kāyam praṇidhāya pratimukham smṛtim upasthāpya padmasyopari padmam nirmitam / tatṛpi bhagavān paryānkaṇiṣaṇṇāḥ / evam agrataḥ pṛṣṭhataḥ pārśvataḥ / evam bhagavatā buddhapiṇḍī nirmitā yāvad akaniṣṭhabhavanam upādāya buddhā bhagavanto paśannnirmitam / ...

bhagavatā tathādhiṣṭhitam yathā sarvaloko 'nāvṛtam adrākṣīd buddhāvataṃsakam yāvad

akaniṣṭhabhavanam upādāya antato bāladārakā api yathāpi tadbuddhasya buddhānubhāvena devatānām ca devatānubhāvena //

そのとき、ブラフマンを始めとする神々は世尊(釈迦牟尼)[の回り]を三回右繞し、世尊(釈迦牟尼)の両足に頂礼して右側に依止して坐した。シャクラを始めとする神々は世尊(釈迦牟尼)[の回り]を三回右繞し、世尊(釈迦牟尼)の両足に頂礼して左側に依止して坐した。龍王ナンダとウパナンダは、葉が千もあり、車輪ほどの大きさで、すべて黄金であり、宝石の莖を有する蓮華を化作して世尊(釈迦牟尼)に献上した。すると、世尊(釈迦牟尼)は、蓮台に坐して結跏趺坐し、背筋をまっすぐ伸ばして、面前に念を定めて、蓮華の上に蓮華が化作された。そこにおいても世尊が結跏趺坐で坐した。同様に、前にも後ろにも[両]脇にも[世尊が結跏趺坐で坐した]。このように、世尊(釈迦牟尼)によって仏の集団が化作され、色究竟天に至るまで尊き諸仏が集会の化作を[なした]のである。… [中略] …

下は幼い子供たちでさえも、一切世間の者が、妨げなく、色究竟天に至るまでの仏華嚴を見えるように、そのように、世尊が加持したのであり、あたかも仏は仏の神通力によって、また諸神は諸神の神通力によるが如くであった³³。

引用文(1)は、釈迦牟尼がシュラーヴァステイーで外道と対峙し、無数の諸仏を化現するという神変によって、外道を凌駕する場面である。この一連の場面を要約すると、まず、龍王ナンダとウパナンダが千葉の葉を有する広大な蓮華を釈迦牟尼に献上する。その蓮華座に釈迦牟尼は坐し、次々と蓮華を化作し、その各々の蓮華座に諸仏を化作して色究竟天までの仏華嚴(buddhāvataṃsaka)を示す。さらには幼い子供も含めた一切世間の者が、この仏華嚴を見えるように加持をなす。以上が「千仏化現」における神変の概要である。当箇所描写が、作例の基本形式に影響を与えたと考えられており、多くの作例には、同根多枝蓮華の広大な蓮華やその蓮華を支える龍王ナンダとウパナンダが確認されている。

一方、下記に示す最勝パタ作製儀則の引用箇所は、最勝パタの画像の中心に位置する釈迦牟尼を描く際の規定であるが、引用文(1)を典拠とする「千仏化現」の作例と類似した構図を読み取ることができる。

(13)[MMK ch.4, 3-3-2-1 ~ 3-3-2-3.]

ādau tāvac chākyamuniṃ tathāgatam ālikhet / sarvākāravaro-petaṃ dvātriṃśanmahāpuruṣa-lakṣaṇalakṣitam aśītyanuvyañjanopaśobhitaśarīraṃ ratnapadmopariniṣaṇṇaṃ samantajvālaṃ samantavyāmopaśobhitamūrṭiṃ dharmam deśayamānaṃ prasannamūrṭiṃ sarvākāravaro-petaṃ madhyasthaṃ vaidūryanālapadmaṃ // adhaś ca mahāsāraḥ, dvau nāgarājānau taṃ padmanālaṃ dhārayamānau tathāgatadrṣṭī dakṣiṇahastena namasyamānau śuklau sarvā-laṅkārabhūṣitau manuṣyākārārdhasarpadehanandopanandau lekhanīyau /...
yad bhagavato mūlapadmaṇḍaṃ viṭapaṃ tatraiva viniṣṭāny anekāni padmapuṣpāni anu-pūrvonnatāni / vāmapārśve 'ṣṭau padmapuṣpāni, teṣu ca padmeṣu niṣaṇṇāni aṣṭau mahābodhi-sattvavigrahāny abhilekhyāḥ / ...

まず始めに、釈迦牟尼如来を描くべし。あるゆる勝れた形相を具え、三十二大士相によって表現され、八十種好によって飾られた身体を有し、宝蓮華に座し、普く光輝を

まとい、一尋四方が飾られた姿で、法を説きつつ、はっきりと認識される姿であり、あるゆる勝れた形相を具えている。瑠璃でできた茎の蓮華が[画布の]中央にあり、また下方に広大な池があり、二尊の龍王が、その蓮華の茎を支えつつ、如来に視線を向けて、右手で恭敬し、輝いていて、あらゆる装飾によって飾られ、人間の容姿で、半身が龍の格好の Nanda と Upananda が描かれるべし。...

世尊の[座す]根本の蓮華の茎についている枝、そこより発した多くの蓮華の花が規則正しく上に向かって突起している。[釈迦牟尼の]左辺に8つの蓮華の花があり、そして、それらの蓮華の花の上に座す八尊の大菩薩の形像が描かれるべきである。...

引用文(2)には、釈迦牟尼が坐す蓮華の茎をナンダとウパナンダが支える構図や、釈迦牟尼の周囲を同根多枝蓮華の蓮華座に坐す諸菩薩が取り囲む構図が示されている。引用文(1)の「千仏化現」の場面と比較すれば、両者には類似の内容の記述を確認することができる。したがって、最勝パタと「千仏化現」の作例は、類似の内容を有する記述を典拠としていることから、必然的に両作例において、同根多枝蓮華のモチーフや中心となる広大な蓮華を支えるナンダとウパナンダが描かれる共通の要素を確認できるわけである。

このように最勝パタの画像は、仏が神変を示す仏典の一場面を表現した作例と共通する特徴を有していることから、行者は奇瑞な一場面を表現した画像を目の前にして成就法を実践していたと理解できる。したがって、最勝パタの画像と、成就法によって得られる神秘的な宗教体験の悉地との密接な関係が推測されるが、この点は研究篇<本論>3.2.1.4.において後述したい。また同時に、こうした最勝パタの画像の特徴は、密教經典に説かれるマンダラのような幾何学的な表現方法とは異質なものであることが指摘できるだろう。なお福山[2008, p.10]は、『根本説一切有部毘奈耶雜事』の寺院装飾に関する記述の中に³⁴、僧院に描くべき説話の主題として「大神通変」の語があることを指摘している。これが「舎衛城の神変」を指すと理解するにはさらなる検証が必要と思われるが、僧院で生活する仏教者たちが仏の神変を主題とする仏画を日常的に目にする機会が多かったと理解するには問題がないだろう。これらの点から、本経の最勝パタと「千仏化現」の作例に共通要素を指摘できるのは、最勝パタ作成儀則の制作者たちが、仏教者たちに広く親しまれていた仏の神変を主題とする仏画のモチーフを摂取したためだと理解するのが妥当であろう。

2.1.3. トンワトウンデン図との比較

本節の最後に、実際の作例であるトンワトウンデン図(Cf.資料篇<参考資料>)と、最勝パタ作製儀則の記述に見られる若干の相違について言及しておきたい。

前述のとおり、トンワトウンデン図は、最勝パタ作製儀則の規定とよく一致しており、尊容や情景の表現などの細かい点を除けば、原典に忠実に再現された画像であることがわかる。ただし、トンワトウンデン図には、尊格の配置に関して梵本と明らかに相違する部分がある。それは、八声聞の描かれる位置である。そこで、この八声聞の配置を規定する梵蔵漢テキストの記述を以下に引用して考察してみたい。

(14)[MMK ch.4, 3-3-2-8.]

pratyekabuddhānām cottarato 'ṣṭau mahāśrāvakā abhilekhyā bodhisattvaśiraḥsthānāvavarjo-
paviṣṭāḥ / tadyathā ...

rang sangs rgyas thams cad kyi 'og tu nyan thos chen po brygad byang chub sems dpa'i mgo
la 'dug pa spangs te bri bar bya ba la ...

於辟支佛後復畫. 八大聲聞尊者 ...

八声聞の位置は、縁覚たちの位置を基準として規定されている。まず梵本が「縁覚たちの上方(uttarataḥ)」とあり、対応するチベット訳と天息災訳は「縁覚たちの後方('og tu)」と訳出している。この「後方」という規定を、パタが二次元で表現されることを前提に考慮すると、「縁覚たちの後方」に描くという規定が結果的には「縁覚たちの上方」に描かれることになり、梵本の「縁覚たちの上方(uttarataḥ)」という規定と一致することになるだろう。したがって、梵蔵漢のテキストは共通して八声聞を縁覚たちの上方に描く規定を示している。

ところが、トンワトゥンデン図を確認してみると、釈迦牟尼の坐す蓮華座を囲むように、左右4尊ずつ声聞が配置されている。この不一致にはいかなる理由が考えられるだろうか。推測の域を出ないが、以下に筆者の考えを述べてみたい。まず考えられるのは、最勝パタが三尊形式に基づく左右対称を意識した構図をとる点である。儀則の記述に基づいて最勝パタの画像を復元してみると(Cf.資料篇<復元図試案>), 主な尊格群は、総じて左右のバランスが意識されて配置されていることに気づく。しかし、釈迦牟尼の周辺の主要な尊格のバランスに注目すると、釈迦牟尼の右辺には八縁覚と八声聞(計十六尊)が配されるのに対し、左辺には八如来が配されていて、当該箇所周辺の左右のバランスが非常に悪いことになる。それゆえ、トンワトゥンデン図では、八声聞と釈迦牟尼との密接な関係が考慮され、釈迦牟尼に最も近い位置で釈迦牟尼の坐す蓮華座を囲むように、左右4尊ずつの声聞が配置されたのではないだろうか。こうした配置の訂正は、パタの作製過程において重要な役割を担う画師や、実際にそのパタを用いる行者の意向が、多分に反映された結果だと考えられる³⁵。実際、田中[2000, p.31]において言及されているように、インド各地に広がる仏教石窟の彫像や浮彫を通じて確認される尊格群の配列は、岩盤の形状や堂宇のスペースに柔軟に対応しているようである。画布に描かれるパタは、地理的な条件に左右されやすい石窟の彫像や浮彫ほどの制限はないだろうが、その反面、美術的嗜好を反映しやすい仏教図像であることから、画師の技量や施主の意向が少なからず表面化したとしても何ら不思議ではない。したがって、トンワトゥンデン図と、最勝パタ作製儀則の記述との相違には、実際に画像を描く画師や、依頼者(当儀則の場合は行者)の影響があったように考えられる。

2.2. 中位パタ

最勝パタに続き、本節では MMK 第 5 章に説かれる中位パタの画像に描かれる諸尊を取り上げたい。研究篇<本論>1.4.において言及したように、中位パタは、最勝パタの儀則がベースとなっていることから、基本的な構図は最勝パタとほぼ一致しており、最勝パタと同一の祖型を基盤として展開していったパタだと考えられる。すなわち、三尊形式を基調とした群像表現であり、パタ下方に実在する行者自身を描く点、山や海が広がる情景の表現がなされる点など、最勝パタからの一貫した特徴を確認できる。そこで、中位パタに描かれる各々の尊格のグループを整理するとともに、中位パタ独自の特徴を浮き彫りにするために、最勝パタとの比較を行いながら、その相違点を中心に引き上げながら考察を進めていきたい。

2.2.1. 中位パタに描かれる尊格(Cf. 資料篇<復元図試案>)

2.2.1.1. 菩薩

ではまず、中位パタに描かれる菩薩について見ていきたい。中位パタの作画規定には、以下のように菩薩を描くように規定されている。

(1)[MMK ch.5, 2-2-3 ~ 2-2-4.]

dakṣiṇapārśva āryamañjuśrīḥ padmakiñjalkābhaḥ kuṅkumādityavarṇo vā vāmaskandhapradeśe nīlotpalāvasaktaḥ kṛtāñjalipuṭo bhagavantam śākyamuniṃ nirīkṣamāṇa īṣatprahasitavadanaḥ kumārārūpī pañcacīrakopaśobhitaśīrasko bāladārakālañkārabhūṣito dakṣiṇajānumaṇḍalāvanataśīraḥ // bhagavataś ca śākyamuner vāmapārśva āryāvalokiteśvaraḥ śaratkāṇḍagauro yathaiiva pūrvam tathaiivābhilekhyāḥ, kiṃ tu bhagavataś cāmaram uddhūyamānam, tasya pārśva āryamaitreyaḥ samantabhadro vajrapāṇir mahāmatīḥ śāntamatir gaganagañjaḥ sarvanīvaraṇa- viṣkambhinaś ceti / ete 'nupūrvato 'bhilekhyāḥ / yathaiiva prathamam tathaiiva sarvālañkāra- bhūṣitāḥ ciatrāpayitavyāḥ //

[釈迦牟尼の]右辺に聖文殊師利が、蓮華の雄しべのような[色]、あるいはサフランのような太陽の色で、左肩の辺りに青蓮華を持ち添えて、虚心合掌し、世尊釈迦牟尼を観察しつつ、少しく微笑し、童子の体つきで、五髻によって飾られた頭頂を有し、若い少年の飾りによって飾られて、右膝頭を地につけて(蹲踞)低頭している。また、世尊釈迦牟尼の左側に、観自在が、秋季の月のように輝かしく、まさに前述したように、そのように描かれるべきであるが、ただし、世尊に拂子を振り動かして、かの者(観自在)の側に、聖弥勒、普賢、金剛手、大慧、寂慧、虚空庫、除一切蓋がいる。かの者たちは、順番に描かれるべきである。最勝[パタ作成儀則]のように、そのように一切の装飾によって飾られた者たちが描かれるべきである。

引用文(1)の冒頭の dakṣiṇapārśva は、中位パタの主尊である釈迦牟尼の右辺を示しているが、その右辺に描かれる菩薩は、文殊一尊のみであることがわかる。一方、釈迦牟尼の左辺には、観自在を筆頭に、弥勒、普賢、金剛手、大慧、寂慧、虚空庫、除一切蓋が描かれる。

そこで、まず気づくのが、主尊の右辺に文殊一尊、左辺に八尊という左右非対称の構図である。後述するように、中位パタ全体を俯瞰すれば、結果的に左右対称の構図を見て取ることができるが、菩薩だけに注目すると、明らかにバランスが悪い。ただし視点を変えて、主尊の右辺に文殊一尊という構図を考察すれば、文殊の存在が強調された構図とも捉えることができるだろう。

また、最勝パタと比較した場合、文殊の描かれる位置が左右逆転し、釈迦牟尼・文殊・弥勒の三尊形式から釈迦牟尼・文殊・観自在へと転換した点が、顕著な相違点といえる。この二点については、本項の最後に詳しく考察することにする。このような最勝パタに描かれる十六尊の菩薩と、中位パタに描かれる九尊の菩薩の比較をまとめてみると、以下の表のように整理できるだろう。

[表 1：最勝パタの十六菩薩と中位パタの九菩薩]

| | | 最勝パタの十六菩薩 | 中位パタの九菩薩 |
|---|---|------------------------------|----------------------------|
| ① | 左 | 文殊師利(Mañjuśrī; 妙吉祥) | 観自在(Avalokiteśvara; 観自在) |
| | 右 | 弥勒(Maitreya; 慈氏) | 文殊師利(Mañjuśrī; 妙吉祥) |
| ② | 左 | 月光(Candraprabha; 月光) | 弥勒(Maitreya; 慈氏) |
| | 右 | 普賢(Samantabhadra; 普賢) | |
| ③ | 左 | 善財(Sudhana; 妙財) | 普賢(Samantabhadra) |
| | 右 | 観自在(Avalokiteśvara) | |
| ④ | 左 | [除]一切蓋(Sarvanīvaraṇa; 能除一切蓋) | 金剛手(Vajrapāṇi) |
| | 右 | 金剛手(Vajrapāṇi) | |
| ⑤ | 左 | 虚空庫(Gaganagañja; 虚空蔵) | 大慧(Mahāmātī; 大意) |
| | 右 | 大慧(Mahāmātī; 大聖意) | |
| ⑥ | 左 | 地藏(Kṣiṭigarbha) | 寂慧(Śāntamātī; 善意) |
| | 右 | 寂慧(Śāntamātī; 善意) | |
| ⑦ | 左 | 無罪(Anagha; 無價) | 虚空庫(Gaganagañja; 虚空蔵) |
| | 右 | 遍照蔵(Vairocanaṅgarbha) | |
| ⑧ | 左 | 妙眼(Sulocana; 妙眼意) | [除]一切蓋(Sarvanīvaraṇa; 除蓋障) |
| | 右 | 滅罪(Apāyajaha) | |

表 1 より、中位パタの九尊の菩薩は、その全てが最勝パタにも描かれる菩薩であり、最勝パタでは、右辺に描かれていた観自在、弥勒、普賢、金剛手、大慧、寂慧が、観自在を筆頭として、左辺に移動し、最勝パタにおいても左辺に描かれていた虚空庫、除一切蓋が加えられたと見ることができる。さらに、右辺に描かれる文殊を加えれば、研究篇<本論> 2.1.1.1.において言及した「標準型八大菩薩」(観音・弥勒・虚空蔵・普賢・金剛手・文殊・除蓋障・地藏)の八尊とほぼ重なることになり、中位パタも最勝パタと同様に「標準型八大菩薩」に影響を受けて展開した一形態と見ることができるだろう。このような「標準型八大菩薩」の系譜は、2.1.1.1.で言及したように、『金剛手灌頂タントラ』および『大日経』所説のマンダラにも確認することができ、本経第 2 章所説のマンダラのみならず、本経所説

のパタを代表する最勝パタ、中位パタも胎蔵マンダラの系譜と無関係ではないことがわかる。この点は、次節で『文殊師利法寶藏陀羅尼經』所説のパタを扱う際にも言及することにした。

では本項の最後に、注目すべき最勝パタとの相違点について、以下の二点をさらに詳しく考察していきたい。

(a)文殊の描かれる位置が中尊釈迦牟尼を中心として左右逆になる点。

(b)菩薩の上首が弥勒から觀自在に交代する点。

まず(a)の問題について、そもそも本經のパタを始めとし、初期密教經典所説のパタは、中期密教以降のマンダラのように、一定の幾何学的なパターンや教理に基づいて尊格が配置されるわけではなく、經典に描写される一場面を切り抜いたような説法図、あるいは浄土図に近い構図を有している。したがって、三尊形式を基調とするものの、脇侍となる上首の菩薩の左右の配置に関してはあまり重視されず、むしろ画像全体にわたる情景のバランスによって、尊格の配置が柔軟になされる傾向が強かったのではないと思われる。実際、近年の図像学の範疇においても、三尊形式の発展型である胎蔵マンダラのように、本尊の右側に觀自在、左側に金剛手という配置が固定されていくのは、ポスト・グプタ期以降であることが報告されている³⁶。したがって、本經のようなパタ作成儀則が制作されていた年代は、三尊形式という構図は一般的に普及していたが、後代に発展していくマンダラのように左右の尊格を固定化し、パタと密教儀礼が有機的に関わる段階までには至っていなかったと考えるのが妥当であろう。それゆえ、本經のパタ作成儀則の制作者たちは、文殊の位置を始めとする左右の諸菩薩の配置をあまり重要視していなかったと考えられる。

次に(b)の問題について、研究篇<本論>2.3.において後述するように、中位パタ作成儀則の成立年代は、少なくとも菩提流志の活躍年代である7世紀頃まで遡ることができる。当時は初期密教から中期密教への過渡期にあたる年代であり、觀自在に関連する密教經典が次々と生み出された年代に相当する。こうした事情を考慮すれば、密教經典において徐々に地位を確立していった觀自在と、本經の中心的存在である文殊を上首することで、中位パタを当時のインド密教の潮流に呼応させようとした意図が読み取れるのではないだろうか。

さらに中位パタの下方に注目すれば、最勝パタと同様にヤマータカとターラーが描かれる。後代の密教文献では、ヤマータカは文殊の忿怒相の化身とされ、またターラーと觀自在は密接な関係にある。したがって、中位パタにおいて文殊を上首とする集団の下方にヤマータカ、觀自在を上首とする集団の下方にターラーが描かれる構図は、前述した両尊の密接な関係に合致するといえる。

一方、最勝パタでは、ターラーは弥勒を上首とする八菩薩の下方に描かれている。この八菩薩の中には觀自在が含まれているが、ターラーとの関係を考慮すると、弥勒を上首とする八菩薩とターラーが直線上に描かれる構図は、少し不自然な印象を受ける。おそらく弥勒は、初期の大乗經典から菩薩の上首として登場することが多く、この最勝パタの不自然な構図は、そのような大乗經典の影響を根強く受けたと思われる。実際、次節2.3.で取り上げる『文殊師利法寶藏陀羅尼經』所説のパタの中心の尊格は、釈迦牟尼・文殊・弥勒の三尊であり、最勝パタとは脇侍である文殊・弥勒の配置が逆であるものの、三尊は一致している。したがって、この三尊を中心とした構図を有するパタも決して珍しくないことが

わかる。いずれにしても、釈迦牟尼の両脇侍と、ヤマーンタカ・ターラーの上下の関係は、最勝パタよりも中位パタの方が妥当であろう。

2.2.1.2. 八如来

次に中位パタに描かれる八如来について見ていきたい。中位パタの作画規定によれば、中位パタに描かれる八如来は、以下のように規定される。

(2)[MMK ch.5, 2-2-5.]

teṣāṃ copariṣṭād aṣṭau buddhā bhagavantaś citrāpayitavyāḥ sthitakā abhayapradānadakṣiṇa-
karāḥ pīta-cīvarottarāsaṅgīkṛtadehā vāmahastena cīvarakarṇakāvasaktā ṣṣadraktāvabhāsakāṣā-
*yasunivastāḥ samantaprabhāḥ sarvākāravaropetāḥ / tadyathā **saṃkusumitarājendras** tathāgato*
ratnaśikhiḥ śikhir viśvabhuk krakucchandaḥ kanakamuniḥ kāśyapaḥ sunetraś ceti / ete
buddhā bhagavantaś citrāpayitavyāḥ //

またかの者たちの上に、尊き八仏が描かれるべきであり、立ち上がっていて、右手で施無畏をなし、黄色い衣を上衣として着た姿で、左手には衣の端が掛けられていて、少しく赤色に輝く袈裟を着て、普く光り輝き、あるゆる勝れた形相を具えている。[その八仏とは]すなわち、開華王、宝頂、Śikhin, Viśvabhuj, Krakucchanda, Kanakamuni, Kāśyapa, 妙眼である。これらの尊き諸仏が描かれるべきである。

引用文(2)の下線部*teṣāṃ*は、直前に説かれる左辺の八菩薩を指しているため、八如来は、釈迦牟尼の左辺上方に描かれることになる。これらの描かれる位置は、最勝パタと同様であるが、描かれる如来の諸尊は、最勝パタの八尊のうちの五尊が交代している。すなわち、開華王如来、宝頂如来、妙眼如来はそのまま中位パタにも描かれ、Śikhin, Viśvabhuj, Krakucchanda, Kanakamuni, Kāśyapaの五尊が新たに追加されている。これらの五尊は、過去七仏として知られ、仏伝文献を中心として、実に様々な仏教文献に登場する尊格である。したがって、初期密教経典に位置づけられる経典群とも決して無関係ではない。初期密教経典と過去七仏の関係は、宮坂[1970]によって指摘されて以来、その後の先行研究³⁷によっても言及されており、過去七仏の名称が、密教経典所説の護呪と結びつけられて登場する場合が多い。こうした背景には、「大本経」などの仏伝文献所説の過去七仏に対する根強い信仰があったと指摘されている。それゆえ、本経の中位パタに描かれる八如来のうちの五尊が、過去七仏というグループを構成する尊格であることを考慮すれば、過去七仏信仰に少なからず影響を受けていたと考えるのが自然であろう。この点については、次項の天部の尊格の関係とも併せて詳しく考察したい。なお、研究篇<本論>2.3.1.で後述するように、『金剛手灌頂タントラ』所説のマンダラの主要な八如来にも、過去七仏のうちの四尊が布置される。この点からも、MMK所説のパタが、胎蔵マンダラの系譜と関連を有することをうかがい知ることができよう。

2.2.1.3. 天衆

次に注目したいのが、中位パタに描かれる天衆である。中位パタ作製儀則によれば、天衆は以下のように規定されている。

(3)[MMK ch.5, 2-2-7.]

evam śuddhāvāsakāyikā devaputrā, abhilekhyāḥ / śakro devānām indraḥ ca sayāmaś ca samtusitaś ca sunirmitaś ca śuddhaś ca vimalaś ca sudrśaś cātapaś cābhāsvaraś ca brahmā saḥāmpatir cākaniṣṭhaś caivamādayo devaputrā rūpāvacarāḥ kāmāvacarāś cānupūrvato 'bhilekhyāḥ / āryamañjuśriyasamīpasthāḥ parṣanmaṇḍaloparicitavinyastāḥ svarūpaveśadhāriṇāḥ citrāpayitavyāḥ //

同様に、浄居天衆の天子たちが描かれるべきである。帝釈天、夜摩天、兜率天、妙化天、清浄天、無垢天、善現天、無熱天、光明天、娑婆世界の主である梵天、色究竟天、以上を始めとする色界や欲界の天子たちが、順番に描かれるべきである。[天衆は]聖文殊師利の近くにいて、積み重なった集会として布置され、各々の姿と装いを有して描かれるべきである。

引用文(3)前部の記述を補足すると、文殊の右辺の近くに「大集会(mahāparṣanmaṇḍala)」として総合されて、八声聞、八縁覚を描くように規定される³⁸。その記述を引用文(3)冒頭の evam で受けているために、中位パタ全体の構図からすれば、引用文(3)で規定される天衆も、「大集会」の一部であると思われる。

次に描かれる天衆として挙げられるのは、下線部1の浄居天の天子、続いて下線部2の欲界に属する六欲天の帝釈天から色界の最上位に位置づけられる色究竟天までが、具体的に名称を挙げられて列挙されている。その記述される順序は、一般的な天部の序列とは必ずしも合致しないようであるが³⁹、筆者が注目したいのは、五浄居天に位置づけられている、善現天(Sudrśa)、無熱天(Atapas)、色究竟天(Akaniṣṭha)の三尊である。そもそも、第4章の最勝パタは、浄居天宮が舞台となって説かれていて、第5章もそれに引き続いて説かれることから、同じく浄居天宮が舞台となって説かれていると考えられる。したがって、浄居天を始めとする諸天が、最勝パタおよび中位パタに描かれるのは、その儀則が説かれている舞台を表すための当然の手段として理解できる。しかし、最勝パタの儀則では、釈迦牟尼の上方で、天蓋を支え、散華をする浄居天の作画が指示されるものの、中位パタの儀則のように、尊格の一群に含められて、さらにその具体的な名称があげられて天衆の作画が指示される規定は見られなかった。この点は、最勝パタとは異なる中位パタ独自の特徴である。

では、このような最勝パタと中位パタの相違にはいかなる背景があるのか。以下では、前項で言及した八如来に含まれる過去七仏との関係とともに考察してみたい。

そこでまず、過去七仏との関係が深い「大本経」を取り上げたい。「大本経」類本の中で最も詳細な内容を有するパーリ文献(Mahāpadānasuttanta)を見てみると、冒頭部⁴⁰では、過去七仏の名前や出自などが明かされ、また末尾⁴¹では、Aviha、Atappa(=Atapas)、Sudassa(=Sudrśa)、Sudassin、Akaniṭṭha(=Akaniṣṭha)の五浄居天が、過去仏Vipassinの事蹟を詳細に明かしている。これらの点は、天野[2010]によって、仏伝文献の展開と過去仏思想の観点から考察がなされているが、本稿の中位パタに描かれる尊格群を考察する上でも、過去

仏と浄居天の関係を示す「大本経」の記述は注目すべきであろう。特に「大本経」末尾の一節において⁴²、浄居天の天衆が、過去仏Vipassinのもとで梵行を重ねた結果、浄居天に生じたことを明かしている点は注目すべきであろう。この記述に依拠すれば、過去仏Vipassinと浄居天は密接な関係にあることがわかる。

さらに天野[2010, p.192]によって指摘されているように、*Lalitavistara*の冒頭部においても、過去仏と浄居天の密接な関係を確認できる。本論文においても、以下に当該箇所を取り上げて考察してみたい。

(4)[*Lalitavistara*, p.274, 8–p.276, 6.]

ekānte sthitāś ca te śuddhāvāsakāyikā devaputrā bhagavantam etad avocan / asti bhagavan lalitavistaro nāma dharmaparyāyaḥ sūtrānto mahāvaiṣṭhānīyāyāḥ, bodhisattvakuśalamūla-samudbhāvanas tuṣṭitavarabhavanāvatarāṇasaṃcintyāvakramaṇavikrīḍanagarbhasthāna-viśeṣasaṃdarśano ’bhijātajanmabhūmiprabhāvasaṃdarśanaḥ ...

sarvamāramaṇḍalavidhvaṃsanas tathāgatabalavaiśāradyāṣṭādaśāveṇikasamuccayo ’pramāṇa-buddhadharmanirdeśaḥ pūrvakair api tathāgatair bhāṣitapūrvah / tadyathā bhagavatā padmotta-reṇa ca dharmaketunā ca dīpaṃkareṇa ca ...

sampūjitena ca vipaśyinā ca śikhinā ca viśvabhuvā ca krakucchandena ca kanakamuninā ca kāśyapena ca tathāgatenārhatā samyaksambuddhena bhāṣitapūrvas, taṃ bhagavān apy etarhi samprakāśayet /

また一処に坐したかの浄居天子たちは、世尊に以下のように述べた。“世尊よ、*Lalitavistara* と名づける法門にして、非常に広大な經典があり、菩薩の善根を生起させ、兜率天のすばらしい宮殿からの降下と考えられる遊戯なる入胎や種々の在胎を顕示するものであり、高貴な生まれとすばらしい出生地を顕示するものであり、 ...

全ての魔を破壊し、如来の[十]力と[四]無畏と十八不共[法]を集めたものであり、無量の仏法を説くものであり、過去の諸仏によっても以前に説かれたものであります。すなわち、世尊 Padmottara, Dharmaketu, Dīpaṃkara, ...

Sampūjita, Vipāśyin, Śikhin, Viśvabhū, Krakucchanda, Kanakamuni, Kāśyapa如来・応供・正等覚者によって、以前に説かれたのであり、世尊もまた今、それを説くべきであります⁴³。

引用文(4)では、浄居天によって、以前に多くの過去仏が*Lalitavistara*の法門を説いたと明かされ、現前する世尊に対してもまた、浄居天が*Lalitavistara*の法門を説くように勧請していることを読み取れる。すなわち、浄居天による勧請が、経題でもある*Lalitavistara*の法門を説く契機となっているのである。このように引用文(4)では、浄居天は重要な役割を担っており、前述の「大本経」と同様に、過去仏と浄居天が密接な関係にあることを物語っているだろう。

ここで、中位パタに描かれる過去仏と天衆に再び目を向けると、Śikhin, Viśvabhuj, Krakucchanda, Kanakamuni, Kāśyapa という過去七仏のうちの五如来、および善現天(Sudṛśa), 無熱天(Atapas), 色究竟天(Akaniṣṭha)という五浄居天のうちの三天を描くように規定されていた。この他にも如来や天部を代表する諸尊が描かれることを考慮すれば、過去仏の如来

と浄居天だけに注目するのは少なからず問題があるだろうが、上記の仏伝文献で確認されるような過去仏と浄居天の密接な関係を考えた場合、両グループが同一画面上に描かれるという点は見過ごすことはできない。おそらく、上記で取り上げたような「大本経」、*Lalitavistara* といった主要な仏伝文献において示された過去仏と浄居天の強固な関係が、本経所説の中位パタの尊格群に、少なからず影響を与えていたのではないだろうか。

なお、最勝パタ作製儀則には、過去仏によって説かれてきた儀則を、現在仏である釈迦牟尼が説き明かそうという旨が述べられている⁴⁴。こうした記述の背景には、一連のパタ作製儀則を無数の過去仏が説いてきたという設定によって、その価値の普遍性、重要性を強調する意図があったと考えられ、最勝パタ作製儀則から一貫して、過去仏の存在は意識されていたと考えられる。実際、研究篇〈本論〉2.1.1.2.において言及したように、最勝パタの八如来の筆頭にあげられる宝頂如来(Ratnaśikhin)は、*Dīvyāvadāna* や *Suvarṇaprabhāsa* において過去仏として登場しており、最勝パタの八如来のグループも過去仏と決して無関係な如来ばかりが描かれているわけではない。しかし、最勝パタと中位パタにおける八如来を比較した場合、中位パタの八如来に過去仏としてより著名な尊格を選出し、過去仏の色の強い八如来を構成しようとした制作者たちの意図は明らかであろう。

以上を整理すれば、中位パタは、最勝パタでは一群として描かれることのなかった天部の尊格、特に上記の浄居天が、天衆の中心を担って描かれる。また中位パタは、過去七仏として知られる尊格が八如来を形成している。これらの点は、最勝パタに確認できない中位パタ独自の特徴である。このような二種のパタの相違は、空間を軸とした仏陀観と、時間を軸とした仏陀観による違いが、両パタに描かれる八如来に反映された結果として理解できるのではないだろうか。すなわち、最勝パタの八如来は、どちらかといえば、他方仏国土を象徴する諸如来を描くのに対し、中位パタの八如来は、過去七仏に由来する諸如来を描き、過去仏の存在を強調する構成である。それゆえ、上記のような仏伝文献において、過去仏と密接な関係にある浄居天を始めとする天衆を描く構図が、中位パタに採用されたと考えられる。

2.2.2. その他の中位パタの特徴

本節でこれまでに見てきた尊格群(菩薩、如来、天衆)は、最勝パタと異なる要素を有するものであった。しかし、これらの内容を除けば、ほぼ最勝パタと一致している。以下では、最勝パタから一貫する重要な特徴だけを取り上げて、中位パタの構図を確認することにした。

まず、注目してきたグループの他には、主な尊格群として、八大声聞、八縁覚のグループが大集会として描かれる。このグループのほとんどの尊格の名称は省略され、最勝パタと同様に描くとする規定がなされている⁴⁵。さらに、この大集会は、釈迦牟尼の右辺に一尊だけ描かれる文殊のそばに描くと規定されていることから、この大集会を描くことによって、釈迦牟尼の左辺に描かれる八菩薩とのバランスが保たれ、中位パタが一応の左右対称の構図となるのではないだろうか。

次に、本経のみならず、初期密教経典所説のパタに共通する重要な特徴に、行者を描く点をあげなければならない。中位パタも最勝パタと同様に、以下のように規定された行者

が描かれる。

(5)[MMK ch.5, 2-2-9]

ekasmin paṭāntakoṇe, sādḥako yathāveśasamsthānākāroḥ vanatajānukoparaśiro dhūpakaṭa-
cchukavyagrahastāḥ citrāpayitavyaḥ //

パタの端の一隅に、装いや外見そのままに、膝を地に着けて(蹲踞)低頭で、香炉を手
に取った行者が、描かれるべきである。

引用文(5)の下線部2より、中位パタに描かれる行者も、最勝パタと同様に、パタ成就法を
実践する実在の行者の外見の特徴を捉えて描かれることが読み取れる。また、行者が蹲踞
の姿勢で香炉を手を持つ点も変わらず、最勝パタから一貫した規定がなされていることが
わかる。ただし、行者を描く位置だけは、最勝パタでは文殊の足下に描かれる岩山の下方
に描くという具体的な規定がなされていたのに対し、中位パタでは、引用文(5) 下線部 1
のように、「パタの端の一隅に(ekasmin paṭāntakoṇe)」という曖昧な規定がなされている。本
節冒頭で言及したように、あくまで中位パタの構図は、最勝パタに準ずることから、おそ
らく、中位パタにおいても、行者は文殊側、すなわち釈迦牟尼の右辺の下方に描くと解釈
するのが妥当であろう⁴⁶。

最後にヤマータカとターラーを取り上げたい。両尊も、最勝パタと同様に以下のように
規定されて描かれる。

(6)[MMK ch.5, 2-2-10~2-2-11]

tasmimś ca ratnaparvata āryamañjuśriyasyādḥastāt yamāntakakrodharājā yathāpūrvanirdiṣṭam
abhilekhyāḥ //

vāmapārśve bhagavataḥ siṃhāsanasādhastād āryāvalokiteśvarapādāmūlasamīpe tasmimś ca
ratnaparvata upaniṣaṇṇā tārādevī abhilekhyā / yathā pūrvanirdiṣṭā tathā citrāpayitavyā //

また、かの宝山において聖文殊師利の下方に、ヤマータカ忿怒王が前述の通りに描
かれるべきである。

世尊の左辺において、獅子座の下方で、聖観自在の足下の近くで、またかの宝山に坐
したターラー天女が、前述の通りに描かれるべきである。

ここで注目したいのは、引用文(6)の下線部が示す両尊の描かれる位置である。研究篇<本
論>2.2.1.1.において言及したように、主尊の右辺に唯一描かれる菩薩である文殊の下方に
ヤマータカ、主尊の左辺の八菩薩の筆頭である観自在の下方にターラーという構図は、
両グループの尊格同士の密接な関係に合致するものである。最勝パタでは、弥勒を筆頭と
する八菩薩の下方にターラーが描かれるために、不自然な印象を受けたが、中位パタにお
いては、各々の密接な関係をそのまま反映させた構図に転換している。こうした変化は、
観自在に対する信仰の拡大と、それに伴うターラー尊の性格の確立を裏付けるものと考え
られる。

2.3. 『文殊師利法寶藏陀羅尼經』所説のパタ

本節では、前節までに扱ってきた最勝パタ、および中位パタと非常に類似した構図の『文殊師利法寶藏陀羅尼經』(以下『法寶藏經』と略)所説のパタを取り上げて考察していきたい。すでに山下[1979, pp.9-14]、田中[2010a, pp.35-44]によって、『法寶藏經』は、本經所説のパタと類似の構図を有する関連經典として指摘されているが、個々の詳細な比較はなされていないようである⁴⁷。それゆえ、ここでは前節までに整理してきた最勝パタ・中位パタの主な特徴と比較し、三種のパタの関係について言及したい。

『法寶藏經』は、現状では漢訳文献のみが現存し、「大正新脩大藏經」に no.1185A, no.1185B の二種が収蔵されている⁴⁸。両者はいずれも菩提流志訳とされ⁴⁹、その内容を比較してみると、ほとんど違いはなく、全体を通じて no.1185B の方に若干増広された形跡を確認することができる。本節で扱うパタの儀則を説く部分に関しても、両者はほとんど同一の記述であり、両者を区別する必要はないといえる。したがって、以下の考察では、no.1185A のみを扱うことにしたい。

2.3.1. パタに描かれる諸尊

では、『法寶藏經』所説のパタの作画儀則を取り上げて、重要な特徴を考察していきたい。

(1) 『文殊師利法寶藏陀羅尼經』(vol.20, p.794b21-c22.)⁵⁰

§a 先於中畫釋迦牟尼佛。坐七寶蓮華座如說法勢。

§b 於佛右邊畫文殊師利。如童子相貌頂戴寶冠。項著瓔珞種種莊嚴。身如鬱金色面貌熙怡瞻仰如來。次右邊畫觀自在菩薩。次畫普賢菩薩。虛空藏菩薩。無盡意菩薩。

§c 次於釋迦牟尼如來左邊。畫彌勒菩薩。次畫無垢稱菩薩。次畫除一切障菩薩。次畫月光童子。次畫金剛藏菩薩。已上菩薩等。各於七寶蓮華座上。皆須畫本形。乃至手執。並依本法畫之。勿使漏脫。

§d 復於釋迦如來上。畫七佛。所謂廣大智甚深雷音王如來。除一切障如來。阿彌陀如來。功德處如來。普香如來。難勝勇雷音行如來。心不動如來。此七佛皆須次第畫之。其身皆作金色各如說法相。

§e 其畫像上兩角。各畫一天仙。頂戴花鬘各一手執花一手散花。半身隱於雲中。形貌端正種種七寶以為瓔珞莊飾其身。

§f 其釋迦牟尼佛蓮華下。畫二龍王。一名難陀二名憂波難陀。其二龍王並於無熱惱池中出半身。以手托共執釋迦如來所坐蓮華莖。作珍重用力勢。其龍王並作人面。頭上各畫七箇蛇頭。頭皆白色身作人形。種種雜寶以為嚴身。皆仰瞻視目覩如來。

§g 文殊師利下。畫野漫德迦忿怒王。仰觀文殊菩薩。如授教勢。彌勒菩薩下。畫持明人。以本相貌手執香爐跪而坐。瞻視世尊如聽法勢。

§h 畫像四邊。散畫龍花及諸妙花。下左邊畫梵天王魔醯首羅天四天王天。次畫四箇阿素羅王。次畫四箇執鬼神曜王。右邊畫那羅延天帝釋天四天王天。次畫四阿素羅王。次畫四箇執神王。已上各依本形貌。皆須執持器仗不得差錯。次畫九箇執神。其身半隱合掌向佛觀如來相。

まず, §a からわかるように, 最勝パタ, 中位パタと同様に, 『法寶藏經』のパタの主尊も釈迦牟尼である。次に§b-c では, 合計十尊の菩薩を左右対称に五尊ずつ描くように指示している。これらの規定を整理すれば, 当パタの基本構図は, 釈迦牟尼・文殊・弥勒の三蔵形式であることがわかる。この中心の三尊は, 最勝パタと一致しているが, 上首となる文殊と弥勒の配置は最勝パタと左右逆である。そこで, 十尊の菩薩の配置を, 最勝パタ・中位パタと比較してみると, 以下の表のようになるだろう。

[表 1 : 三種のパタに描かれる菩薩の比較]

| | | 最勝パタの十六菩薩 | 中位パタの九菩薩 | 『法寶藏經』パタの十菩薩 |
|---|---|------------------------------|----------------------------|--------------|
| ① | 左 | 文殊師利(Mañjuśrī; 妙吉祥) | 觀自在(Avalokiteśvara; 觀自在) | 弥勒 |
| | 右 | 弥勒(Maitreya; 慈氏) | 文殊師利(Mañjuśrī; 妙吉祥) | 文殊師利 |
| ② | 左 | 月光(Candraprabha; 月光) | 弥勒(Maitreya; 慈氏) | 無垢稱 |
| | 右 | 普賢(Samantabhadra; 普賢) | | 觀自在 |
| ③ | 左 | 善財(Sudhana; 妙財) | 普賢(Samantabhadra) | 除一切障 |
| | 右 | 觀自在(Avalokiteśvara) | | 普賢 |
| ④ | 左 | [除]一切蓋(Sarvanīvaraṇa; 能除一切蓋) | 金剛手(Vajrapāṇi) | 月光童子 |
| | 右 | 金剛手(Vajrapāṇi) | | 虚空蔵 |
| ⑤ | 左 | 虚空庫(Gaganagañja; 虚空蔵) | 大慧(Mahāmāti; 大意) | 金剛藏(A; 金剛 B) |
| | 右 | 大慧(Mahāmāti; 大聖意) | | 無盡意 |
| ⑥ | 左 | 地藏(Kṣitigarbha) | 寂慧(Sāntamāti; 善意) | |
| | 右 | 寂慧(Sāntamāti; 善意) | | |
| ⑦ | 左 | 無罪(Anagha; 無價) | 虚空庫(Gaganagañja; 虚空蔵) | |
| | 右 | 遍照蔵(Vairocanagarbha) | | |
| ⑧ | 左 | 妙眼(Sulocana; 妙眼意) | [除]一切蓋(Sarvanīvaraṇa; 除蓋障) | |
| | 右 | 滅罪(Apāyajaha) | | |

表 1 で示すように, 『法寶藏經』のパタに描かれるほとんどの菩薩が, 最勝パタ, 中位パタと共通する菩薩であり, 「標準型八大菩薩」⁵¹の菩薩を中心に構成されていることがわかる。また, 無垢稱(Vimalakīrti)が含まれている点も興味深い。おそらく, 最勝パタ, 中位パタと同様に, 「標準型八大菩薩」の尊格を中心として, 文殊との関連が深い大乘經典からその他の尊格を選出したのではないだろうか。

次に§d では, 七如来が描かれる。最勝パタ, 中位パタの当該箇所は, 八如来が描かれ, 特に中位パタでは, 過去仏として著名な如来が中心に構成されていた。『法寶藏經』の七如来を構成する尊格を見れば, 最勝パタ, 中位パタに一貫して描かれる開華王如来の名前がない代わりに, 阿弥陀如来, 心不動如来(Akṣobhya?)⁵²といった名前があげられている。田中[2010a, p.38]が指摘しているように, 心不動如来の原語が Akṣobhya であるならば, 西方, 東方の仏国土を代表する有力な如来があげられていることになり, 他方仏国土の諸仏であることを強調する構成であると考えられる。

なお、研究篇〈本論〉2.1.1.1.および 2.1.1.2.で言及したように、「標準型八大菩薩」と開華王如来は、胎蔵マンダラの系譜に共通する特徴である。特に『金剛手灌頂タントラ』所説のマンダラでは、主尊を囲むように、宝幢(Ratnaketu, 東)・開華王(Saṃkusumitarājendra, 南)・無量光(Amitābha, 西)・阿閼(Akṣobhya, 北)・Śikhin(北東)・Vipaśyin(東南)・Viśvabhuj(南西)・Krakucchanda(西北)の八如来が布置される⁵³。この構図を、中位パタの八如来、および『法寶蔵経』の七如来と比較すれば、『金剛手灌頂タントラ』所説の主要な八如来は、中位パタの過去仏、『法寶蔵経』の他方仏国土の諸仏を折衷するような構図であることに気づく。したがって、パタとマンダラという相違はあるものの、中核を担う尊格には多くの共通点を見いだすことができ、『法寶蔵経』所説のパタも、胎蔵マンダラの系譜に位置づけることが可能であろう。

次に§fでは、ナンダ、ウパナンダの龍王が描かれる。主尊釈迦牟尼の坐す蓮華座の茎を支える様子は、最勝パタの構図と非常に類似しており、両尊の詳細な特徴を示す記述まで、最勝パタの記述と類似している。

最後に§gでは、パタの下方に描かれるヤマータカと行者(引用箇所では「持明人」)について言及している。その記述によれば、文殊側の下方にヤマータカ、弥勒側の下方に行者を描く規定がなされているが、この構図は最勝パタ・中位パタと若干異なる。すなわち、文殊とヤマータカの組み合わせは一致するが、弥勒と行者の組み合わせは、最勝パタ、中位パタには見られない規定である。というのも、両パタでは、ヤマータカとターラーが守護尊としての役割を担って、パタ両側下方に描かれていたからである。おそらく、最勝パタ・中位パタに描かれていたターラーが、『法寶蔵経』のパタでは描かれないので、左右の構図のバランスをとるために、ヤマータカと対称的な位置に行者を描くという指示がなされているのではないだろうか。ただし、パタの下方に行者を描き入れるという特徴は、共通する要素として考えてよいだろう。

このように、『法寶蔵経』所説のパタ全体を俯瞰すれば、最勝パタ・中位パタに類似していることが明らかである。したがって、『法寶蔵経』の訳者である菩提流志の活躍年代を考慮すれば、本経所説の最勝パタ・中位パタと類似した構図のパタが、少なくとも7世紀頃には存在していたと考えられる。そしてこの種のパタが、異なる經典に散説されていることを考慮すれば、当時の密教行者の間で一定の権威を有し、幅広く流布していたと推測できよう。

2.3.2. 文殊の八字真言

文殊系の密教經典には文殊を本尊とする様々な成就法が説かれているが、それらを区分する手段として、成就法の中で唱える真言の字数を基準とした分類法がしばしば適用される。この分類法によって区分された文殊は、一字文殊、五字文殊、六字文殊、八字文殊などと称され、特に「ア・ラ・パ・チャ・ナ(a ra pa ca na)」の五字文殊は、後代のインド密教において重要な位置を占めている⁵⁴。前項では、最勝パタ・中位パタと類似の構図を有する『法寶蔵経』所説のパタについて取り上げたが、そのパタの作画法が説かれる前に、「大威徳秘密心陀羅尼」あるいは「最勝大威徳心真言」と称される八字真言が、以下のよう

(2) 『文殊師利法寶藏陀羅尼經』(no.1185A, vol.20, p.793b-c)

汝今諦聽諦聽我當爲汝說。此八字名大威德祕密心陀羅尼。如佛住世一無異也。能與一切衆生。於黑暗中作大明燈。爾時如來即說陀羅尼曰

曩莫阿跛哩弭懿庾枳孃_{二合} 曩尾潼失者_{二合} 野囉_引 惹_引 捺囉_引 野怛他_去 藥哆野曩謨曼租_{子魯反} 失哩

_{二合} 曳矩麼_引 羅步哆野怛爾也_{二合} 他唵惡_引 尾囉吽_引 佉_引 佐_上 冑_上

於是世尊告金剛密迹主。言是八字最勝大威德心眞言者。所住之處如佛在世無有異也。能現諸佛種種神力不可思議。亦能作大神通變化。

引用文(2)の下線部の八字眞言は、「文殊の八字眞言」の典拠とされる不空訳『大聖妙吉祥菩薩祕密八字陀羅尼修行曼荼羅次第儀軌法』所説の「文殊の八字眞言」(om āḥ vīra hūṃ khacarah)⁵⁵と同一であると考えられる。さらに、この八字眞言は、MMK 第2章のマンダラ造立儀則の前に説かれる種々の眞言の中にも「文殊の八字眞言」として説かれている⁵⁶。それゆえ、『法寶藏經』所説の八字眞言はその名称こそ異なるものの、「文殊の八字眞言」と同一の眞言と考えて問題ないだろう。この八字眞言を唱えることによって、『法寶藏經』のパタ成就法が実践されるため、『法寶藏經』所説のパタは、いわゆる「八字文殊成就法」に用いられるパタと位置づけることができる。

以上を整理すれば、MMK の最勝パタ・中位パタは、『法寶藏經』所説のパタと類似していることから、「八字文殊成就法」に用いられるパタと類似していると言い換えることが可能である。最勝パタ・中位パタのような構図を有するパタが、「八字文殊成就法」のパタへと展開したのか、あるいは、「八字文殊成就法」のパタが、本經に最勝パタ・中位パタとして組み込まれたのか、現段階ではこのような先後関係に言及できるだけの根拠を提示することはできないが、本經の最勝パタ・中位パタが、本經の中だけではなく、文殊系密教經典全体の中においても重要な位置にあることは間違いない。

2.4. 小位パタ

最勝パタ・中位パタに続き、本節では MMK 第 6 章に説かれる小位パタの画像に描かれる諸尊を取り上げたい。小位パタは、最勝パタ・中位パタと比べて著しく小規模となり、描かれる尊格も数える程となる。したがって、本節では、前節までのように尊格のグループごとに取り上げることはせずに、まとめて小位パタの全体像を整理していきたい。

2.4.1. 小位パタに描かれる尊格(Cf. 資料篇〈復元図試案〉)

では、小位パタに描かれる諸尊について整理していきたい。小位パタは、50尊以上の尊格が描かれる最勝パタ・中位パタと比較すると、著しく小規模になっている。小位パタの諸尊の配置は、文殊を基準として説かれており、その両側に普賢と観自在が描かれる⁵⁷。したがって、小位パタの基本的な構図は、文殊を主尊とし、普賢・観自在を脇侍とする三尊形式と考えられる⁵⁸。最勝パタ・中位パタが釈迦牟尼を主尊とし、その両側に諸菩薩を配置する構図であったことを考慮すれば、釈迦牟尼は一切登場せずに文殊を主尊とする点に、小位パタ独自の特徴を見出すことができるだろう。

一方、小位パタの下方に目を向ければ、行者とヤマーンタカが描かれる。この両者は、最勝パタおよび中位パタにおいても下方に描かれ、各々のパタに構成される尊格群の中で重要な意義を有して描かれる存在であった⁵⁹。また両者の尊容についても、小位パタの規定が最勝パタに依拠すべきだとしていることから、行者とヤマーンタカの存在は、三種のパタに共通する要素として考えて問題ないだろう。

そして最も注目すべきは開華王如来の存在である。研究篇〈本論〉2.1.1.2.および2.2.1.2.において言及したように、最勝パタおよび中位パタでは、主尊の釈迦牟尼の左側上方に位置する八如来の中の一尊として開華王如来を描くと規定されるまでにとどまり、文殊と開華王如来との関係を、パタの作画法や画像そのものから明確に確認できるような記述は認められなかった⁶⁰。一方、小位パタは、その画像を見るだけで文殊と開華王如来の密接な関係を一目瞭然と理解できる。以下に当該箇所を引用したい。

(1)[MMK ch.6, 1-2-7.]

upariṣṭād āryamañjuśrīyasya saṅkusumitarājendras tathāgataś citrāpayitavyaḥ ṣoḍaśāṅgulapramāṇo ratnaparvataguhālīnaḥ //

聖文殊師利の上方に、16指(āṅgula)の大きさで、宝山の洞窟に身を潜めた開華王如来が描かれるべきである。

引用文(1)より、開華王如来は文殊の上方に位置し、その大きさは、1肘(hasta)四方の長さの画布の中に、約16指(āṅgula)の大きさで描くべきだと規定されている。1指が24指であることを考慮すれば、これは実に、小位パタの画像全体の面積の半分程度を占めることになる。したがって、小位パタの画像を一見しただけでは、開華王如来を主尊とするパタとして理解してしまう可能性も否定できないのではないだろうか。それゆえ、小位パタの諸尊の配置が文殊を中心として説かれることより、文殊を主尊とする構図であると解釈できる

ものの、画像全体のバランスを考慮すれば、文殊の背後にいる開華王如来を強調した構図であると理解できる。このような小位パタに確認される文殊と開華王如来の関係は、本経第1章において、文殊が東北方の開華王如来の仏国土に住するという記述⁶¹と決して無関係ではないだろう。

このように開華王如来は、最勝パタおよび中位パタにはやや影を潜めながら八如来の一尊として描かれるのに対し、小位パタには文殊との密接な関係を示唆する形ではっきりと描かれることがわかった。飯塚[2002a][2002b]・田中[2010, pp.51–54, pp.96–102]が指摘するように、開華王如来は、胎蔵マンダラの成立過程においてこそ重要な位置にあるが、胎蔵マンダラの系譜から外れた経典、さらには『金剛頂経』以降の密教経典において、その足跡をたどることができないほどのマイナーな尊格である。それゆえ、本経の三種のパタに一貫して開華王如来が登場することは、三種のパタが当初より密接な関係にあったことの証左と考えられる。そして、文殊と開華王如来の関係が顕著に表れる小位パタは、資料の少ない開華王如来の特徴を知る上で貴重な情報を有しているといえよう。さらに本経の他の章へ視野を広げれば、前述したように、本経第1章では文殊が開華王如来の仏国土に住することを示し⁶²、第2章所説のマンダラでは開華王如来と文殊が同一直線上に描かれる⁶³。開華王如来がマイナーな尊格であるゆえに、開華王如来に言及するこれらの記述は、『大日経』の関連経典として本経を特徴づける根拠となる記述である。したがって、前述した第1章・第2章や、最勝パタを始めとする三種のパタを説く第4章から第6章は、種々雑多な儀則の集成である本経の中に収められながらも、『大日経』との関係において重要な開華王如来を軸とした明確なつながりを有していることがわかる。

以上、小位パタの特徴を、①パタの中心の三尊②パタ下方に描かれる行者とヤマーンタカ③開華王如来、という三つの視座から、先行する最勝パタおよび中位パタと比較した。その結果、②は前二種のパタと共通するものの、①③では、前二種のパタとの相違が確認された。特に③の開華王如来の存在を強調する構図は、小位パタの性格を特徴付けるものとして重要であろう。

2.4.2 小位パタと六字文殊成就法のパタ

2.4.2.1. 六字文殊成就法の関連文献

研究篇<本論>2.3.2.において言及したように、文殊は、真言の字数を基準とした分類によって、一字文殊、五字文殊、六字文殊、八字文殊などと称され、様々な文殊の成就法が密教経典に登場する。

今ここでは、本経の小位パタとの関連文献として、上記の分類法によって区分される六字文殊成就法を説く文献を取り上げることにする。すでに山下[1979, p.12]によって、小位パタと六字文殊成就法において用いられるパタとの類似関係が指摘されているが、ここではさらなる考察を試みたい。本経に収められている儀則も含めて、六字文殊成就法を説く主な文献として以下があげられる⁶⁴。

- ①『文殊師利根本儀軌経』第7章⁶⁵
- ②『文殊師利根本儀軌経』第29章⁶⁶

- ③ 『陀羅尼集經』 卷六「文殊師利菩薩法印呪」阿地瞿多訳⁶⁷
- ④ 『文殊師利菩薩六字呪功能法經』 失訳⁶⁸
- ⑤ 『六字神呪經』 菩提流志訳⁶⁹

これら五種の文献について略述すれば、①②は、六字文殊成就法に関連する儀則として本經に編纂されており、両者ともに梵蔵漢の三本が現存する。ただし、①は、研究篇〈本論〉第1章で見たように、第4章から第6章に説かれる三種のパタに続く、第四パタの作製儀則を説くことに主眼が置かれている。③は、様々な菩薩に関する印契や真言を集成した「諸大菩薩法会印呪品」の第三番目の項目に相当する。④⑤は、いずれも六字文殊成就法を説く単独の漢訳文献として現存するが、現在のところ対応する梵蔵の資料は見出されていない。なお『開元釈教録』によれば、⑤は長寿二年(693年)に菩提流志によって漢訳されている。

また①から⑤は、冒頭部において文殊の六字真言⁷⁰を説き、次に成就法で用いるパタの作製法および作画法を説き、最後に種々の悉地を得るための成就法を説くという構成でほぼ一致している。各々の内容には多少の差異は認められるものの、全体としては類本と位置づけて問題ないだろう。特に③と⑤については、最終部の一節を除いてほぼ完全に一致しており、同本異訳の関係にある⁷¹。

なお、①の本經第7章所説の第四パタの画像は、次節で詳しく言及することにしたい。

2.4.2.2. 六字文殊成就法のパタの画像について

では次に、前述した①から⑤の文献に説かれるパタの作画に関する記述を取り上げて、六字文殊成就法に用いられるパタの特徴を整理してみたい。まず、上記の各文献に示される作画の規定の要点を整理すれば以下の表のようになる。

① 『文殊師利根本儀軌經』 第7章

| | 尊格名 (漢訳) | 配置 | 尊容に関する主な記述 | 補記 |
|---|-------------------------|--------------|---|--|
| 1 | Mañjuśrī (妙吉祥) | パタの主尊 | 童子形・五髻・説法印・獅子座に半伽で右足を下ろして宝台におく・行者(持誦者)に視線を向ける | 三尊の座が同根多枝の蓮華座でつながっていて、中央に根本の蓮華の花柄があり、その上に妙吉祥の獅子座と宝台がある |
| 2 | Samantabhadra (普賢) | 妙吉祥の右側 | 左手に如意宝珠・右手に白払子・白蓮華座・聖紐をつける | |
| 3 | Avalokiteśvara (観自在) | 妙吉祥の左側 | 左手に白蓮華・右手に白払子・白蓮華座・聖紐をつける | |
| 4 | Nanda (難陀) | 上記の三尊の 下方 | 七龍頭・人間の半身を有する | 上記の三尊の座す同根多枝蓮華の花柄を二尊で支える |
| 5 | Upananda (跋難陀) | | | |

| | | | | |
|----|----------------------------|---------------|---|--|
| 6 | Sādhaka (持誦者) | 妙吉祥の 右下方の隅 | 実際に儀礼を行う行者の装いや 外見のままに描く・香炉を持ち 蹲踞・妙吉祥の顔を見る | |
| 7 | Devaputra (天子) | 上方の両隅 | 雲中に住す・華鬘を持つ・花を まいている | |
| 8 | | | | |
| 情景 | パタ下方には無熱惱池が広がり、無数の蓮華が咲いている | | | |

② 『文殊師利根本儀軌經』第29章

| | 尊格名(漢訳) | 配置 | 尊容に関する主な記述 |
|----|-------------------------|--------|----------------------------------|
| 1 | Mañjuśrī (妙吉祥) | パタの主尊 | 童子形・說法印・蓮華座 |
| 2 | Avalokiteśvara (觀自在) | 妙吉祥の左側 | 蓮華と払子を持つ(梵本には持物の左 右を規定する記述なし) |
| 3 | Samantabhadra (普賢) | 妙吉祥の右側 | 欠 |
| 4 | Vidyādhara (天人) | パタの上方 | 雲中に住す・鬘を持つ |
| 5 | | | |
| 6 | Sādhaka (持誦者) | パタの下方 | 香炉を持つ |
| 情景 | パタに普く山の峰が描かれ、下方には蓮池がある | | |

③ 『陀羅尼集經』卷六「文殊師利菩薩法印呪」

| | 尊格名 | 配置 | 尊容に関する主な記述 |
|----|------------------------------|----------|--------------------------------------|
| 1 | 文殊師利 | パタの主尊 | 童子形・蓮華座に結跏趺坐・右手は説 法印・左手は胸元で掌を仰向ける |
| 2 | 觀世音 | 文殊師利の左側 | 蓮華座に結跏趺坐・左手に白払子 |
| 3 | 普賢 | 文殊師利の右側 | 蓮華座に結跏趺坐・右手に白払子 |
| 4 | 首陀會天 | パタの上方の両側 | 雲中に住して半身を現す・華鬘を持つ |
| 5 | | | |
| 6 | 受持呪者 | 文殊師利の右下方 | 香炉を持ち蹲踞 |
| 情景 | パタの下方に池があり、上記の三尊の両側に山の峰が描かれる | | |

④ 『文殊師利菩薩六字呪功能法經』

| | 尊格名 | 配置 | 尊容に関する主な記述 |
|---|------|---------|-------------|
| 1 | 文殊師利 | パタの主尊 | 童子形・蓮華座 |
| 2 | 觀自在 | 文殊師利の右側 | 蓮華座に坐す・手に払子 |
| 3 | 普賢 | 文殊師利の左側 | 欠 |

| | | | |
|----|-------------------------------------|----------|-----------------|
| 4 | 呪仙 | パタの上方の両側 | 雲中に住す・華鬘を持つ |
| 5 | | | |
| 6 | 持呪人 | パタの下方 | 香炉を持つ・文殊師利を仰ぎ見る |
| 情景 | パタの四方に山の峰が描かれ、上記の三尊の下方に蓮華で満たされた池がある | | |

⑤ 『六字神呪経』

| | 尊格名 | 配置 | 尊容に関する主な記述 |
|----|------------------------------|----------|----------------------------------|
| 1 | 文殊師利 | パタの主導 | 童子形・蓮華座に結跏趺坐・右手は說法印・左手は胸元で掌を仰向ける |
| 2 | 観世音 | 文殊師利の左側 | 蓮華座に結跏趺坐・右手に白扠子 |
| 3 | 普賢 | 文殊師利の右側 | 蓮華座に結跏趺坐・右手に白扠子 |
| 4 | 首陀會天 | パタの上方の両側 | 雲中に住して半身を現す・華鬘を持つ |
| 5 | | | |
| 6 | 受持呪者 | パタの下方 | 香炉を持ち蹲踞 |
| 情景 | パタの下方に池があり、上記の三尊の両側に山の峰が描かれる | | |

上記の表に示すように、五文献のパタの作画規定に関する異同を鑑みると、六字文殊のパタの要件は、

- (a) 文殊を主導とし、観自在と普賢をその両脇侍とする三尊を中心とした構図である点、
- (b) 第二に、パタの下方に行者⁷²、上方に天子が描かれる点、
- (c) 第三に、蓮池や山を描く情景描写がなされる点、

以上があげられるだろう。ただし、三尊の配置に着目した場合、④は観自在と普賢の位置が他の四文献と逆になっている点に注意を要する。

2.4.2.3. 小位パタと六字文殊成就法のパタの比較

では次に、小位パタと前項で整理した五文献に説かれる六字文殊のパタを比較して考察したい。まず言及したいのは、前述した六字文殊のパタの要件、すなわち、文殊・観自在・普賢の三尊を中心とした構図である点、パタの下方に行者、上方に天子が描かれる点、蓮池や山を描く情景描写がなされている点、これら三点のすべてを小位パタが満たしていることである。換言すれば、小位パタと六字文殊のパタが非常に類似した画像であるといえる。

一方、明らかに異なるのは、小位パタには開華王如来が文殊との関係において大きな存在感を伴って描かれるのに対し、六字文殊のパタには開華王如来が全く描かれない点である。小位パタに開華王如来が描かれる点は、本節2.4.1.で言及したように、最勝パタを始めとする三種のパタに一貫する特徴であり、最勝パタ・中位パタ・小位パタが胎蔵マンダラの一系譜の枠組みの中に収められる一要因であった。したがって、開華王如来の存在は小位パタにおける重要な特徴であり、その特徴が六字文殊のパタに確認できない点は、両者を区別するための一根據となるだろう。

以上の類似点と相違点を考慮すれば、小位パタは、六字文殊のパタと類似の構図を有するものの、開華王如来と文殊の密接な関係を示す構図も同時に有していることから、前項①から⑤の六字文殊のパタとは一定の距離をおくパタであることがわかる。

さらに付け加えれば、小位パタを説く第6章の儀則と、①の第7章および②の第29章は、異なる過程を経て本経に編纂されたのではないだろうか。なぜならば前述したように、開華王如来の存在は、種々雑多な儀則の集成である本経において、章間の関係を探るための一視座となり、この視座に立てば、開華王如来が描かれない①②のパタは、本経の主要なパタである三種のパタとは別の系統に属すと見ることができるからである。また、小位パタを説く第6章が、パタを作製するための儀則を説く内容のみで終わっているのに対し、①の第7章および②の第29章は、パタの作製儀則に加えて、六字真言の持誦やパタを用いた成就法などの一連の密教儀礼が説かれている。それゆえ、①の第7章および②の第29章は、元来、独立した単独の儀則として流布していた可能性が高いと考えられる。この第7章の第四パタの画像は、次節においてさらに考察することにした。

2.5. 第四パタ

本節では、本研究〈本論〉1.5.において取り上げた第四パタの画布作製に加え、第四パタの画像の特徴を整理し、前三章の儀則との関係を探ってきたこれまでの考察をまとめてみたい。

2.5.1. 第四パタに描かれる尊格(Cf. 資料篇〈復元図試案〉)

次に第四パタの画像について言及していきたい。すでに第四パタの画像については、前節 2.4.2.2.において、六字文殊成就法のパタとの比較を通じて取り上げているが、改めて第四パタを中心とした視座から特徴を整理しておきたい。

[表 1 : 第四パタに描かれる諸尊]

| | 尊格名 (漢訳) | 配置 | 尊格に関する主な記述 | 補記 |
|----|----------------------------|---------------|---|--|
| 1 | Mañjuśrī (妙吉祥) | パタの主尊 | 童子形・五髻・説法印・獅子座に半伽で右足を下ろして宝台におく・行者(持誦者)に視線を向ける | 三尊の座が同根多枝の蓮華座でつながっていて、中央に根本の蓮華の花柄があり、その上に妙吉祥の獅子座と宝台がある |
| 2 | Samantabhadra (普賢) | 妙吉祥の右側 | 左手に如意宝珠・右手に白払子・白蓮華座・聖紐をつける | |
| 3 | Avalokiteśvara (観自在) | 妙吉祥の左側 | 左手に白蓮華・右手に白払子・白蓮華座・聖紐をつける | |
| 4 | Nanda (難陀) | 上記の三尊の 下方 | 七龍頭・人間の半身を有する | 上記の三尊の座す同根多枝蓮華の花柄を二尊で支える |
| 5 | Upananda (跋難陀) | | | |
| 6 | Sādhaka (持誦者) | 妙吉祥の 右下方の隅 | 実際に儀礼を行う行者の装いや外見のままに描く・香炉を持ち蹲踞・妙吉祥の顔を見る | |
| 7 | Devaputra (天子) | 上方の両隅 | 雲中に住す・華鬘を持つ・花をまいている | |
| 8 | | | | |
| 情景 | パタ下方には無熱惱池が広がり、無数の蓮華が咲いている | | | |

前節 2.4.2.2.において言及したように、第四パタは、図像上の特徴から六字文殊成就法のパタとして理解することができる。この点は、第7章が、第四パタ作製儀則の中で、文殊の六字真言を説くことから明らかであろう⁷³。しかし、本経第7章は、前節 2.4.2.2.で取り上げた他の四文献(前節 2.4.2.2.において②～⑤の番号を付した文献)と比べて、尊格の尊

容に関する記述が最も詳細に示されている。さらに、第7章の第四パタ作製儀則のみに確認できる重要な記述も確認できるので、次項において当該箇所を引用して考察したい。

2.5.2. 第四パタの画像の特徴

下記の引用文(1)の部分の梵本には混乱があり、筆者には正確な読解が困難であるため、対応する蔵訳、漢訳も併せて引用しておく。

(1)[MMK ch.7, 4-2-2-4.]

ekapadmaviṭape sthitāni trīṇi padmāsanāni, madhyamamūlapadmakarmīkāyām āryamañjuśriya-sya simhāsanaṃ ratnapādapīṭhaṃ ca / aparasmim padma āryasamantabhadraḥ, ṭṭīye padma āryāvalokiteśvaraḥ / śobhanaṃ ca tatpadmadaṇḍaṃ marakataratnākāram anekapadmapuṣpa-mukulitaṃ patropetaṃ vikasitārdhavidikasitapuṣpaṃ mahāsarānavataptotthitaṃ / dvau †nāgarājānāv aṣṭabhya† nandopanandasandhāritaṃ tatpadmadaṇḍaṃ, ...

de nas sdong bu gcig las skyes pa'i pad ma gsum la dbus kyi rtsa ba'i pad ma'i ge sar la ni 'phags pa 'jam dpal gyi seng ge'i khri dang rin po che'i zhabs rten no | gnyis pa'i pad ma la ni 'phags pa kun tu bzang po'o | gsum pa'i pad ma la ni spyān ras gzjigs dbang phyug go | pad ma'i sdong bu mdzes pa rin po che ma rgad 'dra ba | pad ma'i me tog du ma kha ma bye ba dang | phyed tsam bye ba dang kha bye ba dang ldan pa | mtsho chen po ma dros pa las skyes pa klu'i rgyal po dga' bo dang nye dga' gnyis pad ma'i sdong bu la 'dzin pa | ...

於一莖幹有三枝蓮華。中枝白蓮華坐妙吉祥。兩邊白蓮華右坐普賢左坐觀自在。其蓮華莖作大綠寶色。於大無熱惱池出二大龍王。一名難陀二名跋難陀。

一つの蓮華の莖に、三つの蓮華座があり、真ん中の根本の蓮華の花芯において、聖文殊師利の獅子座と宝石でできた足台がある。第二の蓮華に聖普賢がいて、第三の蓮華に聖観自在がいる。また、かの蓮華の莖は壮大であり、エメラルドの宝石のような形状で、無数の蓮華の花のつぼみを有し、葉をそなえていて、開敷していたり半開敷している花を有し、大池Anavataptaから生じている。八[大龍王]より二尊の龍王がいて、その蓮華の莖はナンダとウパナンダによって支えられている。

引用文(1)全体の文脈を考慮すれば、中心の三尊(文殊・普賢・観自在)の坐す蓮台が同根多枝蓮華でつながり、その蓮華の中心の莖をNandaとUpanandaが支えていることを読み取れる。こうした特徴は、本章2.1.2.において指摘したように、本経第4章の最勝パタに見られる特徴と同一である。特に同根多枝蓮華で諸尊の座がつながる構図は、仏伝文献に描かれる「舎衛城の神変」の一つである「千仏化現」を表現する図像の作例や、阿弥陀浄土図の作例などに見出される仏教美術の主要なモチーフである。したがって、第四パタは、六字文殊成就法のパタとは系統の異なる、且つ、重要な要素を有していることがわかる。

ただし、前節2.4.2.3.で見たように、前三章の三種のパタに描かれていた開華王如来が、第四パタには描かれない点は、注意を要する。というのも、本経は、種々雑多な儀則の集成であるが、前三章のパタは、『大日経』との関係において重要な開華王如来を軸とした明

確なつながりを有しているからである。それゆえ、開華王如来の有無を視座とすれば、第四パタは、この系譜から外れることになる。

以上を整理すれば、第四パタの画像の特徴は、①小位パタと同様に、六字文殊成就法のパタと非常に似た構図を有する。②最勝パタと共通する仏教美術の主要なモチーフを取り入れている。③開華王如来が描かれない。以上の三点に集約することができる。

2.6. 各章のパタ作製儀則の関係について

本章の最後に、前章から二章にわたって見てきた全四種のパタ作製儀則についてまとめておきたい。特に、第7章の第四パタ作製儀則は、様々な要素を有しているため、この第7章の儀則を中心とした視点から、各儀則の関係に対するこれまでの考察を整理しておきたい。

まず、前三章に説かれる最勝パタ・中位パタ・小位パタの儀則には、明確なつながりを確認することができ、三種の儀則を以て一つの大部のパタ作製儀則として体裁を整えていたことがわかった。その主な根拠として、パタ作製儀則の中心を担う最勝パタ作製儀則の規定に、後述される中位パタ・小位パタの儀則の大部分が準じていた点⁷⁴、三種の儀則が開華王如来を描くという胎藏マンダラの系譜において重要な画像上の特徴を共有している点⁷⁵などをあげることができる。また、これら三種のパタを個別に見た場合、最勝パタと中位パタは、八字文殊の真言を説く『文殊師利法寶藏陀羅尼經』所説のパタと類似し、小位パタは、以下に言及する第四パタと同様に、六字文殊成就法に用いられるパタと類似していた。

一方、この前三章の儀則と一定の隔たりを有していたのが、第7章の第四パタの儀則である。まず第7章の儀則は、その導入部において、パタ作製儀則を説く契機となる文殊と釈迦牟尼の対話を、前三章から引き継ぐことなく新たに設定していた。さらに、続いて説かれるパタ作製儀則では、前三章には確認できない六字文殊の真言が説かれており、第7章は、独自の儀則として体裁を整えていた。

しかし、第四パタの儀則は、前三章の儀則と決して無関係ではなく、前三章の儀則やパタの画像との関係を示唆する記述も存在していた。その第一が、研究篇<本論>1.5.2.において言及した、六字真言の用途をめぐる記述である。そこでは、六字真言の機能について、最勝パタ・中位パタ・その他のパタの三種の[パタ儀礼]に用いられるもの(uttamamadhyametaratridhāsamprayuktāh)と説明しており⁷⁶、前三章の三種のパタとの関係が意識されている。第二に、画像の特徴に目を向ければ、第四パタは、最勝パタの重要な要素である同根多枝蓮華のモチーフを取り入れ、全体の構図としては小位パタと非常に類似していた。ここで、並行して考えておきたいのは、六字文殊成就法の関連文献と第四パタ作製儀則の関係である。本經の小位パタ、第四パタは、いずれも六字文殊成就法に用いられるパタと類似した構図を有していることから、小位パタと第四パタは、六字文殊成就法の関連経典としても位置づけることが可能である。研究篇<本論>2.4.2.2.で提示したように、六字文殊成就法の関連文献が多く現存していることから、類似するパタの儀則が数多く制作されていたことは容易に想像がつく。

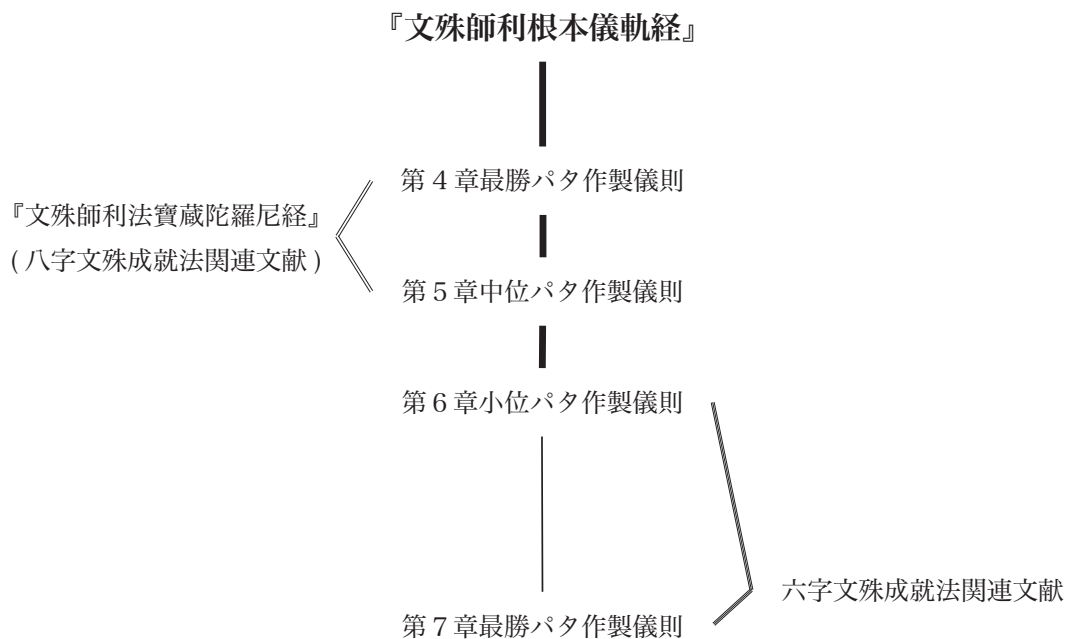
こうした状況を勘案すれば、第7章の第四パタ作製儀則は、本經の三種のパタの儀則と六字文殊成就法に関連する文献、この両方を折衷するように制作された儀則だったのではないだろうか。実際、第四パタ作製儀則の末尾⁷⁷には、明らかに後付けと思われる不自然なオプションが列挙されている。これらの記述は、いわば“帳尻合わせ”のように思われ、上記の筆者の考察を支持する根拠となり得るだろう。

それゆえ、第4章から第6章のパタの儀則、および六字文殊成就法類本と比べて、第7章の儀則は遅れて制作されたと筆者は考える。確固たる事実として、第四パタ作製儀則が

本経の第7章として編纂されていることを考慮すれば、第四パタ作製儀則の制作者が、前三章の儀則を保持していたグループと近い関係にいたことは想像に難くない。このように考えれば、第四パタの儀則で説かれる六字真言に、三種のパタの密教儀礼にも適応可能だとする旨を挿入することが可能になり、さらに、三種のパタと六字文殊成就法を関連づけることが可能になる。したがって、第四パタが、最勝パタを特徴付ける同根多枝蓮華のモチーフを取り入れながら、六字文殊成就法のパタと類似する構図を有することも、同様に無理なく理解できるだろう。

ただし、疑問が残るのは、開華王如来が第四パタに描かれない点である。少なからず、前三章と結びつける意図があったならば、開華王如来を描く規定を取り入れるべきであろう。その理由の一つとして想定されるのは、開華王如来の地位の衰退である。胎蔵マンダラの系譜に限定すれば、開華王如来は主要な尊格であるが、後代の密教文献にその足跡を見ることができないのは周知のとおりである。したがって、第四パタ作製儀則が前三章のパタ作製儀則と比して後代に制作されたものであるならば、制作当時では、開華王如来をパタに描くことは徐々に省略されてしまい、文殊を主尊とした三尊形式のみが、第四パタ作製儀則に継承されていったのではないだろうか。

以上、推測の域を出ない論に至ってしまったが、上記に述べた一連の儀則の関係を図示すれば以下のようなになるだろう。



上記の関係図のように、本経の儀則と関連文献を見てみると、文殊の成就法に用いるパタが多種多様に展開していった様相を見て取ることができる。おそらく、現存する類本の量から考えて、制作するにも携帯するにも簡便な、小位パタ、第四パタのような比較的小規模のパタが、最も要請されたのではないだろうか。そして、いくつかの密教行者のグループが、自身の目的や彼らのスポンサーの意向を反映するような悉地や功德を経典に読み込

んだ結果、類本の中での差異が生じたと思われる。こうした状況下、前三章に比べて成立の遅れる第7章の第四パタ作製儀則は、前三章との関連を意識しつつ、六字文殊成就法の要素も兼ね具えた「第四番目の」儀則として制作されたのだろう。

¹ 本研究で扱う MMK の関連文献以外にも、Lalou[1936]が、チベット訳のみに現存する *Tārāmūlakalpa* と本経の密接な関係を明らかにしており、*Tārāmūlakalpa* に見られる MMK 所説の一連のパタ作製儀則との平行を提示している(Lalou[1936, pp.332-337])。なお、不空訳『仏説大方廣曼殊室利經』(no.1101, vol.20, pp.450a-454a)という漢訳經典が現存しているが、その内容を概観してみると、経題とは矛盾するように、観自在およびターラーが主な尊格として登場している。当該經典にはマンドラやパタが説かれているが、そのパタの一種は、釈迦牟尼・文殊・観自在の三尊形式を基調とするものであり、本研究で扱うパタと類似の構図を有している。Lalou[1936]による指摘を絡めてこうした状況を鑑みると、推測の域を出ないが、膨大な量をほこる観自在、文殊の両尊に関連する文献の中には、ある主要な文献の記述を部分的に改変して取り入れることによって制作された文献(偽経も含めて)も少なからず存在していたと思われる。そして、そのような手法によって制作された經典は、結果的にベースとなった文献との見た目上の区別がつきにくい事態に陥ってしまい、後代の編纂者や翻訳者たちの混同を招くような事態もあったのではないだろうか。このような問題は、梵蔵漢の広い視野で観自在、文殊の両尊に関連する文献研究が進展するにつれて明らかにされていくだろう。

² 最勝パタの図像学的な考察は、田中[2010b]においてなされており、現存する最勝パタの作例として、ハンビッツ文化財団所蔵の「トンワトゥンデン図」が比定されている。なお、田中[2010b]は、このような一連の調査に基づき、チベット仏教美術のタンカ作製に関する伝承をめぐる問題にも言及している。

³ 以下、筆者の訳出による尊格名と天息災の訳出する尊格名が異なる場合には、その漢訳名を()内に併記した。

⁴ チベット語訳は *sGrib pa rnam par sel ba* とあり、*Nīvaraṇaviṣkambhin* という梵語名が想定される。天息災訳も「能除一切蓋菩薩」となっていることから、おそらく「除」の意味に相当する *viṣkambhin* の語が欠落してしまったのであろう。

⁵ 天息災による「無價」という訳語からは、*anarḡha* の原語であった可能性も考えられるが、チベット語訳は *sdig med* とあり、梵本の *anarḡha* の読みを支持している。

⁶ Cf. 頼富[1983][1990a, pp.607-632], 田中[2000, pp.20-38].

⁷ 以下、八大菩薩の原語は宮坂[1981]に依拠した。

⁸ 標準型八大菩薩に言及する文献には、『師子莊嚴王菩薩請問經』(大正 no.486), 『八大菩薩曼荼羅經』(大正 no.1167)がある。Cf. 頼富[1990a, pp.607-632].

⁹ *Sarvatathāgatātattvasaṃgraha*(§5)の眷属成就段、*Adhyardhaśatikā Prajñāpāramitā*(§2)で菩薩の上首として示される八大菩薩の中には、*Ākāśagarbha* および *Gaganagañja* の両尊が登場する。この両方の經典の漢訳に携わった不空は、前者を「虚空蔵」、後者を「虚空庫」と訳出している。したがって、筆者もそれに倣って表記したが、両尊格の違いは不明瞭である。なお、「虚空蔵」「虚空庫」の両菩薩の訳語をめぐる問題は、田中[2010a, pp.21-22]において言及されている。

¹⁰ 頼富[1990a, pp.609-612.][1990b], 田中[2010a, pp.119-122.]

¹¹ Cf. 田中[2007][2010a, pp.96-102; pp.131-142][2012].

¹² *Divyāvadāna*, pp.55-66. なお、宝頂如来が登場するのは、p.62 からである。

¹³ *Suvarṇabhāsa*, p.174.

¹⁴ Cf. 飯塚[2002a][2002b]・田中[2010, pp.51–54, pp.96–102]

¹⁵ Gaṇ : p.1, l.17–p.2, l.9 ; Vai : p.1, l.17–p.2, l.17. なお当該箇所は飯塚[2002b, pp.70–73]において取り上げられ、部分訳も提示されている。ただし文殊の仏国土については一様ではなく、経典によって異なる記述が確認される(Cf. 光川[1990, pp.22–27]).

¹⁶ *Vimalakīrtinirdeśa*, §75(p.44, 2–8.)

¹⁷ Cf. 資料篇<試作テキスト> ch.8, 2-5.

¹⁸ トンワトウンデン図においても、ヤマータカとターラーは、パタ下方の左右に一山ずつ広がる岩山に対称的に描かれている(Cf. 資料篇<参考資料>).

¹⁹ Cf. 宮坂[1971]

²⁰ このセクションは、とりわけ後期密教的な要素が強く表面化しており、勢力を拡大していくヒンドゥー教のシヴァ神を信奉する集団から多大なる影響を受けて成立した儀軌であると指摘されている(Cf. Delhey[2011]). なお、Hamburg 大学の M. Delhey 博士らによって、第 50 章から第 52 章を中心とする梵語校訂テキストの整定作業が進められている。当プロジェクトでは NGMPP によって保存されている写本だけでなく、従来入手不可能であった Trivandrum 写本を校合させた画期的な校訂作業が進められており、近日の出版が期待される。

²¹ 頼富[1990a, pp.642–654]において、八難救済ターラーの作例や関連する文献資料が整理されている。

²² Cf. Lalou[1936, pp.332–337]

²³ Cf. 木村[2001, p.6], 大塚[2004, p.37]

²⁴ 引用文(8)の直前に以下のような記述を確認できる。

tasya parvatasyādhasṭāc chilātalopaniṣaṅgaṃ pṛthivyām avanatajānudehaṃ dhūpakatacchukavyagrahastam ... /

引用箇所の tasya は、前セクションで説明されるヤマータカの住する岩山を指している。したがって、行者は、文殊側(釈迦牟尼左辺)の下方の岩山の麓に描かれると考えられる。また上記の記述では、行者が蹲踞の体勢をとり、香炉を手に持つという規定がなされている。残念ながら、作例には香炉は描かれず、合掌する姿となっているが、体勢は蹲踞とみなすことができる。以上のことを総合的に考慮すれば、パタの右下方の岩山の麓で蓮池の岸辺に描かれる顔のない者が、行者であると考えられる。

²⁵ 引用文は木村[2001]に従った。

²⁶ 引用文(9)では、rdzing de'i 'gram du 「その池の畔に」とあるが、この池は主尊の下方に描かれる池である。なお、引用文(9)の前部では、主尊を中心として位置関係が示される場合に、spyang sngar や drung du という語が用いられている。どちらも「目の前に」という意味に解釈できるが、「A の目の前に B を描け」という位置関係を二次元の画布に表現する場合、B は A の下方に描かれることになる。引用文(9)で示される行者も、このような表現によって位置が示されており、その位置を整理すると「主尊の目の前に七宝蓮華があり、その前にある池の畔に」行者を描く規定がなされている。したがって、パタ全体の構図からすれば、垂直方向を軸とした上方から、主尊→七宝蓮華→池→行者の順序で描かれ、行者はパタの下方に位置することになる。

²⁷ このような行者とその信仰対象を明確に示す構図が表れているパタは、『一字仏頂輪王経』類本所説の「画像法品」にも確認できる。

『菩提場所説一字頂輪王経』(大正 no.950, vol.19, p.199c3–5)

近忿怒無能勝王下。畫持誦人。如本形跪地。手持香爐瞻仰輪王。

『一字仏頂輪王經』(大正 no.951, vol.19, p.231c28-29)

次難勝奮怒神下左。畫持呪者。長跪曲躬手把香爐。觀頂輪王。

『五佛頂三昧陀羅尼經』(大正 no.952, vol.19, p.268b19-20)

次難勝奮怒神下。畫持呪者。長跪瞻仰手把香爐觀頂輪王。

いずれも、主尊は釈迦牟尼であるが、行者が一字頂輪王を仰ぎ見ることを指示している。

²⁸ Cf. 石田[1969, pp.19-21; pp.34-35]. なお、石田[1969, p.20]において、「仏の説法に諸尊が集會する自然の叙景風の曼荼羅」の一例として、「大雲經祈雨壇法」(大正 no.990)などの請雨法に基づく請雨經曼荼羅、不空訳『菩提場莊嚴經』(大正 no.1008)に基づく菩提場曼荼羅をあげている。前者は日本に作例が現存しており、田中[2010a, p.44]において、三尊形式から発展したマンダラの原初形態として位置づけられている。

²⁹ 同根多枝蓮華のモチーフの特徴は、福山[2008, pp.11-14]に詳しい。

³⁰ 「千仏化現」の作例をめぐる研究は、その研究史とともに宮治[2010, pp.120-158]において詳細に論じられており、先駆的な研究である Foucher[1917]に対する近年までの様々な見解が取り上げられている。

³¹ 阿弥陀浄土図と同根多枝蓮華のモチーフの關係に言及した論考として、源[1926]・河原由雄[1989, pp.17-32]・勝木[1992, pp.76-80]・肥田[1997, pp.95-102]を参照した。また阿弥陀浄土図と「千仏化現」の作例を対照させた論考として、源[1926]・樋口[1950]を参照した。なお、宮治[2010, pp.132-158]は、Foucher によって「千仏化現」として比定された作例を阿弥陀浄土図と理解する先行研究を取り上げている。

³² 田中[2010b, p.7]において、最勝パタの同根多枝蓮華のモチーフは、「千仏化現」を表現した作例や極楽浄土図に取り入れられた仏教美術の主要なモチーフであることを指摘している。影響を受けていたことを示唆している。また田中[2000, p.60]は、敦煌出土の「不空絹索五尊曼荼羅」と称される作例に、同根多枝蓮華のモチーフが取り入れられていることを報告している。

³³ Cf. 平岡[2007a, pp.284-285]

³⁴ 『根本説一切有部毘奈耶雜事』義浄訳 (no.1451, vol.24, p.283b2-4)

佛言。長者。於門兩頬應作執杖藥叉。次傍一面作大神通變。又於一面畫作五趣生死之輪。

³⁵ 研究篇<本論>2.5.において取り上げる第7章所説の第四パタ作製儀則には、一連の儀則の最後に、作画過程における補足事項を列挙している(資料篇<試作テキスト>ch.7, 4-3-7)。その記述には、結局のところ当事者である行者や画師の意向のままに描いてよいとする旨が述べられている。こうした事情を考慮すれば、最勝パタも決してその例外ではなく、当事者の行者や画師の意向が反映されることがあったことは想像に難くない。

³⁶ 田中[2010a, p.33; p.83]

³⁷ たとえば、大塚伸[2013, pp.505-509]には、『孔雀經』の増広過程と過去七仏信仰より展開した呪句の關係が考察されており、また『孔雀經』と同様に過去七仏に関する記述が確認される経典もあげられている。

³⁸ 資料篇<試作テキスト>ch.5, 2-2-6. 描かれる尊格の名称は、最勝パタと同一であるために、一部を除いて略されている。

³⁹ 定方[1985, pp.20-25]において、欲界、色界、無色界の三界の世界観とともに諸天の序列が整理されている。

⁴⁰ *Mahāpadānasuttanta*, pp.2–7(par.4–12).

⁴¹ *Mahāpadānasuttanta*, pp.50–54(par.29–33). 天野[2010]によって、当該箇所を確認できる過去仏と浄居天の関係が考察されている。

⁴² [*Mahāpadānasuttanta*, p.51, ll.17–19.] *te mayam mārisa Vipassimhi bhagavati brahmacariyam caritvā kāmesu kāmaccchandam virājetvā idh' uppannā ti /*

⁴³ Cf. 外蘭[1994, pp.704, 11–p.705, 11]

⁴⁴ [MMK ch.4, 2] *tvadīyam paṭavidhānavisarasarvamantracaryāsādhanam anupraveśam anupūrva-kaḥ vakṣye 'haṃ, pūrvanirdiṣṭam sarvatathāgataiḥ aham apīdānīm bhāṣiṣye //*

[MMK ch.4, 4, v.60] *etatpaṭavidhānam tu uttamam jinabhāṣitam / saṃkṣiptam vistarākhyātam pūrvam uktam tathāgataiḥ //*

⁴⁵ 資料篇<試作テキスト> ch.5, 2-2-6

⁴⁶ 資料篇の中位パタ復元図試案も、このような理解に基づき、行者を文殊側の下方に配置した。

⁴⁷ 山下[1979]では本経所説のマンダラに関する考察もなされており、『文殊師利法寶藏陀羅尼経』(p.795b–c ; p.803a–b)所説のマンダラと本経第3章(Gaṇ p.53–54 ; Vai p.37)所説のマンダラが類似していることを指摘している。

⁴⁸ なお、no.1185A が『文殊師利法寶藏陀羅尼経』、no.1185B が『文殊師利法寶藏陀羅尼経』となっており、「法」の有無によって経題が若干異なる。

⁴⁹ Cf. 『開元釈教録』(no.2154, vol.55, p.569c)

⁵⁰ 引用文で示した区分は筆者による。

⁵¹ Cf. 研究篇<本論>2.1.1.1.

⁵² 『法寶藏経』には、現在のところ対応する梵本が見いだされていない。ただし、田中[2010a, p.43, 註 7]が指摘するように、パタの作画儀則とは別に、各尊に対する真言が説かれているため(vol.20, p.792a–p.793a), その真言の音写語から各尊の原語を推測することができる。しかし、「心不動如来」に対応する真言は説かれておらず、その原語を確認することはできない。

⁵³ P: 35b5–8. 『金剛手灌頂タントラ』所説のマンダラに布置される諸如来の研究は、頼富[1990a, pp.118–129][1990b]によって、胎藏マンダラの系譜の考察とともに詳細になされている。

⁵⁴ たとえば、文殊を称える様々な名号が説かれる *Nāmasaṃgīti* には、アラパチャナが文殊の名号の一つとして登場する。

[*Nāmasaṃgīti* p.51, v.27]

oṃ vajratīkṣṇaduḥkhacchedaprajñājñānamūrtaye / jñānakāyavāgīśvaraarapacanāya te namaḥ //

またアラパチャナ文殊は、インド各地に多くの作例が現存しており、図像学の範疇においても文殊の重要な一形態として知られている(Cf. 頼富[1988])

⁵⁵ 『大聖妙吉祥菩薩秘密八字陀羅尼修行曼荼羅次第儀軌法』(no.1184, vol.20, p.784b16–18.)

喝汗細差渴微起資 唵_引阿_引入_引惡_引聲_引 味_引羅_引 呬_引佉_引左_引洛

⁵⁶ MMK ch.2 [Gaṇ p.26–27 ; Vai p.18–8] *oṃ aḥ dhīra hūm khacarah /*

なお当該真言が説かれる前には、*mahāvīram nāma aṣṭākṣaram ...* という八字真言を説明する内容が説かれていることから、下線部の *dhīra* は *vīra* の誤読であろう。

⁵⁷ 資料篇<試作テキスト> ch.6, 2-1 ~ 2-3

⁵⁸ 初期密教経典のパタの三尊形式については、田中[2010, pp.35–44]において、本経を含め

た関連経典とともに言及されている。

⁵⁹ 最勝パタ・中位パタに描かれる行者とは、パタの画布の作製を依頼して実際に成就法を行う行者自身のことであり(Cf. 研究篇<本論>2.1.1.4.; 2.2.2.), ヤマーンタカは、作障者や敵対者から行者を守護する働きを有する(Cf. 研究篇<本論>2.1.1.3.; 2.2.2.).

⁶⁰ 第4章(資料篇<試作テキスト> ch.4, 3-3-2-6)では、開華王如来の尊容を説明する中に「聖者を観察しつつ(āryam abhinirīkṣamāṇam)」という記述があり、法賢はこの「聖者」を文殊として訳出している。なお、チベット訳にはこれらに対応する記述はない。

⁶¹ Gaṇ : p.1, l.17-p.2, l.9 ; Vai : p.1, l.17-p.2, l.17. なお当該箇所は飯塚[2002b, pp.70-73]において取り上げられ、部分訳も提示されている。ただし文殊の仏国土については一様ではなく、経典によって異なる記述が確認される(Cf. 光川[1990, pp.22-27]).

⁶² Cf. 註 62

⁶³ Cf. 田中[2010a, pp.96-102]

⁶⁴ 六字文殊に対する言及は種々の文献に散見されるが、ここでは註 71 に示す六字文殊の真言を説く文献を取り上げた。

⁶⁵ Cf. 資料篇<試作テキスト> ch.7. 儀則の詳細は研究篇<本論>1.5.および 2.5.を参照されたい。

⁶⁶ Gaṇ : pp.322-324 ; Vai : pp.249-250. (本経の梵本第 29 章は、第 7 章同様に NGMPP 写本に対応する部分が現存する。森口[1976]によれば、11b, l.4-13b, l.1 に対応箇所が見出されており、梵本第 29 章全体にわたって対照可能である); Tib(P) 191a6-193a4(チベット訳の第 23 章が梵本の第 29 章に対応); 天息災訳 p.897a-p.898a(漢訳の第 23 章が梵本の第 29 章に対応)。なお、本経の梵蔵漢テキストの対応関係は、飯塚[1997]末尾の対照表を参照されたい。

⁶⁷ 大正 no.901, vol.18, p.838c-p.839b

⁶⁸ 大正 no.1179, vol.20, p.778b-p.779b

⁶⁹ 大正 no.1180, vol.20, p.779b-p.780a

⁷⁰ この六字真言には、若干のヴァリエーションがある(詳細は資料篇<試作テキスト>および<試訳> ch.7, 3.を参照)。NGMPP 写本第 7 章(2v-6)および第 29 章(12r-1)は、om vākye daṃ namaḥ を支持する。また、*Siddhaikavīratāntra*(密教聖典 [1995c], p.14, 14)および *Sādhanamālā*(no.67; 71; 81; 83)は、om vākyedaṃ namaḥ の読みを提示していることから、後代の密教文献には、om vākyedaṃ namaḥ の真言が文殊の真言の一つとして伝承されていたと考えられる。ただし、vākyedaṃ の解釈の問題が残る。ひとまず筆者は、vākye を真言によく見られる形の f, sg, V. と解釈し、daṃ を種子のようなものと理解することにした。それゆえ、本論文では、om vākye daṃ namaḥ を文殊の六字真言として理解しておきたい。なお、本経第 1 章において、最勝心呪(paramahṛdaya)として同真言が説かれており、Gaṇ(p.3, l.8), Vai(p.2, l.16)では、om vākye da namaḥ としている。森口[1977], Delhey[2012, p.57]によれば、*Mañjuśrījñānatāntra* と題された本経第 1 章と第 2 章の前半部分に相当する写本(NGMPP. reel no.A136/11)が現存し、当該真言の対応箇所が残されていると思われるが、筆者は未見である。

⁷¹ Cf. 大正蔵 vol.20, p.780a1-10.

⁷² 以下の三文献には行者が文殊を見つめるという表現を確認できる。

① [MMK ch.7, 4-2-2-5]

adhastāt sādhaḥakḥ dakṣiṇapārśve paṭāntakoṇe āryamañjuśriyasya vaktramaṇḍalanirīkṣamāṇo ... / Tib の対応箇所(P: 102b-3)にも同様の記述を確認できる。

② 『文殊師利根本儀軌經』第29章(大正藏vol.20, p.897b23-24. ※梵藏には確認できないが、対応する漢訳第23章のみに確認できる。したがって下記の引用は漢訳第23章である) 於前下面畫持誦行人，隨自相狀手執香罏，作瞻仰妙吉祥菩薩相。

④ 『文殊師利菩薩六字呪功能法經』(vol.20, p.778b25-26) 畫像下應畫持呪人手執香爐，瞻仰文殊師利菩薩。

⁷³ Cf. 研究篇<本論>1.5.2.

⁷⁴ Cf. 研究篇<本論>1.4.および 1.6.

⁷⁵ Cf. 研究篇<本論>2.4.2.3.

⁷⁶ Cf. 資料篇<試作テキスト> ch.7, 3.

⁷⁷ Cf. 資料篇<試作テキスト> ch.7, 4-2-2-7.

第3章 パタの密教儀礼について

本章では、第4章から第7章のパタ作製儀則をふまえて作製されたパタが、いかなる機能を果たしていたのかを考察していきたい。研究篇〈本論〉2.1.2.において言及したように、最勝パタの画像は、「千仏化現」という仏が神変を示す仏典の一場面を表現した作例と共通する特徴を有している。したがって、行者は奇瑞な一場面を表現した画像を目の前にして、種々の密教儀礼を実践していたと理解できる。またパタの視点に立てば、パタは、行者が成就法を実践する際の視覚的補助手段として機能していたと考えられる¹。それゆえ、最勝パタに表現された画像と、成就法によって得られる神秘的な宗教体験を伴う悉地との間には、密接な関連が推測される。

しかし、行者がパタを現前にして密教儀礼の実践によって悉地を得る以前に、パタには、本来的に具えている功德があることも説かれている。そしてパタ作製儀則によれば、これらの功德は、“パタを見る”という行為だけで、容易に、速疾に、得られることを表明している。すなわち、パタは、密教儀礼に従事する行者のみを対象としていたわけではなく、在家信者を始めとする広く一般民衆までを対象として作製されていたことをうかがい知ることができるのである。したがって、パタの使用目的の本義は、密教儀礼を実践する場に求められるべきであるが、その裾野は広く、決して行者たちによってパタの機能が独占されていたわけではないと思われる。

そこでまず、パタに内包されている、いわば世間レヴェル²の功德について見ていくことにし、パタを取り巻く幅広い一般民衆に対して、パタがいかなる機能を果たしていたのかを考えてみたい。この考察をふまえた上で、出世間レヴェルにおいて³、すなわち、パタの本義である密教儀礼を実践する場において、パタが行者に対してどのようにはたらきかけていたのかを考察していくことにする。

3.1. パタを見る功德

まず、“パタを見る”功德について言及する記述として以下をあげることができる。

(1)[MMK ch.5, 3.]

rogī mucyate rogād daridro labhate dhanam // 5 //

aputro labhate putraṃ madhyame paṭadarśane /

中位のパタを見るならば、病を患う者は病から解放され、貧しい者は富を得て、息子のいない者は息子を得る。

(2)[MMK ch.5, 3.]

na śakyam vācayā vaktum api kalpāgrakoṭibhiḥ /

yat puṇyam prāpnuyāj jantuḥ saphalam paṭadarśanād // 10 //

千万劫の時間をかけても言葉で言い表せない程の有益な福德を、人はパタを見ることより得るだろう。

(3)[MMK ch.6, 2.]

yat puṇyam sarvabuddhānāṃ pūjāṃ kṛtvā tu tāyinām // 4 //

tat puṇyam prāpnuyād vidvān kanyasapaṭadarśane /

保護者である一切の諸仏に供養をなすと、功德があるが、それほどの功德を、知者は小位パタを見るときに得るだろう。

まず引用文(1)は、中位パタを見ると、病を患う者はその病が治癒し、貧しい者は富を得て、息子のいない者は息子を得るといふ、現実の実生活に密着した現世利益を得られることを説いている。(2)(3)には、現世利益の具体的な記述は見られない代わりに、各々のパタを見ることが得られる功德の広大さを述べている。なお、最勝パタの儀則には、求める利益や悉地の違いによって、三種のパタに一応の区別があったことを確認できるが⁴⁾、このような区別は、あくまで密教儀礼を行うことによって利益や悉地を得ようとする行者の視点に立つものだと考えられ、在家信者を主な対象とする世間レベルでは、三種のパタの功德が、どこまで区別されていたかは甚だ疑問である。そもそも世間レベルの立場では、三種のパタから得られる功德に優劣をつけるような意識がなかったのではないだろうか。

そのことを証明するように、以下にあげる三種のパタの讃嘆偈には、パタを見ることによって得られる滅罪の功德が全てのパタに共通して説かれている。

(4)[MMK ch.4, 4.](最勝パタの讃嘆偈)

ālikhet yo hi vidvān vai tasya puṇyam anantakam /

yat kṛtaṃ kalpakotībhīḥ pāpakarmasudāraṇam // 61 //

naśyate tat kṣaṇād eva paṭaṃ dr̥ṣṭvā tu bhūtale /

pañcānantaryakāriṇaṃ duḥśīlān jugupsitān // 62 //

sarvapaṭaprapavṛttānāṃ saṃsārāndhāracāriṇāṃ /

gatiyoninikṛṣṭānāṃ paṭaṃ teṣāṃ na vārayet // 63 //

darśanaṃ saphalaṃ teṣāṃ paṭaṃ maunīndrabhāṣitam /

dr̥ṣṭamātraṃ pramucyante tasmāt pāpāt tu tatkṣaṇāt // 64 //

61.[パタを]描くかの智者には無量の福德がある。コーティ劫の間になされた非常に凶悪な悪業、

62ab.それが、地上においてパタを見ると、すぐに滅するだろう。

62cd.五無間罪をなした者、誤った習慣を有す者たち、非難される者たち、

63.あらゆる罪を犯した者たち、輪廻の暗闇の中で生活する者たち、死後の所趣や生まれの下劣な者たち、そのような者たちに、パタ[を見ること]を妨げるべきでない。

64.彼らにとって、最勝の牟尼によって説かれたパタを見ることは有果であり、見ただけでその瞬間に、その罪から解放されるだろう。

(5)[MMK ch.5, 3.](中位パタの讃嘆偈)

yat kiṃcit kṛtaṃ pāpaṃ saṃsāre saṃsarataḥ purā /

naśyate tat kṣaṇād eva paṭasaṃdarśanād iha // 2 //

以前にいかなる罪がなされ、輪廻の中をさまよっていても、ここにおいてパタを見る

ことより、その罪がまさに瞬間に滅するのである。

(6)[MMK ch.6, 2.] (小位パタの讚嘆偈)

yat kṛtaṃ kārītaṃ cāpi pāpaṃ karma sudāraṇam /

kalpakoṭīśahasrāṇi darśanāt paṭaṃ mucyate // 2 //

paṭaṃ tu dṛṣṭamātraṃ vai tatkṣaṇād eva mucyate /

2.百億劫の間に、なしたり、なさせられた、ひどく残酷な悪業であっても、パタを見ることより解放される。

3ab.パタを見るや否や、まさにその瞬間に、解放される。

引用文(4)(5)(6)によれば、パタを見ることで得られる滅罪の功德には、あらゆる罪人や社会的弱者を救済する意図もうかがい知ることができる。功德を生むような善行を行い、天界に生じることを願う習慣は、広くヒンドゥー文化の根底にあることが指摘されていることから⁵、特に、今生あるいは過去世から積み重ねてしまった罪障や悪業を滅することは、一般民衆の切実な思いであったに違いない。このような民衆の実生活に根付いた宗教慣行をくみ取るように、本経の三種のパタには滅罪の功德が具えられていると考えられる。

したがって、引用文(1)–(6)のパタを見る功德を説く記述から、パタは行者が儀礼を行う際の視覚的補助手段として用いられていただけでなく、幅広い一般民衆を対象とした現世利益を得るための手段、さらには救済手段としても機能していたことがわかる。研究篇第4章で言及したように、特に最勝パタは、経典に描写されたワンシーンを切り取ったような説法図や浄土図のような構図を有するとともに、「千仏化現」という仏伝文献の著名な場面をモチーフとした作例と共通する要素も取り入れていた。このような特徴を有するパタの画像は、一般の在家信者を始めとして仏教の知識を全く持ち合わせていない者たちに対しても、その趣意が容易に理解され、一種の「絵解き」のような役割も担っていたのではないだろうか。それゆえ、パタの功德が広く宣揚されることで、いわゆる「御利益のあるもの」としてパタが一般民衆に対して流布したことは想像に難くない。そして、このようなパタに対する信仰を基盤とし、行者がパタ作製のための資財を得ていたと思われる⁶。

さらに、パタを見ることによって滅罪の功德があると説く同様の記述は、下記の文献にも確認できる。

(7)[*Amoghapāśakalparāja*, 密教聖典[2000, 45b3]・木村[2001, p.22, 6–8.]]

saha darśanamātreṇa ayaṃ duṣyapaṭaṃ janmaśatasahasraṃ avīcisañcitaṃ pañcānantarya-kāraṇaṃ te sarve naśyanti vinaśyanti /

この布のパタを見るだけですぐに、十万の生の間に積集した無間地獄[に陥る原因となる悪業]や、五無間罪をなす[悪業]、そのすべてが消滅する。⁷

(8)『菩提場所説一字頂輪王経』⁸(vol.19, p.199c5–10)

此輪王佛頂大畫像儀軌。無量佛宣説。纔見一切罪悉皆消滅。金剛手若得圓具依法畫。纔見衆生滅除五無間罪。遠離一切罪。若見此微妙像。一切如來之所説。其人現世有報。今世及他世俱抵劫作一切罪。由見此像悉皆消滅。

引用文(7)(8)は、いずれもパタを見ることによって罪障が消滅されると説いている⁹が、特に引用文(8)下線部に確認できる滅罪の功德は、上記の引用文(4)(5)(6)で見た記述とよく一致している。したがって、パタを見る功德は、パタを説く種々の初期密教經典に確認できることがわかり、特に滅罪の功德は、前述したようなヒンドゥー文化に根付いた輪廻や生天思想を背景として、あらゆるパタが共通して具えていた功德と考えるべきであろう。

また、パタ作製儀則において重要な役割を持つ織工師に対しても、注目すべき功德に関する記述が確認される。

(9)[MMK ch.4, 3-2-1]

tathā mūlyam tato dattvā yathā vadati śilpinaḥ /
prathame vāksamutthāne śilpinasya sa mantravit // 11 //
dadyāt mūlyam tataḥ kṣipraṃ vīrakrayeti sa ucyate /
prārthanād eva caitasya mūlyabhāṣā na jāpine // 12 //
śilpinam svastyayitvā tu samvibhāgārthavistaraiḥ /
gatvā yatheṣṭato mantrī susamācārasuvratī // 34 //

11.そこで、織工師が述べる通り、その通りの価格の金銭を与えて、織工師の[対価に関する]始めの声の生じた際に、彼の真言を知る者(行者)は、

12.それより直ちに金銭を与えるべきであり、それは勇ましい購入と言われる。彼(織工師)の要求に応じて[金銭を与えるべきであり]、持誦者(行者)においては価格について交渉しないのである。

34.[パタの]広大な利益を分配することによって、織工師に安寧を与えて、真言行者は、善き行いと善き誓いを保持し、意のままにおもむき、

引用文(9)は、最勝パタ作製儀則において、行者が画布の作製を織工師に依頼する際の費用に関する規定を示しており、v.12b 句の下線部 *vīrakraya*(勇ましい購入)¹⁰によって、織工師に対する対価を与えるべきことを説いている。このような行者と織工師の関係の実態を読み取れる記述は非常に興味深い。

しかし、本節の観点から注目すべきなのは、v.34 の二重線部である。vv.11–12 では、画布作製の費用に関する現実的なやり取りが明らかにされているが、v.34ab では「織工師に対してパタの広大な利益を分配することによって安寧を与える」とある。したがって、パタを作製する織工師に功德を積ませるという功德観念が、少なからず意識されていたことを読み取れる。

以上のように、容易に現世利益や滅罪の功德をもたらすパタの機能は、パタを身近なものとし、行者のみならず、幅広い在家信者や職人たちに対しても、パタを作製する意義を知らしめる効果があったと考えられる。それゆえ、世間レベルの功德を与えるパタの機能は、パタを作製するための資財の布施、あるいは職人たちの技術の提供へとつながり、行者たちを支える重要な役割を担っていたと考えられる¹¹。

なお、田中[2010b, pp.5–6]は、最勝パタの作例に比定するトンワトウンデン図の名称の由来を、引用文(4)の v.64 に対応するチベット訳(*ras ris mthong ba'ang don ldan zhes || thub pa'i*

dbang pos gsungs pa yin || mthong ba tsam gyis dag 'gyur te || de bas skad cig de tsam gyis ||)に求められている。この田中博士の見解に依拠するならば、チベットでは、最勝パタが「見るだけで利益のある(mthong ba'ang don ldan)パタ」という呼称で呼び慣わされていたわけであり、これまで述べてきたような「パタを見る功德」がチベットへも伝播し、伝持されていたことを知ることができる。

3.2. パタと密教儀礼

次に本節では、密教儀礼におけるパタの機能を考えていく中で、パタの画像と成就法の関連を中心として考察する。なお以下の論考では、行者がパタを現前に安置し、世間的な功德から出世間的な悉地を得るまでの幅広い目的で実践する、初期密教的な成就法を、「パタ成就法」と称することにしたい。

3.2.1. 最勝パタ成就法

3.2.1.1. 最勝パタ成就法の概要

本経には、数多くのパタ作製儀則が説かれているが、必然的にそのパタを使用する成就法も数多く説かれている。そこで本研究では、様々なパタ成就法が説かれる本経の中でも、最勝パタを用いた成就法を中心に取り上げていきたい。その理由には以下の二点をあげることができる。

まず、研究篇<本論>第1章、第2章で見てきたように、最勝パタ作製儀則は、本経の中心となる全四種のパタの儀則の中で最も詳細な情報を有している。そのため、資具としてのパタが、いかに密教儀礼と連携しているのかをパタ作製儀則の視座からも考察することが可能である。第二に、幸いにもごく最近、田中公明氏によって、この最勝パタが、ハンビッツ文化財団所蔵のトンワトウンデンとチベット語で称されるタンカの作例に比定されている。この研究成果によって、現存する作例が極めて乏しいパタの研究において、文献と図像を対照させた研究が可能となり、当該の密教儀礼を実践していた当時の行者に、より近い目線で考察できる。

そこで以下では、最勝パタを扱う際の上記のような利点を生かし、最勝パタに描かれた画像が、いかに密教儀礼を行う行者に対してはたらきかけていたのか、という問題点を念頭に置きながら、最勝パタ成就法を考察する。

まず最勝パタ成就法の概要をまとめておく。

[第8章最勝パタ成就法の概要]

§1. 最勝パタ成就法説示の因縁譚

- 1.1. 釈迦牟尼による成就法説示の提案
- 1.2. 文殊の請願
- 1.3. 釈迦牟尼の微笑と光明の出現
- 1.4. 金剛手による微笑の因縁に関する問い
- 1.5. 金剛手に対する授記

§2. 成就法

- 2.1. 前行
- 2.2. パタに対する香華の供養
- 2.3. 護摩
- 2.4. 光明の出現
- 2.5. 悉地の獲得

第8章は非常に短編であるが、その構成は上記のように二部に分けることができる。

まず§1では、世尊釈迦牟尼が文殊に対してパタ成就法を説こうと述べるが、その際には、成就法を「功德の大きさや違いに応じて(*guṇavistaraprabhedavibhāṣas*)」説くという補足の語を確認することができる¹²。この記述によって、パタ成就法が数種類あることが示唆されており、研究篇<本論>第1章から第2章で確認した最勝パタ・中位パタ・小位パタの三種に、それぞれ対応する成就法が存在することを想定してよいだろう¹³。したがって、第8章の当該箇所の記述は、第4章のパタ作製儀則の中で確認した「最勝の悉地を求める場合、最勝パタ成就法をなすべきであり、中位の悉地を求める場合、中位パタ成就法をなすべきである。その他、全ての場合に、下位である低位の儀礼行為(小位パタ成就法)をなすべし」¹⁴という三種のパタの用途を規定する偈と合致すると考えられる。

また上記の1.3.-1.5.において、聴聞者の金剛手に対して授記を与えるストーリー展開は、平岡[2001]によって指摘されている有部系の部派に帰属できる説話文献の授記をめぐるストーリー展開に類似している¹⁵。そこで、1.3.-1.5.の内容を略述しておく、釈迦牟尼の微笑を契機として光明が出現し、あらゆる世界に遍満して、再び釈迦牟尼のもとに帰入する(1.3.)。そして、この神変を目の当たりにした聴聞者の金剛手は、釈迦牟尼に対して微笑の因縁を問う(1.4.)。すると釈迦牟尼は、微笑の因縁の回答として、本経の儀則を実践する全ての者たちが無上正等菩提に至るといふ授記を与える(1.5.)。この一連のストーリー展開は、平岡[2001]が提示する「ブツダの微笑と光明」→「光明の巡回」→「光明の帰入場所と記別の種類の説明」→「アーナンダの質問」→「ブツダの回答」という五段階の展開にほぼ当てはめることが可能である。したがって、本経の儀則の制作者たちは、著名な有部系の文献にまとめられていた授記をめぐるストーリー展開を援用したと考えられる。

そして§2.において、最勝パタ成就法が説かれる。当該の第8章は、最勝パタ作製儀則を説く第4章と別に章立てされていることから、第8章所説のパタ成就法が、最勝パタを用いた成就法であるということを知り得るのは、コロフォンの記述(*uttamasādhanopayikakarmapaṭalavisarāt prathamah samāpta iti* 「広大なる最勝成就法に関する事業より第一[の儀則]、説き終わる」と、2.2.に確認できる記述(*tato parvatāgram abhiruhyā jyestham paṭam paścānmukham pratiṣṭhāpya ...* 「次に[行者は]山頂に登り、最勝パタを西方に向けて安置して ...」)のみである。パタ成就法の詳細は後述することにし、ここではその概要を述べておく。まず、最勝パタ成就法を実践する資格のある者の条件として、三昧耶を観察し、前行をなし、灌頂を授かった者¹⁶であることを提示し、行者は、本経に説かれる真言のうちのいずれかの真言を唱えることによって前行をなすべきだと説かれる。続いて、成就法に用いるパタを安置する場所が規定され、パタに対する供養法および護摩法が説示される。ここで注意すべきなのは、これら一連の密教儀礼が、パタ成就法の所作そのものであると

いうことである。したがって、当該のパタ成就法には、後代の密教文献に説かれるような瑜伽観法の方法は一切説かれていない。そのプロセスを代替するのが、最勝パタ成就法では、香・華による供養、護摩、真言の読誦である。それゆえ、最勝パタ成就法の内実は、簡素な密教儀礼の組み合わせであることがわかる。この最勝パタ成就法によって得られる悉地の問題は、後述する 5.2.1.4.において詳細に考察する。

3.2.1.2. パタ成就法を実践する資格 — 灌頂を受けることの必要性 —

まず最勝パタ成就法の儀則では、成就法を実践するための条件として、①三昧耶を觀察し(*dr̥ṣṭasamayāḥ*)、②前行をなし(*kṛtapuraścaraṇāḥ*)、③灌頂を受けた者(*labdhābhiṣekaḥ*)、という三点があげられている。この中でも最後の「灌頂を受ける」という条件は、密教儀礼の範疇において、パタ成就法が有していた機能を考察する際に極めて重要な条件であろう。というのも、灌頂を受けるということは、その密教行者の集団が権威とする経軌に基づいて作られたマンダラに入り、認可を受ける入門儀礼を経ることが前提とされているからである。これはすなわち、パタに関わる密教儀礼に先行して、マンダラの密教儀礼が行われていたことを意味する。インド密教に内在する秘密主義、神秘主義の特徴を考慮すれば、マンダラにおいて入門儀礼を行い、許可を得た者だけがパタの成就法を実践できると規定することは、至極当然のことと思われるが、このような条件が提示されることによって、マンダラとパタという両者の密教儀礼上の関係が浮き彫りになっていることがわかる。パタ成就法を実践する前に、同様の条件を提示する文献として、一字仏頂系經典類本の下記の記述をあげることができる。

(1) 『五佛頂三昧陀羅尼經』 「畫像法品第三」 (vol.19, p.267a5-7.)

若有擬畫輪王像者。先曾入頂輪灌頂無勝壇。手授具足呪句印法。入最勝頂王等壇已成就者。謂阿闍梨印讚許可。

(2) 『一字佛頂輪王經』 「畫像法品第二」 (vol.19, p.229c29-p.230a3.)

畫斯像者。先曾入此頂輪王灌頂無勝法壇。於阿闍梨手授具足呪句印法。或復入於勝頂王壇已成就者。爲阿闍梨印讚許可。

(3) 『菩提場所說一字頂輪王經』 (vol.19, p.198b15-20.)

我今說世尊佛頂輪王畫像法。修行者先應入曼荼羅。從師受得印契儀軌。曾入佛頂輪王壇。或無能勝忿怒壇。或勝佛頂壇。見三三昧耶。得受灌頂。得阿闍梨印可。無上涅槃道入修行。當依儀軌。應作先行。先行已然後畫像。

菩提流志訳の(1)(2)に見られる「像」は、原語は確定できないまでも、本研究で取り上げているところの「パタ」と考えて問題ないだろう。同様に、不空訳の(3)の「画像」の語も「パタ」を指していると考えられる。頼富[1990a, p.113]は、(1)→(2)→(3)の順で増広発展がなされたとしているが、この説と呼応するように、当該箇所においても(3)の記述が最も詳細に条件を規定している。特に二重線部の、①マンダラに入り師に従う、②三三昧耶¹⁷を見て

灌頂と阿闍梨の印可を受ける、③先行(=前行)を行う、という三点は、前述した本経の成就法を実践するための条件とよく合致している。

さらにこれらの文献から成立年代は下るが、*Śrīparamādya* 「般若分」各章の儀則の構成からも、パタ成就法的前提としてマンダラにおいて灌頂儀礼を受けることが課せられていたことを間接的に知ることができる。*Śrīparamādya* 「般若分」各章後半に付属する儀軌の構成を見ると¹⁸、いずれの章もまず、各章の教理を象徴する尊格を主尊としたマンダラの造立法が説かれる。続いて灌頂儀礼が説かれて弟子の入壇法が説かれた後、パタ成就法が説かれる。この一連の流れは「般若分」各章に共通することから、灌頂儀礼を受けて一連の密教儀礼を実践する許可を得た弟子に対して、パタ成就法を説くという儀軌の制作者たちの意図を読み取ることができる。

これら一部の密教文献の記述、あるいは間接的な根拠を以て、様々な密教文献に説かれるパタ成就法とマンダラの灌頂儀礼の関係を一律に位置づけることは乱暴であるが、ある一定のグループの中では、パタ成就法は、そのグループの権威(阿闍梨)によって許可された者のみに認められた密教儀礼であることに、十分に注意が払われていたと見て問題ないだろう。

またこうした事情は、本経の中心となるマンダラ¹⁹とそのマンダラを用いた灌頂儀礼を説く、本経第2章²⁰所説の下記の真言をめぐる記述とも無関係ではないだろう²¹。パタの密教儀礼の本質に関わる議論からは少し外れることになるが、以下に先行研究²²において取り上げられる問題の箇所を、パタ成就法の密教儀礼との関連の中で筆者なりに考察してみたい²³。

(4)[MMK ch.2 (Gaṇ: p.33, 18–p.34, 13 ; Vai: p.23, 6–28)]²⁴

namaḥ samantabuddhānām apratihataśāsanānām /
tadyathā – oṃ brahma subrahma brahmavarcase śāntiṃ kuru svāhā //
eṣa mantrō mahābrahmā bodhisattvena bhāṣitaḥ /
śāntiṃ prajagmur²⁵ bhūtāni tatkaṣṇād eva śītālā //
mudrāpañcaśikhāyuktaḥ²⁶ kṣipraṃ svastyayanam bhavet /
ābhicārukeṣu²⁷ sarveṣu atharvaveda²⁸ iṣyate //
eṣa samkṣepata ukto kalpam asya samāsataḥ //

普く、無碍なる教説を有する諸仏に帰依致します。

すなわち、オーム、梵天よ、すばらしき梵天よ、梵天の光輝において息災をなせ。スヴァーハー。

これは、偉大な梵天の真言であり、菩薩によって説かれたものである。[この真言を唱えることによって]諸々の鬼魅は、速やかに滅し、まさにその瞬間に穏やかになる。五髻の印と結びつけられ、速疾に安穩になるだろう。あらゆる調伏の儀軌において、Atharvaveda が承認される。

これは簡潔に説かれ、この儀則は略されて説かれたのである。

namaḥ samantabuddhānām apratihataśāsanānām /
tadyathā – oṃ garuḍavāhana cakrapāṇi caturbhujā hūṃ hūṃ samayam anusmara / bodhisattvo
jñāpayati svāhā //

ājñapto mañjuhoṣeṇa kṣipram arthakaraḥ śivah /
vidrāpayati bhūtāni viṣṇurūpeṇa dehinām //
mudrātriśikhāyuktaḥ²⁹ kṣipram arthakaraḥ sthiraḥ /
ya eva vaiṣṇave tantre kathitāḥ kalpavistarāḥ //
upāyavaineyasattvānām mañjuhoṣeṇa bhāsitāḥ //

普く，無碍なる教説を有する諸仏に帰依致します。

すなわち，オーム，Garuḍa に乗る者よ，チャクラを手に持つ者よ，四本の腕を持つ者よ，フォーム，フォーム，三昧耶を想起せよ。菩薩は教える。スヴァーハー。

[この真言は]文殊(mañjuhoṣeṇa)によって説かれ，速疾に吉祥なる利益をなし，諸々の鬼魅を退散させ，Viṣṇu の本質を伴い，姿を有するものである。

三髻の印と結びつけられ，速疾に利益を生じ，堅固となる。

Viṣṇu 教タントラにおいて説かれた広大な儀軌があるが，それは方便によって導かれるべき有情たちのために，文殊(mañjuhoṣeṇa)によって説かれたのである。

namaḥ samantabuddhānām apratihataśāsanānām //
tadyathā – oṃ mahāmaheśvara bhūtādhipativṛṣadhvaja pralambajāṭamakūṭadhāriṇe sita-
bhasmadhūsaritamūrti hūṃ phaṭ phaṭ / bodhisattvo jñāpayati svāhā //
eṣa mantrō mayā proktaḥ sattvānām hitakāmyayā /
śūlamudrāsamāyuktaḥ sarvabhūtaavināśakāḥ //
yan mayā kathitaṃ pūrvam kalpam asya purātanam /
śaivism itī vakṣyante sattvā bhūtalavāsināḥ //
vividhā guṇavistārāḥ śaivatantre mayoditāḥ //

普く，諸仏，無碍なる教説に帰依致します。

すなわち，オーム，偉大な大自在者よ，鬼魅の主である Vṛṣadhvaja よ，頭上に結った髪を垂れ下げた者よ，白い灰が塗られて灰色の身体を有する者よ。菩薩は教える。スヴァーハー。

この真言は，三叉戟の印を伴い，あらゆる鬼魅を消滅させるものであり，有情たちの利益を望むことによって，私(=文殊)が説いたものである。

私が以前に説いたこの過去の儀軌を，地上に住む有情たちは，“シヴァ教[の儀軌]”と呼ぶだろう。シヴァ教タントラにおける，様々で，とても広大な[儀軌は]，私(=文殊)によって説かれたのである。

またこの引用文と併せて，下記の二種のインド中期密教を代表する経典の記述を取り上げたい。

(5)[*Sarvatathāgatattvasaṃgraha*, 212]

santi ca, bhagavantaḥ, sattvā nṛtagāyahāsyālāsyaḥāravihārapriyatayā sarvatathāgatamahāyānābhisamayadharmatānavabodhatvād anyadevakulamaṇḍalāni praviśanti, sarvāśāparipūrisaṃgrahabhūteṣu niruttararatiṣṭiharṣasaṃbhavakareṣu sarvatathāgatakulamaṇḍaleṣu, śikṣāpadabhayabhītā na praviśanti / teṣām apāyamaṇḍalapraveśapathāvasthitamukhānām ayam eva vajradhātumahāmaṇḍalapraveśo yujyate / sarvaratipṛītyuttamasiddhisukhasaumanasyānu-

bhavanārthaṃ sarvāpāyapratipraveśābhimukhapathavinivartanāya ca /

尊き者たちよ、またある有情たちがいて、踊りや歌や戯れ言や歌舞や食べ物や娯楽に溺れ、一切如来の大乗現証の法性を理解しないために、他の天部のマンダラに入ってしまい、あらゆる願望の成就を集成したものであり、無上の悦楽と喜びと歓喜を生じる、一切如来の部族のマンダラには、修学することを恐れて不安になり、入らない。このような悪趣のマンダラに入る道に直面している彼らこそ、金剛界大マンダラに入ることがふさわしい。あらゆる悦楽と喜びや最上の悉地や安楽や満足を体得するために、またあらゆる悪趣に入り、直面する道から退くために、

(6)[Śrīparamādyā, 15]

de nas lha gzhan dag la dad pa rnam la de bzhin du 'jug pa'i cho ga rgyas par byas nas de bzhin du 'grub par 'gyur ro | de nas ci ltar zhugs pa rnam zas dang ro bcud dang gnas pa la sogs pa thams cad kyis yang dag par tshim par byas la | ci ltar shes pa'i gar dang glu dang dgod pa dang bu dang bu mo dang mdza' bshes dang nye du dang gnyen mtshams dang bcas pas kyang mchod par bya'o || de la 'dir ni snod dang snod ma yin pa brtag par mi bya ste | sems can gyi khams ma lus shing lus pa med pa rnam bde ba chen po rdo rje dam tshig 'di dang | 'dod pa'i bsam pa yongs su rdzogs par byed pa'i rdo rje sbyor bas rdo rje chos kyi mnyam pa nyid kyi phyag rgyas rgyas btab pa yin pa'i phyir ro ||

[試訳]

次に、他の諸尊に帰依する者たちに対しても³⁰、同様に、[マンダラに]入る広大な儀則をなした後、[その者たちは]同じように成就するだろう。次に儀則の通りに入った者たちを、食物と味と住居などのあらゆることによって満足させて、知る限りの踊りや歌や戯れ言によって、少年、少女、友人、近い親戚、遠い親戚と共にもてなすべし³¹。その場合、この[マンダラ]において、[入門者が]器であるか、器ではないか、と簡択すべではない。なぜならば、無尽無余の有情界の者たちは、この大安楽金剛三昧耶と、望んだ願いを円満させる金剛瑜伽を通じて、金剛法の平等性の印によって刻印されているからである。

引用文(4)(5)(6)の記述(特に下線部)を総合的に考察すれば、先行研究³²がすでに言及しているように、シヴァ教、ヴィシュヌ教に代表されるヒンドゥー教は、密教がその教理と実践を整備していく時代、いわゆる初期密教から中期密教の時代において、すでに仏教者たちが強く意識せざるをえないほどの勢力を有していたことは容易に想像できる。そしてそこには、外教の神々に信奉する者たちを巧みに仏教側へと誘導しようとした意図があったことは改めて述べるまでもないだろう。それゆえ、仏教の灌頂儀礼を行い、仏教者としての自覚と自負を促す必要があったのであろう。この意味において、最勝パタ成就法を实践する条件として提示される「灌頂を受けること」は、重要な意義があると考えられる。

3.2.1.3. 最勝パタに描かれる行者の意義

研究篇<本論>2.1.1.4.において言及したように、最勝パタに描かれる行者は、決して抽

象的な一行者の姿ではなく、今まさにパタの作成を依頼しており、その完成したパタを用いて成就法を行う実在の行者を描くことが読み取れた。そこで、パタ成就法の観点から、改めてパタに行者を描き入れる意義とは何か、この点について考察してみたい。

研究篇〈本論〉2.1.2.では、最勝パタを特徴付ける同根多枝蓮華のモチーフについて、*Divyāvadāna* に描かれる「千仏化現」の場面と比較したが、ここでは、同じく同根多枝蓮華のモチーフを取り入れられた作例が確認される、阿弥陀浄土図³³を取り上げたい。言うまでもなく、阿弥陀浄土図の典拠となっているのは、浄土三部経に代表される経典であり、いずれも阿弥陀如来の住する浄土を視覚的イメージに富んだ記述によって表現されている³⁴。今注目したいのは、世尊釈迦牟尼とアジタの問答の中で、阿弥陀如来の極楽浄土に「化生(aupapāduka)」した者たちに言及する場面である。

(7)[*Sukhāvāṭīvyūha(Larger)*, p.68, 10–p.69, 2.]

santi khalu punar atra bhagavan sattvā ya aupapādukāḥ padmeṣu paryāṅkaiḥ prādurbhavanti /

...

ye te 'jita bodhisattvā mahāsattvā anyatra buddhakṣetrasthās cittam utpādayanty amitābhasya tathāgatasyārhatāḥ samyaksaṃbuddhasya darśanāya na vicikitsām utpādayanti na kāmḥṣanti asaṅgabuddhajñānaṃ svakuśalamūlaṃ cābhiśraddadhāti teṣāṃ aupapādukānāṃ paryāṅkaiḥ padmeṣu prādurbhūtānāṃ muhūrtamātreṇaivaivaṃrūpaḥ kāyo bhavati tad yathānyeṣāṃ ciro-papannānāṃ sattvānāṃ /

[試訳]³⁵

また実に世尊よ、ここ(安楽世界)に、化生して、諸々の蓮華の中に結跏趺坐で現れる者たちがいます …〈中略〉…

アジタよ、誰であれ、他の仏国土に住す菩薩摩訶薩たちが、阿弥陀如来・阿羅漢・正等覚者を見るために発心し、疑念を起さず、とらわれのない仏智を疑わず、また自身の善根を信じる、その者たちは、化生して、結跏趺坐で諸々の蓮華の中に現れ、まさに瞬時に、他の生まれて久しい者たちのような身体となるのである。

作例によっては、引用文(7)に見られるような描写をもとに、阿弥陀浄土図の下方の蓮池に浮かぶ蓮華に往生した童子を描いたものが見出されている³⁶。このような童子は「化生童子」と称され、浄土経典にはこの化生に関する記述が確認されている³⁷。ただし、この点は本研究の趣意とは外れることから、立ち入ることはせず、ここでは阿弥陀浄土図の下方の蓮池に化生童子が描かれる作例の存在のみを確認しておくことにする。このような化生童子の存在は、浄土経典において主張される往生を象徴するものであり、浄土経典を標榜する者たちの理想の姿として重要な意味を有していたと考えられる。

そこで、本経の最勝パタの下方に描かれる行者の意義を改めて考察すると、阿弥陀浄土図に描かれた化生童子の存在は、本経の最勝パタに描かれる行者に置き換えることが可能ではないだろうか。というのも、パタに描かれる行者の姿は、まさに自身が成就法によって悉地を得ようとする理想の姿であり、阿弥陀浄土図に描かれる化生童子の姿と同様の機能を果たしていると考えられるからである。すなわち、釈迦牟尼が諸菩薩に囲まれて説法する場面や、開華王如来などの諸仏の仏国土を表す画像の下方に、行者自身の姿が描き入

れられるということは、その諸仏諸菩薩が実際に行者の前に顕現し、行者の悉地の獲得を象徴する機能を果たしていると考えられる。したがって、阿弥陀浄土図に描かれる化生童子と最勝パタに描かれる行者は、各々の經典や儀軌を信奉していた集団の理想を投影した姿と見ることができる。そして成就法を実践する行者を最勝パタに描き入れる背景には、描かれた行者自身の姿が、成就法を実践する際の一種のモチベーションとなる重要な意義が込められていたのではないだろうか。

なお、宮治[1995a][1995b][1996]には、三篇にわたってトゥルフアンのトヨク石窟の禅観窟壁画に関する広汎かつ精緻な考察がなされており、特に宮治[1996]には、当該のパタに描かれる行者の姿を考察する上で、非常に興味深い壁画の作例が報告されている。以下、本項に関連する内容の要点のみをあげておきたい。トヨク石窟の壁画には、浄土を観想する行者³⁸の姿が様々な意義を伴って描かれているという。特筆すべきは、いわゆる禅観經典³⁹所説の観想法に関わる記述を、マニュアル化するように場面ごとに描かれた壁画の一つ一つに、その行程を実践する行者が描かれている点である。このような行者の姿は、実際に禅観の行を実践する様子を反映した表現に他ならないという(宮治[1996, p.69])。その中には、蓮華化生を観想する行者の姿を描く図像も報告されており、浄土への往生を観想するための観想図として見いだされている(宮治[1996, p.66-68])。そして、浄土經典に描写される景観の諸要素を観想上で再現する際に有用な画像を、宮治[1996, p.71]では「観想の実践のための浄土図」と位置づけている。このような機能を有する浄土図が、本研究で取り上げているようなパタの画像に影響を与えていたか否かの問題はさておき、行者が実践する観想において視覚的イメージの形成を助長するはたらきを有していたという点では、本経のパタも同様の機能を有しているといえるだろう。その意味において、パタ成就法とパタの画像との密接な関連は、大乘仏教が展開していく中で整備されていった禅観の実践行とその手引きとなる上記のような観想図と、同一直線上にあるものとして理解できる。それゆえ、「観想の実践のための浄土図」と称することのできる壁画が現存していることは非常に興味深い。

3.2.1.4. 最勝パタ成就法による悉地について

研究篇<本論>3.2.1.1.で言及したように、最勝パタ成就法の実態は、簡素な密教儀礼の組み合わせであり、高度な瑜伽観法を実践するような記述は認められなかった。ただし、一連の密教儀礼は、行者が常にパタの画像を目の前にし、その画像の諸尊に対して行われる儀礼であることを忘れてはならない。すなわち、後代の密教文献に見られるような瑜伽観法の記述は認められないとしても、その根底には、同質の要素を想定せざるをえないのである。また一方では、前項で見てきたように、諸仏諸菩薩の姿が描かれたパタを用いる成就法は、大乘仏教の展開過程で整備された禅観經典に説かれる、仏像を視覚対象とした行法との関連も強くうかがわせる。

そこで本項では、下記引用文(8)の最勝パタ成就法の完成によって得られる悉地に関する記述を取り上げて、その答えを、密教と大乘仏教(場合によっては部派仏教以前まで遡りうる)の実践行という両面から模索してみたい。

(8)[MMK ch.8, 2-4~2-5.]

tato bhagavataḥ śākyamuneḥ raśmayo nīscaranti samantāc ca paṭa ekajvālibhūto bhavati / tataḥ sādakena tvaramāṇarūpeṇa paṭam tripradakṣiṇīkṛtya sarvabuddhabodhisattvapratyekabuddhāryaśrāvākāṇāṃ praṇamya paṭam grahītvayam abhītena pūrvalikhitasādhakapaṭāntadeśe //
 tato grhītamātreṇoppatati / acchaṭāmātreṇa brahmalokam atikrāmati / kusumāvatiṃ lokadhātum sampratiṣṭhati / yatrāsau bhagavān saṅkusumitarājendras tathāgataḥ tiṣṭhati dhriyate yāpayati dharmam ca deśayati āryamañjuśriyam ca sākṣāt paśyati dharmam śṛṇoti / anekāny api bodhisattvasatasahasrāni paśyati tāms ca paryupāste mahākālpasahasram ajarāmaralīli bhavati / paṭas tatraiva tiṣṭhati, sarvabuddhabodhisattvādhiṣṭhito bhavati teṣāṃ cādhiṣṭhānam sañjānīte / kṣetraśatasahasram cākrāmati, kāyaśatasahasram vā darśayati, anekarddhiprabhāvasamudgato bhavati, āryamañjuśriyāś ca kalyāṇamitro bhavati, niyataṃ bodhiparāyaṇo bhavati //

すると、[パタに描かれた]世尊釈迦牟尼から諸々の光明が現れ、パタが遍く一つの光輝となる。そして行者は、すばやくパタを右に三匝して、一切諸仏・菩薩・縁覚・聖声聞を礼して、目の前の描かれた行者のパタの端より、恐れずにパタをつかむべきである。そこで、[パタは]つかまれるや否やすぐに上昇する。弾指程の間に梵天界を過ぎ、開華世界に趣くのである。かの世尊開敷華王自在如来が住し、[仏国土を]保持し、時を過ごし、また法を説き、[行者が]文殊師利を目の前に見て、法を聞き、数十万もの菩薩をもまた見て、そしてその菩薩たちに恭敬し、大千劫もの間老死のない享樂者となるころ、まさにそこにパタがあり、一切諸仏諸菩薩に加持されるのである。また[行者は]彼ら(諸仏諸菩薩たち)の加持を理解するのである。また十万の仏国土に行き渡り、あるいは百千の身を現して、多くの神通力や威神力を生じる者となり、また文殊師利が善知識となり、必ず菩提の目的に至るだろう。

ここでは、以下の三点に言及したい。まず、行者が開華王如来の仏国土(Kusumāvati)に住し、そこで文殊を明らかにするという見仏の悉地が説かれている点である。ここで確認しておきたいのは、第8章の教主は釈迦牟尼如来であることから、娑婆世界が舞台となって最勝パタ成就法が説かれていたにも関わらず、他方仏国土の開華王如来の仏国土に行者が住し、文殊を見るという点である。このような見仏の悉地は、研究篇<本論>第2章で言及した最勝パタに表現される画像にも少なからず反映されていることがわかる。すなわち、最勝パタの中心に位置する主尊は釈迦牟尼であることから、最勝パタの画像の中心となる舞台は娑婆世界である。しかし、研究篇<本論>2.1.1.2.において確認したように、釈迦牟尼の左辺上方には、他方仏国土を象徴する八如来が描かれており、その八如来の中には開華王如来が住していた。したがって、この最勝パタの画像に表現される釈迦牟尼と開華王如来の関係は、教主である釈迦牟尼の娑婆世界を中心会座としながらも、八如来によって象徴される他方仏国土、特に最勝パタ成就法では、開華王如来の仏国土へ通じるという悉地⁴⁰を示唆していると考えられる⁴¹。

次に、パタが諸仏諸菩薩によって加持され、さらにその加持を得ていることを行者が認知する点を読み取ることができる。この点は前述した見仏の悉地と密接な関係にあることから、両者を切り離して考察することが不可能である。すなわち、最勝パタは、行者が密教儀礼を実践する場と開華王如来の仏国土をリンクさせる装置、あるいは娑婆世界から開

華王如来の仏国土へ渡るための手形であったといえ、この最勝パタによって見仏の悉地も得られるのである。そして重要なのは、開華王如来の仏国土へ渡り見仏するという神秘的な悉地が、諸仏諸菩薩の加持によってなされているという記述である。この加持という語によって、見仏の悉地が保証されていると考えられることから、一連の悉地の獲得は、行者による密教儀礼の実践だけでは叶わず、背後にある諸仏諸菩薩の加持が重要な意味を有していると考えられる。ここに密教的な加持の概念を確認することができるだろう。

最後に文殊が行者の善知識となる点である。ここでは教導的な菩薩としての文殊を描く「入法界品」などの大乘經典の影響が考えられ、大乘經典に描かれる文殊を信奉する集団によって、最勝パタ成就法が制作されたことを改めて理解することができる。さらに付け加えるならば、本經第8章の前半部分にあたる、釈迦牟尼が授記を与える場面⁴²では、当該の最勝パタ成就法を完成した者たち全てが無上正等菩提に達することを授記していた。しかし、引用文(8)に説かれる悉地の諸相を見る限り、諸仏諸菩薩の住する仏国土を巡り、善知識となる文殊の教導によって菩提に“向かう”という目的に主眼が置かれているように思われる。したがってここには、本尊瑜伽の觀法によって、菩提の境地を体得することに主眼が置かれる後代のインド密教の成就法との懸隔があることを読み取れる。

以上、引用文(8)より三点について言及したが、最勝パタ成就法の根底には、大乘仏教の浄土思想に影響される要素と密教的な要素とが混在していることが認められるのではないだろうか。引用文(8)に説かれる悉地の相は、当該の經典を制作した者たちが密教儀礼を実践する目的を反映するものだと考えられるが、この視点から最も強く読み取れるのは、文殊にまみえて、菩提を得ようとする目的であり、これは浄土經典に見られる「見仏」の目的と符合する⁴³。もちろん、浄土經典において見仏の対象となるのは、阿弥陀如来であることは言うまでもない。しかし、Schopen[2005]が精緻に論証しているように、阿弥陀如来の極楽浄土への往生は、阿弥陀如来を信奉する集団に限定された目的ではなく、仏教者全般に広く共通して見られる目的であったという⁴⁴。そして注目すべきは、このような結論を導き出す主な典拠として、Schopen[2005]が、初期密教經典として位置づけられる『薬師經』⁴⁵や、*Sarvatathāgatādhiṣṭhānavyūha*⁴⁶の記述を提示している点である。この二種の經典には、大乘仏教の展開によって提唱される実践行のみならず、仏教者全般に通ずる、齋戒の保持などの宗教的行為によって、阿弥陀如来の極楽浄土に往生することが説かれている。

したがって、本經と同じ初期密教經典にこのような記述が確認されるということは、これまで述べてきたような最勝パタ成就法に見られる浄土思想の影響が、決して珍しいことではないことがわかる。ただし、最勝パタ成就法では、阿弥陀如来の極楽浄土に関する言及はなく、開華王如来の仏国土において文殊にまみえるという見仏であった。こうした事情を考慮すれば、極楽浄土の阿弥陀如来に限定されていた見仏から、諸仏諸菩薩の見仏への展開の一例⁴⁷、すなわちここでは開華王如来の仏国土を通じた文殊の見仏への展開、と見ることが可能かもしれない。

そこで次項では、最勝パタ成就法の悉地の一つである見仏に対する理解をより深めるために、影響を受けていたことが想定される浄土經典や禪觀經典に説かれる実践行の側面を見ていきたい。

3.2.1.5. パタ成就法と見仏

前項で確認したパタ成就法によって得られる見仏は、これまで浄土経典や禅観経典に関する様々な研究において明らかにされてきた。本項ではそれらの先行研究による成果を援用しながら、パタ成就法の根底にあることが想定される浄土思想を概観し、特にここではその実践行に関わる側面について詳しく見ていくことにしたい。

まず、パタ成就法との関係を考察していくことに先立ち、本研究の視座に関わる先行研究の成果を整理しておきたい。藤田[2007, pp.404–409]によれば、浄土経典に説かれる見仏とは、言うまでもなく阿弥陀如来にまみえることであり、その方法は二種に大別されるという。すなわち、①般舟三昧に代表される三昧によって現世において見仏する方法、②来世に浄土に往生して見仏する方法、の二種である。さらにこの見仏は『観無量寿経』において展開し整備され、①往生による見仏、②三昧による見仏、③仏力による見仏、④臨終の見仏、の四種が認められるという。『観無量寿経』の成立をめぐる問題は、これまで多くの研究者が議論を重ねてきており⁴⁸、純然たるインド撰述の経典として位置づけることは困難なようである。しかし、『観無量寿経』は、先行する浄土経典を総合しながら、インド部派仏教以来の禅観の実践行とも密接な関係にあるとされ⁴⁹、浄土経典と禅観経典を結ぶ重要な位置付けがなされている⁵⁰。そこで本研究では、上記の『観無量寿経』に見られる四種の見仏を念頭におきながら考察を進めていきたい。

そこで、前項において考察したパタ成就法による見仏の構造に今一度言及しておく、行者は最勝パタを現前に安置し、そのパタに対する種々の密教儀礼を実践することによって成就法が完成して、見仏の悉地を得ていた。しかし、この見仏の背景には、諸仏諸菩薩の加持があったことが明らかにされていた。このように、最勝パタ成就法の見仏は、密教儀礼の実践と諸仏諸菩薩の加持という二つの要素によってなされていることがわかる。それゆえ、上記の四種の見仏のうち、最勝パタ成就法が影響を受けていると考えられるのは、②と③であろう⁵¹。特に後者の加持の要素は、上記の③仏力による見仏との明確な関連が推測されることから、まずはこの仏力による見仏の事例が見られる下記の浄土経典 *Sukhāvativyūha(Larger)* の記述に注目したい。

(9)[*Sukhāvativyūha(Larger)*, p.65, 5–p.66, 15]

api cānandottiṣṭha paścānmukho bhūtvā puṣpāṇy avakīryāñjaliṃ pragṛhya praṇipata / eṣāsau dig yatra sa bhagavān amitābhas tathāgato 'rhan samyaksambuddhas tiṣṭhati dhriyate yāpayati dharmam ca deśayati virajo viśuddho yasya tam nāmadheyam anāvaraṇam daśadiśi loke vighuṣṭam ekaikasyām diśi gaṅgānadīvālikāsamā buddhā bhagavanto varṇayanti stuvanti praśamsanty asakṛd asakṛd asaṅgavāco 'prativākyāḥ // evam ukta āyusmān ānando bhagavantam etad avocat / icchāmy aham bhagavaṃs tam amitābham amitaprabham amitāyuṣam tathāgatam arhantaṃ samyaksambuddham draṣṭum tāṃś ca bodhisattvān mahāsattvān bahubuddhakoṭīnayutaśatasahasrāvaropitakuśalamūlān // samanantarabhāṣitā cāyuṣmatānandaneyam vāk / atha tāvad eva so 'mitābhas tathāgato 'rhan samyaksambuddhaḥ svapāñīlāt tathārūpam prabhāṃ prāmuñcad yayedam koṭīśatasahasratamaṃ buddhakṣetraṃ mahatāvabhāsenā sphuṭam abhūt /...

tad yathāpi nāma puruṣo vyāmamātrake sthito dvitīyam puruṣam pratyavekṣata āditye

'bhyudgata evam evāsmiṃ buddhakṣetre bhikṣubhikṣuṇyupāsakopāsikā devanāgayakṣa-
gandharvāsuraḥkinnaramahoragās ca tasyāṃ velāyāṃ adrākṣus tam amitābhaṃ
tathāgatam arhantaṃ samyakṣambuddhaṃ sumerum iva parvatarājānaṃ sarvakṣetrā-
bhyudgatam sarvā diśo 'bhībḥūya bhāsamānaṃ tapantaṃ virocamaṇaṃ bibhrajāmaṇaṃ taṃ ca
mahāntaṃ bodhisattvagaṇaṃ taṃ ca bhikṣusaṃghaṃ yad idaṃ buddhānubhāvena tasyāḥ
prabhāyāḥ pariśuddhatvāt /

“また、アーナンダよ、立ち上がり、西に向かって花々を散じて、合掌して、五体投地をなせ。その方角は、塵のない清浄な、かの世尊阿弥陀如来・阿羅漢・正等覚者がいて、生存し、時を過ごし、法を説いているところである。妨げられることなく、十方世間に響きわたったその名を、それぞれの方角において、ガンジス河の砂[の数ほどの]尊き諸仏が、繰り返し、とらわれない言葉、よどみのない言葉で、讃嘆し、称揚し、賞賛するのである。”このように述べると、尊者アーナンダは世尊に以下のように述べた。「世尊よ、かのアミターバ・アミタプラバ・アミターユス・如来・阿羅漢・正等覚者や、百千コーティ・ナユタの多くの諸仏によって善根を植えられた、かの菩薩摩訶薩たちに、私はまみえたいと思います。」すると、尊者アーナンダがこの言葉を述べるや否や、そのとき、まず、かの阿弥陀如来・阿羅漢・正等覚者は、自身の掌より、この百千コーティ番目の仏国土が大きな光輝によって照らし出されるような、そのような光明を放ったのである。…<中略>…

たとえば、太陽が昇ると、ある人が、[第二の人までの距離が]一尋の距離のところ立ち、第二の人をはっきりと見るように、まさにそのように、この仏国土において、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷たちや、天・龍・夜叉・ガンダルヴァ・アスラ・ガルダ・キンナラ・マホーラガたちが、そのとき、一切の国土にそびえ立つ山の王スメールのように、一切の方角を超越して、光り、輝き、照らし、きらめいている、かの阿弥陀如来・阿羅漢・正等覚者と、かの偉大な菩薩衆と、かの比丘僧団を見た。すなわち、仏の威力によって、かの光明が清浄であるからである。

引用文(9)の場面は、釈迦牟尼とアーナンダの問答において、娑婆世界にいる釈迦牟尼が阿難に対し、阿弥陀如来とその仏国土である極楽浄土を見せるという一場面として理解できる⁵²。そして重要なのは、阿弥陀如来によって発せられた広大で清浄な光明が働きかけることで、娑婆世界の者たちが極楽浄土の阿弥陀如来を見るという見仏を得ている点である。この阿弥陀如来の発した光明こそが、上記で言及した見仏を得るための仏力だと考えられる。浄土経典全体を見渡せば、念仏、称名といった実践行の必要性が説かれているが⁵³、引用文(9)の当該の場面に限定すれば、見仏するアーナンダは、阿弥陀如来の神変を目の当たりにする受動的な立場として描かれており、阿弥陀如来のはたらきかけに主眼が置かれていることがわかる。

このような阿弥陀如来のはたらきかけは、最勝パタ成就法によって実現される見仏の悉地を支える加持へと展開したと見ることができよう。

また、引用文(9)に見られる見仏の構造が、娑婆世界から他の仏国土へと通じる見仏の構造を有していることも見逃してはならない。前項で確認したように、最勝パタ成就法による見仏の構造は、釈迦牟尼を教主とする娑婆世界が舞台となりつつも、パタ成就法の完成

により、他方仏国土の開華王如来の仏国土に行者が住し、文殊を見るという見仏であった。このような見仏の構造は、アーナンダが娑婆世界にしながら阿弥陀とその仏国土を見るという構造に合致しており、両者の見仏の構造には類似性が認められる。

次に関連があると思われるのは、②三昧による見仏である。パタ成就法の見仏を成立させる、密教儀礼の実践と諸仏諸菩薩の加持の二つの要件のうち、前者は、最勝パタの画像(そこには諸仏諸菩薩が描かれている)を現前にして実践することから、行者は最勝パタを常に視覚対象としていて、ある種の三昧の状態にあったことは容易に想像できる。したがって、②三昧による見仏も、パタ成就法には少なからず含意されていたと思われる。それゆえ、三昧による見仏を力説する『般舟三昧経』⁵⁴や、仏像を観察し、詳細な行法によって観仏を実践する方法を説く「禅観経典」⁵⁵との関連が推測される。

そこでまず、『般舟三昧経』との関連を見ていきたい。

(10)[*Pratyutpannabuddhasaṃmukhāvasthitasamādhisūtra*, p.34, §3J.]

bzang skyong | de bzhin du sangs rgyas kyis yongs su bzung ba'i byang chub sems dpa' ting nge 'dzin 'di la gnas pa rnams phyogs gang dang gang na de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sang rgyas bzhugs pa'i phyogs de dang de logs su sangs rgyas mthong ba 'thob par bya ba'i phyir yid la byed do || phyogs de dang de logs su yid la byas pas des phyogs de dang de logs su de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas de dag mthong ngo || de ci'i phyir zhe na || bzang skyong || 'di lta ste || sangs rgyas mthong ba 'thob par 'gyur ba 'di ni ting nge 'dzin 'di'i rgyu 'thun pa yin no || ting nge 'dzin 'di la gnas pa'i byang chub sems dpa' ni sangs rgyas kyi mthu dang | rang gis dge ba'i rtsa ba'i stobs bskyed pa dang | ting nge 'dzin thob pa'i phyir dang | 'di dag gsum tshogs shing 'dus pas des de bzhin gshegs pa rnams mthong zhing snang bar 'gyur ro ||

Bhadrapāla よ、同様に、仏によって支持されてこの三昧に住する菩薩たちは、いかなる方角であっても如来・応供・正等覚者である仏のいる、その方角を向いて、仏を見ることができるよう思念するのである。いかなる方角であれ、思念することによって、その方角に如来・応供・正等覚者である諸仏を見るのである。それはなぜか。すなわち Bhadrapāla よ、仏をみることができるといふこのことは、この[般舟]三昧の必然的な結果(rgyu 'thun pa)なのである。この三昧に住している菩薩は、仏の威力と、自ら植えた善根の力と、三昧[を得た結果の力]、これら三つ[の力]が集まり、結合することによって、諸如来を見るのであり、[諸如来が]現れるのである。⁵⁶

引用文(10)では下線部のように、見仏の要件として、仏の威力、善根の力、般舟三昧の力、この三つを提示している。また重要な点として、諸仏が住する方角に向かって思念することに重点が置かれており、この引用文(10)に限定すれば、パタや仏像のような視覚的補助手段は必要とされていない⁵⁷。それゆえ、前者の見仏の三要件には、パタ成就法と一定の類似性を見ることができ、後者のような視覚的補助手段を要さない点は、行法の根本的な相違として理解できる。

次に、「禅観経典」を見ていきたい。下記の引用文(11)(12)は、山部[2011, pp.99–100]において観仏⁵⁸の方法を説明するために取り上げられており、簡潔に禅観経典の観仏の特徴を

捉えるのに有用であるため、本研究でも援用することにしたい。

(11) 『観仏三昧海経』(vol.15, p.689a24–b3.)

一王子名曰金幢。憍慢邪見不信正法。知識比丘名定自在。告王子言。世有佛像衆寶嚴飾極爲可愛。可暫入塔觀佛形像¹。時彼王子。隨善友語入塔觀像。見像相好¹。白言比丘。佛像端嚴猶尚如此。況佛眞身¹。作是語已比丘告言。汝今見像若不能禮者。當稱南無佛。是時王子合掌恭敬稱南無佛。還宮係念念塔中像²。即於後夜夢見佛像。見佛像故心大歡喜。

(12) 『坐禪三昧経』(vol.15, p.276a8–13.)

念佛三昧有三種人或初習行。或已習行。或久習行。若初習行人。將至佛像所。或教令自往諦觀佛像相好¹。相相明了。一心取持還至靜處。心眼觀佛像²。令意不轉繫念在像不令他念。他念攝之令常在像。

引用文(11)(12)の下線部1より、観仏は、まず仏像の相好を詳細にありありと観察することだと理解できる。そして下線部2より、観察して焼き付けたイメージを別の寂静処において再現することも加味されていることがわかる。このような観仏の特徴に依拠するならば、パタ成就法によって得られる「見仏」は、「観仏」と表現することは避けるべきであろう。というのも、山部[2011, p.99]によって明確に定義されているように、「見仏」は修行がクライマックスに達した時に得られる一種の神秘体験であり、「観仏」は「見仏」を得るためのプロセスだからである。それゆえ、引用文(11)(12)のような禅観経典における「観仏」を経た「見仏」と、パタ成就法における、密教儀礼の実践および諸仏諸菩薩の加持による見仏には、大きな性格の違いがあるといえる。

以上、最勝パタ成就法における見仏の悉地に影響を及ぼしたと考えられる浄土思想を、『観無量寿経』に代表される①往生による見仏、②三昧による見仏、③仏力による見仏、④臨終の見仏、の四種の見仏と比較することによって考察を進めた。この四種の中で最も明確に最勝パタ成就法との共通点を確認できたのは、③仏力による見仏であった。最勝パタ成就法では、この仏力は、加持という密教経典において極めて重要な概念に代替されているものの、行者に対する同質の仏のはたらきかけであることには変わりはなく、最勝パタ成就法の見仏にも、浄土経典所説の見仏と同様の構造を見ることができた。

一方、行者からののはたらきかけという見地では、相違が確認された。最勝パタ成就法には、②三昧による見仏も含意されているように思われるが、残念ながら、その根拠となる明確な記述は確認できない。また禅観経典に説かれる観仏のような実践行との共通点も見いだすことはできない。それゆえ、このような行者側のはたらきかけである実践行を代替するのが、供養儀礼、真言の読誦、護摩という密教儀礼であったと考えるのが妥当であろう。

以上のように、最勝パタ成就法と浄土思想における実践行の関係をしてみると、見仏という目的は同一であるものの、そこへ至る手段、特に行者側からはたらきかける方法に差異があることがわかる。したがって、このような特徴を有する最勝パタ成就法は、松長[1980, p.138]の言葉を借りるならば、「大乘思想の儀軌化」の一典型と理解できる。それゆえ、最

勝パタ成就法は、浄土思想の影響を残しながらも、密教経典として展開していく発展過程に位置することを物語っているといえよう。

¹ 大塚伸[2004, pp.42–46]は、『牟梨曼陀羅呪経』所説のパタを取り上げて考察し、その役割として、①当該経典に描写される世界を再現する点、②成就法の資具として用いる点、③見仏を実現する点、以上の三点を主なパタの機能としてあげている。

² 奈良[1973][1990][1994]の一連の研究は、インド仏教教団の実態として、出世間レベルおよび世間レベルの観念に基づく行為が混在していたことを論証している。また、両レベルは相互補完の関係にあり、現世利益を得るような世間レベルの功德観念を巧みに出世間レベルへと昇華させていく過程に、インド密教が形成されていく潮流を見いだしている。当該箇所「世間レベル」「出世間レベル」の語は、このような奈良博士の精緻な論考をもとに援用させていただいた。

³ Cf. 上記註2

⁴ Cf. 資料篇<試作テキスト> ch.4, 3-2-1, v.10; 3-2-3, vv.15–17.

⁵ 奈良[1975, pp.286–291][1994, p.5]

⁶ このような考察は、『法華経』「方便品」における下記の記述からも支持されるだろう。

[*Saddharmapuṇḍarīka*, ch.2, p.35–36] ye citrabhittiṣu karonti vighrahān paripūrṇagātrān śatapuṇyalakṣaṇān / likhet svayaṃ cāpi likhāpayed vā te sarvi bodhāya abhūṣi lābhinaḥ // 86 // ; dhātūṣu yaiś cāpi tathāgatānām stūpeṣu vā mṛttikavigraheṣu vā / ālekhyabhittiṣv api pāmsustūpe puṣpā ca gandhā ca pradatta āsīt // 89 // ; puṣpeṇa caikena pi pūjayitvā ālekhyabhittau sugatāna bimbān / vikṣiptacittā pi ca pūjayitvā anupūrva drakṣyanti ca buddhakotyaḥ // 94 //

⁷ Cf. 木村[2001, p.23]

⁸ ここでは、類本の中で最も密教経典として整備されている不空訳『菩提場所説一字頂輪王経』「画像儀軌品」の一節を引用した。なお、頼富[1990a, pp.108–118]は、菩提流志訳『一字頂輪王経』を中心とした視座から、一字頂系経典群と胎藏系のマンドラとの関係を考察している。その一連の考察の中で、『一字頂輪王経』と胎藏系のマンドラの密接な関係を指摘している先行研究がまとめられている(同, p.109)。また、一字頂系類本の比較を通じて、『一字頂輪王経』「大法壇品」のみに『大日経』「具縁品」の四仏説に合致するマンドラの記述があることに着目する。そして類本における増広過程を考える上で、この『一字頂輪王経』よりも成立の下る不空訳『菩提場所説一字頂輪王経』には、当該のマンドラに関する記述が見られない問題を指摘している。

⁹ 当該箇所提示している文献以外にも、密教的な懺悔法によって滅罪を得ることを説く初期密教経典が確認されている(大塚伸[2013, pp.262–273])。特に4世紀後半頃に成立していたことが見込まれる(大塚伸[2013, p.225])『大方等陀羅尼経』において、壁画を思わせる画像に対して、香・花などによって供養し、陀羅尼を念誦する供養法を経て、懺悔による滅罪や見仏を得ることが説かれており、MMKに見られるパタ成就法との密接な関係を見ることができるといえる。

¹⁰ Cf. Tanemura[2004, p.237, note52]. 引用文(9)の記述によれば、vīrakraya(勇ましい購入)とは、価格交渉することなく、織工師の望む対価を直ちに与えることだと解釈できる。

¹¹ 種村[2013, pp.94–99]には、タントリズムの特質がより顕著になっていく『金剛頂経』以降の後代のインド密教が民衆レベルにまで受容されていった一要因として、「密教の儀礼的な枠組みを公共の場における支援者に対する儀礼に適用し、その領域に進出していったこと」をあげている。本研究で扱っているパタの密教儀礼には、種村[2013, pp.94–99]が指

摘するような公共の場で必要とされた儀礼に関する情報は得られないが、本項で述べたように、パタに本来的に具わる功德を宣揚することによって、行者たちは積極的に支援者たちとの関係を保持しようとしていたと思われる。

¹² Cf. 資料篇<試作テキスト> ch.8, 1-1

¹³ 第7章には第四パタが説かれるが、研究篇第3章、第4章で見たように、第四パタは最勝パタ・中位パタ・小位パタとは一線を画している。したがって、ひとまずここでは三種のパタに対応する成就法のみを想定しておく。

¹⁴ Cf. 資料篇<試作テキスト> ch.4, 3-2-1, v.10.

¹⁵ 後に発表された平岡[2002, pp.317-325]には、有部系の文献に見られる定型句と、大乘經典に見られる授記の表現が比較されている。なお平岡[同, pp.317-318]には、仏の微笑放光を契機とする授記を扱う大乘經典のリストが提示されている。

¹⁶ ここで述べられている前行や灌頂に関して、特に具体的な内容は説かれていない。Cf. 資料篇<試作テキスト> ch.8, 2-1

¹⁷ 『菩提場所説一字頂輪王經』の当該箇所における「三三昧耶」について、残念ながら筆者は同經典内に「三三昧耶」の理解の手助けとなす記述を見いだすことはできていない。この「三三昧耶」の述語は、類本中、最も発展した形態をとる当該文献のみに見られることから、発展していく過程で付加されたものと考えられる。そこで、他の密教文献にこの「三三昧耶」に関する記述を模索してみると、後代の密教文献に説かれる密教儀礼、特に灌頂儀礼と密接に関係することが、桜井[1996, pp.119-135]、川崎[2013]において明らかにされている。桜井[1996, pp.119-135]に依拠すれば、各文献、あるいは註釈類によって、「三三昧耶」に対する解釈にも相違があるようだが、その根幹は、本尊との瑜伽を成就させる重要な三要素を指すと解釈できる。特に灌頂儀礼においては、この「三三昧耶」を阿闍梨が弟子へ授与することで、弟子を本尊そのものとして灌頂する意義があったことを指摘している。一方、MMK と関係の深い『大日経』「三三昧耶品」を取り上げた論考に大塚伸[1988]があり、この論考によれば、「住心品」に明かされる菩提心の諸相とは別の側面として、菩提心の展開過程が三段階の三昧耶として説示されていることがわかる。そして、これら「三三昧耶品」所説の菩提心は、『大日経』所説のマンダラの灌頂儀礼を実践する阿闍梨の心相と密接に結びついているとされる。前者の密教儀礼のコンテキストの中で解釈される「三三昧耶」に対し、『大日経』に見られるそれは、菩提心に対する思想的な解釈の中で理解されるものであろう。『菩提場所説一字頂輪王經』が、密教儀礼の発展途上段階にある初期密教經典に位置づけられていることを考慮すれば、当該文献の「三三昧耶」に、前者のような高度な本尊瑜伽のコンテキストの中で説かれている「三三昧耶」ほどの意味が内包されていたかどうかは疑問であるが、いずれにしても、当該文献に説かれる「三三昧耶」を理解するだけの典拠が見いだせないため、上記のような関連文献から知られる「三三昧耶」を紹介するまでにとどめておく。

¹⁸ *Śrīparamādyā* 「般若分」各章は、前半の教理を説くセクション(*Adhyardhaśatikā Prajñāpāramitā* 『百五十頌般若』に対応する)と、後半の密教儀礼を説く儀軌のセクションで構成されている。そしてこの各章後半の儀軌は、第1章を中心として説かれており、第2章以降は、しばしば第1章の儀則に従うとして、その詳細がしばしば省略される。なお第1章の儀軌の詳細は拙稿[2012]を参照されたい。

¹⁹ 本經第2章のマンダラは、田中[2010a, pp.96-102][2012]において、胎藏マンダラに大きく影響を与えたマンダラとして位置づけられている。

²⁰ 本經第2章は、Macdnald[1962, pp.97-143]によって仏語訳が提示されている。

²¹ 第2章は、順次、(1)種々の真言の説示、(2)マンダラの造立法、(3)マンダラに布置され

る諸尊の説示, (4)灌頂儀礼, という内容が説かれている。したがって, 問題となる真言をめぐる記述は, 一連のマンダラに関わる密教儀礼に先行して説かれており, 後述される儀礼において使用される真言として重要な位置づけがなされている。

²² 前田[1972]は, 引用文(4)の記述を手がかりとして, 本経を通じた視座からインド密教の形成過程を考察している。また Sanderson[2009]は, インド中世初期におけるシヴァ教を中心とした諸宗教の動向を示す膨大な資料を提示しており, その中では(Sanderson[同, pp.128–132]), 仏教(大乘仏教)が, 仏教外の実践行をいかに吸収し, 適合させてきたのかという問題を取り上げている。この仏教の変容の様子を知る典拠として, 引用文(4)が取り上げられている。種村[2013, p.78–82]は, Sanderson[2009]の研究成果を軸として, 密教とシヴァ教の間に確認される種々の形態の平行を指摘している。

²³ 本項で取り上げてきた最勝パタ成就法を実践するための前提となる「灌頂」とは, 本経の章構成から鑑みると(Cf. 堀内[1996, pp.8–10]), この第2章の規定に基づく灌頂だと考えられる。それゆえ, 最勝パタ成就法と第2章の灌頂儀礼は, 章はまたがって説かれているものの, 密教儀礼上の関係において連結していることがわかる。

²⁴ 当該の引用文は Gaṇapati 本から引用しているが, 原文のままでは文意を解釈することが困難であるため, 当該の引用文に言及している先行研究(前田[1972], Sanderson[2009], 種村[2013])を参照し, 筆者が部分的に手を加えたテキストを提示している。なお, 試訳についても上記の先行研究を参照した。

²⁵ おそらく jagmi-に接頭辞 pra のついた prajagmi-に由来する語だと思われるが, 筆者には正確な解釈ができない。ただし, MMK には他にも用例があることから(e.g. ch.14, v.165), 本経独自の形であろうか。

²⁶ mudrāpañcaśikhāyuktaḥ] em. (*phyag rgya gtsug phud lnga sbyar na* || Tib) ; mudrā pañcaśikhāyuktā Gaṇ Vai

²⁷ Cf. BHSdic. p.99(ābhicāruka)

²⁸ atharvaveda iṣyate] em. (*srid srung gi rig byed 'dod* || Tib) ; athavo ceda paṭhyate Gaṇ ; athavā ceda paṭhyate Vai. Cf. 前田[1972, pp.66–67]

²⁹ mudrātrīśikhāyuktaḥ] em. (*phyag rgya gtsug phud gsum sbyar na* || Tib) ; mudrā trīśikhe yuktaḥ Gaṇ Vai

³⁰ Ānandagarbha の *Śrīparamādya-ṭikā*(D: 84a4–6)は, ヒンドゥー教の諸尊を始めとする外教に帰依する者たちを含意して註釈している。したがって, 仏教者以外に対しても, マンダラを用いた入門儀礼がなされていたことをうかがうことができる。

³¹ 当該箇所は, 踊り(gar)から遠い親戚(gnyen mtshams)までが具格をとって並立的に dang でつながれている。しかし, 訳出の際には文脈を考慮して, 踊り(gar)から戯れ言(dgod pa)と, 少年(bu)から遠い親戚(gnyen mtshams)に二分し, 前半を手段の意味にとり, 後半を随伴の意味にとった。また, 対応する *Śrīparamādya-ṭikā*(D: 84b3–4)は, 当該箇所の訳出に有益な註釈がなされていない。

³² Cf. 註 22

³³ 阿弥陀浄土図と同根多枝蓮華のモチーフの関係に言及した論考として, 源[1926]・河原由雄[1989, pp.17–32]・勝木[1992, pp.76–80]・肥田[1997, pp.95–102]を参照した。

³⁴ Harrison[2003, p.124]は, 浄土經典にしばしば見られる視覚的イメージに直結するような詳細な景観の描写を, 行者が実践する観想と結びつけて理解している。

³⁵ Cf. 藤田[1975, pp.139–140], 山口・桜部・森三樹[1976, pp.82–83]

³⁶ 源[1926, pp.65–69]は, 法隆寺金堂西方の壁画に, 化生童子が描かれている点と同根多枝

蓮華のモチーフが見られる点を指摘している。また、勝木[1992]は、敦煌莫高窟 220 窟南壁「阿弥陀浄土変相」に、勝木[1994]は、敦煌莫高窟 332 窟東壁南側「阿弥陀仏三尊五十菩薩図」に、化生童子が描かれている点と同根多枝蓮華のモチーフが見られる点を指摘している。ただし、勝木[1994]が取り上げている「阿弥陀仏三尊五十菩薩図」に対しては、阿弥陀を主題とする浄土図と見ることに批判的な見解もあるようである(勝木[1994, n.11]).

³⁷ Cf. 藤田[1970, pp.523–525][2007, pp.402–404], 末木[1992, pp.172–173]

³⁸ 宮治論文では、観想の対象が壁画に表現されている場合を「禅観僧」とし、表現されていない場合を「禅定僧」として一応の区別がなされている。

³⁹ 禅観經典に関する近年の重要な研究成果として Yamabe[1999a](学位論文)があり、トヨク石窟の壁画に表現された図像と『観仏三昧海経』を中心とする禅観經典に描写される記述の詳細な比較がなされている(前掲, pp.427–497)。この一連の精緻な論考は、数篇の論文にわたって報告されているが、最新の山部[2011]では、大乘仏教の展開の中で整備された禅定法も、原始仏教以来の禅定法の方法論や修行体系と無関係ではなく、類似性・連続性が認められることを報告している。

⁴⁰ ただし、ここで重点を置かれているのは、開華王如来よりもむしろ、開華王如来の仏国土にいる文殊を見ることにあったと思われる

⁴¹ このような見仏の構造は、藤田[1984]、梶山[1994]、能仁[2008]を参照した。

⁴² Cf. 資料篇<試作テキスト> ch.8, 1-5

⁴³ Cf. 藤田[1984, p.2]

⁴⁴ Cf. Schopen[2005, p.166]

⁴⁵ *Bhaiṣajyagurusūtra*, p.14, 5–13.

⁴⁶ *Sarvathāgatādhiṣṭhānavyūha*, p.56, 11–19.

⁴⁷ 大塚伸[2004, p.160]には、初期密教經典の『牟梨曼陀羅呪経』所説のパタ成就法の概要を示しているが、そこにも見仏の悉地が説かれている。そしてこの場合の見仏も、阿弥陀如来に限定されるわけではなく、「一切如来を見る(*de bzhin gshegs pa thams cad mthong bar 'gyur*)」(D: 306b1)とあり、特定の尊格を明示してはいない。

⁴⁸ 末木[1992, pp.29–38]、藤田[2007, pp.170–204]において、『観無量寿経』の成立問題に対する研究成果が整理されている。

⁴⁹ Cf. 末木[1992, pp.134–147] [2013, pp.235–237]。また山部[2011]は、『観無量寿経』と同様の観仏經典として知られる『観仏三昧海経』を中心とした視座から、同様の結論を導き出している。

⁵⁰ Cf. 末木[1992, pp.180–187]

⁵¹ 本経所説の小位パタ、および第四パタは、六字文殊成就法に用いられるパタと密接に関連していることを指摘したが(Cf. 研究篇<本論>2.4–2.6.)、この六字文殊成就法を説く諸文献には、下記のような「臨終の見仏」に言及している。

[MMK, ch.29 (Gaṇ: p.324, 21–22. ; Vai: p.250, 26–27.)]

athāṣṭaśatajapena maraṇakālasamaye samastaṃ sammukhaṃ āryamañjuśriyaṃ paśyatīti //

『陀羅尼集経』「文殊師利菩薩法印呪」(vol.18, p.839b13–14.)

又法若日別能誦滿一百八遍。臨命終時決定得見文殊師利。

『文殊師利菩薩六字呪功能法経』(vol.20, p.778b14–16.)

若有人能每日誦此呪一百八遍。其人臨命終時。現前見文殊師利菩薩。

『六字神呪経』(vol.20, p.779c25–27.)

又法若日別能誦滿一百八遍。臨命終時得見文殊師利。

それゆえ、本経において最勝パタ成就法以外にも目を向けた場合には、『観無量寿経』に見られる四種の見仏と合致する要素はより増えることになる。さらに、*Amoghapāśakalparāja* 所説のパタ成就法には「往生による見仏」に関する記述が見られる。

[*Amoghapāśakalparāja*, 密教聖典[2000, 45b7–46a1]・Cf.木村[2001, p.24, 11–13.]

cyutāḥ sarvve asya darśanamātrayā sukhavatyā lokadhātav upapatsyante // sarvve ca satvā sukhāvātīnu(ṣu) gāminā bhaviṣyati //

これらの点は今後の研究課題となり得るだろう。

⁵² 当該箇所描写の理解には、梶山[1994]、能仁[2008]を参照した。特に、梶山[1994, pp.220–222]では当該箇所以降の長文にわたる描写を「阿弥陀仏の浄土と釈迦牟尼仏の娑婆世界とが相互に照見し合う」と解釈しており、このような仏国土をまたいだ両如来の神変を『大品般若経』『法華経』『華嚴経』に見られる同種の神変と比較することで、その連続性を指摘している。

⁵³ Cf. 藤田[1970, pp.537–549][2007, pp.443–457]

⁵⁴ 『般舟三昧経』の成立過程をめぐる問題は、Harrison[1990, Appendix A, IX]、末木[1989]によって精緻な研究報告がなされており、これらの成果は梶山[1992, pp.248–263]によって、筆者自身の見解を交えながら整理されている。梶山[1992, p.257]の総括によれば、本研究で提示した引用文(7)は、『般舟三昧経』の原初形態に相当する「行品」からの引用である。

⁵⁵ 「禅観経典」は、総じて複雑な成立事情を抱えており、そこに説かれる行法の全てをインド仏教の展開の中で一律に扱うことは避けるべきだと言及されている(山部[2005][2011])。本研究で「禅観経典」を引用する目的は言うまでもなく、パタ成就法の詳細な理解のためであり、ここでは特にパタ成就法の見仏との異同を探るために引用した。

⁵⁶ Cf. Harrison[1990, p.41]、梶山[1992, p.276]

⁵⁷ ただし、末木[1989, p.318–328]によれば、『般舟三昧経』を構成する諸品のうち、比較的后代に成立したことが見込まれる「四事品」(Harrison[1978, 4D])には、三昧を得るための四事のうちの一つに如来の仏像を作製することや画像を描くことをあげている。

⁵⁸ 本研究では「観仏」と「見仏」の語に対して、「観仏とは、仏の色身を観想、念観するというプロセス」「観仏とは、具体的に相好の観察や観像をさす場合が多い」「見仏とは、観仏の結果、得られた状態、内容を指し、仏身をまのあたりに眼見する、あるいは仏を実感するという意味」(以上、大南[1977, pp.36–37])、および、「観仏は、仏を見るための具体的な方法論」「見仏は、修行がクライマックスに達した時に得られるいわば一種の神秘体験」(以上、山部[2011, p.99])、このような解釈に基づき、一応の区別を図っている。

< 結論 >

『文殊師利根本儀軌經』所説のパタの密教儀礼について

本經所説のパタの作製からパタ成就法の実践に至るまでの一連の諸儀礼のまとめとして、パタの有する密教儀礼上の機能と特徴を整理し、そこから見えてくるパタの密教儀礼の意義について言及したい。

まずパタの画布を作製する工程では、一貫して、清浄な状態にある職人が清浄な場所で作業に従事することが意識されていた。したがって、この工程における重要な密教儀礼は、浄化の儀礼であった。このような清らかな環境下で作製されることによって、靈驗あらたかなパタの画布が完成されたのである。そして、次の作画工程では、パタの密教儀礼上の機能を考察する上で重要な特徴を見いだすことができる。すなわち、本經所説のパタの画像は、「千仏化現」を表現する作例や、仏典に描写される世界を表現する浄土図や説法図に見いだされる仏教美術の主要なモチーフを取り入れ、行者がパタの密教儀礼を実践する際の視覚的イメージの形成を助長するはたらきを有していると考えられる。その中でも、パタの画像にパタ成就法を実践する行者本人を描き入れることや、他方仏国土の諸仏(空間的な軸)、あるいは過去七仏(時間的な軸)を描くことは、パタ成就法によって得られる見仏の悉地を象徴するものだったと考えられ、これらの特徴は本經の関連文献にも見いだすことができる。

ただし、研究篇 3.1.において言及したように、パタの画像に具わる機能は、密教儀礼に精通する出世間レベルの行者たちのみを対象としたものではなく、世間的な功德を与える機能も有していたことは忘れてはならない。というのも、パタに具わる世間レベルの功德によって、行者を取り巻く在家信者や一般民衆に対しても、滅罪によって良き後生を得ることや、富を得ること、病氣平癒といったいわゆる現世利益がもたらされていたからである。このようなパタの機能によって、そのパタを携帯する行者自身も、実生活に結びつく恩恵を受けていたに違いない。すなわち、行者はパタを用いた密教儀礼によって、スポンサーである信者らの求める願望を成就させ、衣食住の援助を受けていたと考えられる。このような見地から考察すれば、パタは「行者の実生活を支える糧」としても機能していたことがわかる。

また、そもそも本研究では、パタの「密教儀礼」と称して一連の考察を進めてきたわけだが、パタを現前に安置して実践されるパタ成就法の実態を見れば、真言の読誦、パタへの香・花の供養、簡易的な護摩、といった非常に簡素なものであった。さらに、浄土經典に確認される見仏を得るための実践行と共通する要素があった。こうした事情を勘案すれば、本經所説のパタの密教儀礼と大乘仏教の実践行との境目が曖昧であり、一連の儀礼を「密教儀礼」と称することに躊躇する見方もあるだろう。実際、Skilling[1992]が指摘しているように¹⁾、護呪文献に説かれる実践行は、それだけを取り出せば、いわゆる大乘小乗を問わず広く仏教者に浸透していた宗教慣行と見ることができ、それが密教的要素を明確に認めることのできるコンテキストの中で説かれることによって、始めて護呪文献が密教經典たるものとなるわけである。このような視座からすれば、本經所説のパタの儀礼を、純然たる「密教儀礼」として位置づけることには慎重にならなければいけないだろう。

しかし、このような本經所説のパタの儀礼における曖昧さを払拭するのが、研究篇 3.2.1.2.において言及した「灌頂を受けることの必要性」と、3.2.1.4.において言及した「加持」の

語に込められた概念である。前者は、形式的に、明確に本経所説のパタの儀礼を「密教儀礼」として位置づけるための根拠となるものである。また後者には、行者がパタを現前にして儀礼を実践している場と諸仏諸菩薩(本経では特に文殊)の仏国土をつなぎ、見仏の悉地を保証するという、密教的な概念を有する「加持」の語の用例を見ることができるのである。

それゆえ、MMK 所説のパタの密教儀礼とは、大乘仏教の浄土思想を根底に据え、神秘的な悉地や、菩提を得るという最終目標に至るための出世間的な悉地を獲得するために実践される、密教儀礼と理解することができる。

最後に今後の研究の方向性を示す上で、MMK 所説のパタの密教儀礼の研究を通じた視点から、以下のような推論を提示しておきたい。

本経所説の詳細なパタ作製儀則によれば、パタは携帯に便利なような工夫が施されていた。行者はこのパタを自由に持ち運び、意のままに密教儀礼を実践していたのであろう。そして、パタに具わる出世間レベルの機能が発揮され、仏教者としての殊勝な悉地や、菩提を得るための確たる道が、行者にもたらされたに違いない。また一方では、パタに具わる世間レベルの功德によって、行者の実生活が支えられていた。それゆえ、出世間レベルあるいは世間レベルから見ても、このパタは行者個人に関わる、言わば「私的な」目的によって活用されていた印象を、筆者は強く持つのである。

一方、マンダラに関する密教儀礼は、近年飛躍的に進歩し²、後代の密教文献によって、その内容を詳細に知ることができる。その中で筆者が注目しているのは、儀礼の執行者である阿闍梨に従い、マンダラ造立のための種々の準備やそれに伴う儀礼を手伝う、弟子(*śiṣya*)や儀礼補助者(*uttarasādhaka*)などの存在である³。このような者たちは、阿闍梨に随行し、マンダラに関わる密教儀礼の実践を支える存在であったと思われる。それゆえ、マンダラの密教儀礼は、阿闍梨を中心とする「集団」によって実践される密教儀礼であったと見ることができないだろうか。

また、マンダラが造立される主要な目的の一つに、灌頂儀礼の実践をあげることは異論のないところであろう。この灌頂儀礼の意義を、前述した「集団」を意識した見地から考察すれば、新たな入門者を獲得し、その「集団」の勢力の保持、さらには拡大に求めることもできよう。したがって、マンダラの密教儀礼の一側面には、ある聖典を権威とする「集団」意識が関わっていたと筆者は考えている。

以上は、ごく一部の密教文献を資料とした推論に過ぎないが、「個」と「集団」という見地から、パタとマンダラという資具の用途や使用される目的を考察してみると、両者には、密教儀礼上の棲み分けがなされていたと思われるのである。しかしながら、こうした推論は、成立年代や系統(特に後代の密教文献では流派)の異なる密教文献に説かれるパタとマンダラを総合的に検証し終えたときに、始めて結論づけられるものであろう。本研究では、当然その結論に至ることはできないので、上記の仮説は、今後の筆者の研究方向と課題として提示するまでにとどめておきたい。

¹ 本研究における Skilling[1992]の研究成果に対する評価は、奥山[1998]によるところが大きい。Skilling[1992]の主張を受けた奥山[1998]の提言は、当該箇所の見解を示すに当たり十分に考慮したつもりである。

² たとえば森[1997][2011]などがあげられる。

³ E.g. [Sarvavajrodaya, 52]

tato manasaiva vajradhātva itī vajravācoccārāyan vairocānībhūya svahṛdayād vajrakarmety udāharan vajrakarmarūpam uttarasādhakam nirmāya / tato vajrasattvodāharan vajrasattvam ātmānaṃ niścintya tatsūtraṃ vānavajramuṣṭyādāya jaḥkāreṇa tadvajrakarmarūpam uttarasādhakam sūtrahastam saṃpreṣya / sarvadiksamatām bhāvayan / ...

[Vajrāvalī, 7.3.]

tataḥ pādatalabhāvitajvaladvajro yathāvasaraṃ salīlaṃ kamalāvartaṃ kurvāṇo vajram ullālayan vajraghaṇṭām ca cālayan vajrapadenaivaiśānīm diśaṃ gatvā tām ārabhya pradakṣiṇataḥ śiṣyaiḥ saha maṇḍalabhūmau vajrapadair nṛtyan ...

[Vajrāvalī, 12.1.4.]

sarvatra vācārya uttarasādhakaś ca pradakṣiṇaṃ gacchet / sarvadiksamatāñ cādhimuñcet /

<参考文献>

<一次文献>

[梵語・パーリ語文献]

- *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā.*
P.L. Vaidya. *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā.* (Buddhist Sanskrit Texts No. 4) Darbhanga. 1960.
- *Avadānaśataka.*
P.L. Vaidya. *Avadānaśataka.* (Buddhist Sanskrit Texts No. 19) Darbhanga. 1958.
- *Adhyardhaśatikā Prajñāpāramitā.* (= Tomabechi[2009])
Toru Tomabechi. *Adhyardhaśatikā Prajñāpāramitā: Sanskrit and Tibetan Texts.* China Tibetology Publishing House • Austrian Academy of Sciences Press. Beijing–Vienna. 2009.
- *Amoghapāśakalparāja.* (=密教聖典[1998][1999][2000][2001][2004][2010][2011])
- *Bhaiṣajyagurusūtra.*
Nalinaksha Dutt. *Bhaiṣajyaguruvaidūryaprabharājasūtram.* (Gilgit Manuscripts, vol.1.) Srinagar-Kashmir. 1939.
- *Dīvyāvadāna.*
E.B. Cowell and R.A. Neil. *The Dīvyāvadāna: A collection of early Buddhist legends / Now first edited from the Nepalese Sanskrit Mss.* Cambridge and Paris. 1886.
- *Gaṇḍavyūhasūtra.*
P.L. Vaidya. *Gaṇḍavyūhasūtra.* (Buddhist Sanskrit Texts No. 5) Darbhanga. 1960.
- *Guhyasamājatantra.*
Yukei Matsunaga. *The Guhyasamājatantra: A New Critical Edition.* Toho Shuppan. Osaka. 1978.
- *Kriyāsaṃgrahapañjikā.* (= Tanemura[2004])
Ryugen Tanemura. *Kuladatta's Kriyāsaṃgrahapañjikā: A critical edition and annotated translation of selected sections.* Egbert Forsten. 2004.
- *Lalitavistara.* (=外蘭[1994])
外蘭幸一. 『ラリタヴィスタラの研究』上. 大東出版. 1994.
- *Mahāpadānasuttanta.*
T.W.Rhys Davids and J.Estlin Carpenter. *The Dīghanikāya II.* Pāli Text Society. pp.1–54. 1982(Reprint).

- *Mahāvastu*.
É. Senart. *Le Mahāvastu*: texte sanscrit, publié pour la première fois et accompagné d'introductions et d'un commentaire. Collection d'ouvrages orientaux seconde sér. Paris. 1882.
- *Mṛtyuvañcanpadeśa*.
Johannes Schneider. *Vāgīśvarakīrtis Mṛtyuvañcanpadeśa, eine buddhistische Lehrschrift zur Abwehr des Todes*. Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften. Wien. 2010.
- *Nāmasaṃgīti*.
Ronald M. Davidson. *The Litany of Names of Mañjuśrī*: Text and Translation of the *Mañjuśrīnāmasaṃgīti*. Tantric and Taoist Studies vol.1, pp.1–69.
- *Niṣpannayogāvalī*.
Benoytosh Bhattacharyya. *Niṣpannayogāvalī of Mahāpandita Abhayākaragupta*. Gaekwad's oriental series v. 109. Oriental Institute. Baroda. 1949.
- *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā*.
Takayasu Kimura. *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā*. Sankibo Busshorin Publishing. Tokyo.
- *Ratnagotravibhāga*.
E. H. Johnston. *The Ratnagotravibhaga Mahayanottaratantrasastra*. Bihar Research Society. Patna. 1950.
- *Saṅghabhedavastu*.
Raniero Gnoli with the assistance of T. Venkatacharya. *The Gilgit manuscript of the Saṅghabhedavastu*: being the 17th and last section of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādin. Istituto italiano per il Medio ed Estremo Oriente. Roma. 1977.
- *Saddharmapuṇḍarīka*.
P.L. Vaidya. *Saddharmapuṇḍarīkasūtram*. (Buddhist Sanskrit Texts No. 6) Darbhanga. 1960.
- *Sarvatathāgatādhiṣṭhānavyūha*.
Nalinaksha Dutt, *Sarvatathāgatādhiṣṭhānasattvāvalokanabuddhakṣetrasandarśanavyūham*. (Gilgit Manuscripts, vol.1.) Srinagar-Kashmir. 1939.
- *Sarvatathāgatattvasaṃgraha*.
堀内寛仁. 『梵藏漢对照 初会金剛頂経の研究 梵文校訂篇』(上)(下). 密教文化研究所. 1983(上) 1974(下). (= 『初会金剛頂経』)

- *Sarvadurgatipariśodhanatantra*.
Tadeusz Skorupski. *The Sarvadurgatiparisodhana tantra*, Elimination of All Evil Destinies: Sanskrit and Tibetan Texts with Introduction, English Translation and notes. Delhi Varanasi Patna. (=Skorupski[1983]).
高橋[1984a][1984b][1985a][1985b][1986]
- *Sarvavajrodaya*. (=密教聖典[1986][1987])
- *Sādhanamālā*.
Benoytosh Bhattacharyya, Gaekwad's oriental series no. 26 and no.41(2vols). 1968(second ed.).
- *Siddhaikavīratāntra*. (=密教聖典[1995a][1995b][1995c])
- *Sukhāvātīvyūha*
Kotatsu Fujita. *The Larger and Smaller Sukhāvātīvyūha Sūtras*. Hozokan. Kyoto. 2011.
- *Suvarṇabhāsa*.
Johannes Nobel. *Suvarṇabhāsottamasūtra: Das Goldglanz-Sūtra, Ein Sanskrit Text des Mahāyāna-Buddhismus*. Reprint.(Originally published: Leipzig, Harrasowitz. 1937).
- *Vajrāvalī*
Masahide Mori. *Vajrāvalī of Abhayākaragupta: Edition of Sanskrit and Tibetan Versions*. 2vols. The Institute of Buddhist Studies. Tring, UK. 2009.
- *Vimalakīrtinirdeśa*
大正大学総合佛教研究所 梵語仏典研究会. *Vimalakīrtinirdeśa: A Sanskrit Edition Based upon the Manuscript Newly Found at the Potala Palace*. 大正大学出版会. 2006.

[チベット語訳文献]

- *Āryavajrapāṇyabhiṣeka-mahātāntra*. ('*phags pa lag na rdo rje dbang bskur ba'i rgyud chen po*).
Derge ed. no.496 ; Peking ed. no.130. (=『金剛手灌頂タントラ』)
- *Mahāmaṇivipulavimānasupraṭiṣṭhitaguhyaparamarahasyakalparājā*. ('*phags pa nor bu chen po rgyas pa'i gzhal med khang shin tu rab tu gnas pa gsang ba dam pa'i gsang ba'i cho ga zhib mo'i rgyal po zhes bya ba'i gzungs*).
Derge ed. no.506(=no.885) ; Peking ed. no.138(=510).
- *Pratyutpannabuddhasaṃmukhāvasthitasamādhisūtra*. ('*phags pa da ltar gyi sangs rgyas mngon sum du bzhus pa'i ting nge 'dzin ces bya ba theg pa chen po'i mdo*) (=Harrison[1978])

The Tibetan text of the *Pratyutpanna-Buddha-Sammukhāvasthita-Samādhi-Sūtra*: critically edited from the Derge, Narthang, Peking and Lhasa editions of the Tibetan Kanjur and accompanied by a concordance and Comparative Table of Chapters of the Tibetan and Chinese versions. Reiyukai Library, Tokyo.

- *Śrīparamādya*. (*dpal mchog dang po zhes bya ba theg pa chen po'i rtog pa'i rgyal po*).
(= 『理趣広経』の翻訳研究会[2013] [2014]).
- *Śrīparamādya-tīkā*. (*dpal mchog dang po'i rgya cher bshad pa*).
Derge ed. no.2512 ; Peking ed. no.3335.
- *Tārāmūlakalpa*. (*bcom ldan 'das ma 'phags ma sgrol ma'i rtsa ba'i rtog pa zhes bya ba*).
Derge ed. no.724 ; Peking ed. no.469.

[漢訳文献] (大正蔵経 no.)

- no.614 : 『坐禅三昧経』 鳩摩羅什訳.
- no.643 : 『仏説観仏三昧海経』 仏陀跋陀羅訳.
- no.901 : 『陀羅尼集経』 阿地瞿多訳.
- no.950 : 『菩提場所説一字頂輪王経』 不空訳.
- no.951 : 『一字佛頂輪王経』 菩提流志訳.
- no.952 : 『五佛頂三昧陀羅尼経』 菩提流志訳.
- no.1008 : 『菩提場莊嚴陀羅尼経』 不空訳.
- no.1179 : 『文殊師利菩薩六字呪功能法経』 失訳.
- no.1180 : 『六字神呪経』 菩提流志訳.
- no.1185A : 『文殊師利法寶蔵陀羅尼経』 菩提流志訳.
- no.1185B : 『文殊師利寶蔵陀羅尼経』 菩提流志訳.

<二次文献(和文)>

天野信

[2010] : 「大本経における七仏の事蹟と浄居天の神」 『印度学仏教学研究』 vol.58-2, pp.189-194.

飯塚秀譽

- [1997] : 「Mañjuśrīmūlakalpa の基本資料」 『豊山教学大会紀要』 vol.25. pp.85-100.
- [1998] : 「Mañjuśrīmūlakalpa 第二章所説の曼荼羅について」 『豊山教学大会紀要』 vol.26. pp.126-148.
- [1999] 「Mañjuśrīmūlakalpa 第二章 和訳(1)と尊容表」 『大正大学大学院研究論集』 vol.23. pp.1-20.

- [2002a]: 「Mañjuśrīmūlakalpa における開華王如来」『密教学研究』 vol.34, pp.67-87.
[2002b]: 「開敷華王如来について」『真言宗豊山派総合研究院紀要』 vol.7, pp.25-37.

石田尚豊

- [1969]: 『日本の美術』 vol.33(密教画). 至文堂.

伊藤堯貫

- [2009]: 「曼荼羅の作画者: 絵師から阿闍梨へ」『密教学研究』 vol.41, pp.41-57.

大塚恵俊

- [2011a]: 「Mañjuśrīmūlakalpa 第9章の成立に関する一考察: 義浄の関連典籍を通じた視点から」『印度学仏教学研究』 vol.59-2, pp.86-89.
[2011b]: 「Manjusrimulakalp 第9章の成立について」『大正大学大学院研究論集』 vol.35, pp.102-94.
[2012]: 「『理趣広経』「般若分」初段所説の密教儀礼について」『豊山教学大会紀要』 vol.40, pp.33-51.

大塚伸夫

- [1988]: 「『大日経』三昧耶品所説の菩提心について」『印度学仏教学研究』 vol.37-1, pp.258-260.
[2013]: 『インド初期密教成立過程の研究』春秋社.

大南龍昇

- [1977]: 「見仏: その起源と展開」『大正大学研究紀要: 佛教学部・文学部』 vol.63, pp.25-40.

奥山直司

- [1998]: 「初期密教經典の成立に関する一考察: 『マハーマントラーヌサーリニー』を中心に」『インド密教の形成と展開: 松長有慶古稀記念論集』法蔵館, pp.67-86.

梶山雄一

- [1994]: 「神変としての浄土教」『仏教』 vol.29, pp.204-224. 法蔵館.

勝木言一郎

- [1992]: 「敦煌莫高窟第220窟阿弥陀浄土変相図考」『仏教芸術』 vol.202, pp.67-92.
[1994]: 「中国における阿弥陀三尊五十菩薩図の図像について: 臥竜山千仏巖の作例紹介とその意義」『仏教芸術』 vol.214, pp.61-73.

川越英真

[1980]: 「Mañjuśrīmūlakalpa のチベットの受容の一面」『東北印度学宗教学会論集』vol.7. pp.133-138.

川崎一洋

[2003]: 「インド密教における葬送儀礼の一考察」『仏教史学研究』vol.46-2. pp.1-16.

[2013]: 「『理趣広経』に説かれるパタの儀礼について」『印度学仏教学研究』vol.61-2. pp.100-105.

河原由雄

[1989]: 『日本の美術』vol.272(浄土画). 至文堂.

木村秀明

[2001]: 「『不空罽索神変真言経』「パタ造立儀則品」に説かれる補陀落山図」『豊山学報』vol.44, pp.1-34.

金, 漢益

[1999]: 「生天と涅槃の関係 — 仏教文化史の視点から —」『東洋文化研究所紀要』vol.137, pp.133-181.

桜井宗信

[1996]: 『インド密教儀礼研究: 後期インド密教の灌頂次第』法蔵館.

定金計次

[1994]: 「インド仏教絵画の展開 — 壁画の変転と礼拝画の成立」『仏教芸術』vol.214. pp.75-131.

[2003]: 「インド仏教と絵画 — 壁画・布絵・板絵、そしてミトゥナの行方 —」『仏教の歴史的・地域的展開—仏教史学会五十周年記念論集—』法蔵館. pp.33-57.

定方晟

[1985]: 『インド宇宙誌』春秋社.

柴田泰

[1965]: 「法天改名法賢説について」『宗教研究』vol.39-3(no.185), pp.80-81.

末木文美士

[1992]: 「観無量寿経 — 観仏と往生」『浄土仏教の思想 二: 観無量寿経 般舟三昧経』

[1989]: 「『般舟三昧経』をめぐって」『インド哲学と仏教: 藤田宏達博士還暦記念論集』pp.313-332.

[2013]: 「阿弥陀仏浄土の誕生」『仏と浄土: 大乘仏典Ⅱ — シリーズ大乘仏教5—』春秋社. pp.210-238.

高橋尚夫

- [1981]: 『略出経』と『Vajrodaya』-供養会について- 『大乘仏教から密教へ: 勝又俊教博士古稀記念論集』 春秋社. pp.457-472.
- [1982]: 『略出念誦経』と『ヴァジュローダヤ』-入マンダラについて- 『密教学研究』 vol.14, pp.55-78.
- [1985a]: 『Sarvadurgatipariśodhanatantra (一)- 梵文テキストと和訳 -』
『仏教の歴史と思想: 壬生台舜博士頌寿記念』 大蔵出版. pp.123-148.
- [1984a]: 『Sarvadurgatipariśodhanatantra (二)- 梵文テキストと和訳 -』
『那須政隆博士米寿記念論文集』 pp.46-77.
- [1984b]: 『Sarvadurgatipariśodhanatantra (三)- 校訂と和訳 -』 『豊山学報』 vol.28 / 29, pp.1-39.
- [1985b]: 『Sarvadurgatipariśodhanatantra (四)- 校訂と和訳 -』 『豊山学報』 vol.30, pp.1-33.
- [1986]: 『Sarvadurgatipariśodhanatantra (五)- 校訂と和訳 -』 『豊山学報』 vol.31. pp.1-17.

高田順仁

- [2000]: 『牟梨曼陀羅呪経』 所説のマンダラ 『密教図像』 vol.19, pp. 1-17.

田中公明

- [1987]: 『曼荼羅イコノロジー』 平河出版社.
- [2000]: 『敦煌 密教と美術』 法蔵館.
- [2001]: 『タンカの世界 チベット仏教美術入門』 山川出版社.
- [2010a]: 『インドにおける曼荼羅の成立と発展』 春秋社.
- [2010b]: 『トンワトゥンデンとは何か? - タンカの起原と『文殊師利根本儀軌経』-』
『密教図像』 vol.29. pp.1-9.
- [2012]: 『胎蔵五仏の成立について - 『大日経』の先行経典としての『文殊師利根本儀軌経』-』 『密教図像』 vol.31. pp.83-95.

種村隆元

- [2004]: 『インド密教の葬儀 - Śūnyasamādhivajra 作 *Mṛtasugatiniyojana* について -』
『死生学研究』 vol.4, pp.26-47.
- [2012]: 『Padmaśrīmitra 作 *Maṇḍalopāyikā* の規定する葬送儀礼について』
『印度学仏教学研究』 vol.60-2. pp.87-92.
- [2013]: 『密教とシヴァ教』 『大乘仏教のアジア - シリーズ大乘仏教 10 -』
pp.74-102. 春秋社.

塚本啓祥

- [1966]: 『改訂増補・初期佛教教團史の研究』 山喜房佛書林.

塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文

[1989]: 『梵語仏典の研究 IV 密教経典篇』平楽寺書店。(= 『梵語仏典』)

中島小乃美

[2005]: 『『一切悪趣清浄儀軌』における荼毘護摩儀礼について -Buddhaguhya の註釈を中心に-』『日本西蔵学会会報』vol.51, pp.53-68.

奈良康明

[1973]: 「古代インド仏教における治病行為の意味 -<世間><出世間>両レベルの関係を中心に-」『中村元博士還暦記念論集』春秋社. pp.237-254.

[1975]: 「古代インド仏教の宗教的表層と基層(一)~(三)」『三蔵集』第一輯 大東出版 pp.277-304.

[1990]: 「『出世間』と『世間』 -インド仏教文化の構造理解のために-」『水野弘元博士米寿記念論集: パーリ文化の世界』春秋社. pp.179-200.

[1994]: 「原始仏教における功德観念の発展と変容 -文化史研究の立場から-」『日本仏教学会年報』vol.59, pp.1-15.

西岡祖秀

[1983]: 『『プトゥン仏教史』目録部索引Ⅲ』『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』vol.6, pp.47-201.

能仁正顕

[2008]: 「ガンダーラ出土仏三尊像と大阿弥陀経」『印度学仏教学研究』vol.57-1. pp.11-18.

樋口隆康

[1950]: 「阿弥陀三尊仏の源流」『仏教芸術』vol.7. pp.108-113.

肥田路美

[1997]: 「法隆寺金堂壁画に画かれた山岳景の意義」『仏教芸術』pp.91-114.

肥塚 隆

[1985]: 「大乘仏教の美術: 大乘仏教美術の初期相」『講座・大乘仏教 10』春秋社. pp.264-291.

平川彰

[1993]: 『二百五十戒の研究 I』(『平川彰著作集』vol.14) 春秋社.

平岡聡

[2001]: 「有部系説話文献に見られる授記の定型句」『仏教学浄土学研究: 香川孝雄博

士古稀記念論集』永田文昌堂, pp.145-156.

[2002]: 『説話の考古学: インド仏教説話に秘められた思想』大蔵出版.

[2007a]: 『ブッダが謎解く三世の物語 『ディヴィヤ・アヴァダーナ』全訳』上大蔵出版.

[2007b]: 『ブッダが謎解く三世の物語 『ディヴィヤ・アヴァダーナ』全訳』下大蔵出版.

福山泰子

[2008]: 「アジャンター石窟における「舎衛城の神変」図の図像的変遷」『國華』vol.113(6), pp.3-19.

藤田宏達

[1970]: 『原始浄土思想の研究』岩波書店.

[1984]: 「浄土教における神秘思想の一断面 - 『観無量寿経』にあらわれた見仏 -」『インド古典研究』vol.6, pp.1-19. 成田山新勝寺成田山佛教研究所.

[2007]: 『浄土三部経の研究』岩波書店.

[1975]: 『無量寿経・阿弥陀経: 梵文和訳』法蔵館.

堀内寛仁

[1996a]: 「文殊儀軌経の梗概 - 主として経の説相について -」『金剛頂経形成の研究 下』法蔵館, pp.3-87(『密教文化』vol.7~10(1949-1950)の再録).

[1996b]: 「文殊儀軌経契印品について(再説)」『金剛頂経形成の研究 下』法蔵館, pp.88-117(『密教文化』vol.21(1953)の再録).

前田崇

[1972]: 「密教形成についての一考察 -Mañjuśrīmūlakalpa における真言 Mantra を中心として-」『東北印度学宗教学会論集』vol.3, pp.51-74.

[1976]: 「《Mūlakalpa》五十三章と Bu-ston 《Chos-ḥbyuñ》」『天台学報』vol.18, pp.133-141.

松長有慶

[1966]: 「Mañjuśrīmūlakalpa の成立年代について」『金倉博士古稀記念論集』平楽寺書店, pp.407-421.

[1980]: 『密教経典成立史論』法蔵館.

光川豊芸

[1990]: 「文殊菩薩とその仏国土: 『文殊師利仏土厳浄経』を中心に」『仏教学研究』vol.45/46, pp.1-32.

密教聖典研究会

[1986]: 「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā-Sarvavajrodāya - 梵文テキストと和訳 - (I)」

- 『大正大学総合佛教研究所年報』 vol.8, pp.24–57.
- [1987] : 「*Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā-Sarvavajrodaya* – 梵文テキストと和訳 – (II) 完」『大正大学総合佛教研究所年報』 vol.9, pp.13–85.
- [1995a] : *Siddhaikavīraṇtra*. Chapter I. 『大正大学総合佛教研究所年報』 vol.17, pp.1–18.
- [1995b] : *Siddhaikavīraṇtra*. Chapter II. 『梵語佛教文献の研究』 pp.1–9. 山喜房佛書林.
- [1995c] : *Siddhaikavīraṇtra*. Chapter III. 『梵語佛教文献の研究』 pp.11–19. 山喜房佛書林.
- [1998] : 「Transcribed Sanskrit Text of the *Amoghapāsakalparāja*. Part I.」
『大正大学総合佛教研究所年報』 vol.20, pp.1–54.
- [1999] : 「Transcribed Sanskrit Text of the *Amoghapāsakalparāja*. Part II.」
『大正大学総合佛教研究所年報』 vol.21, pp.81–128.
- [2000] : 「Transcribed Sanskrit Text of the *Amoghapāsakalparāja*. Part III.」
『大正大学総合佛教研究所年報』 vol.22, pp.1–64.
- [2001] : 「Transcribed Sanskrit Text of the *Amoghapāsakalparāja*. Part IV.」
『大正大学総合佛教研究所年報』 vol.23, pp.1–76.
- [2004] : 「Transcribed Sanskrit Text of the *Amoghapāsakalparāja*. Part V.」
『大正大学総合佛教研究所年報』 vol.26, pp.120–183.
- [2010] : 「Transcribed Sanskrit Text of the *Amoghapāsakalparāja*. Part VI.」
『大正大学総合佛教研究所年報』 vol.32, pp.170–207.
- [2011] : 「Transcribed Sanskrit Text of the *Amoghapāsakalparāja*. Part VII.」
『大正大学総合佛教研究所年報』 vol.33, pp.32–64.

源豊宗

- [1926] : 「浄土変の形式」『仏教美術』 vol.8, pp.60–73.

宮坂宥勝

- [1971] : 「YAMĀNTAKA 考」『印度学仏教学研究』 vol.38, pp.15–23.
- [1981] : 「弘法大師請来『梵本 八曼荼羅經』の研究」『成田山仏教研究所紀要』 vol.6, pp.81–100.

宮治治

- [1995a] : 「トゥルフアン・トヨク石窟の禅観窟壁画について –浄土図・浄土観想図・不浄観図(上)–」『仏教芸術』 vol.221, pp.15–41.
- [1995b] : 「トゥルフアン・トヨク石窟の禅観窟壁画について –浄土図・浄土観想図・不浄観図(中)–」『仏教芸術』 vol.223, pp.15–36.
- [1996] : 「トゥルフアン・トヨク石窟の禅観窟壁画について –浄土図・浄土観想図・不浄観図(下)–」『仏教芸術』 vol.226, pp.38–83.
- [2010] : 『インド仏教美術史論』中央公論美術出版.

森口光俊

- [1976] : 「Mañjuśrīmūlakalpa. Palm. MS について. – National Archives 所蔵 old No.5. 814

(New No.64) – 『智山学報』 vol.25. p1-19.

[1977]: 「Manjusrimulakalpa と Manjusrijnanatantra」 『智山学報』 vol.26. pp.1-12.

森雅秀

[1997]: 『マンダラの密教儀礼』 春秋社.

[2011]: 『インド密教の儀礼世界』 世界思想社.

山口益・桜部建・森三樹三郎

[1976]: 『大乘仏典 6: 浄土三部経』 中央公論社.

山下博司

[1979]: 「Mañjuśrīmūlakalpa のマンダラと成立の問題」 『東北印度学宗教学会論集』 vol.6. pp.1-9.

山部能宜

[2011]: 「大乘仏教の禅定実践」 『大乘仏教の実践 – シリーズ大乘仏教 3 –』 春秋社.

頼富本宏

[1983]: 「インドの八大菩薩像について」 『仏教と文化 中川善教先生頌徳記念論集』 同朋舎. pp.589-602.

[1988]: 「パーラ朝期の文殊菩薩像」 『仏教芸術』 vol.178. pp.105-120.

[1990a] 『密教仏の研究』 法蔵館.

[1990b] 「『金剛手灌頂タントラ』 の四仏・八大菩薩説」 『仏教と社会: 仲尾俊博先生古稀記念』 永田文昌堂. pp.161-180.

『理趣広経』 の翻訳研究会

[2013]: 「Śrīparamādyā 校訂テキスト 第 1 章」 『大正大学総合佛教研究所年報』 vol.35. pp. 134-166.

[2014]: 「Śrīparamādyā 校訂テキスト 第 2 章・第 3 章」 『大正大学総合佛教研究所年報』 vol.36. pp. 141-162.

<二次文献(欧文)>

Bhattacharyya, Benoytosh.

[1932]: An introduction to Buddhist Esoterism. Humphrey Milford, Oxford University Press.

Delhey, Martin.

[2011]: How Buddhist is the *Mañjuśrīyamūlakalpa* (also known as *Mañjuśrīmūlakalpa*).

Abstract of the talk in Tokyo on December 22. (当資料は 2011 年 12 月 22 日, 国際仏教学大学院大学にて行われた講演会内容の要約である。筆者も参加させていただき, 当日配布された Handout を入手したが, 残念ながらその Handout

の公開はされていない。)

- [2012] : The Textual Sources of the *Mañjuśrīyamūlakalpa* (*Mañjuśrīmūlakalpa*). With Special Reference to Its Early Nepalese Witness NGMPP A39/4. Journal of the Nepal Research Centre vol.16. pp.55–75.

Dutt, Nalinaksha.

- [1955] : Buddhism, The Age of Imperial Kanauj, ch.XI-B(pp.259–288). Bharatiya Vidya Bhavan, Bombay.

Edgerton, Franklin.

- [1953] : Buddhist Hybrid Sanskrit and Grammar (2vols.) Motilal Banarsidas. Delhi.
BHSgram. : vol.1, Grammar.
BHSdic. : vol.2, Dictionary.

Foucher, Alfred.

- [1917] : The Great Miracle at Śrāvastī. The beginnings of Buddhist Art. Paris-London. pp.147–184.

Harrison, Paul.

- [1990] : The Samādhi of Direct Encounter with the Buddhas of the Present: An annotated English translation of the Tibetan version of the *Pratyutpanna-buddha-saṃmukhā-vasthita-samādhi-sūtra* with several appendices relating to the history of the text. The International Institute for Buddhist Studies, Tokyo.
[2003] : Mediums and Messages: Reflections on the Production of Mahāyāna Sūtras. The Eastern Buddhist. vol.35, pp.115–151.

Imaeda, Yoshiro.

- [1981] : Un extrait Tibétain du *Mañjuśrīmūlakalpa* dans les manuscrits de Touen-houang. Nouvelles Contributions Aux études de Touen-houang. Ed. by Michel Soymié. Geneve.

Jayaswal, K.P. and Sāṅkṛityāyana, Rāhula.

- [1934] : An Imperial History of India in a Sanskrit Text [c.700 B.C.–c.770 A.D.]. Lahore. Motilal Banarsi Dass.

Jackson, David and Jackson, Janice

- [1984] : Tibetan Thangka Painting: Methods & Materials. Snow Lion. Boston & London.

Kapstein, Matthew.

- [1995] : Weaving the World: The Ritual Art of the “Paṭa” in Pāla Buddhism and Its Legacy in

Tibet. History of Religions vol.34, no.3. pp.241–262.

Lalou, Marcelle

- [1930] : Iconographie des étoffes peintes(paṭa) dans le Mañjuśrīmūlakalpa. Buddhica. Documents et travaux pour l'étude du bouddhisme publiés sous la direction de Jean Przyluski. Première série, Mémoires. vol.6. Paris.
- [1936] : Mañjuśrīmūlakalpa Et Tārāmūlakalpa, Harvard Journal of Asiatic Studies. vol.1, no. 3/4. pp.327-349.

Macdonald, Ariane.

- [1962] : Le Maṇḍala du Mañjuśrīmūlakalpa. Collection Jean Przyluski vol.3. Paris.

Moriguchi, Mitsutoshi.

- [1989] : A Catalogue of the Buddhist Tantric Manuscripts in the National Archives of Nepal and Kesar Library. Sankibo Busshorin. Tokyo.

Przyluski, Jean.

- [1923] : Les Vidyārājā: Contribution à l'histoire de la magie dans les sectes mahāyānistes. Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient vol.23. pp.301–318.

Schopen, Gregory.

- [2005] : Sukhavaṭī as a Generalized Religious Goal in Sanskrit Mahāyāna Sūtra Literature. Fignments and fragments of Mahāyāna Buddhism in India : more collected papers. University of Hawai'i Press.

Snellgrove, D.L.

- [1957] : Buddhist Himālaya, Bruno Cassirer, Oxford.

Sanderson, Alexis.

- [2009] : The Śaiva age: The Rise and Dominance of Śaivism During the Early Medieval Period. Genesis and Development of Tantrism, ed. by Shingo Einoo. Tokyo. Institute of Oriental Culture. pp.41–350.

Seyfort Ruegg, David.

- [1964] : Sur les rapports entre le bouddhisme et le “substrat religieux” indien et tibétain. Journal Asiatique vol.252. pp.77–95.

Skilling, Peter.

- [1992] : The Rakṣā Literature of the Śrāvakayāna. Journal of the Pāli Text Society. vol.16. pp.109–182.

Tribe, Anthony.

[1997] : Mañjuśrī: Origins, Role and Significance (Part I & II). *Western Buddhist Review*. vol.2. pp.49–123.

Wallis, Glenn.

[2002] : Mediating the power of Buddhas: ritual in the *Mañjuśrīmūlakalpa*. SUNY series in Buddhist Studies. State University of New York Press.

[2009] : Oṃ Vākyeda Namaḥ: Mañjuśrī's Mantra and Its Uses. As Long as Space Endures: Essays on the Kālacakra Tantra in Honor of H.H. the Dalai Lama, ed. by Edward A. Arnold. Ithaca. Snow Lion Publications. pp.169–178.

Wayman, Alex

[1973] : The Buddhist Tantras: Light on Indo–Tibetan Esotericism. Samuel Weiser, New York.

Yamabe, Nobuyoshi.

[1999] : The Sūtra on the Ocean-Like Samādhi of the Visualization of the Buddha : The Interfusion of the Chinese and Indian Cultures in Central Asia as Reflected in a Fifth Century Apocryphal Sūtra. (Ph.D. Yale University) UMI Dissertation Services.

<略号>

Gaṇ : T.Gaṇapati Śāstrī (ed.), *The Āryamañjuśrīmūlakalpa*, 3 volumes.

Vai : P. L. Vaidya (ed.), *Mahāyānasūtrasaṃgraha part II (Āryamañjuśrīmūlakalpa)*.

D : Derge Edition of the Tibetan Buddhist Canons.

P : Peking Edition of the Tibetan Buddhist Canons.

NGMPP : Nepal-German Manuscript Preservation Project.

資料篇

<テキスト>

1.1. 略号

研究篇<序論>1.2.において述べたように、以下には資料篇として作成した試作テキスト(MMK 第4章から第8章)とそれに対応する試訳を付す。管見の及ぶ限り、MMK 第4章から第8章には下記の文献資料が確認されており、作成者が使用した文献資料には略号を記載し、その略号を試作テキスト、および試訳において使用している。

<梵文写本>

(a) 使用不可能.

Trivandrum Manuscript. Deposited in the Oriental Research Institute and Manuscripts Library, Thiruvananthapuram (Serial no. 1867; Mss. no. C 2388).

(b) **Ms** :

Palm-leaf Manuscript in the National Archives, Kathmandu (NGMPP, no. A 39/4.).

<梵文出版本>

(c) **Gaṇ** :

Gaṇapati Śāstrī, *Āryamañjuśrīmūlakalpa*. Trivandrum Sanskrit Series vol.70, 1920.

(d) **Vai** :

P. L. Vaidya, *Āryamañjuśrīmūlakalpa*. Buddhist Sanskrit Texts No.18, 1964.

<チベット語訳>

(e) **Tib** :

'phags pa 'Jam dpal gyi rtsa ba 'i rgyud. (**D** : Derge ed. no.543; **P** : Peking ed. no.162.)

<チベット語訳校訂本>

(f) **L** (=Lalou[1930]) :

Marcelle Lalou, *Iconographie des étoffes peintes(pata) dans le Mañjuśrīmūlakalpa*. Paris, 1930.

<漢訳>

(g) **天** :

天息災訳『大方広菩薩藏文殊師利根本儀軌經』大正 no.1191 (vol.20).

各資料に関する詳細な情報は Delhey[2012]において明らかにされており、また研究篇 1.2. においても略説しているので、ここでは省略することにした。なお、筆者による試作テキストでは、第7章の対応箇所が(b)NGMPP 写本(2v, 1.6–5r, 1.5)に現存していることから、第7章の試作テキスト作成の際には、一次資料として(b)を扱った¹。

1.2. 凡例

前項において言及したように、本経には(a)Trivandrum 写本と、(b)NGMPP 写本の二種が現存するため、整定テキストを作成するには、その両本を用いた校訂作業を行うことが理想である。しかし、前述の通り、(a) Trivandrum 写本の入手は困難である上に、(b)NGMPP 写本は断片的に現存する写本であるため、第7章以外は初版本(c)Gaṇ を底本として扱うことを避けられず、第7章のみ、一次資料である(b)NGMPP 写本の対応箇所を校合した。したがって、一次資料を十分に校合するまでの作業に至らなかったため、今回筆者が提示するテキストは、あくまで初版本(c)Gaṇ を整定した「試作テキスト」である。なお、本論文の研究篇では、本経第4章から第8章の記述を引用する際に、この試作テキストを使用している。

試作テキストの作成にあたり、主に以下の点に配慮しながら作業を進めた。まず、初版本(c)の編者である Gaṇapati Śāstrī が Preface で言及しているように、MMK は正規の梵語文法を逸脱するケースが多く見られ、Edgerton[1953]によって提唱されている Buddhist Hybrid Sanskrit によって解決される文法形態、音韻形態も少なくない。したがって、近年飛躍的に研究が進展している中期インドアーリアン語やプラークリット(俗語)などの幅広い言語学、統語論の知識が、本経をより正確に、そしてオリジナルの形で理解するには不可欠であろう。しかしながら、このような知識を前提とするテキストの精読は、筆者の能力を遙かに超える作業と言わざるをえない。そこで、正規の梵語文法に依拠して精読することを第一とし、Buddhist Hybrid Sanskrit の形態が認められる、あるいは疑われる場合には、校勘欄(脚注)において Edgerton[1953]の参照箇所を提示することにした²。

またチベット語訳は、全体を通じて梵本の読みに比較的对応しており、梵本の精読に有益であることから、整定作業において大いに活用した。なお、(f)Lolou[1930]も、フランス語訳を提示している脚注において(c)Gaṇ の読みに関して言及している箇所があり、特に

¹ (b)Ms の対応箇所は、初版本(c)Gaṇ 第7章の冒頭部分を欠いた全体の三分の二程度に相当する。詳細は森口[1976]、Delhey[2012, pp.62–70]を参照されたい。なお Delhey[2012, pp.62–70]によれば、(b)NGMPP 写本は、書写した人物の目的や用途に合わせて原本から抽出される形で書写されたもの、特に儀礼の実践に必要な儀則が抜き出された、いわばマニュアル集としての性格が強いようである。実際、(b)NGMPP 写本が欠いている第7章の冒頭部分は、初版本(c)Gaṇ と照合すると教説の導入部分であることがわかり、第7章の主要な教説(真言やパタの作製法を始めとする実践的な内容)を説く部分は(b)NGMPP 写本に現存している。

² Edgerton[1953]の vol.1 には BHSgram., および vol.2 には BHSdic.の略号を用いて提示している。

(c) Gaṇ の読みの訂正を示唆している場合には、校勘欄あるいは後註にその内容を示している。

一方、天息災訳には、大幅な意識と思われる箇所が随所に認められ、梵本と逐語的に対応しない場合が多い。それゆえ、天息災訳は参照する程度にとどめたが、必要に応じて重要だと思われる読みは校勘欄において示した。

なお、その他の試作テキストの作成に関する詳細な方針は以下のように設定した。

(1) 以下に相当する場合は、校勘欄に表記することなく、作成者の判断によって訂正、削除、補填を行った。

- ・ s と ś の間の訂正.
- ・ b と v の訂正.
- ・ 鼻音と anusvāra の訂正.
- ・ r に後続する重複した子音の削除.
- ・ avagraha の補填
- ・ 頻出する不規則な saṃdhi は、訂正後の形を統一している.
e.g.) bhagavāṃś chākyamunir ; bhagavāṃ śākyamunir → bhagavān śākyamunir
- ・ NGMPP 写本に確認される真言部分の字句の繰り返しを避けるための数字表記は、字句の表記に直して記載している.
e.g.) hūṃ 2 → hūṃ hūṃ

(2) 作成者の解釈により、適宜、読点(,), daṇḍa(/), dvidaṇḍa(//)を削除、補填している。その際、校勘欄に表記することは省略した。

(3) 作成者の解釈により、テキストのセクション分けを行った。なお、研究篇において、本経第4章から第8章の記述を引用する場合は、このセクション番号を用いている。

(4) チベット語訳は、Derge ed. と Peking ed. のみを用いた。なお、両版の間で読みが異なる場合、D (Derge ed.) および P (Peking ed.) の略号を用いて各々の読みを校勘欄に示している。

(5) 後註には、アラビア数字に()の記号を付した箇所を校訂、あるいは解釈する際に参照した文献の記述や、パラレルな記述が確認される文献の記述などを提示している。

(6) 校勘欄には、下記の記号や略号を用いた。

conj. : 作成者による diagnostic conjecture

corr. : 作成者による correction(単純な saṃdhi の訂正の際に用いる)

第7章において写本の読みを提示する際に、写本の書写者あるいは後代の写本使用者によって、文字のキャンセルや読みの訂正が示されている場合は以下のような記載法で提示する。

ac. ante correctionem (訂正前の) ; pc. post correctionem (訂正後の)

e.g.) mahāpuṣpaugham] Ms^{(pc.} ; mahāpuṣpaumagham ^{ac.}) Gaṇ Vai ; *me tog gi tshogs chen po Tib*

→この場合は、mahāpuṣpaugham の読みを採用し、その読みを支持する梵本は Ms Gaṇ Vai である。ただし、Ms は mahāpuṣpaumagham から mahāpuṣpaugham に訂正されていて、訂正後の Ms の読みを採用し、本文の読みを支持することを示す。

なお、後代の写本使用者によることが明らかな場合は、pc.に*を付した。

e.g.) saptasphaṭopabhūṣitau] Ms^{(ac.} ; saptasphaṭaupabhūṣitau Ms ^{pc.*}) ; saptasphaṭāvabhūṣitau Gaṇ Vai ; *gdengs ka bdun gyis nye bar brgyan pa Tib*

→この場合は、saptasphaṭopabhūṣitau の読みを採用し、その読みを支持する梵本は Ms である。ただし、Ms は、saptasphaṭopabhūṣitau から saptasphaṭaupabhūṣitau に後代の写本使用者によって訂正されているが、訂正前の Ms の読みを採用し、本文の読みを支持することを示す。一方、Gaṇ Vai は、saptasphaṭāvabhūṣitau の異なる読みを示す。

em. : 作成者による emendation

om. : omitted

<< >> : 作成者が補填した部分(本文の中で用いる)。

< > : 作成者が削除した部分(校勘欄の中で用いる)。

× : 判読できない文字。1つの×は1文字分に相当する。

+ : 破損して判読できない文字。1つの+は1文字分に相当する。

[] : 部分的な判読が可能である文字。子音と母音を=で挟み、判読できない部分を×で示す。

e.g.) [k=×]→この場合は子音 k は判読できるが、母音の部分が判読できないことを示す。

e.g.) [×=i]→この場合は母音 i は判読できるが、子音の部分が判読できないことを示す。

[+ ... +] : 破損して判読できない部分で、文字数も判断できない場合を示す。

† ... † : 何らかの混乱が推測されるが解決できない部分。

(7)校勘欄には、アラビア数字のみを付した部分の異読を提示した。各註記の左端に示す読みが作成者によって採用された読みであり、その読みを支持する梵本がある場合には、記号「J」を挟んで梵本の略号を示した。対応するチベット訳や天息災訳は、「;」を挟んで原則的に、チベット訳→天息災訳の順で示した。ただし、梵本の読み em. や conj. を示す際、その根拠となる Tib や天息災訳などの読みを提示できる場合には、略号の直後に()を付して示した。なお、Lalou[1930]においても、梵本の読みの訂正が示唆されている箇所があり、その場合もチベット訳、天息災訳に続いて、その示唆された読みを()を付して示した。以下に一例を示す。

e.g.) kuṭiprasrāvam] Gaṇ Vai ; *bshang dang gci ba Tib* ; (Cf.若彼作人大小便利。天) ; (gūthaprasrāvam L)

→この場合は、kuṭiprasrāvam の読みを採用し、その読みを支持するのは Gaṇ Vai であ

る。

e.g.) vicāro] conj. (*rnam par spyod* Tib) ; viceruḥ Gaṇ Vai ; (Cf.一切眞言行眞言相天); (vicaryā L)

→この場合は、vicāro の読みを採用し、その conj.の根拠として Tib の *rnam par spyod* を提示する。viceruḥ は Gaṇ Vai の示す異読である。

(8)校勘欄に、広範囲にわたって梵本の読みに対応する Tib の読みを示す場合は、作成者が採用した読みの後に、記号「]」および「;」を付して、Tib の読みを提示した。

e.g.) adhiṣṭhitaṃ me ... me mantrasiddhiḥ] ; *sangs rgyas bcom ldan 'das dang byang chub sems dpa' chen po rnams kyis bdag gi ras skud 'di la byin gyis brlabs te | bdag gi skye ba(bo P) dam pa ni legs par 'tsho ba yin te | bdag gi sngags sgrub pa 'bras bu med par mi 'gyur ro | Tib*

(9)校勘欄に天息災訳を提示する場合、文字化けしてしまう漢字は下記の通りにアルファベットに置き換えて表記した。

A: 𑖀 B: 𑖁

Mañjuśriyamūlakalpa

(also known as *Mañjuśrīmūlakalpa*)

CH. IV

1

[Gaṇ p.55-2 ; Vai p.38-3 ; Tib(D) 129a4 ; Tib(P) 90a1 ; 天 p.859a22]

atha khalu mañjuśrīḥ¹ sarvāvantaṃ śuddhāvāsabhavanam avalokya punar api tan mahāparśanmaṇḍalasannipātam avalokya śākyamuneś caraṇayor nipatya prahasitavadano bhūtvā bhagavantam etad avocat /

sādhu²⁽¹⁾ bhagavan³ sarvasattvānāṃ hitāya mantracaryāsādhanavidhānanirhāraniṣyandaṃ⁴ dharmameghapravarṣaṇaṃ yathepsitaphalaniṣpādanapaṭalavisaraṃ paṭavidhānam⁽²⁾ anuttaraṇyaṇyaṣavaṃ⁵ samyaksambodhibījam abhinirvartakaṃ sarvajñajñānāśeṣam abhinirvartakaṃ saṃkṣepataḥ sarvāsāpāripūraṃ sarvamantraphalasamyaksamprayuktam⁶ saphalīkaraṇam⁷ avandhyasādhitasādhakaṃ sarvabodhisattvacaryāpāripūraṃ mahābodhisattvasaṃnāhasaṃnaddhaṃ⁸ sarvamārabalābhibhavanaparāprṣṭhīkaraṇam⁹ / tad vadatu bhagavān asmākam anukampām upādāya

¹ mañjuśrīḥ] Gaṇ Vai ; 'jam dpal gzhon nur gyur pas Tib ; (Cf. 妙吉祥童子 天) ² sādhu] em. ; <tat> sādhu Gaṇ Vai ; om. Tib ; (Cf. 善哉 天) ³ bhagavan] em. ; bhagavāṃ Gaṇ Vai ; Cf. BHSgram. 18.81 ⁴ mantracaryāsādhanavidhānanirhāraniṣyandaṃ dharmameghapravarṣaṇaṃ yathepsitaphalaniṣpādanapaṭalavisaraṃ] em. ; mantracaryā^o-(comp.)^opaṭalavisaraḥ Gaṇ Vai ; sngags kyi spyod pa'i cho ga'i sgrub pa'i rgyu mthun pa | chos kyi char ci tar 'dod pa'i 'bras bu sgrub pa'i cho ga rab 'byam las Tib ; (Cf. 成就眞言儀則法行. 法雲降雨所求皆得. 天) ⁵ -^oprasavaṃ] em. ; -^oprasavaḥ Gaṇ Vai ⁶ -^osamprayuktam] em. ; -^osamprayuktaḥ Gaṇ ; -^osamprayuktaḥ Vai ; sngags thams cad kyi 'bras bu la rab tu sbyor zhing 'bras bu dang bcas par byed pa Tib ⁷ -^okaraṇam] em. ; -^okaraṇa Gaṇ Vai ⁸ -^osaṃnāhasaṃnaddhaṃ] em. ; -^osannāhasannaddhaḥ Gaṇ ; -^osaṃnāhasaṃnaddhaḥ Vai ⁹ -^omārabalābhibhavana^o] em. ; -^omārabala abhibhavana^o- Gaṇ ; -^omārabalaabhibhavana^o- Vai ; Cf. BHSgram. 4.51–56.

2

sarvasattvānām ca //

2

[Gaṇ p.55-13 ; Vai p.38-11 ; Tib(D) 129b1 ; Tib(P) 90a5 ; 天 p.859b2]

evam ukte mañjuśriyā kumārabhūtena, atha bhagavān śākyamunir mañjuśriyaṃ
kumārabhūtam etad avocat /

sādhu sādhu mañjuśrīḥ yas⁽³⁾ tvam̐ bahunahitāya pratipanno lokānukampāyai,
yas tvam̐ tathāgatam̐ etam̐ arthaṃ paripraṣṭavyaṃ manyase / tac chṛṇu sādhu ca
suṣṭhu ca manasi kuru / bhāṣiṣye 'haṃ te / tvadīyaṃ paṭavidhānavisarasarvamantra-
caryāsādhanam¹ anupraveśam² anupūrvaśaḥ³ vakṣye 'haṃ / pūrvanirdiṣṭaṃ sarva-
tathāgataiḥ aham̐ apīdānīm⁴ bhāṣiṣye⁽⁴⁾ //

3-1-1

[Gaṇ p.55-20 ; Vai p.38-16 ; Tib(D) 129b1 ; Tib(P) 90a7 ; 天 p.859b7]

ādau tāvac̐ chucau pṛthivīpradeśe rajovigate picuṃ gṛhya samayapraṣṭaiḥ sattvaiḥ
tatpicuṃ saṃśodhayitavyam / saṃśodhya cānena⁵ mantreṇa maṅḍalācāryeṇābhi-
mantritavyam̐ aṣṭaśatavārān /

namaḥ sarvabuddhabodhisattvānām̐ apratihataḡatimatipracāriṇām̐⁶⁽⁵⁾ /

¹ -°sarvamantracaryā°- 〕 em. (*sngags thams cad sgrub par byed pa* Tib) (Cf.一切真言行 天) ;
-°sarvasattvacaryā°- Gaṇ Vai ² anupraveśam 〕 Gaṇ Vai ; *sngags thams cad sgrub par byed pa
la rab tu 'jug pa* Tib ³ anupūrvaśaḥ 〕 em. (*mthar gyis* Tib) ; -°kaḥ Gaṇ Vai ⁴ apīdānīm 〕 em.
(*da ltar yang ngas bshad par bya'o* Tib) (Cf.我今亦說 天) ; *apy edānīm* Gaṇ Vai ⁵ cānena 〕 corr.
; ca anena Gaṇ Vai ; Cf.BHSgram. 4.51–56. ⁶ -°gatimatipracāriṇām 〕 em. (*ga ti ma ti pra tsā ri
nām* Tib) (Cf. 阿鉢囉(二合)底賀哆識底摩底鉢囉(二合)左(引)哩A 天) ; -°matigatipracāriṇām Gaṇ Vai

namaḥ saṃśodhanaduḥkhaḥpraśamanendrarājāya¹ tathāgatāyārhatē samyak-
 sambuddhāya / tadyathā
 oṃ śodhaya śodhaya² sarvaviḡnaghātaka³ mahākāruṇika kumārārū-
 padhāriṇe⁴⁽⁶⁾ / vikurva⁽⁷⁾ vikurva / samayam anusmara / tiṣṭha tiṣṭha /
 hūṃ⁵ hūṃ phaṭ phaṭ svāhā //

Gaṇ 56

3-1-2

[Gaṇ p.56-1 ; Vai p.38-22 ; Tib(D) 129b5 ; Tib(P) 90b3 ; 天 p.859b1]

tato⁶ 'viditagrāmyadharmakumārīm⁷ brāhmaṇakulakṣatriyakulaprasūtām⁸ vaiśya-
 kule prasūtām⁹ nātikṛṣṇavarṇayonivarjitām¹⁰ avikalām¹¹ sarvāṅgaśobhanām mātāpi-
 tranuṣkṛtām¹² upośadhaparigṛhītām utpāditabodhicittām kāruṇikām avadātavarṇām
 anyavarṇavivarjitām samkṣepataḥ strīlakṣaṇasupraśastacihṇām, suśobhane¹³ 'hani
 śuklapakṣe śubhagrahanirīkṣite¹⁴⁽⁸⁾ vigatadhūpanirhāravardalāpagate¹⁵ vigatavāte
 śucau pradeśe pūrvanirdiṣṭām kumārīm snāpayitvā śucivastraprāvṛtena sunivastām
 kṛtvā anenaiva mantreṇa mahāmudropetarakṣām kṛtvā śvetacandanakuṅkumam

¹ -°praśamanendrarājāya 〕 em. (*pra śa ma ne(ṇe P) ndra rā jā ya* Tib) (Cf.鉢囉 (二合) 舍摩爾 (引) 捺囉 (二合) 囉惹野 天) ; -°praśamanarājendrarājāya Gaṇ Vai ² śodhaya 〕 Gaṇ Vai ; *saṃ śo dha ya* Tib ; (Cf.僧戍馱野 天) ³ -°viḡnaghātaka 〕 Gaṇ Vai ; *bi ghaṇa gha ta ka* Tib(D) ; *bi ghaṇa gha ta ka* Tib(P) ; (Cf.尾近曩 (二合) 伽 (引) 哆迦 天) ⁴ -°dhāriṇe 〕 Gaṇ Vai ; (*ku mā ra rū pa dhā ri ṇi* Tib(D) ; *ku mā ra ru pa dha ri ni* Tib(P)) ; (Cf.馱 (引) 哩尼 (引) 天) ⁵ hūṃ hūṃ 〕 em. (*hūṃ hūṃ* Tib) (Cf.咩咩 天) ; hum hum Gaṇ Vai ⁶ tato 'vidita°- 〕 corr. ; tataḥ avidita°- Gaṇ Vai ⁷ 'vidita°-(comp.)-°kumārīm 〕 em. (*grong gi chos mi shes pa'i gzhon nu ma* Tib) (Cf.未知世法者童女 天) ('vidita°- L) ; avitatha°-(comp.)-°kumārī Gaṇ Vai ⁸ -°prasūtām 〕 em. ; -°prasūtām Gaṇ Vai ⁹ prasūtām 〕 em. ; prasūtām Gaṇ Vai ¹⁰ -°varṇayonivarjitām 〕 em. (*rīgs ngan pa'i skyes gnas yongs su spangs* Tib) (Cf.餘下姓者不用 天) ; -°varṇayoni-<varṇayoni>-varjitām Gaṇ Vai ¹¹ avikalām 〕 em. ; avikalām Gaṇ Vai ; *dbang po mtshang ba med pa* Tib ; (Cf.諸根具足 天) ¹² -°pitrānuṣkṛtām 〕 corr. ; -°pitrānuṣkṛtām Gaṇ Vai ; Cf.BHSgram. 4.51-56. ¹³ suśobhane 〕 Vai ; sa°- Gaṇ ; *shin tu nyin zhag shis pa* Tib ; (Cf.吉祥之日 天) ¹⁴ śubhagraha°- 〕 em. (*gza' bzang po bltas* Tib) ; <śukla>śubhagraha°- Gaṇ Vai ; (Cf.白星宿 天) ¹⁵ -°vardalāpagate 〕 Vai ; -°vadalāpagate Gaṇ ; *du ba dang khug rna med cing sprin dang bral ba* Tib ; (Cf.又須天色晴朗.無其陰暗風雨方可作法 天)

niṣprāṇakenodakenāloḍya tatpicuṃ¹ tām ca kanyāṃ tenaiva mantreṇa saṃśodha-
nenābhyukṣayet / caturdiśaṃ ca kṣipet śvetacandanakuṅkumodakam² ity⁽⁹⁾ ūrd-
hvam adhaś ca vidikṣu / śvetacandanakuṅkumakarpūraṃ caikīkṛtya pūrvam dā-
payet /

svayaṃ vā dadyāt / sādhakācāryeṇa³ vā / tad evaṃvācā bhāṣitavyaṃ trīn vārān /

adhitiṣṭhantu⁴ buddhā bhagavanto idaṃ paṭasūtraṃ daśabhūmipraṭiṣṭhitāś⁵
ca mahābodhisattvāḥ /

Vai 39

tatas te buddhā bhagavanto samanvāharanti / mahābodhisattvāś ca //

3-1-3

[Gaṇ p.56-14 ; Vai p.39-1 ; Tib(D) 130a4 ; Tib(P) 91a2 ; 天 p.859c3]

dhūpaṃ dahatā tasmim samaye mayūrakrauñcahaṃsasārasacakraṅkāvidhaśubha-
śakunā⁶ jalasthalacāriṇo 'ntarikṣe⁷ gaccheyuḥ / śubhaṃ vā kūjayeyuḥ / tataḥ⁸ sādha-
kena jñātavyam / saphalaṃ me⁹ tatkarma¹⁰, adhiṣṭhitaṃ¹¹ me buddhair bhagavad-

¹ tatpicuṃ tām] em. (*ras bal de dang bu mo de* Tib) (Cf. 童女身上及兜羅綿 天) (tat picuṃ tām ca kanyāṃ L) ; tatpibantāṃ Gaṇ ; tatpibantīm Vai ² -°candanakuṅkumo°-] em. ; -°candanam kuṅkumo°- Gaṇ Vai ³ -°ācāryeṇa] em. ; -°ācārye Gaṇ Vai ; *sgrub pa'i grogs mchog gi slob dpon gyis sbyin par bya'o* Tib ; (Cf. 阿闍梨及同法事者 天) ⁴ adhitiṣṭhantu] Gaṇ Vai ; *lhag par gnas par mdzod cig* Tib ⁵ daśabhūmipraṭiṣṭhitāś] Gaṇ Vai ; *sa bcu'i dbang phyug la gnas pa'i byang chub sems dpa' chen po rnams* Tib ; (Cf. 住十地大自在菩薩 天) ⁶ -°vividhaśubhaśakunā] em. ; -°vividhā śubhaśakunayā Gaṇ Vai ; ... *dang ngur pa rnam pa sna tshogs bya dge ba thang la gnas pa 'am | chu la spyod pa rnams nam mkha' la 'gro bar 'gyur ba'am* | Tib ; (Cf. 或有孔雀鴛鴦鵝鴨鶴雁. 如此吉祥之禽. 或從空來或水中來或地行來. 天) ⁷ 'ntarikṣe] Vai ; 'ntarikṣi Gaṇ ; *nam mkha' la* Tib ; (Cf. 或從空來或水中來或地行來. 天) ⁸ tataḥ] conj. ; tat Gaṇ Vai ; *las 'di ni* Tib ⁹ me] Gaṇ Vai ; om. Tib ¹⁰ tatkarma] em. ; etatkarma Gaṇ Vai ¹¹ adhiṣṭhitaṃ me ... me mantrasiddhiḥ /] ; *sangs rgyas bcom ldan 'das dang byang chub sems dpa' chen po rnams kyis bdag gi ras skud 'di la byin gyis brlabs te | bdag gi skye ba(bo P) dam pa ni legs par 'tsho ba yin te | bdag gi sngags sgrub pa 'bras bu med par mi 'gyur ro* | Tib ; (Cf. 必得諸佛菩薩降臨加備. 我所求事決定成就. 造因之緣亦得成就. 天)

bhir mahābodhisattvaiś ca¹ tatpaṭasūtraṃ, sujīvitam ma² iha janmany avandhyā me
 mantrasiddhiḥ / paṭahabherīmṛdaṅgaśaṅkhaviṇṇāveṇupaṇavamurajaśabdaṃ³ vā
 bhaveyuḥ⁴ / <<strīpuruṣadāradārikā>>⁵ evaṃ vadeyur akasmāt⁶ tasmim samaye
 jayasiddhisiddhadattadinnagrḥṇaśreyasasaphalakaśakraprabhūta⁷ evamādīn⁸ anyān⁹
 vā śubhān śabdān pravayāharanti / ghaṇṭānisvanā¹⁰ vā bhaveyuḥ nandīśabdā¹¹ vā /
 tato vidyādhareṇa jñātavyam / buddhānām bhagavatām mahābodhisattvānām cā-
 dhiṣṭhānam etat / nānyatra avandhyasiddhir iti //

3-1-4

[Gaṇ p.56-26 ; Vai p.39-9 ; Tib(D) 130b2 ; Tib(P) 91a7 ; 天 p.859c14]

atha te tasmim samaye krūram pravayāharante grḥṇakhādakhādāpayanaṣṭavinaṣṭa-
 kaṣṭadūrasudūranāstīty evamādayaḥ śabdā niścāranti, vānaramahiṣakroṣṭukagarda-
 bhamārjārakutsitiriyagdvipadacatuḥpadānām śabdā niścāreyuḥ / tato sādhakena
 jñātavyam nāsti me siddhir iti / iha janmani saṃhartavye¹² bhūyo vā pūrvasevām¹³

Gaṇ 57

kṛtvā prārabdhavyam / evaṃ yāvāt saptavārān pañcānantaryakariṇasyāpi¹⁴ saptame

¹ ca 〕 em. ; ca <me> Gaṇ Vai ² ma iha 〕 conj. ; meha Gaṇ Vai ; *bdag gi skye ba(D; bo P) dam pa ni legs par 'tsho ba yin te* Tib ³ -°vīṇāveṇupaṇavamurajaśabdaṃ 〕 Vai ; -°vīṇāveṇupaṇavamuravaśabdaṃ Gaṇ ; ... *pi bang(D; wang P) dang gling bu dang 'khar(P; khar D) rnga dang rdza rnga chen po'i sgra* Tib ; (Cf.鼓聲螺鈸聲鈴聲磬聲. 琴瑟方響種種樂聲. 天) ⁴ bhaveyuḥ 〕 Gaṇ Vai ; *thos pa* Tib ; (Cf.聞 天) ⁵ strīpuruṣadāradārikā 〕 conj. (*bud med dang khye'u 'am bu mo 'am skyes pa rnam* Tib) (Cf.男子女人童男童女 天) ; ++++++++ Gaṇ Vai ⁶ akasmāt 〕 em. (*blo bur du* Tib) ; akalpsmāt Gaṇ Vai ⁷ jayasiddhi°-(comp.)-°śakraprabhūta 〕 em. ; jayasiddhi siddha datta dinna grḥṇa śreyasaḥ saphalakaśakraprabhūta Gaṇ Vai ; *rgyal ba dang grub pa dang sbyin pa dang byin pa dang khyer cig ces pa dang dpal dang 'bras bu dang 'bras bu yod pa dang cho ga dang rgya byin dang mang po dang* Tib ; (Cf.此最殊勝大有增益.堪受此法當獲勝果. 天) ⁸ -°ādīn 〕 em. ; -°ādayo Gaṇ Vai ⁹ anyān 〕 em. ; anye Gaṇ Vai ¹⁰ -°nisvanā 〕 em. ; -°nisvanam Gaṇ Vai ¹¹ -°śabdā 〕 em. ; -°śabdaṃ Gaṇ Vai ¹² saṃhartavye 〕 conj. ; saṃhartavyaḥ Gaṇ Vai ; *brtul bar bya* Tib ¹³ pūrvasevām 〕 Gaṇ Vai ; *snga ma bzhin du* Tib ; (Cf.結淨壇再作法 天) ¹⁴ -°kariṇasyāpi 〕 Gaṇ ; -°kariṇasyāpi Vai ; Cf.BHSgram. 10.3., BHSdic. p.169(-kāriṇa)

karmaprayoge sidhyatīti //

3-1-5

[Gaṇ p.57-4 ; Vai p.39-14 ; Tib(D) 130b3 ; Tib(P) 91b1 ; 天 p.859c21]

tataḥ sādhakena tām kumārīm kṛtarakṣām kṛtvā kuśaviṇḍakopaviṣṭakām¹ kārayet /
pūrvābhimukhām uttarābhimukhām vā samsthāpya ātmanaś ca haviṣyāhārah² tām³
ca kanyām⁴ haviṣyāhārah bhojayet / pūrvam eva parikalpitaṃ⁵ kuśaviṇḍakaṃ⁶,
tenaiva vidhinā taṃ⁷ picuṃ⁸ kartāpayet⁹ / tatsūtraṃ sukartitaṃ¹⁰ śuklaṃ pūrva-
śikṣāpitakanyayā samhṛtya¹¹ aṣṭa pañca trīṇi ekaṃ prabhṛti¹² yāvat ṣoḍaśamātrām
palām vā karṣām vā supraśastagaṇanām¹³ etām kuryān /

<<tatrottame ṣoḍaśamātrām>>¹⁴⁽¹⁰⁾ madhyame 'ṣṭamātrām¹⁵ tathā¹⁶

/(¹¹)

itare pañca caikaṃ vā kṣudrasādhyeṣu karmasu // I //

yathāśaktitaḥ kuryāt sarvakarmiṣu mantravit // IIab //

tataḥ¹⁷ prabhṛti yat kiñcit pāpaṃ karma purākṛtam /

¹ -°viṇḍako°-] Gaṇ ; -°piṇḍako°- Vai ; Cf. BHSdic. p.487(viṇḍa) ² haviṣyāhārah] Gaṇ Vai ;
bdag nyid srung(D; bsrung P) ba Tib ³ tām] Gaṇ Vai ; om. Tib ⁴ kanyām] Gaṇ Vai ; om.
Tib ⁵ parikalpitaṃ] Gaṇ Vai ; *sbyang ba byas pa* Tib ⁶ -°viṇḍakaṃ] Gaṇ ; -°piṇḍakaṃ Vai
; Cf.BHSdic. p.487(viṇḍa) ⁷ taṃ] Gaṇ Vai ; om. Tib ⁸ picuṃ kartāpayet] Gaṇ Vai ; *ras bal*
la yang bya'o Tib ⁹ Cf. BHSgram. p.208(√kṛt) ¹⁰ sukartitaṃ] Gaṇ Vai ; *legs par bsgrims pa*
Tib ¹¹ samhṛtya] Gaṇ Vai ; *yang dag par blangs te* Tib ; (Cf. 令彼撻爲綿線. 天) ¹² prabhṛti]
Vai ; prabhṛti Gaṇ ¹³ -°gaṇanām] em. ; -°gaṇanam Gaṇ Vai ¹⁴ tatrottame ṣoḍaśamātrām]
conj. (*de la rab ni bcu drug bya |* Tib) (Cf. 若上等壇法十六兩. 天) ; n.e. Gaṇ Vai ¹⁵ 'ṣṭamātrām]
conj. ; aṣṭamām Gaṇ Vai ; *brgyad* Tib ¹⁶ tathā] em. (*de bzhin* Tib) ; gāthā Gaṇ Vai ¹⁷ tataḥ
... purākṛtam /] Gaṇ Vai ; *de nas brtsams te gang cung zad || sdig pa sngar ni byas pa dag ||* Tib

naśyate tat kṣaṇād eva sūtrārthaṃ ca cetane¹ // 1 //
 saṅgrhya-m² idaṃ sūtraṃ śucau bhāṇḍe niveśayet /
 na³⁽¹²⁾ hi tantugato kṛtvā dhūpayet karpūradhūpanaiḥ // 2 //
 aprāṇyaṅgasamutthitaṃ⁴ vā kuṅkumacandanādibhiḥ /
 arcitaṃ sugandhapuṣpair mallikacampakādibhiḥ // 3 //
 śucau pradeśe saṃsthāpya kṛtaraḥśāvidhānataḥ⁵⁽¹³⁾ /
 mantravit sarvakarmajño kṛtajāpaḥ susamāhitaḥ⁶ // 4 //

3-2-1

[Gaṇ p.57-20 ; Vai p.39-28 ; Tib(D) 131a1 ; Tib(P) 91b7 ; 天 p.860a14]

tantuvāyaṃ tato gatvā mūlyaṃ dattvā⁷ yathepsitam /
 avyaṅgam akṛśaṃ caiva śukladharmasadāratam⁽¹⁴⁾// 5 //
 avyādhyārtam⁸ avṛddham ca kāśāśvāsavinirmuktam⁹ /
 keśāśvetavinirmuktam¹⁰ aṣaṇḍaṃ yonisatyajam¹¹ // 6 //(15)
 anavadyam akubjaṃ¹² caivāpāṅgapativarjitam¹³ /
 saṃmatalakṣaṇopetaṃ¹⁴⁽¹⁶⁾ praśastaṃ cārudaśanam // 7 //

Vai 40

¹ cetane] conj. ; <na> cetane Gaṇ Vai ; (*dog(D; dogs P) par sems kyis dmigs pa na* || Tib)
² saṅgrhya-m] em. (*dog pa 'di dag yang dag blangs* Tib) ; saṅgrhyam Gaṇ Vai ³ na hi tantugato
 kṛtvā] Gaṇ Vai ; *de nas bzhaḡ pa byas nas de* Tib ; (Cf. 一心觀注更不異緣. 天) ; (nihitaṃ tu tato
 kṛtvā L) ⁴ aprāṇyaṅga°-] Vai ; aprāṇyaṅga Gaṇ ; *srog chugs yan lag min(om. D) byung ba*
 Tib ; Cf. BHSdic. p.98(āprāṇya) ⁵ -°rakṣāvidhānataḥ] conj. (*bsrung ba'i cho ga byas nas*
ni Tib) ; -°rakṣāpithānitaṃ Gaṇ ; -°rakṣāpidhānitaṃ Vai ; (Cf. 作擁護 天) ; Cf.BHSgram. 34.7.,
 BHSdic. p.345(pithānita) ⁶ susamāhitaḥ] Gaṇ Vai ; *shin du mnyam gzhag bzlas pa bya* Tib ;
 (Cf. 不得散亂 天) ⁷ dattvā] Vai ; datvā Gaṇ ⁸ avyādhyārtam] Vai ; avyādhyartam Gaṇ ; *nad*
kyis gdungs pa min Tib ⁹ kāśāśvāsa°-] Vai ; kāśāśvāsāvinir°- Gaṇ ¹⁰ keśāśvetavinirmuktam]
 em. (*skra dkar spangs* Tib) (keśāśveta°- L) ; kāśāśvāsavinirmuktam Gaṇ Vai ¹¹ yonisatyajam]
 Gaṇ Vai ; om. Tib ¹² akubjaṃ] Gaṇ Vai ; *'phye bo ma yin* Tib ¹³ caivāpāṅgapati°-] em.
 ; caivāpāṅgupati°- Gaṇ Vai ¹⁴ saṃmata°-] conj. (*kun gyis bkur ba'i mtshan nyid ldan* Tib) ;
 samasta Gaṇ Vai

śubhabuddhisamācāraṃ¹ laukikīṃ vṛttim āśritam /
 siddhikāmo 'tra taṃ yāced uttame² paṭavāyane // 8 //
 praśastās śubhavarṇe vā buddhimanto suśikṣitāḥ /
 atyutkr̥ṣṭatamaiḥ³ śreṣṭhaiḥ paṭavāyanaśreyasaiḥ // 9 //
 uttame⁴ uttamaṃ kuryān madhyame madhyasādhanam /
 itaraiḥ kṣudrakarmāṇi nikṣṭāny eva sarvataḥ // 10 //
 tathā⁵ mūlyaṃ tato dattvā⁶ yathā vadati śilpinaḥ⁷ /
 prathame vāksamutthāne śilpinasya⁸ sa mantravit // 11 //
 dadyāt mūlyaṃ⁹ tataḥ kṣipraṃ vīrakrayeti⁽¹⁷⁾ sa ucyate /
 prārthanād¹⁰ eva caitasya mūlyabhāṣā¹¹ na jāpine // 12 //
 kṣiprasiddhikaro hy eṣa paṭaśreṣṭho niruttaraḥ /
 sarvakarmakaro pūjyo divyamānuṣyasaukhyadaḥ // 13 //
 śreyasaḥ sarvabhūtānāṃ samyaksambuddhabhāṣitaḥ¹² // 14ab //

Gaṇ 58

iti //

¹ śubhabuddhisamācāraṃ] Gaṇ Vai ; *blo dang yang dag sbyod pa dge* Tib ² uttame paṭavāyane] Gaṇ Vai ; *ras bzang btags(D; rtag P) pa'i ched du(D; chad du P) Tib* ³ atyutkr̥ṣṭatamaiḥ] em. (*shin tu khyad par mchog gyur pa'i* || Tib) ; atotkr̥ṣṭatamaiḥ Gaṇ Vai ⁴ Cf.BHSgram. 4.51.–56. ⁵ tathā] em. (*de ltar* Tib) ; yathā Gaṇ Vai ⁶ dattvā] Vai ; datvā Gaṇ ⁷ Cf.BHSgram. 10.3. ⁸ Cf.BHSgram. 10.3. ⁹ mūlyaṃ] conj. (*rin* Tib) ; puṇyaṃ Gaṇ Vai ¹⁰ prārthanād eva caitasya] Gaṇ Vai ; (*don du gnyer med de la ni* || Tib) ¹¹ mūlyabhāṣā na] conj. ; puṇyabhāvena Gaṇ Vai ; (*rin du smra byed sgrub pa po* || Tib) ; (Cf. 若得前造B之人. 所要功價不計多少. 不得怖懼恪惜依價令作. 若自乏財方便求告. 天) ¹² -°bhāṣitaḥ] em. ; -°bhāṣitam Gaṇ Vai

3-2-2

[Gaṇ p.58-11 ; Vai p.40-16 ; Tib(D) 131a6 ; Tib(P) 92a4 ; 天 p.860a26]

tato vidyādhareṇa tantuvāyasya poṣadhaṃ dattvā śubhanakṣatre¹ prātihārapakṣe
 śukle 'hani śubhagrahanirīkṣite 'nye vā śuklapakṣe, sukusumitasahakāramañjarī-
 varatarupuṣpādhyavasantasamaya² ṛtuvare tasmin kāle tasmin samaye³, pūrvāhṇo-
 dite⁴ savitari, pūrvanirdiṣṭaṃ tantuvāyaṃ haviṣyāhāraṃ śucivastraprāvṛtaṃ⁵ baddho-
 ṇīṣaśiraskaṃ susnātaṃ suviliptaṃ⁶ śvetacandanakuṅkumābhyām anyatareṇānulip-
 tāṅgaṃ karpūravāsītavadanaṃ hr̥ṣṭamanasaṃ⁷ kṣutpipāsāpagataṃ kṛtvā, sarvatra
 bhāṇḍarajjvādyupakaraṇāni⁸ ca mṛdgomayābhyām prakṣālya pratyagrāṇi ca bhūyo
 bhūyo pañcagavyena prakṣālayet / tato niḥprāṇakenodakena prakṣālya śvetacan-
 danakuṅkumābhyām⁹ abhyāṣiñcet¹⁰ śucau pṛthivīpradeśe apagatakolāhale vigata-
 janapade viviktāsane prasanne gupte puṣpārcite //

tataḥ sādakena saṃśodhanamantreṇaivāṣṭaśatābhimantritaṃ kṛtvā śvetasarṣapān
 caturdikṣv¹¹ ity⁽¹⁸⁾ ūrdhvam adho¹² vidikṣu ca kṣipet / tato tantuvāyaṃ sarṣapaiḥ
 saṃtāḍya¹³ mahāmudrāṃ pañcaśikhāṃ baddhvā śikhābandhaṃ kurvīta / mahārakṣā

¹ śubhanakṣatre 〕 em. (*rgyu skar bzang po* Tib) ; saśubhe nakṣatre Gaṇ ; suśubhe nakṣatre
² -°samaya 〕 corr. ; -°samaye Gaṇ Vai ; Cf. BHSgram. 4.51–56. ³ sukusumita°- ... tasmin
 samaye 〕 ; *shing a mra'i me tog skyes shing shing gi mchog rnams kyi yal ga dang me tog rgyas
 pa de'i dus mtshams su* Tib ⁴ pūrvāhṇodite savitari 〕 Gaṇ Vai ; *snga dro nyi ma 'char ba la*
 Tib ; (Cf. 日初出時 天) ⁵ śucivastraprāvṛtaṃ baddhoṇīṣaśiraskaṃ susnātaṃ 〕 em. (*gos gtsang
 ma bgos la mgo la cod pan bcings nas khros legs par byas te* Tib) ; śucivastra°-(comp.)-°susnātaṃ
 Gaṇ Vai ⁶ suviliptaṃ ... anyatareṇānuliptāṅgaṃ 〕 ; *tsan da na dkar po dang gur gum gang yang
 rung bas lus byugs nas* Tib ⁷ Cf. BHSgram. 16.6. ⁸ bhāṇḍarajjvādy°- 〕 em. (*lag cha tha
 ga pa la sogs pa'i yo byad* Tib) ; bhāṇḍaṃ rajjvādy°- Gaṇ Vai ⁹ śvetacandanakuṅkumābhyām 〕
 Gaṇ Vai ; *tsan da na dkar po dang gur gum gyi chus kyang* Tib ; (Cf. 用白檀恭俱摩香水 天) ¹⁰ ab-
 hyāṣiñcet 〕 em. ; abhyāṣiñcet Gaṇ Vai ; *gtor bar bya* Tib ¹¹ caturdikṣv 〕 corr. ; caturdikṣu Gaṇ
 Vai ; Cf. BHSgram. 4.51–56. ¹² adho 〕 corr. ; adhaḥ Gaṇ Vai ¹³ saṃtāḍya 〕 corr. ; santāḍya
 Gaṇ Vai ; *gtor bar bya zhing* Tib

kṛtā bhavati /

3-2-3

[Gaṇ p.58-25 ; Vai p.40-26 ; Tib(D) 131b4 ; Tib(P) 92b1 ; 天 p.860b9]

yadi jyeṣṭhapaṭaṃ¹ bhavati caturhastavistūrṇam aṣṭahastasudīrgham etatpramāṇam²
 hi tantuvāyopacitaṃ kuryāt / madhyamaṃ bhavati dvihastavistūrṇam pañcahastā-
 Gaṇ 59 dīrghatvam / kanyasaṃ sugatavitastipramāṇam³⁽¹⁹⁾ ardhahastadīrghatvam⁴ / tatra
 bhagavato buddhasya vitasti madhyadeśapurūṣapramāṇahastam ekam eṣa⁵ sugata-
 sya vitastir iti kīrtyate / anena pramāṇena prāmāṇyam ākhyātam /

uttiṣṭha⁶ siddhir jyeṣṭhā tu kathitā lokapuṅgavaiḥ /
 Vai 41 madhyame rājyakāmānām antardhāne⁷ pare munau // 15 //
 mahābhogārthinām puṃsām tridevāsura bhoginām⁸ /
 kanyase siddhir⁹ ākhyātā madhyame siddhimadhyamā // 16 //
 kṣudrakarmāṇi sidhyante kanyase tu paṭe sadā /
 sarvakāryāṇi sidhyante sarvadravyāṇi vai sadā // 17 //
 paṭatraye 'pi¹⁰ nirdiṣṭā siddhiḥ śreyo'rthinām nṛṇām /
 vidhibhraṣṭā na sidhyeyuḥ śakrasyāpi śacīpateḥ // 18 //
 sidhyante kṣīpram evaṃ tu sarvakarmā¹¹ na yatnataḥ /

¹ jyeṣṭhapaṭaṃ] em. ; jyeṣṭhaṃ paṭaṃ Gaṇ Vai ² etatpramāṇam ... kuryāt] ; *thag pas de tsam la yongs su goms par bya'o* Tib ³ -°pramāṇam] em. ; -°pramāṇa Gaṇ Vai ⁴ ardhahasta°-] conj. ; aṅguṣṭhahasta°- Gaṇ Vai ; *khru bryad kyī phyed* Tib ; (Cf. 下品 闊佛尺一尺長三肘半 天)
⁵ eṣa] em. ; eṣā Gaṇ Vai ⁶ uttiṣṭha] Gaṇ Vai ; om. Tib ⁷ antardhāne] Gaṇ Vai ; *mya ngan 'das 'og tu* Tib ; (Cf. 佛滅度後 天) ⁸ tridevāsura bhoginām] Gaṇ Vai ; *lha mi lha min gdengs can ni* Tib ⁹ siddhir] em. ; siddhim Gaṇ Vai ¹⁰ 'pi] Gaṇ Vai ; *ras gsum gyis kyang* Tib ¹¹ Cf. BHSgram. 17.17–18.

vidhinā ca samāyuktā itaro 'pi¹⁽²⁰⁾ tu janminah // 19 //
 eṣa² mārgaḥ samākhyāto jinair jinavarātmajaiḥ³ /
 śreyasaḥ sarvasattvānām⁴ daridrānāthaduḥkhinām // 20 //
 bodhimārgo hy aśeṣas tu darśitas tattvadarśibhiḥ /
 bodhihetur ayaṃ dharmo⁵ mantramārgeṇa darśitaḥ // 21 //
 mantrāḥ sidhyanty ayatnena sarvalaukikamaṇḍalāḥ /
 lokottarāś cāpi sidhyante maṇḍalā ya⁶ udāhṛtāḥ // 22 //
 bodhihetumatir yeṣāṃ teṣāṃ siddhiḥ sadā bhavet /
 nānyeṣāṃ kathyate siddhir⁷ ahitā⁸ ye jage sadā // 23 //
 bodhāya⁹ prasthitān sattvān sadā siddhir udāhṛtā /
 mañjuśriya¹⁰ mahātmānaḥ¹¹⁽²¹⁾ kumārasya¹² viśeṣataḥ // 24 //
 kṣiprakāryānusādhyārthaṃ prāpnuyāt sakalād iha /
 anupūrvam tato śilpī paṭam vāyeta yatnataḥ // 25 //
 divasaiḥ pañca-r-aṣṭābhiḥ¹³ ṣoḍaśadvicatuṣkayoḥ¹⁴⁽²²⁾ /
 ahorātreṇa vā¹⁵ kṣipram samāptiḥ paṭavāyane // 26 //
 ahorātreṇa vai śreyo uttamasiddhilipsunām¹⁶⁽²³⁾ /

Gaṇ 60

¹ itaro 'pi tu janminah] conj. (mi yi skye ba tha ma la'ng(D; yang P) Tib)
 (Cf. 依法奉行賤下之人亦得成就 天) ; itasyāpi tṛjanminah Gaṇ Vai ; (itasya pitṛjanminah L)
² eṣa mārgaḥ] Gaṇ Vai ; lam 'di dag Tib ³ jinavarātmajaiḥ] Gaṇ Vai ; rgyal ba rgya
 mtsho sras dag gis Tib ⁴ sarvasattvānām] Gaṇ Vai ; sems can kun la Tib ⁵ dharmo] em.
 (chos Tib) (dharma L); vartma Gaṇ Vai ⁶ ya] corr. ; ye Gaṇ Vai ; Cf. BHSgram. 4.51-56.
⁷ siddhir] corr. ; siddhiḥ Gaṇ Vai ⁸ ahitā ye jage sadā] Gaṇ Vai ; 'gro la phan sems rtag med
 pa Tib ⁹ bodhāya ... udāhṛtā /] ; byang chub 'jug pa'i khyad sems la || ras ris 'grub par gsungs
 pa yin || Tib ¹⁰ mañjuśriya] em. ; mañjuśriyasya Gaṇ Vai ; 'jam dpal ni Tib ¹¹ -°ātmānaḥ]
 corr. ; -°ātmāno Gaṇ Vai ¹² kumārasya] em. ; kumārasyeha Gaṇ Vai ; gzhon nur gyur pas Tib
¹³ Cf. BHSgram. 4.61. ¹⁴ ṣoḍaśa°-] corr. ; ṣoḍaśa°- Gaṇ Vai ¹⁵ vā] em. ; vai Gaṇ Vai
¹⁶ uttamasiddhilipsunām] em. (grub pa mchog ni 'dod pa yis Tib) ; uttamā siddhilipsunām Gaṇ
 Vai

śaucācārasaṃpannaḥ¹ śilpino nityadhiṣṭhitaḥ⁽²⁴⁾ // 27 //
 dūrād āvasathād² gatvā kuṭiprasrāvam³⁽²⁵⁾ utsrjet /
 sacelas tu tataḥ snātvā anyavāsān nivāsyā ca // 28 //
 śuklāmbaradharaḥ sragmī⁴ upaspr̥śya punaḥ punaḥ /
 śvetacandanaliptāṅgo hastau pralipya⁵ śilpinaḥ⁶ // 29 //
 bhūyo vayena⁷ yatnena ślakṣṇaṃ saṃdhāvitam⁸⁽²⁶⁾ sadā /
 evamādyaiḥ⁹ prayogais tu¹⁰ anyair vā jinabhāṣitaiḥ // 30 //
 vicāraśīlī yatnena paṭasyāśeṣavāyanān¹¹ /
 samāpte tu paṭe prokte pūrvakarmasu nirmite // 31 //
 pramāṇasthe¹² ahīne ca kuryād bhadre 'hani samam /
 avatārayet tato mantrān¹³ śuklapakṣe suśobhane // 32 //
 pariṣphuṭaṃ tu paṭaṃ gr̥hya daśābaddhānuśobhanam /
 veṇuyastyāvanaddham¹⁴ tu paṭaṃ gr̥hya tato vrajet // 33 //
 śilpinaṃ svastyayitvā¹⁵ tu saṃvibhāgārthavistaraiḥ /
 gatvā yatheṣṭato mantrī susamācārasuvratī // 34 //
 sugandhapuṣpair abhyarcya śucau deśe tu taṃ nyaset /

Vai 42

¹ -°saṃpannaḥ] corr. ; -°saṃpanno Gaṇ Vai ; Cf. BHSgram. 4.38. ² āvasathād] em. (*gnas nas thag ring song nas* Tib) (āvasathāt L) ; āvastathā Gaṇ Vai ³ kuṭiprasrāvam] Gaṇ Vai ; *bshang dang gci ba* Tib ; (Cf. 若彼作人大小便利. 天) ; (gūthaprasrāvam L) ⁴ sragmī] Gaṇ Vai ; *phreng ba ldan par* Tib ; (sragvī L) ; Cf. BHSgram. 4.51–56. BHSdic. p.615(sragmin) ⁵ pralipya] conj. (*byugs(D; byug P)* Tib) (Cf. 復用白檀塗其身體及於手足. 天) ; uddhr̥śya Gaṇ Vai ⁶ Cf. BHSgram. 17.39. ⁷ vayena] em. ; vayeta Gaṇ Vai ; *tha ga bya* Tib ⁸ saṃdhāvitam] em. (*dri med par* Tib) ; sandhotam Gaṇ ; saṃdhotam Vai ; (sandhitam L) ; Cf. BHSdic. p.558(saṃdhovita) ⁹ evamādyaiḥ] Gaṇ Vai ; *de la sogs pa'i sbyor ba* Tib ¹⁰ Cf. BHSgram. 4.51–56. ¹¹ -°vāyanān] conj. ; -°vāyanā Gaṇ Vai ; *tha ga bya* Tib ; Cf. BHSgram. 8.92. ¹² Cf. BHSgram. 4.51–56. ¹³ mantrān] em. (*de la sngags ni gzhug par bya* Tib) ; tantrā Gaṇ Vai ; Cf. BHSgram. 8.92. ¹⁴ veṇuyastyāvanaddham] Gaṇ Vai ; *'od ma'i shing la btags nas* Tib ¹⁵ Cf. BHSdic. p.616(svastyayati)

anenaiva tu mantreṇa kṛtarakṣāvidhānitam¹⁽²⁷⁾ // 35 //
 yena tatpicukaṃ pūrvam saṃśodhyaṃ² bahudhā punaḥ /
 tenaiva kārayed rakṣām ātmanaś ca paṭasya vai // 36 //
 mañjuśriyo mahāvīro³ mantrarūpeṇa⁴ bhāṣitaḥ /
 atītair bahubhir buddhair⁵⁽²⁸⁾ mayāpy etarhi punaḥ punaḥ // 37 //
 sa eva sarvamantrāṇaṃ vicāro⁶ mantrarūpiṇaḥ /
 mahāvīryo mahātejaḥ sarvamantrārthasādhakaḥ // 38 //
 karoti vividhākārān⁷ vicitratrāṇahetavaḥ⁸ /
 jambudvīpagatāḥ sattvā⁹ mūḍhācārā¹⁰ acetanāḥ // 39 //
 aśrāddhaviṣāṅgāḥ¹¹ tu mithyācārasalolupāḥ /
 na sādhyanti mantrāṇi sarvadravyaṇi vai punaḥ // 40 //
 ata eva bhramante te saṃsārāndhāracārake¹² /
 yaḥ¹³ śuddhamanasa¹⁴ nityaṃ śrāddhaḥ¹⁵ kautukamaṅgale¹⁶ // 41 //
 autsuko sarvamantreṣu nityaṃ grahaṇadhāraṇe /
 siddhikāmo¹⁷ mahātmāno¹⁸ mahotsāho¹⁹ mahaujasah²⁰ // 42 //

Gaṇ 61

¹ kṛtarakṣāvidhānitam || conj. (*srung ba'i cho ga rab tu bya*) Tib ; kṛtarakṣāpithānitam Gaṇ ; kṛtarakṣāpidhānitam Vai ; Cf. BHSgram. 34.7. BHSdic. p.345(pithānita) ² saṃśodhyaṃ || Vai ; saṃśodhya Gaṇ ³ mahāvīro || corr. ; mahāvīraḥ Gaṇ Vai ⁴ mantrarūpeṇa || Gaṇ Vai ; *sngags kyi bzlas pa* Tib ⁵ buddhair || em. (*sangs rgyas* Tib) (Cf.諸佛 天) ; mantrair Gaṇ Vai ⁶ vicāro || conj. (*rnam par spyod* Tib) ; viceruḥ Gaṇ Vai ; (Cf. 一切真言行真言相 天) ; (vicaryā L) ⁷ vividhākārān || em. (*cha byad rnam pa sna tshogs byed* Tib) (vividhākārān L) ; trividhākārāṃ Gaṇ Vai ⁸ vicitratrāṇahetavaḥ || em. ; vicitrā trāṇahetavaḥ Gaṇ Vai ; Cf. BHSgram. §12.48 ⁹ sattvā || corr. ; sattvāḥ Gaṇ Vai ¹⁰ mūḍhācārā acetanāḥ || em. (*rmongs pa spyod cing sems pa med* || Tib) ; mūḍhācāracetanāḥ Gaṇ Vai ; (Cf. 復能救度南閻浮提愚迷衆生 天) ¹¹ -°viparītās || Vai ; -°viparītās Gaṇ ¹² saṃsārāndhāracārake || Gaṇ Vai ; '*khor ba'i mun pa'i btson rar* Tib ; Cf. BHSdic. p.41(āndhāra) ¹³ yaḥ || em. ; yas <tu> Gaṇ Vai ¹⁴ Cf. BHSgram. 16.3. ¹⁵ śrāddhaḥ || corr. ; śrāddho Gaṇ Vai ¹⁶ kautukamaṅgale || em. (*bkra shis dag la dga'* Tib) ; kautukamaṅgale <sadā> Gaṇ ; kautukamaṅgale <sadā> Vai ¹⁷ -°kāmo || em. ; -°kāmā Gaṇ Vai ¹⁸ Cf. BHSgram. 17.39. ¹⁹ -°otsāho || em. ; -°otsāhā Gaṇ Vai ²⁰ mahaujasah || em. ; mahojasah Gaṇ ; mahojasah Vai ; Cf. BHSgram. 16.3.

teṣāṃ siddhyanty ayatena mantrā ye jinabhāṣitāḥ /

aśrāddhānāṃ tu jantūnāṃ śuklo dharmo¹ na rohate // 43 //

bījam ūṣarakṣetre² kṣiptam aṅkuro 'phalo yathā /⁽²⁹⁾

śraddhāmūlaṃ sadā dharmā³ uktaṃ sarvārthadarśibhiḥ // 44 //

mantrasiddhiḥ sadā proktā teṣāṃ dharmārthaśīlinām // 45ab //

iti //

3-3-1

[Gaṇ p.61-13 ; Vai p.43-1 ; Tib(D) 132b7 ; Tib(P) 93b4 ; 天 p.860c15]

Vai 43

tato sādhanē⁴ śilpinaḥ suśikṣitacitrakaro vātmano⁵ vā, kuśalā lekhyāḥ /⁽³⁰⁾ aśleṣakai⁽³¹⁾

raṅgaiḥ sarvojjvalaṃ raṅgopetaṃ varṇakaṃ gr̥hya pūrveṇaiva vidhinā yathātantu-

vāyayāpaṇenaiva⁶ lakṣaṇasamanvāgatena citrakareṇa peyālaṃ vistareṇa kartavyo⁷

yathāpūrvaṃ tantuvāyavidhiḥ, tenaiva tatpaṭaṃ citrāpayitavyam svayaṃ vā citri-

tavyam / karpūrakuṅkumacandanādibhir aṅgaṃ vāsaitavyam / dhūpaṃ dahatā

tenaiva mantreṇāṣṭaśatavāraṃ parijapya nāgakesarapunnāgavakulacampakavārṣika-

dhānuṣkārikamālatīkusumādibhiḥ⁸ taṃ paṭaṃ abhyavakīrya⁹⁽³²⁾ pūrvābhimukhaḥ

kuśaviṇḍakopaviṣṭaḥ¹⁰ susthitabuddhiḥ¹¹ sarvabuddhabodhisattvagatacittaḥ¹² sū-

¹ dharmo na || Vai ; dharmeṇa Gaṇ ; *dkar po'i chos rnam mi skye ste* Tib ² ūṣarakṣetre || conj. (Cf. 鹹鹵之地) ; ūṣare Gaṇ Vai ; *tshwa sgor(D; rgor P)* Tib ³ dharmā || corr. ; dharme Gaṇ Vai ⁴ sādhanē śilpinaḥ suśikṣitacitrakaro vā || Gaṇ Vai ; *sgrub pa pos bzo bo legs par bslab pa'i ri mo mkhan nam* Tib ; (sādhakena śilpinaḥ L) ⁵ vātmano || corr. ; vā ātmano Gaṇ Vai ; Cf. BHSgram. 17.24–25. ⁶ -°yāpanenaiva || conj. ; yathā tantuvāyayāyānenaiva Gaṇ ; yathā tantuvāyavāyānenaiva Vai ; (*sngar tha ga pa la byas pa'i cho ga ci lta ba* Tib) ⁷ kartavyo || em. ; kartavyaṃ Gaṇ Vai ⁸ -°vārṣika°- || Vai ; -°vāpīka°- ; *dbyar gyi me tog* Tib ; (Cf. 雨花天) ; (vārṣikā L) ⁹ abhyavakīrya || Gaṇ Vai ; *gcal(D; bcal P) bkram pa byas la* Tib ¹⁰ -°viṇḍako°- || Gaṇ ; -°piṇḍako°- Vai ; Cf. BHSdic. p.487(viṇḍa) ¹¹ susthita || em. (*blo legs par gnas pa* Tib) ; svasthabuddhiḥ Gaṇ Vai ¹² -°gatacittaḥ || Gaṇ Vai ; *sangs rgyas dang byang chub sems dpa' la dmigs pa'i sems kyis* Tib

kṣmavartikāpratigṛhītapāṇir¹ anāyāsacittaḥ² taṃ paṭam ālikhet //

3-3-2-1⁽³³⁾

[Gaṇ p.61-22 ; Vai p.43-8 ; Tib(D) 133a4 ; Tib(P) 93b8 ; 天 p.860c25]

ādau tāvac chākyamuniṃ tathāgatam ālikhet / sarvākāravāropetaṃ⁽³⁴⁾ dvātriṃśanma-
hāpuruṣalakṣaṇalakṣitam³ aśītyanuvyañjanopaśobhitaśarīraṃ ratnapadmopariniṣaṇ-
ṇaṃ samantajvālaṃ samantavyāmopaśobhitamūrṭiṃ⁴ dharmāṃ deśayamānaṃ pra-
sannamūrṭiṃ⁵ sarvākāravāropetaṃ madhyasthaṃ vaidūryanālapadmam //

3-3-2-2⁽³⁵⁾

[Gaṇ p.61-25 ; Vai p.43-10 ; Tib(D) 133a5 ; Tib(P) 94a2 ; 天 p.860c28]

adhaś ca mahāsaraḥ⁶⁽³⁶⁾, dvau nāgarājānau taṃ padmanālaṃ dhārayamānau⁷ tathā-
gatadr̥ṣṭī⁸ dakṣiṇahastena namasyamānau śuklau sarvālaṅkārabhūṣitau manuṣyā- Gaṇ 62
kārārdhasarpadehanandopanandau⁹ lekhanīyau / samantāc ca tatpadmasaraṃ pa-
dmapatrapuṣpakuḍmalavikasitaṃ¹⁰ jalajaprāṇibhiś ca śakunamīnādibhir vyāptam
aśeṣavinyastasucirasuśobhanākāram¹¹ abhilekhyam //

¹ sūkṣmavartikā°- 〕 em. (*pir(D; bar) phra mo lag par blangs* Tib) (sūkṣmavartikā°- L) ; sūkṣ-
mavarti°- Gaṇ Vai ² anāyāsacittaḥ 〕 Gaṇ Vai ; '*khruḡ pa med pa'i sems* Tib ; (Cf. 然可細意精心。
描畫功德勿生疲倦。天) ³ -°lakṣitam 〕 Vai ; -°lakṣita Gaṇ ⁴ samanta°-(comp.)°-mūrṭiṃ 〕 em. ;
samantavyāmopaśobhitam mūrṭiṃ Gaṇ Vai ⁵ -°mūrṭiṃ 〕 Vai ; -°mūrṭiṃ Gaṇ ⁶ mahāsaraḥ 〕
em. (Cf. 於蓮花下復有大池。池中有二龍王。天) ; *gdan chen po'i pad ma'i sdong bu* Tib ;
mahāsāraṃ Gaṇ ; mahāsāram/ Vai ⁷ dhārayamānau 〕 Vai ; dhārayayānau Gaṇ ⁸ -°dr̥ṣṭī 〕
em. -°dr̥ṣṭayo Gaṇ Vai ⁹ -°ārdha°- 〕 Vai ; -°ārdha°- Gaṇ ¹⁰ -°vikasitaṃ jalajaprāṇibhiś 〕 em.
; -°vikasitajalajaprāṇibhiś Gaṇ Vai ¹¹ aśeṣavinyastasucirasuśobhanākāram 〕 Gaṇ Vai ; *yangs*
shing mdzes par skyes pa Tib

3-3-2-3

[Gaṇ p.62-4 ; Vai p.43-14 ; Tib(D) 133a7 ; Tib(P) 94a4 ; 天 p.861a5]

yad¹ bhagavato mūlapadmadaṇḍaṃ viṭapaṃ tatraiva viniṣṭāny anekāni padma-
 puṣpāni anupūrvonnatāni / vāmapārśve 'ṣṭau padmapuṣpāṇi, teṣu ca padmeṣu niṣaṇṇā-
 ni aṣṭau mahābodhisattvavigrahāny² abhilekhyāḥ³ / prathamam tāvad āryamañjuśrī⁴
 īṣat padmakiñjalkagaurah kuṅkumakanakavarṇo vā kumārākāro⁵ bāladāraakarūpī
 pañcacīrakaśiraskaḥ kumārālaṅkāraṅkṛto⁶ vāmahastanīloptalaḡrḥito⁷ dakṣiṇaha-
 stena tathāgataṃ namasyamānaḥ cārumūrtis tathāgatagataḡṣṭiḥ saumyākāra⁸ īṣat
 prahasitavadanaḥ samantajvālāvabaddhamaṇḍalaparyeṣaḥ⁹⁽³⁷⁾ /
 aparasmim¹⁰⁽³⁸⁾ padma¹¹ āryacandraprabhaḥ kumārabhūtaḥ tathaivam abhilekhyāḥ
 / ṭṭīye sudhanaḥ, caturthe sarvanīvaraṇaḥ, pañcame gaganagañjaḥ, ṣaṣṭhe kṣiti-
 garbhaḥ, saptame 'naghaḥ¹², aṣṭame sulocanam iti / ete sarve kumārādāraakākārā
 abhilekhyāḥ¹³ kumārālaṅkārabhūṣitāḥ //

¹ yad ... anupūrvonnatāni / 〕 Gaṇ Vai ; gang bcom ldan 'das kyi rtsa ba'i pad ma'i sdong
 bu de las 'phros pa 'i yal ga las pad ma'i me tog du ma mthar gyis mtho ba bya'o Tib ;
 (Cf. 又彼如來所坐蓮莖上下周迴。出無數蓮花次第高低一一得所。天) ² -°vighrahāny 〕 em. ; vi-
 grahām Gaṇ ; vighrahān Vai ; gzugs bzhugs pa Tib ³ abhilekhyāḥ 〕 em. ; abhilekhyāni Gaṇ
 Vai ⁴ -°mañjuśrī 〕 corr. ; -°mañjuśrīḥ Gaṇ Vai ⁵ kumārākāro bāladāraakarūpī 〕 Vai ;
 kumārākārābāladāraakarūpī Gaṇ ; gzhon nu'i cha byad byis pa dang | khye'u'i gzugs can Tib
⁶ -°ālaṅkṛto 〕 corr. ; -°ālaṅkṛtaḥ Gaṇ Vai ⁷ -°grḥīto 〕 corr. ; -°grḥītaḥ Gaṇ Vai ⁸ -°ākāra 〕
 corr. ; -°ākāraḥ Gaṇ Vai ⁹ -°āvabaddha°- 〕 em. ('od 'bar ba dang ldan pas dkyil 'khor kun du
 khyab pa Tib) ; -°āvabaddha°- Gaṇ Vai ; (Cf. 身具圓光結跏趺坐 天) ; Cf. BHSdic. p.336(paryeṣa)
¹⁰ aparasmim 〕 Gaṇ Vai ; pad ma gnyis pa la Tib ; (Cf. 第二蓮華) ; Cf. BHSgram. 8.63-69.
¹¹ padma 〕 corr. ; padme Gaṇ Vai ¹² 'naghaḥ 〕 Gaṇ Vai ; sdiḡ med Tib ; (Cf. 無價菩薩 天)
¹³ abhilekhyāḥ 〕 Vai ; ābhilekhyāḥ Gaṇ

3-3-2-4

[Gaṇ p.62-15 ; Vai p.43-22 ; Tib(D) 133b6 ; Tib(P) 94b1 ; 天 p.861a16]

dakṣiṇapārśve bhagavato¹ 'ṣṭau mahābodhisattvāḥ sarvālaṅkārabhūṣitā varjayitvā⁽³⁹⁾
 tu maitreyaṃ, bhagavataḥ samīpa² āryamaitreyo³ brahmacāriveśadhārī jaṭāmakuṭa-
 vabaddhaśiraskaḥ kanakavarṇo⁴ raktakaṣāyadhārī raktapaṭṭāmśukottariyāḥ⁵⁽⁴⁰⁾ tri-
 puṇḍrakakṛtaciḥṇaḥ⁶ kāyarūpī daṇḍakamaṇḍaluvāmavinyastapāṇiḥ kṛṣṇasāraccarma-
 vāmaskandhāvakṣiptaḥ⁷ dakṣiṇahastagr̥hītākṣasūtraḥ tathāgataṃ namasyamānaḥ
 tadgatadr̥ṣṭir⁸ dhyānālambanagatacittacaritaḥ⁹ /
 dvitīyasmiṃ¹⁰⁽⁴¹⁾ padme samantabhadraḥ priyaṅguvarṇaśyāmaḥ sarvālaṅkāraśarīraḥ
 vāmahaste cintāmaṇiratnavinyasto¹¹ dakṣiṇahaste śrīphalavinyastahastavaradaḥ¹²
 cārurūpī tathaivam abhiliḥhitavyaḥ¹³ /
 ṭṛtīya¹⁴ āryāvalokiteśvaraḥ śaratkāṇḍagauraḥ¹⁵⁽⁴²⁾ sarvālaṅkārabhūṣito¹⁶ jaṭāmakuṭa-
 dhārī śvetayajñopavītaḥ sarvajñaśirasīkṛta¹⁷⁽⁴³⁾ āryāmitābhadaśabalajaṭāntopalagno-

¹ bhagavato 'ṣṭau] corr. ; bhagavata aṣṭau Gaṇ Vai ; Cf. BHSgram. 4.32–37. ² samīpa] corr. ; samīpe Gaṇ Vai ³ -°maitreyo] corr. ; -°maitreyaḥ Gaṇ Vai ⁴ -°varṇo] corr. ; -°varṇaḥ Gaṇ Vai ⁵ raktapaṭṭāmśuko°-] corr. ; raktapaṭṭāmśuko°- Gaṇ Vai ⁶ tripuṇḍrakakṛtaciḥṇaḥ] Vai ; ṭṛpuṇḍraka°- Gaṇ ; *thal ba'i thig le gsum gyis mtshan pa* Tib ; (Cf.三種標幟) ⁷ -°carmavāmaskandhāvakṣiptaḥ] em. (*kri ṣṇa sa ra'i pags pa thal gong g-yon par bgos pa* | Tib) (Cf.於肩上挂黑鹿皮 天) ; -°carma vāmaskandhā°-(comp.)-°gr̥hītākṣasūtraḥ Gaṇ ; -°dharma°-(comp.)-°gr̥hītākṣasūtraḥ Vai ⁸ -°dr̥ṣṭir] corr. ; -°dr̥ṣṭiḥ Gaṇ Vai ⁹ dhyānālambanagatacittacaritaḥ] Gaṇ Vai ; *sems kyi spyod pa bsam gtan la dmigs pa'i rnam pa can* Tib ; (Cf.心如在定 天) ¹⁰ Cf. BHSgram. 8.63–69. ¹¹ -°vinyasto] corr. ; -°vinyastaḥ Gaṇ Vai ¹² śrīphalavinyasta°-] Gaṇ Vai ; *bil ba thogs shing mchog sbyin pa* Tib ; (Cf.持吉祥葉作施願相 天) ¹³ abhiliḥhitavyaḥ] em. ; abhiliḥhitavyam Gaṇ Vai ¹⁴ ṭṛtīya] corr. ; ṭṛtīye Gaṇ Vai ; Cf.BHSgram.4.51–56. ¹⁵ śaratkāṇḍa°-] Gaṇ Vai ; (*'dam bu'i mdog 'dra ba* Tib) ; (Cf.身如中秋月色 天) ¹⁶ -°bhūṣito] corr. ; -°bhūṣitaḥ Gaṇ Vai ¹⁷ sarvajñaśirasīkṛta] Gaṇ Vai ; om. Tib

paviṣṭaḥ¹ cārurūpo² vāmahastāravindavinyasto³ dakṣiṇahastena varado⁴ dhyānā-
lambanagatacittacaritaḥ⁵ samantadyotitaśarīraḥ⁶ /

Vai 44

caturtha⁷ āryavajrapāṇir⁸ vāmahastavinyastavajraḥ⁹⁽⁴⁴⁾ kanakavarṇaḥ¹⁰ sarvālaṅkāra-

Gaṇ 63

bhūṣito¹¹ dakṣiṇahastoparuddhaphalo¹² varadaḥ¹³ ca cārurūpiṇaḥ¹⁴ saumyadarśano¹⁵

hārārdhahāropaguṇṭhitadeho¹⁶ muktāhārayajñopavīto¹⁷ ratnojvalavicchuritamaku-

ṭaḥ¹⁸ paṭṭacalananivasitaḥ¹⁹⁽⁴⁵⁾ śvetapaṭṭāṃśukottarīyaḥ²⁰ / tathaiṅvāryāvalokiteśva-

raḥ²¹ samantabhadraḥ²² tīrthanivāsanottarāsaṅgadehaḥ²³ / ākārataś ca yathāpūrvanir-

diṣṭam /

pañcamasmiṃ⁽⁴⁶⁾ tathā padma²⁴ āryamahāmatīḥ, ṣaṣṭhe śāntamatīḥ, saptame vairo-

canagarbhaḥ, aṣṭame 'pāyajahaś ceti / ity ete bodhisattvā abhilekhyāḥ / phala-

pustakavinyastapāṇayaḥ²⁵ sarvālaṅkārasuśobhanāḥ paṭṭāṃśukottarīyaḥ sarvālaṅkāra-

bhūṣitāḥ paṭṭacalanikānivastāḥ //

¹ āryāmitābha°-(comp.)-°opaviṣṭaḥ] conj. ; āryāmitābha daśabalajaṅtāntopalagnopaviṣṭam Gaṇ Vai ; 'phags pa 'od dpag med gzugs mdzes shing yid du 'ong ba / stobs bcu dang ldan pa / ral pa'i mthar skyil mo krung gis bzugs shing cod pan du byas pa / Tib ; (Cf.頂中復戴化無量壽佛端嚴而坐天) ² cārurūpo] em. ; cārurūpaṃ Gaṇ Vai ³ vāmahastāravindavinyasto] em. ; cāmara-hastāravindavinyastaṃ Gaṇ Vai ⁴ varado] em. ; varadaṃ Gaṇ Vai ⁵ -°caritaḥ] em. ; -°caritaṃ Gaṇ Vai ; sems kyi spyod pa bsam gtan la dmigs pa'i rnam pa can Tib ⁶ -°sarīraḥ] em. ; -°sarīram Gaṇ Vai ⁷ caturtha] corr. ; caturthe Gaṇ Vai ; Cf.BHSgram.4.51–56. ⁸ -°pāṇir] corr. ; -°pāṇiḥ Gaṇ Vai ⁹ -°vajraḥ] em. ; -°vajraṃ Gaṇ Vai ¹⁰ -°varṇaḥ] em. ; -°varṇaṃ Gaṇ Vai ¹¹ -°bhūṣito] em. ; -°bhūṣitaṃ Gaṇ Vai ¹² -°oparuddhaphalo] em. ; -°oparuddha-<sa>-phalaṃ Gaṇ Vai ; lag pa g-yas na bil ba thogs pas Tib ; (Cf.右手作施願相執菓天) ¹³ varadaḥ] em. ; varadaṃ Gaṇ Vai ¹⁴ cārurūpiṇaḥ] em. ; cārurūpiṇaṃ Gaṇ Vai ; Cf.BHSgram. 10.3. ¹⁵ -°darśano] em. ; -°darśanaṃ Gaṇ Vai ¹⁶ hārārdha°-(comp.)-°deho] em. ; hārārdha°-(comp.)-°dehaṃ Gaṇ ; hārārdha°-(comp.)-°dehaṃ Vai ¹⁷ -°yajñopavīto] em. ; -°yajñopavītaṃ Gaṇ Vai ¹⁸ -°makuṭaḥ] em. ; -°makuṭaṃ Gaṇ Vai ¹⁹ -°nivasitaḥ] em. ; -°nivastaṃ Gaṇ Vai ; gos g-yo ba dang ldan pa Tib ; (Cf.著白衣天) ²⁰ -°ottarīyaḥ] em. ; -°ottarīyaṃ Gaṇ Vai ; bgos pa dar la dkar po'i stod g-yogs byas pa'o Tib ; (Cf.復挂白仙衣天) ²¹ -°āvalokiteśvaraḥ] em. ; -°āvalokiteśvaraṃ Gaṇ Vai ²² samantabhadraḥ] em. ; samantabhadraṃ Gaṇ Vai ²³ tīrtha°-] Gaṇ Vai ; na(D; nam P) bza' stod g-yogs Tib ; (Cf.偏袒右肩如觀自在天) ; (tathā°- L) ²⁴ padma] corr. ; padme Gaṇ Vai ; Cf.BHSgram.4.51–56. ²⁵ phalapus-takavinyastapāṇayaḥ] em. ; -°vinyastapāṇayaḥ Gaṇ Vai ; bil ba'i 'bras bu dang glegs bam ... Tib ; (Cf.手執經菓天)

3-3-2-5

[Gaṇ p.63-9 ; Vai p.44-8 ; D 133a7 ; P 95a4 ; 天 p.861b5]

teṣāṃ copariṣṭāt¹ aṣṭau pratyekabuddhā abhilekhyāḥ / bhikṣuveṣadhāriṇo mahāpu-
ruṣalakṣaṇaśarīrāḥ raktakāṣāyavāsasaḥ² paryaṅkopaviṣṭāḥ ratnotpalaniṣaṅṅāḥ³ śā-
ntaveṣātmakāḥ samantajvālamālākulāḥ sugandhapuṣpābhyavakīrṅāḥ⁴⁽⁴⁷⁾ / tadyathā
mālatīvārṣikādhānuṣkārikāpunnāganāgakesarādibhiḥ puṣpaiḥ samantāt paṭam abhy-
avakīryamāṇaṃ⁽⁴⁸⁾ likhitaṃ //

3-3-2-6

[Gaṇ p.63-13 ; Vai p.44-11 ; D 134b2 ; P 95a6 ; 天 p.861b10]

bhagavataḥ śākyamuner⁵ vāmapārśva⁶ āryamañjuśriyasyopariṣṭād⁷ anekaratnopara-
citaṃ sudīrghākāraṃ vimānamaṇḍalaṃ⁸ śailarājopasoḥbitaṃ⁹⁽⁴⁹⁾ ratnotpalasaṃ-
channaparvatākāraṃ¹⁰ abhilikhet / tatrasthān buddhān bhagavato¹¹ 'ṣṭau likhet /
tadyathā ratnaśikhivaidūryaprabhāratnavicchuritasamantavyāmaprabhaṃ¹² padma-

¹ copariṣṭāt 〕 Vai ; copariṣṭā Gaṇ ; *steng du 'ang(D; yang)* Tib ; (Cf. 彼菩薩上復天) ; Cf. BHSgram. 8.46-48. ² -°vāsasaḥ 〕 corr. ; -°vāsasā Gaṇ Vai ; Cf. BHSgram. 16.3. ³ ratnotpala°- 〕 em. (*rin po che'i u tpa la* Tib) (寶蓮華天) ; ratnopala°- Gaṇ Vai ⁴ -°ābhyavakīrṅāḥ 〕 em. (*me tog dri zhim pos gcal(D; bcal P) bkram pa*) ; -°puṣpāṇi kīrṅāḥ Gaṇ ; -°puṣpābhikīrṅāḥ Vai ; (Cf. 手作散華相天) ⁵ -°muner 〕 corr. ; -°muneḥ Gaṇ Vai ⁶ -°pārśva 〕 corr. ; -°pārśve Gaṇ Vai ; Cf. BHSgram.4.51-56. ⁷ -°opariṣṭād 〕 Vai ; -°opariṣṭāḥ Gaṇ ; '*phags pa 'jam dpal gyi steng du* Tib ; (Cf. 於釋迦牟尼佛左邊聖妙吉祥上天) ⁸ vimānamaṇḍalaṃ 〕 Gaṇ Vai ; *gshal med khang gi dkyil 'khor* Tib ; (Cf. 宮殿樓閣天) ⁹ śailarājo 〕 Gaṇ Vai ; *brag gi tshogs* Tib ¹⁰ ratnotpala°- 〕 em. (*rin po che'i u tpa las shin tu bkab pa* Tib) (Cf. 優鉢羅花天) ; ratnopala°- Gaṇ Vai ¹¹ bhagavato 'ṣṭau 〕 em. ; bhagavatāṃ aṣṭau Gaṇ Vai ; Cf. BHSgram. 18.48. ¹² ratnaśikhivaidūrya°- 〕 Gaṇ ; ratnaśikhim vaidūrya°- Vai

rāgendranīlamarakatādibhir¹ vaidūryāśmagarbhādibhir² mahāmaṇiratnaviśeṣaiḥ sa-
 mantato prajvālyamāṇam īśadādityodayavarṇam³ tathāgatavigrahaṃ pītacīvarottarā-
 saṅginam⁴ paryaṅkopaviṣṭam dharmam deśayamānam pītani vāsitoparivastam mahā-
 puruṣalakṣaṇakavacitadeham aśītyanuvyañjanopaśobhitamūrtim⁵ praśāntadarśanam
 sarvākāvaropetaṃ ratnaśikhiṃ tathāgatam abhiliḥhet /
 dvitīyam saṅkusumitarājendraṃ tathāgataṃ kanakavarṇam abhiliḥhet / sutarām⁶
 nāgakesaravakulādipuṣpair abhyavakīritam⁷⁽⁵⁰⁾ abhiliḥhet⁸ / āryam abhinirīkṣamā-
 ṇam samantaprabhaṃ ratnaprabhāvicchuritadyotiparyeṣam⁹⁽⁵¹⁾ /
 tṛtīyam sālendrarājam¹⁰⁽⁵²⁾ tathāgatam abhiliḥhet / padmakiñjalkābhaṃ dharmam
 deśayamānam / caturthaṃ sunetraṃ tathāgatam abhiliḥhet / pañcamam duḥprasa-
 ham⁽⁵³⁾ / ṣaṣṭham vairocanaṃ jinam / saptamam bhaiṣajyavaidūryarājam / aṣṭa-
 mam sarvaduḥkhapraśamanaṃ rājendraṃ tathāgatam abhiliḥhet iti / sarva eva
 kanakavarṇāḥ tathāgatavigrahāḥ kāryā¹¹ abhayapradānakarāḥ¹² //

Gaṇ 64

¹ -°ādibhir] corr. ; -°ādibhiḥ Gaṇ Vai ² -°ādibhir] corr. ; -°ādibhiḥ Gaṇ Vai ³ ādityo-
 dayavarṇam] Gaṇ Vai ; *nyi ma 'char ka'i mdog 'dra ba* Tib ; (Cf. 猶如日出 天) ⁴ pītacīvarot-
 tarāsaṅginam] Gaṇ Vai ; *lhung bzed dang chos gos dang bla gos dang ldan pa* Tib ; (Cf. 著黃衣
 偏袒右肩 天) ; (pātra°- L) ⁵ aśītyanuvyañjano°-] Vai ; aśītyanuvyañjano°-mūrtim Gaṇ ; *br-
 gyad cus sku nye bar mdzes pa* Tib ; (Cf. 具三十二相八十種好 天) ⁶ sutarām ... ratnaprabhāvicchu-
 ritadyotiparyeṣam /] Gaṇ Vai ; n.e. Tib ; (Cf. 散適意花龍花鬘俱羅等花. 結跏趺坐觀察聖妙吉祥菩薩.
 天) ⁷ Cf. BHSdic. p.61(abhyavakīrati) ⁸ abhiliḥhet] Vai ; abhiliḥhet Gaṇ ; Cf. BHSgram.29.12.
⁹ Cf. BHSdic. p.336(paryeṣa) ¹⁰ sālendrarājam] Gaṇ Vai ; om. Tib ; (Cf. 娑陵捺囉王如來
 天) ¹¹ kāryā] corr. ; kāryāḥ Gaṇ Vai ¹² abhayapradānakarāḥ] Gaṇ Vai ; om. Tib ;
 (Cf. 手作無畏之相 天)

3-3-2-7

[Gaṇ p.64-5 ; Vai p.44-25 ; Tib(D) 134b2 ; Tib(P) 95b5 ; 天 p.861b24]

upariṣṭāc ca tathāgatānāṃ meghāntarālasthau¹ paṭakoṇa² ubhayataḥ³ puṣpavarṣam
utsrjāmānu⁴ dvau śuddhāvāsakāyikau devaputrāv⁵ abhilekhyau / antarīkṣasthi-
tau sarvabuddhabodhisattvapratyekabuddhāryaśrāvakānāṃ namasyamānāv⁶ abhi-
lekhyau //

3-3-2-8

[Gaṇ p.64-9 ; Vai p.44-29 ; Tib(D) 135a2 ; P 95b6 ; 天 p.861c1]

pratyekabuddhānāṃ cottarato⁷ 'ṣṭau mahāśrāvakā abhilekhyā⁸ bodhisattvaśiraḥ-
sthānāvavarjopaviṣṭāḥ⁹ / tadyathā sthaviraśāriputraḥ, mahāmaudgalyāyanaḥ, mahā-
kāśyapaḥ, subhūtiḥ, rāhulaḥ, nandaḥ, bhadrīkaḥ, kaphiṇaś ceti //

3-3-2-9

[Gaṇ p.64-12 ; Vai p.45-1 ; Tib(D) 135a4 ; Tib(P) 95b7 ; 天 p.861b26]

pratyekabuddhā¹⁰ api tadyathā gandhaḥ¹¹, mādanaḥ, candanaḥ, upariṣṭaḥ, śvetaḥ, Vai 45

¹ meghāntarālasthau 〕 em. ; -°sthāḥ Gaṇ Vai ; *sprin gyi gseb nas gnas gtsang ma'i lha'i bu gnyis lus mi snang bar ...* Tib ; (Cf.有雲雨諸香花。於B二角畫二淨光天子。天) ² paṭakoṇa 〕 corr. ; paṭakoṇe Gaṇ Vai ; Cf.BHSgram.4.51–56. ³ ubhayataḥ 〕 Gaṇ Vai ; *gyas gyon nas* Tib ; (Cf.於B二角 天) ⁴ -°mānu 〕 em. ; -°mānāḥ Gaṇ Vai ⁵ devaputrāv abhilekhyau 〕 em. ; -°putrau mabhilekhyau Gaṇ(Cf. BHSgram. 4.59.) ; -°putrau abhilekhyau Vai ⁶ -°mānāv 〕 em. ; -°mānu Gaṇ Vai ⁷ cottarato 'ṣṭau 〕 corr. ; cottarataḥ aṣṭau Gaṇ Vai ; *'og tu* Tib ; (Cf.於辟支佛後 天) ⁸ abhilekhyā 〕 corr. ; abhilekhyāḥ Gaṇ Vai ⁹ -°āvavarjo- 〕 em. (*spangs* Tib) ; -°āvavarjo- Gaṇ Vai ¹⁰ pratyekabuddhā api 〕 em. ; pratyekabuddhāpi Gaṇ Vai ¹¹ gandhaḥ ... sunemiś 〕 em. ; gandhamādanaḥ candanaḥ upariṣṭaśvetasitaketunemisunemiś Gaṇ Vai

sitaketuḥ, nemiḥ, sunemiś ceti / sarva eva suśobhanāḥ śāntaveśāḥ¹ ātmano sudāntā-
kārāḥ /
mahāśrāvakā api kṛtāñjalayo buddhaṃ bhagavantaṃ śākyamuniṃ nirīkṣamāṇāḥ //

3-3-2-10

[Gaṇ p.63-13 ; Vai p.44-11 ; D 134b2 ; P 95a6 ; 天 p.861b10]

upariṣṭāc² ca śuddhāvāsād³ eva saṃnikṣṭāv⁴ aparau dvau devaputrau samantāt
paṭṭavitānadīrghāyatasuśobhanāgrhītau⁵ sarvabuddhabodhisattvapratyēkabuddhā-
ryaśrāvakāṇām upariṣṭād dhārayamāṇau⁶ divyamālyāambaradharau devaputrāv⁷ abhi-
lekhyau //

3-3-2-11

[Gaṇ p.64-18 ; Vai p.45-5 ; Tib(D) 135a6 ; Tib(P) 96a2 ; 天 p.861c6]

bhagavataḥ⁸ śākyamuner⁹ upariṣṭān mūrdhani muktāhāraratnapadmarāgendranīlādi-
bhiḥ grathitaṃ ratnasūtrakalāpaṃ tasmimś ca paṭṭavitānasuvinyastaṃ samantāc ca
muktāhārapralambopaśobhitam abhīlikhet //

¹ -°veśāḥ 〕 em. ; -°veśaṃ Gaṇ Vai ² upariṣṭāc 〕 Gaṇ Vai ; *steng du* ; (Cf.於釋迦佛上面 天)
³ śuddhāvāsād ... devaputrau 〕 Gaṇ Vai ; *gnas gtsang ma'i lha'i bu gzhan gnyis nye bar* Tib
; (Cf.別畫二淨光天子 天) ⁴ -°nikṣṭāv 〕 corr. ; -°nikṣṭau Gaṇ Vai ⁵ paṭṭavitānadīrghāyata-
suśobhanāgrhītau 〕 em. (*gos kyi bla re chu zhing yangs pa shin tu mdzes pa 'dzin* Tib) ; paṭṭavitā-
nadīrghā<pā>yataśasobhanāgrhītau Gaṇ Vai ⁶ dhārayamāṇau 〕 Gaṇ Vai ; om. Tib ⁷ -°putrāv 〕
corr. ; -°putrau ; Cf.BHSgram.4.51–56. ⁸ bhagavataḥ ... mūrdhani 〕 ; *bcom ldan 'das shākya*
thub pa'i steng dbu'i steng du Tib ⁹ -°muner 〕 corr. ; -°muneḥ Gaṇ Vai

3-3-2-12

[Gaṇ p.64-21 ; Vai p.45-7 ; Tib(D) 135a7 ; Tib(P) 96a3 ; 天 p.861c8]

adhaś ca buddhasya bhagavataḥ padmāsanād¹ āryamañjuśriyasya pādamūlasamīpe
nāgarājopanandapārśve mahāratnaṃ parvataṃ padmasarābhyunnataṃ² ratnāṅkura-
guhākandarapravālatāpariveṣṭitaṃ³ ratnataruṃ maharṣayasiddhasevitam //

3-3-2-13

[Gaṇ p.64-23 ; Vai p.45-9 ; Tib(D) 135b2 ; Tib(P) 96a5 ; 天 p.861c12]

tasya parvatasyottuṅge⁴ yamāntakaṃ krodharājānaṃ mahāghorarūpiṇaṃ pāsada-
kṣiṇahastaṃ⁵ vāmahastagr̥hītadaṇḍaṃ bhṛkuṭivadanam ājñāṃ⁶ pracicchamānam⁶ ārya-
mañjuśriyagataḍṛṣṭiṃ bṛhadudaram⁷⁽⁵⁴⁾ ūrdhvakeśaṃ bhinnāñjanakṛṣṇameghasaṅ-
kāśaṃ⁸ kapilaśmaśrudīrghakarālaṃ⁹ dīrghanakhaṃ raktalocanakaṃ sarpamaṇḍita-
kaṇṭhadeśaṃ¹⁰ vyāghracarmanivasanaṃ sarvaviḥnaghātakaṃ¹¹ mahādāruṇataraṃ
mahākrodharājānaṃ samantajvālaṃ yamāntakaṃ krodharājānaṃ¹² abhilikhet // Gaṇ 65

¹ -°āsanād 〕 corr. ; -°āsanāt Gaṇ Vai ; *pad ma'i mtsho las* Tib ; (Cf.又於佛足下有蓮華池。天) ² *padmasarābhyunnataṃ* 〕 em. ; *padmasarād abhyunnataṃ* Gaṇ Vai ; *pad ma'i mtsho las mngon par 'thon pa* Tib ; (Cf.一寶山從蓮池出上天) ³ -°pariveṣṭitaṃ ratnataruṃ 〕 Gaṇ Vai ; ... *byi ru'i yal ga dang rin po che'i shing gis yongs du bskor ba* Tib ; (Cf.有寶巖周迴寶樹挂珊瑚蔓草木花菓皆是珍寶莊嚴天) ⁴ *parvatasyottuṅge* 〕 Gaṇ Vai ; *ri'i rtse mo'i steng du* Tib ; (Cf.此山北邊天) ⁵ *pāsadakṣiṇahastaṃ* 〕 em. (*lag pa gyas pa na zhags pa thogs pa* Tib) (Cf.右手執索天) ; *pāśahastaṃ* Gaṇ Vai ⁶ -°mānam 〕 Vai ; -°mānaḥ Gaṇ ⁷ *bṛhadudaram* 〕 em. (*gsus pa 'phyang ba* Tib) (Cf.腹形廣大天) ; *vṛkodaram* Gaṇ Vai ⁸ *bhinnāñjanakṛṣṇameghasaṅkāśaṃ* 〕 Gaṇ Vai ; *miḡ sman nag po dang sprin nag po dang 'dra ba* Tib ; (Cf.身如墨色可喻黑雲天) ⁹ -°dīrghakarālaṃ 〕 Gaṇ Vai ; om. Tib ¹⁰ -°kaṇṭhadeśaṃ 〕 em. (*mgul ba'i phyogs sbral gyis bryan pa* Tib) ; -°kaṇṭhadeśaṃ Gaṇ Vai ¹¹ -°ghātakaṃ 〕 em. ; -°ghātakaḥ Gaṇ ; -°ghātakamahādāruṇataraṃ Vai ¹² -°rājānaṃ 〕 Vai ; *krodharājā* Gaṇ

3-3-2-14⁽⁵⁵⁾

[Gaṇ p.65-1 ; Vai p.45-14 ; Tib(D) 135b4 ; Tib(P) 96a7 ; 天 p.861c17]

Gaṇ 65

tasya parvatasyādhasṭāc chilātalopaniṣaṇṇaṃ pṛthivyām¹ avanatajānudehaṃ dhū-
pakaṭacchukavyagrahastam yathāveśasaṃsthānagr̥hīṭaliṅgaṃ² yathānuvṛttacaritam
āryamañjuśriyagatadr̥ṣṭiṃ sādhakam abhilikhet //

3-3-2-15

[Gaṇ p.65-3 ; Vai p.45-16 ; Tib(D) 135b5 ; Tib(P) 96a8 ; 天 p.861c17]

nandanāgendrarājasamīpaṃ bhagavataḥ śākyamuner adhasṭāt dakṣiṇapārśve padma-
sarābhyudgataṃ mahāratnaśailendrarājaṃ yathākathitaṃ³ tathābhilikhet / yamānta-
kakrodharājarahitaṃ⁴ divyapuṣpāvākīrṇam abhilikhet / āryāvalokiteśvarasyādhasṭāt⁵
taṃ parvatam abhilikhet / taduccatuṅgaparvataṃ⁶ pa-dmarāgopalaṃ ekāṅkuraṃ⁷
vaidūryamayaśṛṅgākāram abhilikhet⁽⁵⁶⁾ //

¹ pṛthivyām avanatajānudehaṃ 〕 Gaṇ Vai ; *lus sa la btud de* Tib ; (Cf. 右膝著地 天)

² yathāveśasaṃsthānagr̥hīṭaliṅgaṃ 〕 Gaṇ Vai ; *cha byad dang dbyibs ci lta ba bzhin rtags 'dzin pa* Tib ; (Cf. 隨彼身貌衣服畫之 天)

³ yathākathitaṃ tathābhilikhet 〕 conj. (*ji ltar sngar ri 'i rgyal por bstan pa de bzhin du bri bar bya'o* Tib) (Cf. 莊嚴殊妙亦如前山之相. 天) ; kathitaṃ tathāgatam abhilikhet Gaṇ Vai

⁴ -'rahitaṃ 〕 Gaṇ Vai ; *med pa* Tib ⁵ āryāvalokiteśvarasyādhasṭāt 〕 em. (*'phags pa sbyan ras gziḡs dbang phyug gi 'og tu bri 'o* Tib) (Cf. 又於聖觀自在下 天) ; āryāvalokiteśvaraḥ syāt Gaṇ Vai

⁶ taduccatuṅgaparvataṃ padmarāgopalaṃ 〕 conj. ; *ri de yang shin tu miho ba rin po che padma rā ga'i them skas 'dra ba* Tib ; taduccatuṅga^o-(comp.)-^oopalaṃ Gaṇ Vai ; (Cf. 復畫其山作紅蓮華色亦以珍寶莊嚴 天)

⁷ ekāṅkuraṃ vaidūryamayaśṛṅgākāram 〕 conj. ; <taṃ> ekāṅkura^o-(comp.)-^oākāram Gaṇ Vai ; *bai dū rya'i(D)* ; *bai dū rya'i P*) *rang bzhin rtse mo myu gu 'dra ba* Tib ; (Cf. 以瑠璃寶作山峯頂 天)

3-3-2-16

[Gaṇ p.65-9 ; Vai p.45-20 ; Tib(D) 135b7 ; Tib(P) 96b3 ; 天 p.861c23]

tatrāpāsritāṃ devīm āryāvalokiteśvarakarūṇāṃ āryatārāṃ sarvālāṅkāravibhūṣitāṃ
 raktapaṭṭāṃśukottariyāṃ¹ vicitrapaṭṭānivasanāṃ stryalāṅkārasarvāṅgavibhūṣitāṃ
 vāmahastanīlotpalavinyastāṃ kanakavarṇāṃ kṛśodarīm nātikṛśāṃ nātibālāṃ nā-
 tivṛddhāṃ dhyānagatacetanāṃ ājñāṃ pratīcchayantīm² dakṣiṇahastena varadām³
 īśadavanatakāyāṃ⁴ paryāṅkopaniṣaṅṅāṃ āryāvalokiteśvareṣadgatadr̥ṣṭīm⁵ samanta-
 jvālāmālāparyeṣitām⁶⁽⁵⁷⁾ / tatraiva vaidūryaratnaśṛṅge puṃnāgavṛkṣapariveṣitāṃ
 sarvataḥ, śākhāsu samantapuṣpopacitavikasitasupuṣpitāṃ⁷ bhagavatīm tārāṃ abhi-
 cchādayamānāṃ tadeva⁸ cābhinataśākhā⁹ sucitrapravālāṅkurāvanaddhaṃ vicitrarū-
 paraṅgojjvalāṃ tārādevīmukhāvalokanam¹⁰ abhilekhyā //

3-3-2-17

[Gaṇ p.65-18 ; Vai p.45-27 ; Tib(D) 136a4 ; Tib(P) 96b7 ; 天 p.862a2]

sarvaviḡhaghātakī devī¹¹ uttamā bhayanāśinī /

¹ raktapaṭṭāṃśuko°- 〕 em. (*dar la dmar pos stod gyogs byas pa* Tib) (Cf. 著紅仙衣 天) ; rat-
 napāṭṭāṃśuko°- Gaṇ Vai ² pratīcchayantīm 〕 Vai ; pratīcchayantī Gaṇ ³ varadām 〕 em.
 ; varadād Gaṇ Vai ⁴ īśad°- 〕 Vai ; īśid°- Gaṇ ; *cung zad* Tib ⁵ -°eṣadgatadr̥ṣṭīm 〕 em.
 (*'phags pa spyān ras gzigs dbang phyug la cung zad lta zhing 'dug pa* Tib) ; āryāvalokiteśvara īśad
 <apa>gatadr̥ṣṭiḥ Gaṇ Vai ; (Cf. 瞻仰聖觀自在 天) ⁶ -°mālā°- 〕 em. (*phreng bas yongs su bskor*
ba Tib) ; -°mālā°- Gaṇ Vai ; Cf.BHSdic. p.336(paryeṣa) ⁷ -°puṣpopacita°- 〕 em. (*me tog 'phrel*
 Tib) ; -°puṣpopa<ra>cita°- Gaṇ Vai ⁸ tadeva 〕 conj. (*yal ga mngon par 'dud pa de nyid kyang*
 Tib) ; tenaiva Gaṇ Vai ⁹ cābhinataśākhā sucitrapravālāṅkurāvanaddhaṃ 〕 conj. (*yal ga mn-*
gon par 'dud pa de nyid kyang shin tu kha dog sna tshogs pa byi ru'i myu gu'i 'brel ba Tib) ; cāpa-
 gataśākhāsucitraṃ Gaṇ Vai ; (Cf. 其花殊妙滿樹開敷枝葉四垂. 在菩薩頂上如彼傘蓋. 天) ¹⁰ tārāde-
 vīmukhāvalokanam 〕 Gaṇ Vai ; *lha mo sgrol ma mngon du phyogs shing lta ba* Tib ¹¹ Cf. BHS-
 gram. 4.51–56.

sādhakasya tu rakṣārthaṃ likhed varadāṃ śubhāṃ // 46 //
 strīrūpadhāriṇī devī karuṇādaśabalātmajā /
 śreyasaḥ¹ sarvabhūtānāṃ likheta varadāyikāṃ // 47 //
 kumārasyeha mātā devī mañjughoṣasya mahādyuteḥ /
 sarvaviḡnavināśārthaṃ sādhakasya tu samantād // 48 //
 rakṣārthaṃ² manujeśānāṃ śreyasārthaṃ paṭe nyaset /

3-3-2-18

[Gaṇ p.65-25 ; Vai p.46-2 ; Tib(D) 136a6 ; Tib(P) 97a1 ; 天 p.862a5]

yo 'sau krodharājendraḥ parvatāgre samavasthitaḥ // 49 //
 sarvaviḡnavināśāya kathitaṃ jinavarātmajaiḥ /
 mahāghoro mahāvandyo mahācaṇḍo mahādyutiḥ // 50 //
 śāsane³ dviṣṭasattvānāṃ nigrāhāya⁴ prakalpate⁵ /
 sādhakasya tu rakṣārthaṃ sarvaviḡnavināśakaḥ // 51 //
 dāruṇo roṣaśīlaś ca⁶ ākrṣṭā mantradevatāḥ⁷ /
 sughero ghorarūpī ca niṣeddhā sarvanirghṛṇām // 52 //
 avaśānām⁸ vaśam ānetā pāparaudrapracāriṇām /
 khacare bhūcare⁹ pātāle cāpi samantataḥ // 53 //

Gaṇ 66

¹ śreyasaḥ ... varadāyikāṃ//] Gaṇ Vai ; 'byung po kun gyi dpal don dang || mchog sbyin byed pa bri bar by a || Tib ; (Cf. 能施一切衆生所求之願皆得滿足。天) ² rakṣārthaṃ ... nyaset /] ; mi yi bdag po srung don dang || dpal sgrub phyir yang ri mo bri || Tib ³ śāsane] Gaṇ Vai ; sgrub pa la Tib ; (Cf. 聖教 天) ⁴ nigrāhāya] em. ; nigrāhāyaiva Gaṇ Vai ⁵ prakalpate] Gaṇ Vai ; rab tu brtags Tib ⁶ Cf. BHSgram. 4.51–56. ⁷ mantradevatāḥ] em. ; mantradevatā Gaṇ Vai ; sngags kyi lha dag 'gugs par byed || Tib ⁸ avaśānām] em. ; avaśānām <ca> Gaṇ Vai ⁹ bhūcare] em. ; bhūcare <vāpi> Gaṇ Vai

nāśayati sarvaduṣṭān¹ viruddhān² ye śāsane muneḥ³ /

3-3-2-19

[Gaṇ p.66-8 ; Vai p.46-12 ; Tib(D) 136b1 ; Tib(P) 97a4 ; 天 p.862a12]

caturaśraṃ samantād vai catuḥkoṇaṃ paṭaṃ likhet // 54 //

adhaś caiva paṭānte tu vistīrṇasaritālayam /

kuryān nāgabhogāṅgam⁴ ekaikaṃ⁵ ca samantataḥ // 55 //

śuklena śubhāṅgena manujākāradehajāḥ⁶ /

uttaraśirasam⁷ sthāpya kṛtāñjalipuṭāḥ⁸ sadāḥ // 56 //

†saptasphuṭo⁽⁵⁸⁾ mahāvīryo maheśākhyo ananto nāma nāmataḥ† /⁽⁵⁹⁾

tathāgataṃ nirīkṣanto⁽⁶⁰⁾ maṇiratnopaśobhitaḥ // 57 //

suśobhano⁽⁶¹⁾ cārurūpī ca ratnābharaṇabhūṣitaḥ /

ālikhej jvālamāliṇaṃ mahānāgendraviśrutam // 58 //

sarvalokahitodyuktaṃ¹⁰ pravṛttaṃ¹¹ śāsane muneḥ¹² /

sarvaviḡnavināśāya¹³ ālikhet saritāśritam¹⁴ // 59 //

¹ -°duṣṭān] conj. ; -°duṣṭānām Gaṇ Vai ² viruddhān] conj. ; viruddhā Gaṇ Vai ; Cf. BHSgram. 8.92. ³ muneḥ] Vai ; mune Gaṇ ; *thub pa'i bstan la* Tib ; Cf. BHSgram. 10.72. ⁴ -°āṅgam] em. (*klu yi gdengs ka yan lag can* || Tib) ; -°āṅkam Gaṇ Vai ⁵ ekaikaṃ] em. ; aikaikaṃ Gaṇ Vai ⁶ -°dehajāḥ] em. ; -°dehajā Gaṇ Vai ; BHSgram. 8.78. ⁷ uttaraśirasam] conj. (*byang du mgo* Tib) ; uttarāśirasam Gaṇ Vai ; (Cf. 面北合掌瞻仰如來. 天) ; Cf. BHSgram. 16.6. ⁸ -°āñjalipuṭāḥ] em. ; -°āñjalipuṭāḥ Gaṇ Vai ⁹ saptasphuṭo ... nāmataḥ] ; *stobs chen gdengs ka bdun dang ldan || mtha yas zhes ni bya ba yin* || Tib ¹⁰ sarvalokahitodyuktaṃ] Gaṇ Vai ; *'jig rten kun la phan par brtson* Tib ¹¹ pravṛttaṃ] em. ; pravṛtto Gaṇ Vai ; *rab tu zhugs* Tib ; (Cf. 奉佛教勅 天) ¹² muneḥ] Vai ; mune Gaṇ ; *sangs rgyas bstan la* Tib ; Cf. BHSgram. 10.72. ¹³ Cf. BHSgram. 4.51–56. ¹⁴ -°āśritam] Vai ; -°āśṛtam Gaṇ ; *chu bo la brten* Tib

[Gaṇ p.66-19 ; Vai p.46-23 ; Tib(D) 136b4 ; Tib(P) 97a7 ; 天 p.862a17]

etatpaṭavidhānaṃ tu¹ uttamaṃ jinabhāṣitam /
 saṃkṣiptaṃ² vistarākhyātaṃ pūrvam uktaṃ tathāgataih // 60 //⁽⁶²⁾
 ālikhet³ yo hi vidvān⁴ vai tasya puṇyam anantakam /
 yat kṛtaṃ kalpakoṭibhiḥ pāpakarmasudāruṇaṃ⁵ // 61 //
 naśyate tat kṣaṇād eva paṭaṃ dṛṣṭvā tu bhūtale //⁽⁶³⁾
 pañcānantaryakāriṇaṃ duḥśīlān jugupsitān // 62 //
 sarvapāpapravṛttānāṃ saṃsārāndhāracāriṇāṃ⁶⁽⁶⁴⁾ /
 gatiyoninikṛṣṭānāṃ paṭaṃ⁷ teṣāṃ na vārayet // 63 //
 darśanaṃ saphalaṃ teṣāṃ paṭaṃ maunīndrabhāṣitam /
 dṛṣṭamātraṃ pramucyante⁸ tasmāt pāpāt tu tatkṣaṇāt // 64 //⁽⁶⁵⁾
 kiṃ punaḥ śuddhavṛttitvāt suśuddhavṛttirūpiṇaḥ⁹ /
 mantrasiddhau sadodyuktāḥ¹⁰ siddhiṃ labheyur¹¹ mānavāḥ¹² // 65 //
 yatpuṇyaṃ sarvabuddhānāṃ¹³ pūjayitvā kalpakoṭi¹⁴ /
 tatpuṇyaṃ prāpnuyān mantrī paṭaṃ ālikhanād bhuvi // 66 //

Gaṇ 67

¹ Cf. BHSgram. 4.51–56. ² saṃkṣiptaṃ] em. ; saṃkṣipta Gaṇ Vai ³ ālikhet] em. ; ālikhe Gaṇ Vai ; Cf. BHSgram. 29.12. ⁴ vidvān] em. ; vidvāṃ Gaṇ Vai ⁵ pāpakarmasudāruṇaṃ] em. ; pāpaṃ karma sudāruṇaṃ Gaṇ Vai ; *sdig pa shin tu mi bzad pa* Tib ⁶ -°āndhāracāriṇāṃ] Gaṇ Vai ; *'khor ba'i mun par spyod pa* Tib ; Cf. BHSdic. p.41(āndhāra) ⁷ paṭaṃ ... na vārayet] ; *der ni ras ris gzhaḡ(D; bzhaḡ P) mi bya* Tib ⁸ pramucyante] Gaṇ Vai ; *dag 'gyur* Tib ; (Cf. 令罪速滅 天) ⁹ -°vṛttirūpiṇaḥ] em. ; -°vṛttorūpiṇaḥ Gaṇ Vai ¹⁰ sadodyuktāḥ] em. ; sadodyuktoḥ Gaṇ ; sadodyukto Vai ; ... *rtaḡ brtson pa'i || mi rnamṣ ...* Tib ¹¹ labheyur] em. ; lapseyur Gaṇ Vai ; *grub* Tib ; (Cf. 何況持誦之者於此真言妙法常行成就 天) ¹² mānavāḥ] em. (*mi rnamṣ* Tib) ; mānavāḥ Gaṇ Vai ¹³ -°buddhānāṃ] em. (*sangs rgyas la* Tib) (Cf. 一切佛 天) (-°buddhānāṃ L) ; -°sattvānāṃ Gaṇ Vai ¹⁴ kalpakoṭi] em. ; kalpakoṭiye Gaṇ Vai

sikatā yāni gaṅgāyāḥ pramāṇā¹ yāni kīrtitā /
 tatpramāṇā bhaved buddhāḥ pratyekajinavarātmajāḥ // 67 //
 khaḍginaḥ śrāvako² loke jivvā bahudhābhojanaḥ³ /
 tatphalaṃ prāpnuyān martyaḥ⁴ paṭalikhanaḍarśanāt⁵ // 68 //
 vācanād eva kalpasya⁶ pūjanād⁷ vāpy anumodanād⁸ /
 mantrasiddhir dhruvā tasya sarvakalpe⁹ prakalpitāḥ // 69 //
 yāvanti laukikā mantrāḥ bhāṣitā¹⁰ jinapuṅgavaiḥ /
 tacchiṣyakhaḍgibhir divyaiḥ bodhisattvair mahātmabhiḥ // 70 //
 siddhyante sarvamantrā vai paṭasyāsyā tu-m-agratas // 71ab //

iti //

bodhisattvapiṭakāvataṃsakān mahāyānasūtrān mañjuśrīmūlakalpāc caturthaḥ /
 prathamapaṭavidhānavisaraḥ parisamāptaḥ //

¹ pramāṇā] em. ; pramāṇe Gaṇ Vai ² śrāvako] em. (*nyan thos* Tib) ; sādhakā Gaṇ Vai ;
³ bahudhābhojanaḥ] conj. (*lan mang dag tu mchod ston byas* || Tib) ⁴ martyaḥ] em. ;
 martye Gaṇ Vai ; *mi yis* Tib ⁵ -°darśanāt] Vai ; -°darśanā Gaṇ ; *mthong ba tsam gyis* Tib ; Cf.
 BHSgram.8.46–48. ⁶ kalpasya] em. (*cho ga klog pa tsam* Tib) ; kāyesya Gaṇ Vai ⁷ pūjanād]
 em. ; pūjanā Gaṇ Vai ; Cf.BHSgram. 8.46–48. ⁸ anumodanād] em. ; anumodanā Gaṇ Vai ;
 Cf.BHSgram. 8.46–48. ⁹ -°kalpe] em. (*cho ga thams cad rab brtags pa* Tib) ; -°karme Gaṇ
 Vai ¹⁰ bhāṣitā] em. ; bhāṣitā <ye> Gaṇ Vai ; *gang dag* Tib

第4章 後註

- (1) Gaṇ, Vaiの読みのようにtat sādhu ... の形は以下のGaṇḍavyūhaにおいて見られる。
[Gaṇḍavyūha, p.114, 7-9.]

mayā ārya anuttarāyāṃ samyaksambodhau cittam utpāditam / na ca jānāmi kathaṃ bodhisattvena
bodhisattvacaryāyāṃ śikṣitavyam, kathaṃ pratipattavyam / tat sādhu me āryo bodhisattvam
ārgam upadiśatu, yenāhaṃ mārgēṇa sarvajñatāyāṃ niryāyāṃ //

この引用文におけるtatは前文の内容を受けた接続詞として働いていると考えられるが、MMK当該箇所は世尊に対する懇願の言葉の文頭に位置している。したがって、tatがあつた場合にその働きが指示代名詞や接続詞だとしても不明瞭であるため、ここでは削除することにした。

- (2) Gaṇ, Vaiの当該箇所前後の読みはm, sg, Nom. やn, sg, Nom./Acc. の形が混在しているようだが、文脈上、全ての語がpaṭavidhānaにかかると考えられるため、paṭavidhānam(n, sg, Nom.)に合わせる形で整定した。

- (3) [MMK ch.7, 2.] sādhu sādhu mañjuśrīḥ yas tvam tathāgatam arthaṃ paripraṣṭavyaṃ manyase/

- (4) [MMK ch.4, v.37.]

mañjuśriyo mahāvīro mantrarūpeṇa bhāṣitaḥ / atītair bahubhir buddhair mayāpy etarhi punaḥ
punaḥ //

[MMK ch.4, 4, v.60.]

etatpaṭavidhānaṃ tu uttamaṃ jinabhāṣitam / saṃkṣiptaṃ vistarākhyātaṃ pūrvam uktaṃ tathā-
gataiḥ //

- (5) [MMK ch.2 (Gaṇ p.30, 16. ; p.31, 20.)] namaḥ samantabuddhānāṃ apratihataḥ apratipracāriṇāṃ/
MMK第2章に確認される上記の帰命句に基づけばmatiの語は削除されるべきかもしれないが、当該箇所のTib, 天にはmatiがあるため、ここでは残すことにした。

- (6) [MMK ch.1(Gaṇ p.3, 4-5.); ch.2(Gaṇ p.26, 13-14.)]

om ra ra smara apratihataśāsana kumārarūpadhāriṇa hūṃ hūṃ phaṭ phaṭ svāhā //

[MMK ch.7, 4-1.]

om he he bhagavan bahurūpadhara divyacakṣuṣe avalokaya avalokaya māṃ samayam anu-
smara kumārarūpadhāriṇe mahābodhisattva kiṃ cirāyasi/ hūṃ hūṃ phaṭ phaṭ svāhā //

- (7) [Sarvatathāgatataṭṭvasaṃgraha 1410]

om vajravidyottame nṛtya nṛtya vikurva vikurva hūṃ phaṭ //

Cf.BHSdic. p.481(vikurvati)

- (8) [MMK ch.4, 3-2-2.]

śubhanakṣatre prātihārapakṣe śukle 'hani śubhagrahanirīkṣite 'nye vā śuklapakṣe ...

[Kriyāsaṃgrahapañjikā, 6-8-3.]

tataḥ śubhagrahopalakṣite śubhatithinakṣatramuhūrte 'gnikuṇḍaṃ rajahpiṇḍikāṃ snānapīṇḍi-
kāṃ indrādīlokapālakalaśāsthānapīṇḍikāṃ bāhyabalipīṇḍikāṃ cāropayet.

- (9) [MMK ch.4, 3-2-2.] ... caturdikṣv ity ūrdhvam adho vidikṣu ca kṣipet /

- (10) [MMK ch.4, 3-2-1, v.10]

uttame uttamaṃ kuryān madhyame madhyasādhanam / itaraiḥ kṣudrakarmāṇi nikṛṣṭāny eva sarvataḥ //

- (11) 当該箇所から3半偈分は、GaṇおよびVaiは散文としているが、おそらく当該箇所からŚlokaの偈文が始まっていたと思われる。また同様にLalou[1930, p.22 footnote3]によって以下のようにślokaの形で当該箇所の復元案が提示されている。

<<uttame ṣoḍaśamātram>> madhyame aṣṭamaṃ yathā /
itare pañca caikaṃ vā kṣudrasādhyeṣu karmasu //
yathā <<hi>> śaktitaḥ kuryāt sarvakarmasu mantravit /
tataḥ prabhṛti ...

対応するTibも当該箇所から偈頌の形式で訳出していることから、当該箇所は元来、偈頌の形を有していたが、書写過程においてその偈頌の形が崩れてしまった、あるいは、元来散文であったが、書写過程において意図的に偈頌の形式に訂正されて書写された、このような可能性が疑われる。というのも、Gaṇにもとづく場合、3-1-5から3-2-1へと続く偈の末尾は、第14偈のab句までで終わっており、半偈分合わないからである。ただし、作成者による復元案にしても、Lalouによる復元案にしても、問題がないわけではない。また本経には正規の文法や韻律を逸脱した偈頌の形がしばしば見られることから、必ずしもślokaの韻律が保持されていたとも考えにくい。いずれにしても現段階では、当該箇所がślokaに近い形であったと理解しておくことにしたい。なお、ここでは一応の区別を図るために、ひとまずローマ数字で偈の番号を提示しておく。

- (12) 当該箇所は、Lalou[1930, p.22 footnote6]によって、Tibに依拠して *nihitaṃ tu tato kṛtvā* と訂正されるべきだと示されている。確かにGaṇとTibは合わないが、前後の文脈を考慮すると、*na hi tantu-gato kṛtvā*の方がよいだろう。
- (13) ここではTibにしたがって^orakṣāvidhānataḥとしておく。ただし、以下の引用箇所のように^orakṣāvidhānitamという形だった可能性も考えられる。vidhānitamの形は、おそらくvidhānaにitaが付加されて韻律に合う形にされたものと考えられる。

MMK [ch.4, 3-2-3, v.35cd] *anenaiva tu mantreṇa kṛtarakṣāvidhānitam //*

- (14) MMK [ch.14(Gaṇ p.142), v.148]

śucinā śucicittena śucikarmasādārataḥ / śucau deśe 'tha mantrajñāḥ śucisiddhi samṛcchati //

- (15) 梵本v.6-v.7の二偈に対し、Tibは一偈と半偈分で対応させて訳出している。

rgan min nad kyis gdungs pa min || lud pa dbugs mi bde ba spangs || ma ning smad pa ma yin dang || 'phye bo ma yin skra dkar spangs || kun gyis bkur ba'i mtshan nyid ldan || rab bsngags blta na sdug pa dang ||

- (16) [Gaṇḍavyūha, p.68, 29]

... laukikalokottarakriyāvidhijñānapaṭupaṇḍitarūpān lokācāryasaṃmatapaṇḍitarūpān anekākāra-kalpān anekākārasaṃsthānavyūhān ...

- (17) Cf. Tanemura[2004, p.237, n.52]

[MMK ch.7, 4-1] *ādau tāvad vīrakrayeṇa sūtrakaṃ kṛtvā, ... ;*

[*Kriyāsaṃgrahaṇajikā*, 3-5-1(p.139)]

tato maṇḍaleśayogavān ācārya ākāśe sarvatathāgatān avalambya sampūjya, akṣatakanyākartitāni vīrakrayakṛitāni vā pañcapañcasūtrāṇi sitapītaraktaharitaḥ varṇakaiḥ pṛthak pṛthag rañjitāni vuṃ-āṃ-jrīm-khaṃ-hūm iti pañcatathāgatābījaniṣpannāni tair evādhitiṣṭhet/ ;

[*Vajrāvalī*, 12-1-2(p.141)]

... 'kṣatakanyākartitāni vīrakrayakṛitāni vā pañcapañcasūtrāṇi pañcapātrasthāni sitapītarakta-

haritakṛṣṇaiḥ sugandhavarṇakaiḥ siddhārthacūrṇapañcāmṛtamisraiḥ pṛthak pṛthag rañjitāni / ;
漢訳文献にも当該箇所と同様の内容を想定させる記述を見いだせる。

[『菩提場所説一字頂輪王経』 vol.19, p.198b23–24] 或縁畫像要買物者。勇士不應酬價。

(18)[MMK ch.4, 3-1-2.]

caturdiśam ca kṣipet śvetacandanakuṅkumodakam ity ūrdhvam adhaś ca vidikṣu /

(19)[MMK ch.6, 1.]

pūrvanirdiṣṭenaiva vidhinā śilpibhiḥ sugatavitastipramāṇam tiryak tathaiva samam caturasram
pūrvavat paṭaś citrāpayitavyaḥ pūrvanirdiṣṭai raṅgaiḥ //

(20)ここではTibの'ang(D; yang P)と天の「亦」に着目し、apiの語があったという推測を軸としてテキストの整定を試みた(前後の文脈を考慮した場合も、apiのある方が文意を理解しやすい)。

(21)本来はmahātmanaḥとなるべきだろう。韻律の制限によるものと考えられる。

(22)śoḍaśadvicatuṣkayoḥは韻律の制限によって、複合語末尾のcatuṣkaがdu, G/Lの形をとっていると考えられる。

(23)-°lipsunāmは本来-°lipsūnāmとなるべきだろうが、韻律の制限によって-°lipsunāmの形をとっていると考えられる。 Cf. BHSgram. 12.71.

(24)nityadhiṣṭhitaḥは本来nityādhiṣṭhitaḥとなるべきだろうが、韻律の制限によってnityadhiṣṭhitaḥの形をとっていると考えられる。 Cf. BHSgram. 4.21.

(25)[Mrtyuvañcanopadeśa, p.81, v.39]

kuṭiprasrāvayoḥ(bshang dang gci ba'i Tib) kāle tulyam syād yadi hañchikā / tasyām eva hi
velāyām mṛtyur varṣeṇa tasya hi //

(26)Edgerton(BHSDic. p.558)が指摘するようにPāliのsaṃdhovatiに由来する過去分詞の形をそのまま残していた可能性もある。

(27)[MMK ch.4, 3-1-5, v.4ab] śucau pradeśe saṃsthāpya kṛtaraṅgāvidhānataḥ /

(28)[MMK ch.4, 2.] pūrvanirdiṣṭam sarvatathāgatāiḥ aham apīdānīm bhāṣiṣye //

[MMK ch.4, 4, v.60.]

etatpaṭavidhānam tu uttamaṃ jinabhāṣitam / saṃkṣiptam vistarākhyātam pūrvam uktaṃ tathā-
gataiḥ //

(29)[MMK ch.7, 5, v.3]

aśrāddhasya manuṣyasya śuklo dharmo na rohate / bījānām agnidagdhanām aṅkuro harito
yathā //

(30)当該箇所の一には何らかの混乱があったように思われる。ここではひとまずGaṇの読みに従っておく。

(31)[Amoghapāśakalparāja, 45a1–2(Cf. 木村[2001, p.16])]

aśleṣakai raṅgair navabhājanasthair navena śucinā kūrcakenāryāvalokiteśvaram amoghapāśam
citrāyitavyam //

[Saratathāgatādhiṣṭhānasattvāvalokanabuddhakṣetrasandarśanavyūha, p.72, 6]

aśleṣai raṅgair navabhājanasthaiś citrāpayitavyam / ;

[Mahāmañvivipulavimānasupratīṣṭhitaguhyaparamarahasyakalparājā, D, 305b3–4]

ri mo mkhan smyung ba byas pas snod sar par tshon spyin med pas bcom ldan 'das rgyan
thams cad kyis brgyan pa |

(32)[MMK ch.4, 3-3-2-5]

... sugandhapuṣpābhyavakīrṇāḥ ... ; mālativārṣikādhānuṣkārikāpunnāganāgakesarādibhiḥ puṣpaiḥ samantāt paṭam *abhyavakīryamāṇam*(*gcal bkram pa* Tib) likhitam //

[MMK ch.4, 3-3-2-6]

sutarām nāgakesaravakulādipuṣpair *abhyavakīritam*(*n.e. Tib*) ...

[MMK ch.5, 3-12]

... puṣpair *abhyavakīrṇam*(*gcal bkram pa* Tib) samantāt paṭam /

- (33) ch.4の3-3-2, およびch.5の3において示されるパタの画像は, 下記の漢訳文献に示されるパタの画像と類似している。

[『佛說文殊師利法寶藏陀羅尼經』 vol.20, p.794b20–c22]

先於中畫釋迦牟尼佛。坐七寶蓮華座如說法勢。於佛右邊畫文殊師利。如童子相貌頂戴寶冠。項著瓔珞種種莊嚴。身如鬱金色面貌熙怡瞻仰如來。次右邊畫觀自在菩薩。次畫普賢菩薩。虛空藏菩薩。無盡意菩薩。次於釋迦牟尼如來左邊。畫彌勒菩薩。次畫無垢稱菩薩。次畫除一切障菩薩。次畫月光童子。次畫金剛藏菩薩。已上菩薩等。各於七寶蓮華座上。皆須畫本形。乃至手執。並依本法畫之。勿使漏脫。復於釋迦如來上。畫七佛。所謂廣大智甚深雷音王如來。除一切障如來。阿彌陀如來。功德處如來。普香如來。難勝勇雷音行如來。心不動如來。此七佛皆須次第畫之。其身皆作金色各如說法相。其畫像上兩角。各畫一天仙。頂戴花鬘各一手執花一手散花。半身隱於雲中。形貌端正種種七寶以爲瓔珞莊飾其身。其釋迦牟尼佛蓮華下。畫二龍王。一名難陀二名憂波難陀。其二龍王並於無熱惱池中出半身。以手托共執釋迦如來所坐蓮華莖。作珍重用力勢。其龍王並作人面。頭上各畫七箇蛇頭。頭皆白色身作人形。種種雜寶以爲嚴身。皆仰瞻視目觀如來。文殊師利下。畫野漫德迦忿怒王。仰觀文殊。菩薩。如授教勢。彌勒菩薩下。畫持明人。以本相貌手執香爐跪而坐。瞻視世尊如聽法勢。畫像四邊。散畫龍花及諸妙花。下左邊畫梵天王魔醯首羅天四天王天。次畫四箇阿素羅王。次畫四箇執鬼神曜王。右邊畫那羅延天帝釋天四天王天。次畫四箇阿素羅王。次畫四箇執神王。已上各依本形貌。皆須執持器仗不得差錯。次畫九箇執神。其身半隱合掌向佛觀如來相。

- (34) [MMK ch.5, 2-2-5.] *teṣāṃ copariṣṭād aṣṭau buddhā bhagavantaś citrāpayitavyāḥ sthitakā abhaya-pradānadakṣiṇakarāḥ pītacīvarottarāsaṅgīkṛtadehā vāmahastena cīvarakarṇakāvasaktā īśadraktāvabhāsakāśāyasunivastāḥ samantaprabhāḥ sarvākāravaroṇetāḥ /*

[*Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*, p.183, 10-11.] *bhagavān āha – yataḥ subhūte bodhisattvo mahāsattvaḥ sarvākāravaroṇetāṃ sūnyatāṃ pratyavekṣate, ...*

[*Ratnagotravibhāga*, p.57, 6-7.] *tatra tathāgatānāṃ anāsrave dhātau sarvākāravaroṇetaśūnyatābhinirhārataś citrakaradrṣṭāntena guṇasarvatā veditavyā |*

[*Sarvatathāgatataṭvasaṃgraha*, 28.] *sarvatathāgatāḥ prāhuḥ / " tena hi mahāsattvaḥ ! sattvavajram sarvākāravaroṇetaṃ buddhabimbam ātmānaṃ bhāvayā ! 'nena prakṛtisiddhena mantreṇa rucitaḥ pariṅjāpya // 'oṃ yathā sarvatathāgatāś tathā 'ham ' " //*

[*Guhyasamājatantra*, ch.12, v.38.] *sarvākāravaroṇetaṃ buddhabimbam vibhāvayet / pāṇau ca kāyavākcittam aṅkuśādīni bhāvayet / anena khalu yogena sa bhavet padakarmakṛt //*

- (35) [*Dīvyāvadāna* p.162, 5–28.]

atha brahmādayo devā bhagavantaṃ triḥ pradakṣiṇīkṛtya bhagavataḥ pādau śirasā vanditvā dakṣiṇaṃ pārśvaṃ niśritya niṣaṅṅāḥ / śakrādayo devā bhagavantaṃ triḥ pradakṣiṇīkṛtya bhagavataḥ pādau śirasā vanditvā vāmaṃ pārśvaṃ niśritya niṣaṅṅāḥ / nandopanandābhyāṃ nāgarājābhyāṃ bhagavata upanāmitaṃ nirmitaṃ sahasrapattraṃ śakaṭacakramātraṃ sarvasauvarṇaṃ ratnadaṇḍam padmam / bhagavāṃś ca padmakarṇikāyāṃ niṣaṅṅāḥ paryaṅkam ābhujya ṛjuṃ kāyaṃ praṇidhāya pratimukhaṃ smṛtim upasthāpya padmasyopari padmaṃ nirmitam / tatrāpi bhagavān paryaṅkaniṣaṅṅāḥ / evam agrataḥ pṛṣṭhataḥ pārśvataḥ / evaṃ bhagavatā buddhapiṇḍī nirmitā yāvad akaniṣṭhabhavanam upādāya buddhā bhagavanto parṣannirmitam / ... bhagavatā tathādhiṣṭhitam yathā sarvaloko 'nāvṛtam adrākṣīd buddhāvataṃsakam yāvad akaniṣṭhabhavanam upādāya antato bālādārakā api yathāpi tadbuddhasya buddhānubhāvena devatānāṃ ca devatānubhāvena //

- (36) [MMK ch.4, 3-3-2-2] *samantāc ca tatpadmasaraḥ padmapatrapuṣpakuḍmalavikasitaṃ ...* ;
 [『佛說文殊師利法寶藏陀羅尼經』 no.1185A vol.20, p.794c7–c9]
 其釋迦牟尼佛蓮華下。畫二龍王。一名難陀二名憂波難陀。其二龍王並於無熱惱池中出半身。 ;
 [『佛說文殊師利法寶藏陀羅尼經』 no.1185B vol.20, p.801c3–c6]
 其釋迦牟尼佛所坐蓮華出水池內。池中復現二龍王。一名難陀。二名憂波難陀。其二龍王於其池中現出半身。
- (37) [MMK ch.4, 3-3-2-6]
āryam abhinirīkṣamāṇaṃ samantaprabhaṃ ratnaprabhāvicchuritadyotiparyeṣaṃ /
 [MMK ch.4, 3-3-2-18]
āryāvalokiteśvareṣadgatadr̥ṣṭiḥ samantajvālāmālāparyeṣitām /
- (38) [MMK ch.4, 3-3-2-4]
dviṭīyasmim̐ padme samantabhadraḥ ... ; pañcamasmim̐ tathā padma āryamahāmatih̐ ...
- (39) [MMK ch.5, 2-1.] *aśleṣakai raṅgair apagatakeśasaṃkārādibhir yathaiiva prathamam̐ tathaiiva tat kuryāt varjayivā tu pramāṇarūpakān, ...*
- (40) [MMK ch.4, 3-3-2-4] ... *śvetapaṭṭāṃśukottarīyaṃ ...* ;
 [MMK ch.7, 4-3-1] ... *nīlapaṭṭāṃśukottarīyaṃ ...*
- (41) [MMK ch.4, 3-3-2-3] *aparasmim̐ padma āryacandraprabhaḥ ...* ;
 [MMK ch.4, 3-3-2-4] *pañcamasmim̐ tathā padma āryamahāmatih̐ ...*
- (42) [MMK ch.5, 2-2-4] *bhagavataś ca śākyamuner vāmapārśva āryāvalokiteśvaraḥ śaratkāṇḍagauro(ston ka'i zla ba'i mdog ltar dkar ba Tib ; 如秋天滿月 天) ...*
 [MMK ch.7, 4-2-2-3.] *āryamañjuśrīyasya vāmapārśva āryāvalokiteśvaraḥ śaratkāṇḍagauro(ston ka'i zla rgyu'i mdog ltar dkar ba Tib ; 身如中秋月色 天) nīlapaṭṭacalanikānīvastah̐ ...*
 MMKの上記の引用箇所ではśaratkāṇḍagauraḥの読みでGaṇ, Tib, 天の三本が一致している。そこで、当該箇所のTibはśarakāṇḍagauraḥ「葦の茎のように輝かしく」と読んでいるが、上記のMMKの引用箇所と同様に「秋季の月のように輝かしく」と読んでおくことにする。なお、*Sādhanamālā*にも同様の記述を確認できる。
 [Sādhanamālā, 15(Khasarpaṇa)] *sa ca śaratkāṇḍagauraḥ(ston ka'i zla ba bzhin du dkar zhing Tib) jaṭāmakuṭī śirasi amitābhadhārī sarvālaṅkārabhūṣitaḥ ...*
- (43) [Amoghapāśakalparāja, 45a2(密教聖典研究会[2000, p.61])]
āryāvalokiteśvaraṃ amoghapāśaṃ citrayitavyam / ... amitābhajinamakuṭaṃ dakṣiṇābhīmukhaṃ navacandra makuṭāntare / ;
 [Amoghapāśakalparāja, 53b2(密教聖典研究会[2001, p.37])]
madhye bhagavān āryāvalokiteśvaraṃ jaṭāmakutaṃaṇḍitam amitābhajinālaṃkṛtaṃ navacandra-dakṣiṇāvasthitamakutaṃ ...
- (44) 以下、n, sg, Nと思われる形が続く。不自然であるため、以下は冒頭のvajrapāṇiḥのm, sg, Nの形に統一しておく。
- (45) [MMK ch.7, 4-2-2-1.] ... *nīlapaṭṭacalanikānīvasitaṃ nīlapaṭṭāṃśukottarīyaṃ ...*
 [MMK ch.7, 4-2-2-3.] ... *nīlapaṭṭacalanikānīvasitaḥ sarvāṅgaśobhanaḥ ...*
- (46) [MMK ch.4, 3-3-2-3] *aparasmim̐ padma āryacandraprabhaḥ ...* ;
 [MMK ch.4, 3-3-2-4] *dviṭīyasmim̐ padme samantabhadraḥ ...*

- (47) [MMK ch.4, 3-3-1]
 nāgakesarapunnāgavakulacampakavārṣikadhānuṣkārikamālatīkusumādibhiḥ taṃ paṭam *abhyavakīrya*(*gcal bkram pa Tib*) ... ;
 [MMK ch.4, 3-3-2-5]
 mālatīvārṣikādhānuṣkārikāpunnāganāgakesarādibhiḥ puṣpaiḥ samantāt paṭam *abhyavakīryamāṇam*(*gcal bkram pa Tib*) likhitaṃ // ;
 [MMK ch.4, 3-3-2-6] sutarāṃ nāgakesaravakulādipuṣpair *abhyavakīritam*(*n.e. Tib*) ... ;
 [MMK ch.5, 3-12] ... puṣpair *abhyavakīrṇam*(*gcal bkram pa Tib*) samantāt paṭam /
- (48) [MMK ch.4, 3-3-1]
 nāgakesarapunnāgavakulacampakavārṣikadhānuṣkārikamālatīkusumādibhiḥ taṃ paṭam *abhyavakīrya*(*gcal bkram pa Tib*) ... ;
 [MMK ch.4, 3-3-2-5] ... sugandhapuṣpābhyavakīrṇāḥ ... ;
 [MMK ch.4, 3-3-2-6] sutarāṃ nāgakesaravakulādipuṣpair *abhyavakīritam*(*n.e. Tib*) ... ;
 [MMK ch.5, 3-12] ... puṣpair *abhyavakīrṇam*(*gcal bkram pa Tib*) samantāt paṭam /
- (49) Tibによれば, *brag gi tshogs*(for *śailarāśi*?)と訳していることから, 当該箇所は, 山が群集している様子を表している可能性もある. また, 小位パタにも山脈のようなものを描く規定がなされていることから, Tibのように「山々」を描くという規定である可能性も考えられる.
- (50) [MMK ch.4, 3-3-1]
 nāgakesarapunnāgavakulacampakavārṣikadhānuṣkārikamālatīkusumādibhiḥ taṃ paṭam *abhyavakīrya*(*gcal bkram pa Tib*) ... ;
 [MMK ch.4, 3-3-2-5]
 ... sugandhapuṣpābhyavakīrṇāḥ ... ; mālatīvārṣikādhānuṣkārikāpunnāganāgakesarādibhiḥ puṣpaiḥ samantāt paṭam *abhyavakīryamāṇam*(*gcal bkram pa Tib*) likhitaṃ // ;
 [MMK ch.5, 3-12] ... puṣpair *abhyavakīrṇam*(*gcal bkram pa Tib*) samantāt paṭam /
- (51) [MMK ch.4, 3-3-2-3] prahasitavadanaḥ samantajvālāvabaddhamaṇḍalaparyeṣaḥ / ;
 [MMK ch.4, 3-3-2-18] āryāvalokiteśvareṣadgatadr̥ṣṭiḥ samantajvālāmālāparyeṣitām /
- (52) [*Sukhāvātīvyūha*(short),] ... *sāleṃdrarājo* nāma tathāgato ...
- (53) [*Vimalakīrtinirdeśa*, §75, p.44, 3–8]
 dvitīyāś ca bhāgo *duṣprasahāya tathāgatāya* dattaḥ / yathā ca sarvā parṣat paśyati taṃ ca marīciṃ lokadhātuṃ taṃ ca *duṣprasahaṃ tathāgataṃ* taṃ ca muktāhāraṃ *duṣprasahasya* mūrdhasaṃdhau muktāhārakūṭāgāraṃ prādurbhūtaṃ citraṃ darśanīyaṃ caturasraṃ catuḥsthūṇaṃ samaṃbhāgaśaḥ suvibhaktam /
- (54) [*Kriyāsaṃgrahapañjikā*, ch.6]
 bhairavasya / om hrīm nīlājīmūtasamkāśa ghora daṃṣṭrabhayāvaha ūrdhvakeśa virūpākṣa kṣetrāpāla *bṛhadudara hūṃ* ... ;
 [*Niṣpannayogāvalī*, 20(Tricatvāriṃśadātmakamañjuvajramaṇḍala)]
 pūrvadvāre mahiṣopari Yamāntakaḥ kṛṣṇaḥ ṣaḍbhujō dakṣiṇaiḥ khadgavajraśaradharāḥ sapāśāvā-matarjanyotthitayā tarjayan ... ṣaṭcaraṇo *bṛhadudaro* ...
- (55) [*Mahāmanīpūlavimānasupratīṣṭhitaguhyaparamarahasyakalparājā*, D, 306a5–6.]
 rdzing de'i 'gram du *rig pa 'dzin pa* | lag pa na pog phor dang | me tog gi mgo lcogs thogs la lag pa cig shos na bgrang phreng thogs te | pus mo btsugs nas de bzhin gshegs pa la gyen du bltab bya'o || ;

[*Amoghapāśakalparāja*, 45b2(密教聖典研究会[2000, pp.62–63])(Cf. 木村[2001, p.22, 1-2.])]
 āryāvalokiteśvarasya pādamūle *vidyādharaṃ jānuprapatitaṃ kartavyam / puṣpadhūpakaṭac-*
chukahastaṃ bhagavantaṃ mukhaṃ ullokayamānaṃ kartavyam / ;

[『菩提場莊嚴陀羅尼經』(vol.19, p.674b2–4.)]

於佛下當中畫四大天王。皆被甲冑作威怒形。天王下畫持誦者左手執香爐右手把念珠。瞻視世尊。

- (56) この一文は觀自在の下方に描かれる山の特徴を補足するものだろうが、Gaṇの提示する読みには少なからず混乱があるように思われる。実際、Tibにはthem skasの語があるが、Gaṇの提示する読みと合致する語は見いだせない。そこで明確な根拠を示すことはできないが、当該箇所が、觀自在の下方に描かれる山の特徴を補足する内容であることを考慮して、*taduccatuṅgaparvataṃ*に、後述される複合語がかかるようにテキストを整理した。原型テキストの記述とは離れてしまう可能性を否定できないが、当該箇所の趣意から大幅に外れることはないと考える。

- (57) [MMK ch.4, 3-3-2-3] *prahasitavadanaḥ samantajvālāvabaddhamaṇḍalaparyeṣaḥ / ;*

[MMK ch.4, 3-3-2-6] *samantaprabhaṃ ratnaprabhāvicchuritadyotiparyeṣam /*

- (58) [MMK ch.7, 4-3-4] *sitavarṇau ca tau nāgarājānau saptasphaṭopabhūsitau ...*

- (59) この半偈は著しくślokaの形式から逸脱しており、Tibの提示する読みとも合致しない箇所がある。したがって、何らかの混乱があったと思われるが、適切な校訂を行うのも困難であるため、Gaṇの読みをそのまま提示する。

- (60) m, sg, Nのnirīkṣanであるべきところを、韻律の制限によって、nirīkṣantoのm, pl, Nの形となっていると思われる。

- (61) 韻律を考慮すれば、śobhanoとした方がよいだろうが、Tibは、legs par mdzesと訳しており、su-śobhanoを支持している。したがってGaṇの読みをそのまま提示する。

- (62) [MMK ch.4, 2]

tvadīyaṃ paṭavidhānavisarasarvamantracaryāsādhanam anupraveśam anupūrvakaḥ vakṣye 'haṃ,
pūrvanirdiṣṭaṃ sarvatathāgataiḥ aham apīdānīm bhāṣiṣye // ;

[MMK ch.7, 2]

niyataṃ sambodhiprāpaṇatāyai ṣaṭsaptatibuddhakoṭibhiḥ pūrvabhāṣitam aham apy etarhi idānīm
bhāṣiṣye/

- (63) 『一字佛頂輪王經』(vol.19, p.232a3–6)

若有智者見遇斯像。生希有想信喜觀禮。燒香供養憶相讚持。此人則得今世當世。壽不空過於俱胝劫。所造重罪則皆殄滅。

- (64) [MMK ch.4, 3-2-3, v.41ab] *ata eva bhramante te saṃsārāndhāracāraḥ /*

- (65) この偈のチベット訳(*ras ris mthong ba'ang don ldan zhes || thub pa'i dbang pos gsungs pa yin || mthong ba tsam gyis dag 'gyur te || de bas skad cig de tsam gyis ||*)の記述を、本経所説の最勝パタが、チベットにおいて「トンワトウンデン」と称されて伝承されている典拠としている(田中[2010, pp.5–6])。なお、パタの功德を強調する同様の記述は他の経典にも確認できる。

[*Amoghapāśakalparāja*, 45b3(密教聖典研究会[2000, p.63])(Cf. 木村[2001, p.22 6-8.])]

saha darśanamātreṇa ayaṃ duṣyapatam janmaśatasahasram avīcisañcitaṃ pañcānantaryakārakam
te sarve naśyanti vinaśyanti / ;

[*Mahāmañivipulavimānasupraṭiṣṭhitaguhyaparamarahasyakalparājā*, D, 306b5–6.)]

mthong ba tsam mam | bzlas brjod byas pa tsam mam | bklags pa tsam gyis yon tan dang phan
yon 'di dag yongs su gzung bar 'gyur na cho ga lhag par mang du byed pa lta smos kyang ci
dgos |

CH. V

1

[Gaṇ p.68-2 ; Vai p.48-2 ; Tib(D) 137a4 ; Tib(P) 97b6 ; 天 p.862b4]

atha khalu bhagavān¹ śākyamuniḥ sarvaṃ tatparśanmaṇḍalam avalokya mañjuśrī-
yaṃ kumārabhūtam āmantrayate² sma / asti mañjuśrī³ aparam api tvadīyaṃ⁽¹⁾ ma-
dhyamaṃ paṭavidhānam / tad bhāṣiṣye 'ham / śṛṇu sādhu ca suṣṭhu ca manasikuru
//

2-1

[Gaṇ p.68-5 ; Vai p.48-5 ; Tib(D) 137a5 ; Tib(P) 97b7 ; 天 p.862b7]

ādau tāvat pūrvanirdiṣṭenaiva sūtrakeṇa pūrvoktenaiva vidhinā pūrvaparikalpitaiḥ
śilpiḥ pūrvapramāṇa⁴ eva madhyamaṃ paṭaḥ suśobhanena⁵ śuklena suvratena sada-
śena⁶, aśleṣakai⁽²⁾ raṅgair apagatakeśasamkārādibhir yathai⁷ prathamam tathai⁷
kuryāt⁸ varjayitvā⁹⁽³⁾ tu pramāṇarūpakān¹⁰, tatpaṭam paścād¹¹ abhilikhāpayitavyam
//

¹ bhagavān śākyamuniḥ] Vai ; bhgavāṃś chākyamuniḥ Gaṇ ² āmantrayate] Vai ; āmantrayeta
Gaṇ ³ mañjuśrī] corr. ; mañjuśrīḥ Gaṇ Vai ; om. Tib ⁴ -°pramāṇa eva] Vai ; -°pramāṇaiva
Gaṇ ; *sngar gyi tshad bar ma dang ldan pa | ras shin tu bzang ba dang ... Tib ⁵ suśobhanena
... sadaśena,] Gaṇ Vai ; shin tu bzang ba dang 'jam pa dang shing tu bkruś pa kha tshar dang
bcas pa dang | Tib ⁶ sadaśena] Gaṇ ; om. Vai ; kha tshar dang bcas pa Tib ⁷ yathai⁷ ...
abhilikhāpayitavyam //] ; *tshad ma gtogs pa dang po ci lta ba de bshin du byas pa'i ras de la phyi
nas bri bar bya ste | Tib ⁸ kuryāt] em. ; <tat> kuryāt Gaṇ Vai ⁹ varjayitvā tu] Gaṇ Vai ;
om. Tib ; (Cf. 今此中等所有B像尺量停分。及彼佛菩薩聲聞等執持儀則少有不同。天) ¹⁰ -°rūpakān]
em. ; -°rūpakāt Gaṇ Vai ¹¹ paścād] Gaṇ Vai ; *phyi nas Tib***

2-2-1

[Gaṇ p.68-10 ; Vai p.48-9 ; Tib(D) 137a6 ; Tib(P) 98a1 ; 天 p.862b10]

ādau tāvad śuddhāvāsabhavanam samantaśobhanākāraṃ sphuṭikaratnamayākāraṃ¹
sitamuktāhārabhūṣitaṃ/

2-2-2

[Gaṇ p.68-11 ; Vai p.48-10 ; Tib(D) 137a7 ; Tib(P) 98a1 ; 天 p.862b12]

tasmin madhye bhagavān² śākyamuniḥ citrāpayitavyo³ ratnasimhāsanopaniṣaṇṇo⁴
dharmam deśayamānaḥ sarvākāravaropetaḥ/

2-2-3

[Gaṇ p.p.68-13 ; Vai p.48-11 ; Tib(D) 137a7 ; Tib(P) 98a2 ; 天 p.862b14]

dakṣiṇapārśva⁵ āryamañjuśrīḥ padmakiñjalkābhah⁶ kuṅkumādityavarṇo vā vāmaska-
ndhapradeśe nīlotpalāvasaktaḥ kṛtāñjalipuṭo⁷ bhagavantaṃ śākyamuniṃ nirīkṣamāṇa⁸
īṣatprahasitavadanaḥ kumārarūpī pañcacīrakopaśobhitaśīrasko⁹ bāladārakālaṅkāra-
bhūṣito¹⁰ dakṣiṇajānumaṅḍalāvanataśīraḥ¹¹⁽⁴⁾ //

¹ sphuṭikaratna°- 〕 em. (*rin po che shel gyi rang bzhin lta bu* Tib) (Cf.淨光天以頗胝迦寶為地. 天) ² bhagavān śākyamuniḥ 〕 Vai ; bhgavāṃś chākyamuniḥ Gaṇ ³ -°tavyo- 〕 corr. ; °tavyaḥ Gaṇ Vai ⁴ -°opaniṣaṇṇo 〕 corr. ; -°opaniṣaṇṇaḥ Gaṇ Vai ; *rin po che'i seng ge'i khri la* Tib ; (Cf.坐七寶師子之座 天) ⁵ -°pārśva 〕 corr. ; -°pārśve Gaṇ Vai ⁶ padmakiñjalkābhah ... vā 〕 Gaṇ Vai ; *padma'i ge sar ram | gung gu ma mam | nyi ma'i mdog 'dra ba* Tib ; (Cf.身如紅蓮華色或恭俱摩色或如日色 天) ⁷ -°puṭo 〕 corr. ; -°puṭaḥ Gaṇ Vai ⁸ -°māṇa 〕 corr. ; -°māṇaḥ Gaṇ Vai ⁹ -°śīrasko 〕 corr. ; -°śīraskaḥ Gaṇ Vai ¹⁰ -°bhūṣito 〕 corr. ; -°bhūṣitaḥ Gaṇ Vai ¹¹ dakṣiṇajānumaṅḍalāvanataśīraḥ 〕 Gaṇ Vai ; *pus mo g-yas pa'i lha nga dang mgo 'dud pa'o* Tib ; (Cf.坐立右膝瞻仰世尊. 天)

2-2-4

[Gaṇ p.68-17 ; Vai p.48-14 ; Tib(D) 137b2 ; Tib(P) 98a3 ; 天 p.862b17]

bhagavataś ca śākyamuner vāmapārśva¹ āryāvalokiteśvaraḥ śaratkāṇḍagauro²⁽⁵⁾ yathaiḥ
 pūrvaṃ tathaiḥ bhilekhyāḥ³, kiṃ tu bhagavataś⁴ cāmaram uddhūyamānaṃ,
 tasya pārśva⁵ āryamaitreyaḥ samantabhadro⁶ vajrapāṇir mahāmatih śāntamatir gaganā
 nagañjaḥ sarvanīvaraṇaviṣkambhinaś ceti / ete 'nupūrvato 'bhilekhyāḥ / yathaiḥ
 prathamam tathaiḥ sarvāṅkārabhūṣitāḥ citrāpayitavyāḥ //

2-2-5

[Gaṇ p.68-22 ; Vai p.48-18 ; Tib(D) 137b4 ; Tib(P) 98a6 ; 天 p.862b22]

teṣāṃ copariṣṭād⁷ aṣṭau buddhā bhagavantaś citrāpayitavyāḥ⁸ sthitakā abhayapradā-
 nadakṣiṇakarāḥ pītacīvarottarāsaṅgīkṛtadehā⁹ vāmahastena cīvarakarnaśakāvasaktā
 īśadraktāvabhāsakāśāyasunivastāḥ samantaprabhāḥ sarvākāravaropetāḥ⁽⁶⁾ / tadya-
 thā saṃkusumitarājendras tathāgato¹⁰ ratnaśikhiḥ śikhir¹¹ viśvabhuk krakuccha-
 ndaḥ¹² kanakamuniḥ¹³ kāśyapaḥ sunetraś ceti / ete¹⁴ buddhā bhagavantaś citrā-
 payitavyāḥ //

¹ -°pārśva 〕 corr. ; -°pārśve Gaṇ Vai ² śaratkāṇḍagauro 〕 Gaṇ Vai ; *ston ka'i zla ba'i mdog ltar dkar ba* Tib ; (Cf. 如秋天滿月 天) ³ tathaiḥ bhilekhyāḥ 〕 em. ; tathaiḥ abhilekhyam
⁴ bhagavataś 〕 Gaṇ Vai ; *bcom ldan 'das la* ⁵ pārśva 〕 corr. ; pārśve Gaṇ Vai ; Cf.BHSgram. 4.51–56. ⁶ -°bhadro 〕 corr. ; -°bhadraḥ Gaṇ Vai ⁷ copariṣṭād 〕 Vai ; copariṣṭā Gaṇ ; Cf.BHSgram.8.46–48. ⁸ citrāpayitavyāḥ 〕 Vai ; citrāpayivyāḥ Gaṇ ⁹ -°dehā 〕 corr. ; -°dehāḥ Gaṇ Vai ¹⁰ tathāgato 〕 corr. ; tathāgataḥ Gaṇ Vai ¹¹ śikhir 〕 corr. ; śikhiḥ Gaṇ Vai ¹² krakucchandaḥ 〕 em. ; krakucchanda<ka> Gaṇ krakucchanda<ka>ḥ Vai ¹³ kanakamuniḥ 〕 em. (*gser thub* Tib) (俱那含牟尼如來 天) ; bakagraniḥ Gaṇ ; bakagrīviḥ Vai ¹⁴ ete 〕 em. ; <ity> ete Gaṇ Vai

2-2-6

[Gaṇ p.69-1 ; Vai p.48-23 ; Tib(D) 137b6 ; Tib(P) 98a8 ; 天 p.862b27]

Gaṇ 69

dakṣiṇe pārśve bhagavata āryamañjuśriyasya samīpe mahāparśanmaṇḍalaṃ citrā-
payitavyam / aṣṭau mahāśrāvakā¹ aṣṭau pratyekabuddhā² yathaiiva pūrvaṃ tathaiiva
te citrāpayitavyāḥ / kiṃ tu āryamahāmaudgalyāyanaśāriputrau bhagavataḥ śākya-
muneḥ³ cāmaram uddhūyamānau sthitakāv⁴⁽⁷⁾ abhilekhyau //

2-2-7

[Gaṇ p.69-4 ; Vai p.48-25 ; Tib(D) 138a1 ; Tib(P) 98b2 ; 天 p.862c1]

evaṃ śuddhāvāsakāyikā devaputrā abhilekhyāḥ / śakro⁵⁽⁸⁾ devānām indraḥ ca sayā-
maś ca saṃtuṣitaś ca sunirmitaś ca śuddhaś ca vimalaś ca sudrśaś cātapaś⁶ cābhā-
svaraś⁷ ca brahmā⁸⁽⁹⁾ sahāmpatir cākaniṣṭhaś⁹ caivamādayo¹⁰ devaputrā rūpāvacarāḥ
kāmvāvacarāś cānupūrvato 'bhilekhyāḥ / āryamañjuśriyasamīpasthāḥ parśanmaṇḍalo-
paricitavinyastāḥ svarūpaveśadhāriṇāḥ¹¹ citrāpayitavyāḥ //

2-2-8

[Gaṇ p.69-10 ; Vai p.48-29 ; Tib(D) 138a3 ; Tib(P) 98b4 ; 天 p.862c4]

bhagavataḥ siṃhāsanasyādastāt samantān mahāratnaparvato¹²⁽¹⁰⁾ mahāsamudrābhy-

¹ mahāśrāvakā] corr. ; mahāśrāvakāḥ Gaṇ Vai ² pratyekabuddhā] corr. ; pratyekabuddhāḥ Gaṇ Vai ³ śākyamuneḥ] Vai ; śākyamune Gaṇ ⁴ sthitakāv] em. ; sthitakāyam Gaṇ Vai ; 'greng bag tu Tib(D) ; bgreng bag tu Tib(P) ; (待立佛邊 天) ; 'brenng bag tu L ; Cf.BHSdic. p.611(sthitaka) ⁵ śakro devānām indraḥ ca] em. ; śakraś ca devānām indraḥ Gaṇ Vai ; *lha rnam*s kyi dbang po brgya byin Tib ; (Cf.帝釋天主 天) ⁶ cātapaś] corr. ; ca atapaś Gaṇ Vai ; *mi gdung ba dang* Tib ⁷ cābhāsvaraś] corr. ; ca ābhāsvaraś Gaṇ Vai ; 'od gsal Tib ⁸ brahmā sahāmpatir cā°-] em. ; brahmā ca sahāmpatiḥ Gaṇ Vai ; *tshangs pa mi mjed kyi bdag po dang* Tib ⁹ cākaniṣṭhaś] em. ; akaniṣṭhaś Gaṇ Vai ¹⁰ caivamādayo] corr. ; ca evamādayo Gaṇ Vai ¹¹ -°dhāriṇāḥ] corr. ; -°dhāriṇo Gaṇ Vai ¹² mahāratnaparvato] em. (*rin po che'i ri bo* Tib) (Cf.大寶山 天) ; mahāparvataḥ Gaṇ Vai

udgato¹ yāvat paṭānte citrāpayitavyaḥ //

2-2-9

[Gaṇ p.69-11 ; Vai p.48-30 ; Tib(D) 138a3 ; Tib(P) 98b5 ; 天 p.862c5]

ekasmin paṭāntakoṇe sādḥako yathāveśasamsthānākāro² 'vanatajānumaṇḍalaśiro³⁽¹¹⁾

dhūpakaṭacchukavyagrahastāḥ citrāpayitavyaḥ //

2-2-10

[Gaṇ p.69-13 ; Vai p.49-1 ; Tib(D) 138a4 ; Tib(P) 98b5 ; 天 p.862c6]

tasmimś ca ratnaparvata⁴ āryamañjuśriyasyādḥastāt yamāntakakrodharājā yathā- Vai 49

pūrvanirdiṣṭam abhilekhyā⁵ //

2-2-11

[Gaṇ p.69-14 ; Vai p.49-2 ; Tib(D) 138a4 ; Tib(P) 98b6 ; 天 p.862c7]

vāmapārśve bhagavataḥ siṃhāsanasyādḥastād āryāvalokiteśvarapādamūlasamīpe

tasmimś⁶ ca ratnaparvata⁷ upaniṣaṇṇā tārādevī abhilekhyā⁸ / yathā pūrvanirdiṣṭā

tathā citrāpayitavyā⁹ //

¹ -°ābhyudgato 〕 em. (rgya mtsho chen po las mngon par byung ba'i kun nas rin po che'i ri bo Tib) ; -°ābhyudgataṃ Gaṇ Vai ² -°ākāro 〕 corr. ; -°ākāraḥ Gaṇ Vai ³ 'vanatajānukoparaśiro 〕 conj. (pus mo'i lha nga dang mgo btud pa Tib) ; avanatajānukaurparaśiraḥ Gaṇ Vai ⁴ -°parvata 〕 corr. ; -°parvate Gaṇ Vai ⁵ abhilekhyāḥ 〕 em. ; abhilekhyam Gaṇ Vai ⁶ tasmimś ca 〕 Gaṇ Vai ; 'phags pa spyan ras gziḡs dbang phyug gi zhabs drung dang nye ba der Tib ⁷ ratnaparvata 〕 em. ; ratnaparvatopaniṣaṇṇā Gaṇ Vai ⁸ abhilekhyā 〕 Vai ; abhilekhyāḥ Gaṇ ⁹ citrāpayitavyā 〕 corr. ; citrāpayitavyāḥ Gaṇ Vai

2-2-12

[Gaṇ p.69-17 ; Vai p.49-3 ; Tib(D) 138a5 ; Tib(P) 98b7 ; 天 p.862c11]

samantāc¹ ca tatpaṭaṃ muktapuṣpāvākīrṇaṃ campakanīlotpalasaugandhikamālatī-
vārṣikadhānuṣkārikapunnāganāgakesarādibhiḥ² puṣpair abhyavākīrṇaṃ samantāt
paṭaṃ //

2-2-13

[Gaṇ p.69-19 ; Vai p.49-5 ; Tib(D) 138a6 ; Tib(P) 98b8 ; 天 p.862c9]

upariṣṭāc ca paṭāntakoṇa³ ubhayānte dvau devaputrau mahāpuṣpaugham utsrjamā-
nau vicitrarūpadhāriṇau⁴ antarīkṣasthitau vārimeghāntargatanilīnāv⁵ utpatamānau
sitavarṇau abhilekhyāv iti //

3

[Gaṇ p.69-22 ; Vai p.49-8 ; Tib(D) 138a7 ; Tib(P) 99a1 ; 天 p.862c13]

etan madhyamakam proktaṃ paṭaṃ⁶ śreyārtham udbhavam /

madhyasiddhis tadāyattā⁷ manujānām tu bhūtale // 1 //

yat kiṃcit kṛtaṃ pāpaṃ saṃsāre saṃsarataḥ⁸ purā /

naśyate tat kṣaṇād eva paṭasaṃdarśanād⁹ iha // 2 //

¹ samantāc ॥ Vai ; samantās Gaṇ ² -°vārṣikadhānuṣkārikapunnāganāgakesarādibhiḥ ॥ em. (bār shi ka dang dhā nu škā ri ka dang pun nā ga dang nā ga ge sa ra la sogs pa'i Tib) ; -°vārṣikadhānuṣkārikapunnāgakesarādibhiḥ Gaṇ ; -°vārṣikadhānuṣkārikapunnāgakesarādibhiḥ Vai ³ -°koṇa ॥ corr. ; -°koṇe Gaṇ Vai ⁴ vicitrarūpadhāriṇau ॥ Gaṇ Vai ; rnam par bkrab par Tib ⁵ vārimeghāntargatanilīnāv ॥ corr. ; -°nilīnau ; char 'byin pa'i sprin gyi nang nas mgo tsam 'thon pa ldng bzhin pa Tib ⁶ paṭaṃ ॥ em. ; paṭaḥ Gaṇ Vai ⁷ tadāyattā ॥ Gaṇ Vai ; 'di la brten Tib ⁸ saṃsarataḥ ॥ corr. ; saṃsarato Gaṇ Vai ⁹ paṭasaṃdarśanād ॥ Vai ; paṭaṃ darśanād Gaṇ

mūḍhasattvā na jānanti bhramante¹ gatipañcake /
 paṭasyādarśanād² ye tu mañjughoṣasya madhyame // 3 //
 api kilviṣakārī syāt pañcānantaryakāriṇaḥ /
 duḥśīlasyāpi sidhyeyur mantrā vividhabhāṣitāḥ // 4 //
 api kṣiprataraṃ siddhiṃ prāpnuyāt kṛtajāpinaḥ /
 rogī mucyate rogād daridro labhate dhanam // 5 //
 aputro labhate putraṃ madhyame paṭadarśane /
 dṛṣṭamātraṃ tadā puṇyaṃ prāpnuyād vipulaṃ mahat // 6 //
 niyataṃ devamanuṣyāṇāṃ³ saukhyabhogī⁴ bhaven naraḥ /⁽¹²⁾
 buddhatvaṃ niyataṃ tasya janmānte ca bhaviṣyati // 7 //
 likhanād⁵ vācanāc caiva pūjanalekhanāt⁶ tathā /
 darśanāt⁷ sparśanāc caiva mucyate sarvakilviṣāt // 8 //
 prārthanādhyeṣaṇād⁸ hy evaṃ paṭasyāsyā mahādyuteḥ /
 labhate saphalaṃ janma⁹ kṣipraṃ cānumodanāt¹⁰ // 9 //
 na¹¹ śakyam vācayā vaktum api kalpāgrakoṭibhiḥ /
 yat puṇyaṃ prāpnuyāj¹² jantuḥ¹³ saphalaṃ paṭadarśanād // 10 //

Gaṇ 70

¹ bhramante 〕 em. ; bhramantā Gaṇ Vai ; 'gro ba lngar ni 'khor ba na 〕 Tib ² -°adarśanād 〕 conj. ; -°adarśanā Gaṇ Vai ; mthong bar mi byed pa Tib ; Cf.BHSgram.8.46–48.
³ -°manuṣyāṇāṃ 〕 Vai ; -°manuṣyāṇāṃ Gaṇ ⁴ saukhyabhogī 〕 conj. ; -°bhāgī Gaṇ Vai ; bde ba Tib ; (Cf.於人天中受福快樂. 天) ⁵ likhanād 〕 Vai ; likhanā Gaṇ ; Cf.BHSgram. 8.46–48.
⁶ pūjanalekhanāt 〕 Vai ; -°lekhanā Gaṇ ; mchod dang phyag 'tshal Tib ; (Cf.受持讀誦書寫供養天) ; Cf.BHSgram. 8.46–48. ⁷ darśanāt 〕 Vai ; darśanā Gaṇ ; Cf.BHSgram. 8.46–48.
⁸ -°ādhyeṣaṇād 〕 em. (don du gnyer dang bskul bas Tib) ; -°ādhyeṣaṇā Gaṇ Vai ; Cf.BHSgram. 8.46–48. ⁹ janma 〕 Vai ; janmām Gaṇ ; myur du skye ba don yod 'thob 〕 Tib ¹⁰ cānumodanāt 〕 em. ; cānumodanā Gaṇ Vai ; Cf.BHSgram. 8.46–48. ¹¹ na ... kalpāgrakoṭibhiḥ 〕 Gaṇ Vai ; bskal pa bye ba rnams su yang 〕 brjod par yang ni mi nus so 〕 ; (Cf. 彼人獲福經俱胝劫說不能盡 天)
¹² prāpnuyāj 〕 Vai ; prāpnuyā Gaṇ ¹³ jantuḥ 〕 Vai ; jantu Gaṇ

44

iti //

bodhisattvapiṭakāvataṃsakān mahāyānavaipulyasūtrād āryamañjuśriyamūlakalpāt

pañcamaḥ paṭalavisaraḥ /

dvitīyaḥ paṭavidhānavisaraḥ samāptaḥ //

第5章 後註

- (1) [MMK ch.6, 1.] *asti mañjuśrīr aparam api paṭavidhānarahasyaṃ tṛtīyaṃ kanyasaṃ nāma yat sarvasattvā ayatnenaiva siddhiṃ gaccheyuḥ /*
 最勝バタ・中位バタ・小位バタの三種がセットで扱われていた点と、上記の引用箇所イタリアック部の記述を考慮すれば、*tvadīyaṃ*ではなく*dvitīyaṃ*であった可能性も考えられる。しかしTibには *khyod kyi 'bring gi ras kyi cho ga*とあり、*tvadīyaṃ*の読みを支持している。
- (2) [Amoghapaśakalparāja, 45a1–2(Cf. 木村[2001, p.16])] *aśleṣakai raṅgair navabhājanasthair navena śucinā kūrcakenāryāvalokiteśvaram amoghapaśaṃ citrayitavyam // ;*
 [Sarvatathāgatādhiṣṭhānasattvāvalokanabuddhakṣetrasandarśanavyūha, p.72, 6]
aśleṣai raṅgair navabhājanasthaiś citrāpayitavyam / ;
 [Mahāmañvivipulavimānasupratīṣṭhitaguhyaparamarahasyakalparājā, D, 305b3–4]
ri mo mkhan smyung ba byas pas snod sar par tshon spyin med pas bcom ldan 'das rgyan thams cad kyis brgyan pa |
- (3) [MMK ch.4, 3-3-2-4.] *dakṣiṇapārśve bhagavato 'ṣṭau mahābodhisattvāḥ sarvālaṅkārahūṣitā varjayitvā tu maitreyaṃ, ...*
- (4) [MMK ch.5, 3-9]
sādhako yathāveśasaṃsthānākāro 'vanatajānumaṅḍalaśīro dhūpakatacchukavyagrahasthaḥ citrāpayitavyaḥ // ;
 [Aṣṭasāhasrikā prajñāpāramitā, p.226, 4–6.]
te utthāyāsanebhya ekāṃsānyuttarāsaṅgāni kṛtvā dakṣiṇāni jānumaṅḍalāni pṛthivyāṃ pratiṣṭhāpya yena bhagavāṃstenāñjalim praṇamayāmāsuḥ /
 このような表現は聖者に恭敬する際の定型表現であり、頻繁に用いられるようである。おそらく当該箇所も、上記の『八千頌般若』の引用箇所のように、蹲踞のような姿勢で低頭している姿を規定していると思われる。
- (5) Cf. <試作テキスト>ch.4 後註42.
 [MMK ch.7, 4-2-2-3.] *āryamañjuśrīyasya vāmapārśva āryāvalokiteśvaraḥ śaratkāṅḍagauro(ston ka'i zla rgyu'i mdog ltar dkar ba Tib ; 身如中秋月色 天) nīlapatṭacalanikānivasthaḥ ...*
 [Sādhanamālā, 15(Khasarpaṇa)] *sa ca śaratkāṅḍagauraḥ(ston ka'i zla ba bzhin du dkar zhing Tib) jaṭamakuṭī śirasi amitābhadhārī sarvālaṅkārahūṣitaḥ ...*
- (6) [MMK ch.4, 3-3-2-1.] *āḍau tāvac chākyamuniṃ tathāgatam ālikhet / sarvākāraropetaṃ dvātriṃśanmahāpuruṣalakṣaṇalakṣitam aśītyanuvyañjanopaśobhitaśarīraṃ ...*
 [Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā, p.183, 10-11.] *bhagavān āha – yataḥ subhūte bodhisattvo mahāsattvaḥ sarvākāraropetaṃ sūnyatāṃ pratyavekṣate, ...*
 [Ratnagotravibhāga, p.57, 6-7.] *tatra tathāgatānām anāsrave dhātau sarvākāraropetaśūnyatābhinirhārataś citrakaradṛṣṭāntena guṇasarvatā veditavyā |*
 [Sarvatathāgatataṭvasaṃgraha, 28.] *sarvatathāgatāḥ prāhuḥ / " tena hi mahāsattvaḥ ! sattvavajraṃ sarvākāraropetaṃ buddhabimbam ātmānaṃ bhāvayā ! 'nena prakṛtisiddhena mantreṇa rucitaḥ pariṅjāpya // 'om yathā sarvatathāgatās tathā 'ham ' " //*

[*Guhyasamāja*, ch.12, v.38.] *sarvākāravāropetaṃ* buddhabimbaṃ vibhāvayet / pāṇau ca kāya-vākcittam aṅkuśādīni bhāvayet / anena khalu yogena sa bhavet padakarmakṛt //

(7) [MMK ch.7, 4-3-2] ... nīlapaṭṭacalanikānivastaṃ muktāhārayajñopavitāṃ *sthitakaṃ* śvetapadmāsanasthaṃ citrāpayitavyam //

(8) [*Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā* IV, p.10, 1.3]

atha khalu śakro devānāṃ indra āyusmantam śāriputram etad avocat / ;

[*Avadānaśataka*, p.99-6]

tataḥ śakro devānāṃ indras tad atyadbhutaṃ devamanuṣyāvarjanakaram prātihāryaṃ dṛṣṭvā ...

(9) [*Avadānaśataka*, p.121-5]

kiṃ bhagavan asyāṃ rātrau brahmā sahāṃpatiḥ śakro devendraś catvāro lokapālā ... ;

[*Bhaiṣajyavastu*, p.54 13–14]

... brahmā sahāṃpatiḥ śakro devendraś catvāro lokapālā ...

(10) [MMK ch.5, 3-10] *tasmimś ca ratnaparvata* āryamañjuśriyasyādhasṭāt ... ;

[MMK ch.5, 3-11] ... *tasmimś ca ratnaparvata upaniṣaṇṇā* tārādevī abhilekhyā / ;

[MMK ch.4, 3-3-2-15] ... adhasṭāt dakṣiṇapārśve *padmasarābhyudgataṃ mahāratnaśailendrārājaṃ* yathākathitaṃ tathābhilikhet / /

(11) [MMK ch.5, 2-2-3]

... bāladārakālānkārabhūṣito *dakṣiṇajānumaṅḍalāvanataśiraḥ* (*pus mo g-yas pa'i lha nga dang mgo 'dud pa'o*) //

(12) Cf. [MMK ch.4, 3-2-3, v.16] mahābhogārthināṃ puṃsāṃ tridevāsura bhogināṃ / kanyase siddhim ākhyātā madhyame siddhimadhyamā //

CH. VI

1-1

[Gaṇ p.71-2 ; Vai p.50-2 ; Tib(D) 138b6 ; Tib(P) 99a8 ; 天 p.862c24]

atha khalu bhagavān¹ śākyamuniḥ punar api mañjuśriyaṃ kumārabhūtam āmantra-
yate sma / asti⁽¹⁾ mañjuśrīr² aparam³ api paṭavidhānarahasyaṃ tṛtīyaṃ kanyasaṃ⁴
nāma yat⁵ sarvasattvā⁶ ayatnenaiva siddhiṃ gaccheyuḥ / pūrvanirdiṣṭenaiva vidhi-
nā śilpiḥ sugatavitastipramāṇaṃ⁽²⁾ tiryak tathaiva samaṃ caturasraṃ pūrvavat
paṭaś citrāpayitavyaḥ pūrvanirdiṣṭai raṅgaiḥ //

1-2-1

[Gaṇ p.71-7 ; Vai p.50-6 ; Tib(D) 138b7 ; Tib(P) 99b1 ; 天 p.862c28]

ādau tāvad āryamañjuśrīḥ siṃhāsanopaniṣaṇṇo⁷ bāladāraakarūpī pūrvavat dharmāṃ
deśayamānaḥ samantaprabho⁸ 'rciṣo nirgacchamānaś cārurūpī citrāpayitavyaḥ //

1-2-2

[Gaṇ p.71-10 ; Vai p.50-7 ; Tib(D) 139a1 ; Tib(P) 99b2 ; 天 p.863a1]

vāmapārśva⁹ āryasamantabhadro¹⁰ ratnopalasthitāḥ¹¹ camaravyagrahastāḥ¹² cintā-
mañivāmavinyastakaraḥ priyaṅguśyāmavarnaḥ¹³ pūrvavac citrāpayitavyaḥ //

¹ bhagavān] corr. ; bhagavāṃ Gaṇ Vai ² mañjuśrīr] corr. ; mañjuśrīḥ Gaṇ Vai ³ aparam ... gaccheyuḥ /] ; *gzhan yang khyod kyis ras ris gsum pa'i cho ga rab tu gsang(P; gsungs D) ba zhes bya ba yod de | gang sems can rnam la 'bad med par 'grub par 'gyur ba* Tib ⁴ kanyasaṃ] Gaṇ Vai ; om. Tib ; (Cf.第三下等B像祕密儀則 天) ⁵ yat] em. ; yaḥ Gaṇ Vai ⁶ -°sattvā] em. ; -°sattvānām Gaṇ Vai ⁷ -°opaniṣaṇṇo] corr. ; -°opaniṣaṇṇaḥ Gaṇ Vai ⁸ -°prabho 'rciṣo] em. ; -°prabhā arciṣo Gaṇ Vai ⁹ -°pārśva] em. ; -°pārśve Gaṇ Vai ¹⁰ -°bhadro] corr. ; -°bhadraḥ Gaṇ Vai ¹¹ ratnopalasthitāḥ] Gaṇ Vai ; *rin po che'i ri la gnas pa* Tib ; (Cf.坐優鉢羅華座 天) ¹² camaravyagrahastāḥ] Gaṇ Vai ; *rnga yab lag na thogs pa* Tib ; (Cf.右手執拂 天) ¹³ priyaṅguśyāmavarnaḥ] Gaṇ Vai ; *me tog pri yang ku ltar sngo sangs* Tib ; (Cf.紫綠色 天)

1-2-3

[Gaṇ p.71-12 ; Vai p.50-9 ; Tib(D) 139a2 ; Tib(P) 99b3 ; 天 p.863a3]

dakṣiṇapārśva¹ āryamañjuśriyasya ratnopalasthita² āryāvalokiteśvaraḥ pūrvavat ca-
maravyagrahasto³ vāmahastāravindavinyastaḥ samantadyotitamūrtir abhilekhyah
//

1-2-4

[Gaṇ p.71-15 ; Vai p.50-10 ; Tib(D) 139a3 ; Tib(P) 99b4 ; 天 p.863a4]

adhaś ca siṃhāsanāt kanakavarṇaḥ parvato yāvat paṭānte citrāpayitavyaḥ //

1-2-5

[Gaṇ p.71-16 ; Vai p.50-11 ; Tib(D) 139a3 ; Tib(P) 99b4 ; 天 p.863a5]

paṭāntakoṇa⁴ āryamañjuśriyasya siṃhāsanasyādastād dakṣiṇapārśve yamāntakaḥ
krodharājā pūrvavac citrāpayitavyaḥ //

1-2-6

[Gaṇ p.71-17 ; Vai p.50-12 ; Tib(D) 139a4 ; Tib(P) 99b5 ; 天 p.863a6]

dhūpakaṭacchukavyagrahasto⁵ yathāpūrvam tathaiva sādhaḥ //

¹ -°pārśva] corr. ; -°pārśve Gaṇ Vai ² -°sthita] corr. ; -°sthitaḥ Gaṇ Vai ³ camaravyagra-
hasto] corr. ; -°hastah Gaṇ Vai ; *rnga yab lag na thogs pa* Tib ; (Cf.右手執拂 天) ⁴ -°koṇa]
em. ; -°koṇasya Gaṇ Vai ; *ras kyi mtha' ma dang nye ba'i zur du* Tib ⁵ -°hasto] corr. ; -°hastah
Gaṇ Vai

1-2-7

[Gaṇ p.71-18 ; Vai p.50-13 ; Tib(D) 139a4 ; Tib(P) 99b6 ; 天 p.863a7]

upariṣṭād āryamañjuśriyasya saṅkusumitarājendras tathāgataś¹ citrāpayitavyaḥ ṣo-
ḍaśāṅgulapramāṇo² ratnaparvataguhālīnaḥ³ //

1-2-8

[Gaṇ p.71-20 ; Vai p.50-14 ; Tib(D) 139a5 ; Tib(P) 99b7 ; 天 p.863a8]

kūṭāgārasadrśāḥ⁴ prāgbhāraparvatā⁵ daśa⁶ citrāpayitavyāḥ //
samantāc⁷ ca tatpaṭaṃ parvatākāroveṣṭitaṃ likhet //

1-2-9

[Gaṇ p.71-21 ; Vai p.50-15 ; Tib(D) 139a5 ; Tib(P) 99b7 ; 天 p.863a9]

upariṣṭāc ca paṭakoṇāvasthitau parvataprāgbhārasaṃśliṣṭau utpatamānāv⁸ imān⁹
puṣpaugham utsrjamānau¹⁰ śuddhāvāsakāyikau devaputrau śuddhaś ca nāma viśu-
ddhaś ca nāma pūrvavac citrāpayitavyau //

1-2-10

[Gaṇ p.71-25 ; Vai p.50-17 ; Tib(D) 139a6 ; Tib(P) 99b8 ; 天 n.e.]

nānāpuṣpābhikīrṇaṃ ca tatpaṭaṃ abhilikhāpayitavyam iti //

¹ tathāgataś] Vai ; tathāgata Gaṇ ² -°pramāṇo] corr. ; -°pramāṇaḥ Gaṇ Vai ³ ṣoḍaśāngu-
lapramāṇo ratnaparvataguhālīnaḥ] ; *rin po che'i ri'i phug sor bcu drug gi tshad tsam gyi
nang na bzhugs pa* Tib ; (Cf.於妙吉祥上畫開華王如來。彼佛身長十六指。坐寶山巖猶如樓閣。天)
⁴ kūṭāgārasadrśāḥ prāgbhāraparvatā] ; *ri'i stod kyi cha khang pa brtsegs pa 'dra ba* Tib ;
(Cf.坐寶山巖猶如樓閣。天) ⁵ -°parvatā] corr. ; -°parvatāḥ Gaṇ Vai ⁶ daśa] Gaṇ Vai ; om.
Tib ⁷ samantāc] Gaṇ Vai ; *kho ra khor yug tu* Tib ; (Cf.四面天) ⁸ utpatamānāv] corr. ;
-°mānāv Gaṇ Vai ; *lding ba bzhin du* Tib ⁹ imān] em. ; imāna Gaṇ Vai ¹⁰ utsrjamānau]
Gaṇ ; utsrjamānau Vai

[Gaṇ p.71-26 ; Vai p.50-18 ; Tib(D) 139a6 ; Tib(P) 99b8 ; 天 p.863a12]

etat kathitaṃ sarvaṃ trividhaṃ paṭalakṣaṇam /

kanyasaṃ nāmato hy etat paṭaḥ śreyo kṣudrakarmasu // 1 //

yat¹⁽³⁾ kṛtaṃ kāritaṃ cāpi pāpaṃ karma sudāruṇam /

kalpakotīśahasrāṇi darśanāt paṭa⁽⁴⁾ mucyate // 2 //

paṭaṃ tu dr̥ṣṭamātraṃ vai tatkṣaṇād eva mucyate /

buddhakoṭīśahasrāṇi satkuryād yo hi buddhimān // 3 //

kanyasapaṭadr̥ṣṭasya²⁽⁵⁾ kalām³ nāyāti ṣoḍaśīm /

yat puṇyaṃ sarvabuddhānāṃ pūjām⁴ kṛtvā tu tāyinām⁵ // 4 //

tat puṇyaṃ prāpnuyād vidvān⁶ kanyasapaṭadarśane⁷ /

śobhanāni ca karmāṇi bhogahetor⁸ ihācāret // 5 //

yāvanti kecana mantrā brahmendra-r̥ṣibhāṣitāḥ⁹ /

vainateyena¹⁰ proktā¹¹ varuṇādityakuberayoḥ // 6 //

dhanādyai¹²⁽⁶⁾ rākṣasaiḥ sarvair dānavendrait mahoragaiḥ /

somavāyūyamādyair¹³ bhāṣitā hariharādibhiḥ // 7 //

¹ yat ... mucyate //] ; *bskal pa bye bar mi bzad las* || *ras ris mthong ba tsam gyis grol* || Tib ² kanyasapaṭadr̥ṣṭasya] conj. (*sangs rgyas bye ba stong phrag la* || *blo dang ldan pas bsnyen bkur bas* || *ras ris tha ma mthong ba ni* || *bcu drug char yang mi phod do* || Tib) (Cf. 若復有人供養佛。經百千俱胝劫所得功德。不及依下品B法持誦之者。十六分中一分功德。天) ; kanyasaṃ tu paṭaṃ dr̥ṣṭvā Gaṇ Vai ³ kalām] Vai ; kalā Gaṇ ⁴ pūjām kṛtvā] Vai ; pūjā kṛtvā Gaṇ ⁵ tāyinām] Vai ; tāpinām Gaṇ ; *skyob pa* Tib ⁶ vidvān] Vai ; vidvām Gaṇ ⁷ kanyasapaṭadarśane] em. ; kanyase paṭadarśane Gaṇ Vai ; *ras ris mtha' ma mthong ba'i yin* || Tib ⁸ -°hetor] Vai ; -°hetoḥ Gaṇ ⁹ Cf.BHSgram. 4.51–56. ¹⁰ vainateyena] em. ; vainateyena <tu> Gaṇ Vai ¹¹ proktā] corr. ; proktāḥ Gaṇ Vai ¹² dhanādyai] Vai ; dhanādyaiḥ Gaṇ ; *nor sbyin sogs* Tib ¹³ -°adyair] em. ; -°adyaiś <ca> Gaṇ Vai

sarve mantrā ihānītāḥ sidhyante paṭa-m-agrataḥ¹ /

śāntikāni sadā kuryāt pauṣṭikāni tathā² iha // 8 //

dāruṇāni ca varjita garhitā jinavarais tv iha // 9ab //

iti //

bodhisattvapiṭakāvataṃsakān mahāyānavaipulyasūtrād mañjuśrīmūlakalpāt ṣaṣṭhaḥ

paṭalavisaraḥ /

ṭṭīyaḥ kanyasapaṭavidhānaḥ parisamāpta iti //

¹ Cf.BHSgram. 4.59 ² Cf.BHSgram. 4.51–56.

第6章 後註

(1)[MMK ch.5, 1] *asti mañjuśrīr aparam api tvadīyaṃ madhyamaṃ paṭavidhānam /*

(2)[MMK ch.4, 3-2-3]

*kanyasaṃ sugatavitastipramāṇaṃ ardhahastadīrghatvam / tatra bhagavato buddhasya vitasti
madhyadeśapuruṣapramāṇahastam ekaṃ eṣa sugatasya vitastir iti kīrtyate /*

*sugatavitasti*の解釈はch.4, 3-2-3を参照されたい。

(3)Tibは、梵本v.2全体を半偈で訳出し、梵本v.2–v.3abをTibのv.2として訳出している。

(4)韻律によりpaṭamのṃが落ちたと考えられる。

(5)[*Saṅghabhedavastu*, p.168, 10–13.]

*śatam aśvā śataṃ niṣkāḥ śatam aśvatarīrathāḥ / nānāvittasya saṃpūrṇāḥ śataṃ ca vaḍavārathāḥ
/ padāvihārasyaikasya kalāṃ nārhanṭi ṣoḍaśīm //*

(6)Tibが示すように、*dhanadādyai*が適切な形だと思われるが、韻律の制限によって、*dhanādyai*の形となったのだろうか。

CH.VII

1

[Ms n.e. ; Gaṇ p.73-1 ; Vai p.51-1 ; Tib(D) 139b5 ; Tib(P) 100a6 ; 天 p.863b5]

atha khalu mañjuśrīḥ kumārabhūta utthāyāsanād bhagavantam śākyamuniṃ triḥ
 pradakṣiṇīkr̥tya, bhagavataś caraṇayor nipatya, bhagavantam evam āha/
 sādhu sādhu bhagavatā yas tathāgatenārhatā samyaksambuddhena subhāṣito 'yaṃ
 dharmaparyāyah/ sarvavidyāvratācāriṇām arthāya hitāya sukhāya lokānukampāyai
 bodhisattvānām¹ upāyakaśalyatā darśitā nirvāṇopariḡāminī² vartmopaviśeṣā³ niya-
 taṃ bodhiparāyaṇā santatir bodhisattvānām sarvamantrārthacaryāsādhanīyam⁴ etan
 mantrarahasvasarvajanavistāraṇakarī⁵ bhaviṣyati⁶ //
 anāgate 'dhvani nirvṛte lokagurāv⁷ astamite tathāgatādityavaṃśe⁸ riñcite⁹ sarva-
 buddhakṣetre¹⁰ sarvabuddhabodhisattvāryaśrāvākapatyekaḥbuddhair¹¹ andhakārī-
 bhūte lokabhājane vicchinna¹² āryamārge sarvavidyāmantrauśadhimaṇiratnāpaga-
 te¹³ sādhujanaparīhīṇe nirāloke sattvadhātau, sattvā bhaviṣyanti kusīdā naṣṭaspr-

¹ bodhisattvānām upāyakaśalyatā] Gaṇ Vai ; *byang chub sems dpa' rnams kyi thabs la mkhas pa* Tib ² nirvāṇopariḡāminī] Gaṇ Vai ; *phung po lhag ma dang bcas pa'i mya ngan las 'das pa'i grong khyer du 'gro bar byed pa* Tib ; (Cf. 當得最上菩提涅槃 天息災訳) ³ vartmopaviśeṣā] Gaṇ Vai ; n.e. Tib ; Cf. BHSdic. p.141(upaviśeṣa) ⁴ sarvamantrārthacaryāsādhanīyam] Gaṇ Vai ; *sngags kyi spyod pa thams cad kyi don sgrub par byed pa* Tib ⁵ mantrarahasvasarvajanavistāraṇakarī] Gaṇ Vai ; *bdag gi gsang sngags 'di skye bo thams cad la rgyas par byed par* Tib ⁶ bhaviṣyati] em. (... *byed par 'gyur ro* || Tib) ; bhaviṣyaty anāgate ... Gaṇ Vai ⁷ -°gurāv] corr. ; -°gurau Gaṇ Vai ⁸ tathāgatādityavaṃśe] Gaṇ Vai ; *de bzhin gshegs pa'i nyi ma'i rigs* Tib ⁹ Cf. BHSdic. p.455(riñcita) ¹⁰ riñcite ... andhakārībhūte] ; *sangs rgyas kyi zhing thams cad spangs pa dang | sangs rgyas dang byang chub sems dpa' thams cad dang 'phags pa nyan thos dang rang sangs rgyas rnams kyi mun par gyur pa dang* | Tib ¹¹ -°buddhair] corr. ; -°buddhaiḥ Gaṇ Vai ¹² vicchinna] corr. ; vicchinne Gaṇ Vai ; Cf. BHSgram. 4.51-56. ¹³ -°mantrauśadhimaṇiratnāpagate] em. (*'phags pa'i lam dang rig pa thams cad dang sngags dang sman dang nor bu rin po che med pa dang* | Tib) ; mantrauśadhimaṇiratnāpagate Vai ; -°mantrośadhimaṇiratnāpagate Gaṇ ; (-°ratnāpagate L)

haṇā¹ aśrāddhāḥ khalakā² akalyāṇamitrapariḡhītāḥ śaṭhāḥ māyāvino dhūrtacari-
tāḥ, te imaṃ dharmaparyāyaṃ śrutvā³ saṃtrāsam⁴ āpatsyante / ālasyakausīdyābhi-
ratā na śraddhāsyanti, kāmagaveṣiṇo na pratīṣyanti⁵, mithyādr̥ṣṭiratā⁶ bahvapūṇyaṃ⁷
prasaviṣyanti / saddharmapratikṣepakā⁸ avīciparāyaṇā ghorataraṃ⁹ gatāḥ, teṣāṃ
duḥkhitānām arthāyāvaśānām¹⁰ vaśam ānītāya¹¹ vaśyānām¹² abhayapradāya, up-
āyakausālyasaṃgrahayā mantrapāṭavidhānaṃ bhāṣatu bhagavān¹³ / yasyedānīm kālāṃ
manyase //

2

[Ms n.e. ; Gaṇ p.73-19 ; Vai p.51-16 ; Tib(D) 140a6 ; Tib(P) 100b7 ; 天 p.863b18]
atha bhagavān¹⁴ śākyamunir¹⁵ mañjuśrīyaṃ kumārabhūtaṃ sādhuḥkāram adāt /
sādhu sādhu mañjuśrīḥ yas⁽¹⁾ tvaṃ tathāgatam arthaṃ paripraṣṭavyaṃ manyase
/ asti mañjuśrīḥ tvadīyaṃ paramaṃ guhyatamaṃ vidyāvratasādhanacaryāpāṭala-
pāṭavidhānavisaraṃ paramahṛdayānām arthaṃ paramaṃ guhyatamaṃ mahārthaṃ
nidhānabhūtaṃ¹⁶ sarvamantrāṇām¹⁷ / ṣaḍ ete ṣaḍakṣaraparamahṛdayā¹⁸ avikalpato¹⁹⁽²⁾

¹ naṣṭaspr̥haṇā] conj. ; naṣṭaspr̥hatayā Gaṇ Vai ; *dran pa nyams pa* Tib ² khalakā] conj. ;
khaṇḍakā Gaṇ Vai ; *mi srun pa* Tib ; Cf. BHSdic. p.203(khaṇḍaka) p.204(khalaka) ³ ca: add.
Gaṇ Vai ⁴ saṃtrāsam] Vai ; *satrāsa* Gaṇ ⁵ pratīṣyanti] em. (*yid ches par mi 'gyur ro* Tib)
; *patīṣyanti* Gaṇ ; *yatiṣyanti* Vai ⁶ -^oratā] em. ; -ratāḥ / <te> bahu apuṇyaṃ ... Gaṇ Vai ; *log*
pa'i lta ba skye zhing bsod nams ma yin pa Tib ⁷ bahvapūṇyaṃ] em. ; bahu apuṇyaṃ Gaṇ Vai
; Cf. BHSgram. 4.51-56. ⁸ saddharmapratikṣepakā] corr. ; -^opratikṣepakāḥ Gaṇ Vai ; om. Tib
⁹ ghorataraṃ gatāḥ] em. (*shin tu mi bzad pa 'thob pa* Tib) ; <ghorād> ghorataraṃ gatāḥ Gaṇ Vai
¹⁰ arthāyāvaśānām] corr. ; arthāya avaśānām Gaṇ Vai ; Cf. BHSgram.4.51-56. ¹¹ ānītāya]
em. ; ānetā Gaṇ Vai ; *dbang med pa la dbang du bya ba'i don* Tib ¹² vaśyānām abhayapradāya]
em. ; vaśyānām bhayapradāya Gaṇ ; vaśyānām abhayapradātā Vai ; *dbang du gyur pa la mi 'jigs pa*
sbyin pa'i phyir Tib ¹³ bhgavān] Vai ; bhagavāṃ Gaṇ ¹⁴ bhagavān] corr. ; bhagavāṃ Gaṇ
Vai ¹⁵ śākyamunir] corr. ; cchākyamuniḥ Gaṇ ; śākyamuniḥ Vai ¹⁶ nidhāna^o-] Gaṇ Vai ;
cho gar gyur pa Tib ¹⁷ -^omantrāṇām] Vai ; -^omantrāṇām Gaṇ ¹⁸ ṣaḍakṣaraparamahṛdayā]
em. ; ṣaḍakṣaraparamahṛdayāḥ Gaṇ Vai ¹⁹ avikalpato] Gaṇ Vai ; *the tshom med pa* Tib

tasmim̐ kāle siddhim̐ gacchanti/ teṣāṃ sattvānāṃ damanāya upāyakauśalyasambhā-
 ramantrapraveśanatāyai¹ niyatam̐ sambodhiprāpaṇatāyai² ṣaṣaptatibuddhakoṭib-
 hiḥ⁽³⁾ pūrvabhāṣitam aham apy etarhi idānīm bhāṣiṣye/ anāgatajanatāpekṣāyai³
 tam̐ śṛṇu sādhu ca suṣṭhu ca manasi kuru/ bhāṣiṣye 'ham̐ te/ katamam̐ ca tat//

Gaṇ 74

3

[Ms 2b6 ; Gaṇ p.74-1 ; Vai p.51-23 ; Tib(D) 140b2 ; Tib(P) 101a3 ; 天 p.863b26]⁽⁴⁾

atha khalu bhagavān śākyamunir mantram̐ bhāṣate sma//

om̐ vākyaṛthe jaya/⁴ om̐ vākyaśeṣe sva/⁵ om̐ vākye kham̐ jaya/⁶

om̐ vākyaṇiṣṭhe ya/⁷ om̐ vākye ya namaḥ/⁸ om̐ vākye daṃ namaḥ/⁹⁽⁵⁾

ity ete mañjuśrīḥ kumārabhūta¹⁰ tvadīyaśaḍmantrāḥ ṣaḍakṣarā¹¹ mahāprabhāvāḥ
Ms 3a1

tulyabalavīryāḥ¹² paramahṛdayāḥ paramasiddhā¹³ buddha¹⁴ ivotpannāḥ sarvasattvā-

nām arthāya sarvabuddhaiḥ samprabhāṣitāḥ¹⁵ samayagrastasampracalitasārvakarmi-

¹ -°sambhāramantrapraveśanatāyai] em. ; -°sambhāra-<sa>-mantrapraveśanatāya Gaṇ Vai ; *thabs la mkhas pa la yang dag par rab tu zhugs pa'i phyir* Tib ; Cf. BHSgram. 9.60.

² -°prāpaṇatāyai] em. ; -°prāpaṇatāyā Gaṇ ; -°prāpaṇatāya Vai ; *thob pa'i phyir* Tib ; Cf. BHSgram. 9.60.

³ -°āpekṣāyai] em. ; -°āpekṣāya Gaṇ Vai ; *phan pa'i phyir* Tib ; Cf. BHSgram. 9.60.

⁴ om̐ vākyaṛthe jaya] Gaṇ Vai ; om̐ vākyaṛthe jayaḥ Ms ; *om̐ vā kye rtha ja ya* Tib ⁵ om̐ vākyaśeṣe sva] Gaṇ Vai ; om̐ vākye śeṣa svaḥ Ms ; *om̐ vā kye śe śa sva* Tib ⁶ om̐ vākye kham̐ jaya] conj. ; om̐ vākye kham̐ jayaḥ Ms ; om̐ vākye yanayaḥ Gaṇ Vai ; *om̐ vā kye vaṃ ja ya* Tib

⁷ om̐ vākyaṇiṣṭhe ya] conj. ; om̐ vākyaṇiṣṭhe yaḥ Gaṇ Vai ; om̐ vākyaṇiṣṭhe+ Ms ; *om̐ vā kye ni ṣṭhe ya* Tib ⁸ om̐ vākye ya namaḥ] Gaṇ Vai ; om̐ vā+ya namaḥ Ms ; *om̐ vā kye ya na maḥ* Tib ⁹ om̐ vākye daṃ namaḥ] Ms ; om̐ vākye da namaḥ Gaṇ Vai ; *om̐ vā kye da na maḥ* Tib

¹⁰ kumārabhūta] Ms (*gzhon nur gyur pa* Tib) ; om. Gaṇ Vai ¹¹ -°akṣarā] corr. ; -°akṣarā Ms(××+rāḥ) Gaṇ Vai ¹² tulyabalavīryāḥ] conj. ; +++lamvī+ Ms ; tulyasamavīryāḥ Gaṇ Vai ; *stobs mnyam pa* Tib ; (Cf. 大精進 天息災訳) ¹³ -°siddhā] corr. ; -°siddhāḥ Gaṇ Vai ; -°++ Ms

¹⁴ buddha ivotpannāḥ] em. ; buddham ivotpannāḥ Gaṇ Vai ; *sangs rgyas bzhin du 'byung ba* Tib ¹⁵ samprabhāṣitāḥ] Vai ; samprabhāṣitāḥ Gaṇ ; +prabhā[×=i]+ Ms ; *rab tu gsungs pa* Tib

kā¹ bodhimārgānudeśakāḥ tathāgatakule mantrapravarāḥ uttamamadhyametaratri-
Ms 3a2
dhāsamprayuktāḥ²⁽⁶⁾ suśobhanakarmaphalavipākapradaḥ³ śāsanāntardhānakālasa-
maye⁴ siddhiṃ yāsyanti / samavasaraṇaṃ saddharmanetrākṣaṇārthaṃ ⁵⁽⁷⁾ ye⁶
sādhayiṣyanti, teṣāṃ mūlyaprayogeṇaiva mahārājyamahābhogaiśvaryārthaṃ sādha-
Ms 3a3
yiṣyanti⁷, teṣāṃ kṣiprataraṃ tasmin⁸ kāle tasmin⁹ samaye siddhiṃ yāsyanty¹⁰, an-
tato¹¹ jijñāsanahetor¹² api/ sādhanīyā hy ete paramahṛdayāḥ saṃkṣepataḥ yathā ya-
tā prayujyante, tathā tathā siddhiṃ yāsyanti samāsataḥ^{13/} ¹⁴eṣāṃ paṭavidhānaṃ
Ms 3a4
bhavati/ tasmim kāle tasmim samaye mahābhairave pañcakaṣāye sattvā alpapuṇyā
bhaviṣyanti/ alpeśākhyā¹⁵ alpajīvino¹⁶ 'lpabhogā¹⁷ mandavīryā¹⁸ na śakyante ativi-
Ms 3a5
taratarapaṭavidhāne¹⁹ karmasādhanādīni karmāṇi prārabhantum^{20/} teṣāṃ arthāya
bhāṣiṣye saṃkṣiptataram//

Vai 52

¹ samayagrastasaṃpracalitasārvakarmikā] em. (*dam tshig nyams pa dang dam tshig g-yos pa rnam kyī las thams cad byed pa* Tib) ; +maya+++saṃpracali++sārvakarmikāḥ Ms(it is also likely that -^osaṃpracalitāḥ sārvakarmikāḥ) ; samayagrastāḥ saṃpracalitāḥ sarvakarmikāḥ Gaṇ ; samayagrastāḥ saṃpracalitāḥ sarvakarmikāḥ Vai ² -tridhā-] Ms (*mchog dang 'bring tha ma gsum la ...* Tib) ; ṛdhā Gaṇ Vai ³ suśobhanakarma-] (+śobhanakarma-)Ms (*legs par sbyangs ba'i las kyī ...* Tib) ; suśobhanaṃ karma- Gaṇ Vai ⁴ śāsanāntardhānakālasamayā] Ms(śāsanāntarddhānakālasamayā) (*bstan pa nub pa'i dus su yang* Tib) ; śāsanāntardhānakālasamayāsiddhiṃ Gaṇ ; śāsanāntardhānakālasamayāṃ siddhiṃ Vai ⁵ saddharmanetrākṣaṇārthaṃ-] Gaṇ ; saddharmanetrākṣaṇārthaṃ Vai ; ++++netrā^(pc); nentrā^{ac})rakṣamānārthaṃ Ms ; *las kyī tshul dang bcas pa* Tib ⁶ ye sādhayiṣyanti ... -aiśvaryārthaṃ : n.e. Tib ⁷ sādhayiṣyanti] em. ; <te> sādhayiṣyanti Gaṇ Vai ; [t=×] Ms ⁸ tasmin] Ms Vai ; tasmim Gaṇ ⁹ tasmin] Vai ; tasmim Gaṇ ; taṃsmīta Ms ¹⁰ yāsyanty] Ms ; yāsyanti Gaṇ Vai ¹¹ antato] Gaṇ Vai ; ato Ms ; n.e. Tib ¹² jijñāsanahetor] Ms Gaṇ Vai ; *nyam sad pa'i phyir* Tib ¹³ samāsataḥ] Gaṇ Vai ; samāsato +ṣāṃ Ms ; n.e. Tib ¹⁴ *des na*: add. Tib ¹⁵ -^oākhyā] corr. ; -^oākhyāḥ Ms Gaṇ Vai ¹⁶ -^ojīvino] corr. ; -^ojīvinaḥ Ms Gaṇ Vai ¹⁷ 'lpabhogā] corr. ; alpabhogāḥ Ms Gaṇ Vai ¹⁸ mandavīryā] Gaṇ ; maṃdavī+ Ms ; mandavīryāḥ Vai ; *chos spyod pa chung bas* Tib ¹⁹ ativistatarapaṭavidhāne karmasādhanādīni karmāṇi] em. ; [+ ... +]tivi+++paṭavidhāne karmasādhanādī[×=i] karmāṇi Ms ; ativistatarapaṭavidhānādīni karmāṇi Gaṇ Vai ; *shin tu rgya che ba'i ras ris kyī cho ga'i sgrub pa la sogs pa* Tib ²⁰ prārabhantum] Gaṇ Vai ; prārabhitum Ms ; *rtsom par* Tib

4-1

[Ms 3a5 ; Gaṇ p.74-18 ; Vai p.52-3 ; Tib(D) 141a1 ; Tib(P) 101b2 ; 天 p.863c18]
 ādau tāvad vīrakrayeṇa¹⁽⁸⁾ sūtrakam kṛtvā², palamātram ardhapalamātram³ vā,
 hastamātram dīrghatvenārdhahastamātram⁴ tiryak⁵ karpaṭam sadaśam⁶ tantuvāye-
 Ms 3a6
 na vāyayitavyam/ apagatakeśam⁷ anyam vā navam karpaṭakhaṇḍam pratyagram
 ata ūrdhvam⁸ yathepsitaḥ⁹ dvihastacaturhastam vā ṣaṭ pañca¹⁰ daśa vāṣṭam¹¹ vā
 suśukla-m¹² samgrhya¹³⁽⁹⁾, yathepsitaḥ¹⁴ citrakareṇa⁽¹⁰⁾ citrāpayitavyam aśleṣakai
 Ms 3b1
 raṅgaiḥ candanakarpūraṅkumavāsitaḥ¹⁵ paṭam, candanakuṅkumakarpūram caikī-
 kṛtya niṣprāṇakenodakena¹⁶⁽¹¹⁾ niṣkaluṣeṇāloḍya¹⁷ nave bhāṇḍe paṭam plāvayitvā,
 divasatrayam supidhānapihitam¹⁸ sthāpayet/ kṛtarakṣam śucau deśa¹⁹ ātmanaś²⁰ ca
 Ms 3b2
 śucir bhūtvā, śuklapakṣe pūrṇamāsyām²¹ paṭabhāṇḍasyāgrataḥ pūrvābhimukhaḥ
 ku-śaviṇḍakopaviṣṭa²² ime mantrapadā²³ aṣṭaśatavāram uccārayitavyāḥ/ tadyathā

om he he bhagavan²⁴ bahurūpadhara²⁵⁽¹²⁾ divyacakṣuṣe avalokaya avalo-
 Ms 3b3

¹ vīrakrayeṇa] Ms (*dpa' bo'i tshong gis* Tib) (vīrakrayeṇa L) ; vikrayeṇa Gaṇ Vai ² kṛtvā] Gaṇ Vai ; kītvā Ms ; *nyos la* Tib ³ ardhapalamātram] Gaṇ Vai ; ardhapālamātram Ms ⁴ -°tvenārdha°-] corr. ; -°tvena ardhā°- Gaṇ Vai ; ([x...x])Ms ; Cf.BHSgram.4.51-56. ⁵ tiryak] Gaṇ Vai ; +++ Ms ; *zheng du* Tib ⁶ sadaśam] Ms Gaṇ Vai ; *kha tshar dang bcas pa* Tib ⁷ -°keśam] Gaṇ Vai ; -°keśam Ms ⁸ ūrdhvam] Ms Gaṇ Vai ; *steng dang 'og tu* Tib ⁹ yathepsitaḥ] Ms ; yathepsataḥ Gaṇ Vai ; *ci ltar 'dod pa* Tib ¹⁰ pañca] Gaṇ Vai ; pañca Ms ¹¹ vāṣṭam] Ms ; cāṣṭam Gaṇ Vai ¹² suśuklam] om. Tib ¹³ samgrhya] Ms ; grhya Gaṇ Vai ; *blangs* Tib ¹⁴ yathepsitaḥ] Ms ; yathepsataḥ Gaṇ Vai ; *ci ltar 'dod pa* Tib ¹⁵ -°kuṅkumavāsitaḥ] em. (*gur gum gyis bsgos* Tib) (-°kuṅkumavāsitaḥ L) ; -°kuṅkuma++taiḥ Ms -°kuṅkumasitaḥ Gaṇ Vai ¹⁶ niṣprāṇakenodakena] Vai ; niṣprāṇakenodake Gaṇ ; niṣprāṇakodakena Ms ; *srog chags med pa'i chu rdul med pa dang bsres te* Tib ¹⁷ niṣkaluṣeṇā°-] Ms ; niḥkaluṣeṇā°- Gaṇ Vai ¹⁸ supidhānapihitam] Ms ; supidhānam pathitam Gaṇ ; supidhānam pithitam Vai ; *legs par bkab* Tib ¹⁹ deśa] corr. ; deśe Ms Gaṇ Vai ; Cf. BHSgram., 4.51-56. ²⁰ ātmanaś ca] Ms (*gtsang ba'i phyogs su srung ba byas shing bdag nyid kyang gtsang bar byas* Tib) ; ātmanaḥ Gaṇ Vai ²¹ pūrṇa°-] Gaṇ Vai ; pūrṇa°- Ms ²² kuśaviṇḍakopaviṣṭa] corr. ; -°opaviṣṭaḥ Ms Gaṇ ; kuśaviṇḍakopaviṣṭa Vai ; Cf. BHSdic. p.487 ²³ mantrapadā] corr. ; mantrapadāḥ Ms Gaṇ Vai ²⁴ bhagavan] corr. ; bhagavam Ms Gaṇ Vai ²⁵ -dhara] Vai ; -dharah Gaṇ ; ++ Ms ; *dhā ra* Tib(D) ; *dha ra* Tib(P)

kaya māṃ samayam anusmara kumārarūpadhāriṇe⁽¹³⁾ mahābodhisattva

kiṃ cirāyasi / hūṃ hūṃ phaṭ¹ phaṭ svāhā //(14)

anena mantreṇa kṛtajāpaḥ tatraiva svapeta/ svapne kathayati siddhim² asiddhiṃ
Ms 3b4

vā//

tata³ utthāya mā vilambitaṃ⁴ siddhinimittaṃ svapnaṃ dṛṣṭvā taṃ paṭaṃ likhā-
payet/ na ced siddhinimittāni⁵ svapnāni dṛśyante, tatpaṭaṃ tasmād bhāṇḍād ud-

dhrīyātape⁶ śoṣayet/ śoṣayitvā ca bhūyo⁷ 'nye⁸ nave bhāṇḍe nyaset/ suguptaṃ⁹
Ms 3b5

ca kṛtarakṣaṃ ca sthāpayet/ tato bhūyo teṣāṃ¹⁰ paramahrdayānāṃ anyatamaṃ¹¹

mantraṃ grhītvā, ya-theṣṭataḥ ṣaḍakṣarānāṃ bhūyo 'kṣaralakṣaṃ¹² jayet/ tata¹³

āśu tatpaṭaṃ¹⁴ sidhya-tīti//

4-2-1

[Ms 3b5 ; Gaṇ p.75-10 ; Vai p.52-18 ; Tib(D) 141a7 ; Tib(P) 102a1 ; Ch p.864a11]

āḍau tāvat taṃ paṭaṃ gr̥hya prātihārapakṣe¹⁵ 'nye¹⁶ vā śukle 'hani, śubhanakṣa-
Ms 3b6

trasaṃyukte śubhāyāṃ¹⁷ tithau¹⁸ śuklapakṣadivasavāre¹⁹ vā, suśobhanaiḥ śaku-

¹ phaṭ] Gaṇ Vai ; phaṭa Ms ² siddhim] Ms Vai ; siddhir Gaṇ ³ tata utthāya] Vai ; tatotthāya Gaṇ ; [t=x]++[x=ā]ya Ms ; *de nas langs nas* Tib ⁴ māvilambitaṃ] em. ; māvilambitasiddhi°- Ms ; avilambitasiddhi°- Gaṇ Vai ; *rmi lam du grub pa'i mtshan ma mthong na ring po mi thogs par ras ris bri bar bya'o* Tib ⁵ siddhinimittāni] em.(*gal te grub pa'i mtshan ma rmil ma du ma mthon* Tib) ; asiddhinimittāni Ms Gaṇ Vai ⁶ uddhrīyātape] corr. ; uddhrīya ātape Ms Gaṇ Vai ; Cf. BHSgram., 4.51-56. ⁷ bhūyo] Ms ; bhūyaḥ Gaṇ Vai ⁸ 'nye] corr. ; anye Ms Gaṇ Vai ⁹ suguptaṃ] Vai (*shin tu dben par*) Tib ; ++ptaṃ Ms ; saguptaṃ Gaṇ ¹⁰ teṣāṃ] Gaṇ Vai ; +ṣām Ms ¹¹ anyatamaṃ] Gaṇ Vai ; anyatamā++mam Ms ; *gandg yang rung ba'i sngags* Tib ¹² 'kṣaralakṣaṃ] corr. ; +[kṣ=x]ralakṣaṃ Ms ; akṣaralakṣaṃ Gaṇ Vai ; *yi ge 'bum* Tib ; Cf. 六字微妙心眞言一洛叉 Ch ¹³ tata] Ms ; tato Gaṇ Vai ¹⁴ āśu tatpaṭaṃ] Gaṇ Vai ; āśu tampaṭaṃ Ms ; *ras mi dge ba yang 'grub par 'gyur ro* Tib ¹⁵ prātihārapakṣa: Cf. BHSdic. p.391 ¹⁶ 'nye] Ms ; anye Gaṇ Vai ; om. Tib ¹⁷ śubhāyāṃ] Gaṇ Vai ; su[ś=x]++ Ms ¹⁸ tithau] Gaṇ Vai ; ṭi[x=au] Ms ¹⁹ -°divasavāre] Ms ; -°divase Gaṇ Vai ; (śuklapakṣadivasavāre vā ... karpūradhūpaṃ dahatā//)n.e. Tib

naiḥ⁽¹⁵⁾ maṅgalasammatāyāṃ rātrāv¹ ardharātrakālasamaye² upośadhikena citraka-
 Ms 4a1
 reṇa taṃ paṭaṃ citrāpayet śucau pradeśe karpūradhūpaṃ dahatā//

4-2-2-1

[Ms 4a1 ; Gaṇ p.75-14 ; Vai p.52-21 ; Tib(D) 141b1 ; Tib(P) 102a2 ; Ch p.864a15]

ādau tāvad āryamañjuśriyaṃ³ bāladārakākāraṃ⁴ pañcacīrakaśiraskaṃ⁵ bālālaṅkāra-
 bhūṣitaṃ⁶ kanakavarṇaṃ⁷ nīlapaṭṭacalanikānivasitaṃ nīlapaṭṭāṃśukottariyaṃ⁸ dha-
 rmaṃ⁹ deśayamānaṃ siṃhāsane 'rdhaparyaṅkopaviṣṭaṃ¹⁰ dakṣiṇacaraṇaṃ ratna-
 Ms 4a2
 pādapiṭhasthaṃ¹¹ siṃhāsanopaviṣṭaṃ¹² sarvālaṃkāropetaṃ¹³ cārudarśanaṃ¹⁴ īṣat¹⁵
 smitamukhaṃ sādhakagatadrṣṭim citrāpayet¹⁶//

4-2-2-2

[Ms 4a2 ; Gaṇ p.75-19 ; Vai p.52-25 ; Tib(D) 141b3 ; Tib(P) 102a4 ; Ch p.864a20]

dakṣiṇapārśva¹⁷ āryasamantabhadraṃ sitacāmaroddhūyamānaṃ priyaṅguśyāmaṃ¹⁸
 Ms 4a3
 vāmahastacintāmaṇivinyastaṃ sarvāṅgaśobhanaṃ¹⁹ sarvālaṅkārabhūṣitaṃ²⁰ nīla-

¹ rātrāv] corr. ; rātrau Gaṇ Vai Ms ; Cf. BHSgram. 4.51-56. ² ardha°] Gaṇ Vai ; arddha°- Ms
³ -°mañju°-] Gaṇ Vai ; -°mañju°- Ms ⁴ -°dārakākāraṃ] Gaṇ Vai ; -°dā+kārī+m Ms ; *khye'u*
yi gzugs can Tib ⁵ pañcacīrakaśiraskaṃ] Gaṇ Vai ; pañcacīrakasaśiraskaḥ^(pc; -°śiraska× ac)
 Ms ; *mgo zur phud lnga dang ldan pa* Tib ⁶ -°bhūṣitaṃ] Gaṇ Vai ; -°vibhūṣitaṃ Ms ; *br-*
gyan pa Tib ⁷ -°varṇaṃ] Gaṇ Vai ; -°varṇaṃ Ms ⁸ nīlapaṭṭā°-] Gaṇ Vai ; nīlapaṭā°- Ms
⁹ dharmam] Gaṇ Vai ; dharmo Ms ¹⁰ 'rdhaparyaṅkopaviṣṭaṃ] em. ; arddha+ryaṅkopaviṣṭaṃ
 Ms ; ardhaparyaṅkopaviṣṭadakṣiṇacaraṇaṃ Gaṇ Vai ¹¹ ratnapādapiṭhasthaṃ] Gaṇ Vai ;
 ratnapīṭhākaṣaṃsthāpitaṃ^(pc; -°pīṭhnāka°- ac) Ms ; *rin po che'i zhabs rten la bzha[gbsten Tib(P)]*
pa Tib ¹² siṃhāsanopaviṣṭaṃ] em. ; siṃhāsanopaviṣṭena Ms ; sthāpitasiṃhāsanopaviṣṭaṃ Gaṇ
 Vai ; *g-yon pa seng ge'i gdan la bzugs pa* Tib ¹³ sarvālaṃkāropetaṃ] Gaṇ Vai ; -°opetacāru°-
 Ms ; *rgyan thams cad dang ldan pa bzhin* Tib ¹⁴] Gaṇ Vai ; -°opetacāru°- Ms ; om. Tib ¹⁵ īṣat
 smitamukhaṃ] Ms Vai ; īṣasmitamukhaṃ Gaṇ ; *cung zad 'dzum pa dang bcas pa* Tib ¹⁶ citrā-
 payet] Gaṇ Vai ; citrāpayāt Ms ¹⁷ dakṣiṇapārśva] corr. ; dakṣiṇapārśve Ms ; dakṣiṇe pārśve
 Gaṇ Vai ; Cf. BHSgram. 4.51-56. ¹⁸ priyaṅgu°-] Gaṇ Vai ; priyaṅgu°- Ms ¹⁹ sarvāṅga°-]
 Gaṇ Vai ; sarvāṅga°- Ms ²⁰ -°bhūṣitaṃ] Gaṇ Vai ; -°vibhūṣitaṃ Ms ; *brgyan pa* Tib

paṭṭacalanikānivastaṃ muktāhārayajñopavītaṃ sthitakaṃ¹⁽¹⁶⁾ śvetapadmāsanasthaṃ
citrāpayitavyam^{2//}

4-2-2-3

[Ms 4a3 ; Gaṇ p.75-23 ; Vai p.52-28 ; Tib(D) 141b4 ; Tib(P) 102a5 ; Ch p.864a22]

āryamañjuśriyasya³ vāmapārśva⁴ āryāvalokiteśvaraḥ⁵ śaratkāṇḍagauro⁶⁽¹⁷⁾ nīlapaṭṭa-
Ms 4a4
calanikānivastaḥ sarvāṅgaśobhanaḥ⁷ sarvālaṅkāravibhūṣito⁸ muktāhārayajñopavīto⁹
vāmahaste¹⁰ śvetapadmavinyasto¹¹ dakṣiṇahaste sitoddhūyamānacamarahemaṇḍa-
Ms 4a5
vinyastaḥ¹² saumyākāra¹³ āryamañjuśriyagatadrṣṭiḥ^{14/} tathaiṅvāryasamantabhadraḥ¹⁵,
Gaṇ 76 śvetapadmāsanasthāv¹⁶ ubhāv apy etāv¹⁷ abhilekhyau//

4-2-2-4⁽¹⁸⁾

[Ms 4a5 ; Gaṇ p.76-1 ; Vai p.52-31 ; Tib(D) 141b6 ; Tib(P) 102a7 ; Ch p.864a26]

Vai 53 ekapadmaviṭape¹⁸ sthitāni trīṇi padmāsanāni¹⁹, madhyamamūlapadmakarṇikāyām²⁰
Ms 4a6

¹ sthitakaṃ] Ms ; sikataṃ Gaṇ Vai ; n.e. Tib ; (sitakaṃ L) ; Cf. BHSdic. p.611(sthitaka)
² -°tavyam] Gaṇ Vai ; -°tavyaḥ Ms ³ -°mañju°] Gaṇ Vai ; -°mañju°- Ms ⁴ -°pārśva]
corr. ; -°pārśve Ms Gaṇ Vai ; Cf. BHSgram. 4.51-56. ⁵ -°eśvaraḥ] Gaṇ Vai ; -°eśvaraṃ
Ms ⁶ śaratkāṇḍagauro] corr. ; śaratkāṇḍagauraḥ Ms ; om. Gaṇ Vai ; *ston ka'i zla rgyu'i
mdog ltar dkar ba* Tib ⁷ sarvāṅga°] Gaṇ Vai ; sarvāṅga°- Ms ⁸ -°vibhūṣito] corr. ;
-°vibhūṣitaḥ Gaṇ Vai ; -°vibhūṣitaṃ Ms ⁹ -°yajñopavīto] corr. ; yajñopavītaḥ Ms Gaṇ Vai
¹⁰ vāmahaste śvetapadma°] Gaṇ Vai ; vāmahastaśvetapadma°- Ms ; *lag pa g-yon pa na pad ma
dkar po ...* Tib ¹¹ -°vinyasto] corr. ; -°vinyastaḥ Ms Gaṇ Vai ¹² sitoddhūyamānacamarahema-
maṇḍavinyastaḥ] conj. ; (sitoddhūyamāna++++[h=×][m=×]++vinyastaḥ)Ms ; sitoddhūyamā-
nacamarahemaṇḍavinyastaḥ Gaṇ Vai ; *rnga yab gser gyi yu ba can dkar po thogs pa* Tib
¹³ saumyākāra] Ms ; saumyākāraḥ Gaṇ Vai ¹⁴ -°mañjuśriya°] Gaṇ Vai ; -°mañjuśriya°-
Ms ¹⁵ tathaiṅvāryasamantabhadraḥ ... abhilekhyau/ : *de bzhin du 'phags pa kun du bzang po pad
ma dkar po la gnas pa | gnyi ga yang de ltar bri bar bya'o* || Tib ¹⁶ -°āsanasthāv] corr. ;
-°āsanasthau Ms Gaṇ Vai ; Cf. BHSgram. 4.51-56. ¹⁷ etāv] corr. ; etau Ms Gaṇ Vai ; *de
ltar* Tib ; Cf. BHSgram. 4.51-56. ¹⁸ ekapadmaviṭape sthitāni] em.(*de nas sdong bu gcig las
skyes pa'i pad ma gsum la dbus kyi rtsa ba'i pa dma'i ge sar la ni ...* Tib) ; ekapadmaviṭape^{(pc} ;
-°viṭape^{ac}) sthitau Ms ; ekapadmaviṭapothitau Gaṇ Vai ; (Cf. 於一莖幹有三枝蓮華 天) ¹⁹ pad-
māsanāni] Ms ; padmāni Gaṇ Vai ; *pad ma* Tib ²⁰ madhyamamūlapadmakarṇikāyām] em.
(*dbus kyi rtsa ba'i pad ma'i ge sar la* Tib) ; madhyame mūlapadme +++[y=×] Ms ; madhyame
mūlapadmakarṇikāyām Gaṇ Vai

āryamañjuśriyasya¹ siṃhāsanaṃ ratnapādapīṭhaṃ² ca/ aparasmim³ padma⁴ ārya-
 samantabhadraḥ⁵, tṛtīye padma⁶ āryāvalokiteśvaraḥ/ śobhanaṃ ca tatpadmadaṇḍaṃ
 marakataratnākāraṃ⁷⁽¹⁹⁾ Ms 4b1 anekapadmapuṣpamukulitaṃ patropetaṃ⁸ vikasitārdha-
 vikasitapuṣpaṃ⁹ mahāsarānavataptotthitaṃ/
 dvau¹⁰ †nāgarājānāv¹¹ aṣṭabhya† nandopanandasandhāritaṃ¹² tatpadmadaṇḍaṃ⁽²⁰⁾,
 sitavarṇau¹³ Ms 4b2 ca tau nāgarājānau saptasphaṭopabhūṣitau¹⁴ sarvālaṅkāraśobhitaśārīrau
 manuṣyārdhakāyāv¹⁵ ahibhogāṅkitamūrty¹⁶ āryamañjuśriyaṃ¹⁷ nirīkṣamāṇau jalā-
 ntārdhanilīnau¹⁸ maṇiratnopaśobhitacchadau¹⁹ likhāpayitavyau//

¹ -°mañju°- 〕 Gaṇ Vai ; -°mañju°- Ms ² ratnapādapīṭhaṃ 〕 Ms ; ratnapīṭhaṃ Gaṇ Vai ; *rin po che'i zhabs rten* Tib ³ aparasmim 〕 Gaṇ Vai ; aparasmimś ca Ms ; *gnyis pa'i pad ma la* Tib ⁴ padma 〕 corr. ; padme Ms Gaṇ Vai ; Cf. BHSgram. 4.51-56. ⁵ āryasamantabhadraḥ 〕 Gaṇ Vai ; āryasamantabhadraḥ śvetapadmāsanastho Ms ⁶ padma 〕 em. ; padme Ms Gaṇ Vai ; Cf. BHSgram. 4.51-56. ⁷ marakataratnākāraṃ 〕 (^{ac}; -°ratnāttaram ^{pc})Ms(see 後註()) (*rin po che ma rgad 'dra ba*)Tib ; marakatapadmākāraṃ Gaṇ Vai ⁸ patropetaṃ 〕 Gaṇ Vai ; [p=×]++lamṭaṃ Ms ; n.e. Tib ⁹ vikasitārdhavigasitapuṣpaṃ mahāsarānavataptotthitaṃ 〕 em. ; vikasitārdhavigasitapadmamahāsarānavataptotthitaṃ Ms ; vikasitārdhavigasitapuṣpamahāsarānavataptotthitaṃ Gaṇ Vai ; *phyed tsam bye ba dang kha bye ba dang ldan pa | msho chen po ma dros pa las skyes pa klu'i rgyal po ...* Tib ¹⁰ dvau nāgarājānāu ... tatpadmadaṇḍaṃ 〕 ; *klu'i rgyal po dga' bo dang nye dga' gnyis pad ma'i sdong bu la 'dzin pa* Tib ; (Cf. 於大無熱惱池出二大龍王。一名難陀二名跋難陀。天) ¹¹ †nāgarājānāv aṣṭabhya† 〕 ; nāgarājā[j=×]+v aṣṭabhya <padmanāḍaṃ> Ms ; nāgarājāv aṣṭabhdhanābhaṃ Gaṇ Vai ; *klu'i rgyal po* Tib ¹² -sandhāritaṃ tatpadmadaṇḍaṃ 〕 Gaṇ Vai ; -sandhāritapadmadaṇḍaṃ Ms ¹³ -°varṇau 〕 Ms Vai ; -°varṇā Gaṇ ¹⁴ saptasphaṭopabhūṣitau 〕 (^{ac}; saptasphaṭaupabhūṣitau ^{pc}*)Ms (*gdengs ka bdun gyis nye bar bryan pa*)Tib ; saptasphaṭāvabhūṣitau Gaṇ Vai ; (Cf. 於頭上戴七龍頭 天) ¹⁵ -kāyāv 〕 em. ; -kāyau Ms Gaṇ Vai ; *lus kyi stod mi* Tib ¹⁶ ahibhogāṅkitamūrty 〕 em. ; ahibhogāṅkitamūrtayaḥ Gaṇ Vai ; abhibhogāddhāṅkitamūrttayaḥ Ms ; *sbrul gyi gdengs kas mtshan pa* Tib ¹⁷ -°mañju°- 〕 Gaṇ Vai ; -°mañju°- Ms ¹⁸ jalāntārdha- 〕 Gaṇ Vai ; jalādanilīnau Ms ; *lus phyed chu'i nang du nub pa* Tib ¹⁹ maṇiratnopaśobhitacchadau 〕 Ms Gaṇ Vai ; *nor bu rin po che dang gos kyes nye bar mdzes pa bri bar bya'o* Tib

4-2-2-5⁽²¹⁾

[Ms 4b2 ; Gaṇ p.76-5 ; Vai p.53-4 ; Tib(D) 142a2 ; Tib(P) 102b3 ; Ch p.864b5]

samantāc ca mahāsaram¹/ adhasat sādhaḥakḥ dakṣiṇapārśve paṭāntakoṇa² ārya-
mañjuśriyasya vaktramaṇḍalanirīkṣamāṇo³ dhūpakaṭacchukavyagrahasto⁴ avanata-
Ms 4b3
śirakorparajānukāyaḥ⁵ yathāveṣavarṇaṃ⁶ tathābhilekhyah⁷//

4-2-2-6⁽²²⁾

[Ms 4b3 ; Gaṇ p.76-5 ; Vai p.53-4 ; Tib(D) 142a3 ; Tib(P) 102b4 ; Ch p.864b7]

upariṣṭād āryamañjuśriyasyobhau⁸ paṭāntakoṇābhyāṃ dvau devaputrau mālādhā-
riṇau⁹ puṣpamālāgrhītāv¹⁰ utpatamānau¹¹ meghāntarnilīnau¹² mahāpuṣpaugham¹³
Ms 4b4
utsrjamānau suśobhanāv¹⁴ abhilekhyau//

4-2-2-7

[Ms 4b4 ; Gaṇ p.76-16 ; Vai p.53-13 ; Tib(D) 142a4 ; Tib(P) 102b4 ; Ch p.864b9]

samantāc¹⁵ ca tatpaṭaṃ¹⁶ nāgakesarādibhiḥ puṣpaiḥ prakiritam¹⁷⁽²³⁾ abhilihket/

¹ mahāsaram] Vai ; mahāsaram Ms Gaṇ ; *mtsho chen po kun gyi 'og tu ...* Tib ² paṭāntakona] corr. ; paṭāntakone Ms Gaṇ Vai ³ vaktramaṇḍalanirīkṣamāṇo] (+ktramaṇḍalanirīkṣamāṇo *pc* ; -°nirīkṣamāṇau *ac*)Ms ; vaktramaṇḍalaṃ nirīkṣamāṇo Gaṇ Vai ; *zhal gyi dkyil 'khor la lta ba* Tib ⁴ -°kaṭacchukavyagrahasto] corr. ; -°hastah Ms Vai ; -°kaṭacchakavyagrahastah Gaṇ ⁵ avanataśirakorparajānukāyaḥ] Ms Gaṇ Vai ; *mgo dang pus mo'i lha nga 'dud pa* Tib ⁶ -°varṇaṃ] (-°varṇaṃ)Ms ; -°varṇataḥ Gaṇ Vai ; *cha byad dang kha dog snga ma ci lta ba bzhi ...* Tib ⁷ tathābhilekhyah] em. ; tathābhilekhyam Ms ; tathābhilekhyam Gaṇ Vai ⁸ -°mañjuśriyasyobhau] corr. ; -°mañjuśriyasya ubhau Gaṇ Vai Ms ⁹ mālādhāriṇau] Ms Gaṇ Vai ; n.e. Tib ¹⁰ -grhītāv] em. ; -grhītau (-grhī[×=au])Ms Gaṇ Vai ; *me tog gi phreng ba 'dzin pa* Tib ¹¹ utpatamānau] Gaṇ Vai ; +patamānau Ms ; *nam mkha' la ldīng ba* Tib ¹² meghāntarnilīnau] Ms Gaṇ Vai ; *sprin gyi nang nas byung ba* Tib ¹³ mahāpuṣpaugham] (*pc* ; mahāpuṣpaugham *ac*)Ms Gaṇ Vai ; *me tog gi tshogs chen po* Tib ¹⁴ suśobhanāv] corr. ; suśobhanau Ms Gaṇ Vai ¹⁵ samantāc] Gaṇ Vai ; saṃmantāc Ms ¹⁶ -°paṭaṃ] Gaṇ Vai ; -°paṭan Ms ¹⁷ prakiritam] Ms Gaṇ Vai ; *rab tu gtor bar* Tib

yatheṣṭataś ca¹ trirūpakādhiṣṭhitam²⁽²⁴⁾ vā abhiliḥket/ āryamañjuśrī³ dharmam⁴
Ms 4b5
 deśayamānaḥ, āryasamantabhadrā⁵ āryāvalokiteśvaraś ca⁶ camaravinyastapāṇiḥ⁷
 likhāpayitavyaḥ⁸/

yathābhirucitam⁹ vā sādhakasya trīṇi¹⁰ rūpakāṇy atyavaśyam¹¹ likhāpayitavyāni/
Ms 4b6
 yatheṣṭākāraṃ¹² vā yathāsamsthānasamsthitam¹³ vā sādhakasya yathā yathā ro-
 cate¹⁴ tathā tathā likhāpayitavyāni¹⁵/

madhye cāryamañjuśrī¹⁶ ubhayānte¹⁷ cāryāvalokiteśvaraḥ¹⁸ samantabhadrāś¹⁹ ca
 yathepsito²⁰ atyavaśyam²¹ likhāpayitavyaḥ²²/
Ms 5a1

yathālabdhe vā karpaṭakhaṇḍe vitastimātre²³ hastamātre vā, ātmanā vā pareṇa vā
 citrakareṇa, ⁽²⁵⁾ poṣadhikena vāpoṣadhikena²⁴ vā, śrāddhena²⁵ vāśrāddhena²⁶ vā,
 śucinā vāśucinā²⁷ vā, śīlavatā²⁸ vā duḥśīlena²⁹ vā, citrakareṇa³⁰ likhāpayitavyaḥ // Gaṇ 77

¹ ca] Gaṇ Vai ; cha Ms ² trirūpakādhiṣṭhitam] Gaṇ Vai ; trirūpakadhiṣṭhitam Ms(see 後註());
ci ltar 'dod pa'i gzugs de bzhin du Tib ³ -°mañjuśrī] corr. ; -°mañjuśrīh Gaṇ Vai ; -°mañjuśrī
 Ms ⁴ dharmam] Gaṇ Vai ; dharmām Ms ⁵ -°bhadrā] corr. ; -°bhadrāh Ms Gaṇ Vai ⁶ ca]
 em. ('phags pa kun du bzang po dang 'phags pa spyan ras gzigs Tib) ; om. Ms Gaṇ Vai ⁷ -°pāṇiḥ]
 em. ; -°pāṇayo Ms Gaṇ Vai ⁸ likhāpayitavyaḥ] em. ; likhāpayitavyau Ms ; likhāpayitavyāh Gaṇ
 Vai ⁹ yathābhirucitam] (yathā+++tam Ms) ; yathābhirucitakam Gaṇ Vai ; *ci ltar 'dod pa bzhin
 du Tib* ¹⁰ trīṇi rūpakāṇy] corr. ; trīṇi rūpakāṇi Gaṇ Vai ; trīṇi rūpāṇi Ms ; *ras ris kyi gzugs Tib*
¹¹ atyavaśyam] em. ; atyavaśya Ms ; avaśyam Gaṇ Vai ; *nges par Tib* ¹² yatheṣṭākāraṃ] em.
 ; yatheṣṭākārā Ms Gaṇ Vai ; *ci ltar 'dod pa'i cha byad Tib* ¹³ -°samsthitam] em. ; -°samsthitā
 Ms Gaṇ Vai ; *ci ltar 'dod pa'i dbyibs Tib* ¹⁴ rocate] Ms Gaṇ Vai ; *'dod pa Tib* ¹⁵ likhāpayi-
 tavyāni] Ms ; likhitavyāni Gaṇ Vai ¹⁶ cāryamañjuśrī] corr. ; ca āryamañjuśrī Ms ; ca ārya-
 mañjuśrīh Gaṇ Vai ¹⁷ ubhayānte] Ms Gaṇ Vai ; *g-yas g-yon du Tib* ¹⁸ cāryāvalokiteśvaraḥ]
 em. ; ca āryāvalokiteśvaraḥ Gaṇ Vai ; xvalokiteśvaraḥ Ms ¹⁹ samantabhadrāś ca] Gaṇ Vai ;
 samantabhadrā Ms ²⁰ yathepsito] corr. ; yathepsitaḥ Ms Gaṇ Vai ²¹ atyavaśyam] Ms ; anya
 avaśyam Gaṇ ; anye avaśyam Vai ; *nges par Tib* ²² likhāpayitavyaḥ] em. ; likhāpayita++ Ms
 ; likhāpayitavyāni Gaṇ Vai ²³ vitastimātre] em. (mtho gang ngam khru gang Tib) ; vitasti-
 hastamātre Ms Gaṇ Vai ²⁴ vāpoṣadhikena] corr. ; vā apoṣadhikena Ms Gaṇ Vai ²⁵ śrād-
 dhena] Gaṇ Vai ; om. Ms ; *dad pa Tib* ²⁶ vāśrāddhena] em. ; vā aśrāddhena Ms Gaṇ Vai ;
ma dad pa Tib ²⁷ vāśucinā] em. ; vā aśucinā Ms Gaṇ Vai ; *mi gtsang ba Tib* ²⁸ śīlavatā]
 em. ; śīlavatena Gaṇ Vai (śī+++tena Ms) ; *tshul khrims dang ldan pa Tib* ; Cf. BHSgram. 18.42.
²⁹ duḥśīlena] Gaṇ Vai (*tshul khrims 'chal ba'i Tib*) ; aśīlavatena Ms ³⁰ citrakareṇa] Gaṇ Vai
 ; om. Ms ; *ri mo mkhan gyis kyang Tib*

ātmanā¹ sādakenātyavaśyaṃ² kṛtapuraścaraṇena śrāddhenotpāditabodhicittenā-
Ms 5a2
 vaśyaṃ³ bhavitavyam iti //

5

[Ms 5a2 ; Gaṇ p.77-3 ; Vai p.53-24 ; Tib(D) 142b1 ; Tib(P) 103a1 ; Ch p.864b17]⁽²⁶⁾

evaṃ⁴ sidhyanti mantrā vai nānyeṣāṃ pāpakarṃiṇām⁵/
 śrāddhena⁶ tathā bhūtvā sādhanīyā⁷ mantradevatāḥ⁸ //1//
 sidhyate⁹⁽²⁷⁾ mantrarāṭ tasya śrāddhasyaiveha¹⁰ nānyathā⁽²⁸⁾
 śraddhā hi paramaṃ yānaṃ yena niryānti¹¹ nāyakāḥ¹² //2//⁽²⁹⁾
Ms 5a3
 aśrāddhasya manuṣyasya śuklo dharmo na rohate/
 bījānām agnidagdhānām¹³ aṅkuro¹⁴ harito¹⁵ yathā //3//⁽³⁰⁾
 śrāddhe sthitasya martyasya¹⁶ bodhyārambha¹⁷ hi karmaṇā¹⁸/
 sidhyante¹⁹ devatās tasya aśrāddhasya na sidhyati⁽³¹⁾ //4//
Ms 5a4

Vai 54

¹ ātmanā ... bhavitavyam iti//: *bdaḡ nyid dam sgrub pa pos nges par sngon du bsnyen pa byas pa dang dad pa dang byang chub tu sems bskyed pa ni nges par bya'o* Tib ² sādakenātyavaśyaṃ] corr. ; sādakena atyavaśyaṃ Ms ; sādakena avaśyaṃ Gaṇ Vai ; *sgrub pa pos nges par* Tib ³ śrāddhenotpāditabodhicittenāvaśyaṃ] Ms ; śrāddhena utpāditabodhicittena avaśyaṃ Gaṇ Vai ⁴ evaṃ sidhyanti mantrā] Ms Gaṇ Vai ; *de ltar byas na sngags 'grub par 'gyur gyi* Tib ⁵ -°karṃiṇām] (-°karmṃiṇām)Ms (*sdig pa'i las can* Tib) ; -°kāriṇām Gaṇ Vai ⁶ śrāddhena ... sādhanīyā] *de ltar dad pa dang de ltar gyur pas bsgrub par bya'o* Tib ⁷ sādhanīyā] Gaṇ Vai ; sā<rdha>dha×× Ms ; *bsgrub par bya'o* Tib ⁸ -°devatāḥ] Gaṇ Vai ; -°devatā sidhyante mantrarāṭ ... Ms ⁹ sidhyate] conj. ; sidhyante Ms Gaṇ Vai ¹⁰ śrāddhasyaiveha] Gaṇ Vai ; śrāddhasyeha Ms ; *'dir dad pa dang ldan pas* Tib ¹¹ niryānti] Ms ; yānti Ms ; n.e. Tib ¹² nāyakāḥ] Ms ; *vināyakāḥ* Gaṇ Vai ; *nam par 'dren pa* Tib ¹³ -°dagdhānām] Gaṇ Vai ; -°dagdhānām Ms ¹⁴ aṅkuro] Gaṇ Vai ; aṅkuro Ms ¹⁵ harito] Ms Gaṇ Vai ; *sngon po* Tib ; (Cf. 譬如焦穀永絕其芽. 天) ¹⁶ martyasya] Gaṇ Vai ; marttasya Ms ; *mi dag* Tib ¹⁷ bodhyārambha] Ms(boddyārambha) ; boddhāraṃ Gaṇ Vai ; *sangs rgyas* Tib ¹⁸ karmaṇā] Gaṇ Vai ; karmaṇi Ms ; *sangs rgyas las* Tib ¹⁹ sidhyante ... na sidhyati//(v.4cd)] Gaṇ Vai ; sidhyante sarvadevatāḥ/ tasya aśrāddhasya na siddhya+ sarvamantrā viśeṣata// Ms (unmetrical? Ms is likely to confuse v.4cd–v.5ab) ; n.e. Tib

<<aśrāddhasya¹ na sidhyanti>> sarvamantrā² viśeṣataḥ/

laukikā devatā ye 'pi³ ye⁴ 'pi lokottarā tathā //5//

sarve vai śraddadhānasya⁵ sidhyante⁶ vigatakalmaṣaḥ⁷/

āśu siddhir⁸ dhruvā⁹ teṣāṃ bodhis¹⁰ tadgatamānasām¹¹⁽³²⁾ //6//

nānyeṣāṃ kathyate siddhiḥ śāsane¹² 'smin¹³ nivāritāḥ¹⁴/

Ms 5a5

paṭaḥ svalpo viśeṣo¹⁵ vā madhyamo¹⁶ parikīrtitaḥ¹⁷ //7//

adhunā tu pravakṣyāmi sarvakarmasu sādhanam //8ab//

iti//

bodhisattvapiṭakān mahāyānavaipulyasūtrād āryamañjuśrīyamūlakalpāt saptamaḥ

paṭalavisarāt caturthaḥ paṭavidhānapaṭalavisaraḥ parisamāpta iti //18

¹ aśrāddhasya na sidhyanti || conj. ; ++++++ Gaṇ Vai ; n.e. Ms (→haplography?); *dad pa med la mi 'grub bo* Tib(n.e. for Skt v.4cd) ² sarvamantrā viśeṣataḥ || Gaṇ Vai ; ... viśeṣata Ms ; *sngags rnam s thams cad khyad par du* Tib ³ 'pi || Gaṇ Vai ; pi Ms ⁴ ye 'pi || Gaṇ Vai ; n.e. Ms ⁵ śraddadhānasya || Gaṇ Vai ; śra<ddha: cancelled>ddadhānasya Ms ⁶ sidhyante || Ms ; sidhyate Gaṇ Vai ; 'grub 'gyur Tib ⁷ vigatakalmaṣaḥ || Ms Gaṇ Vai ; *sdig pa dag dang bral phyir ro* Tib ⁸ siddhir || Gaṇ Vai ; siddhiḥ Ms ⁹ dhruvā || Gaṇ Vai ; dhruvās Ms ¹⁰ bodhis || Gaṇ Vai ; bodhau Ms ; *chang chub* Tib ¹¹ -°mānasām || Gaṇ Vai ; -°mānasāṃ nānyeṣāṃ ... Ms ; *der song yid kyis* Tib ¹² śāsane || Gaṇ Vai ; śāmsane Ms ¹³ 'smin || Gaṇ Vai ; smin Ms ¹⁴ nivāritāḥ || Gaṇ Vai ; nivāritā Ms ; *rnam par bzlog* Tib ¹⁵ viśeṣo || Gaṇ Vai ; viśiṣo Ms ; *chen po* Tib ¹⁶ madhyama Ms ¹⁷ parikīrtitaḥ || Gaṇ Vai ; parikīrtitaḥ Ms ; *nye bar bsgrags pa yin* Tib ¹⁸ bodhisattvapiṭakān ... parisamāpta iti || Gaṇ Vai ; om. Ms ; *byang chub sems dpa'i sde snod phal po che theg pa chen po shin tu rgyas pa'i mdo las | 'phags pa 'jam dpal gyi rtsa ba'i cho ga bdun pa'i le'u rab 'byam las | ras ris kyī cho ga bzhi pa'i le'u rab 'byam rdzogs so || Tib*

第7章 後註

- (1) [MMK Ch.4, 2] *sādhu sādhu mañjuśrīḥ yas tvaṃ bahunahitāya pratipanno lokānukampāyai, yas tvaṃ tathāgatam etam arthaṃ paripraśtavyaṃ manyase /*
- (2) [MMK Ch.2(Gaṇ p.51-1)] ... *prathamasādhana eva sidhyatīty avikalpataḥ!*
- (3) [MMK ch.4, 2] *tvadīyaṃ paṭavidhānavisarasarvamantracaryāsādhanaṃ anupraveśam anupūrvakaḥ vakṣye 'haṃ, pūrvanirdiṣṭaṃ sarva-tathāgatāiḥ ahaṃ apīdānīm bhāṣiṣye //*
 [MMK ch.4, 3-2-3, v.37] *mañjuśriyo mahāvīro mantrarūpeṇa bhāṣitaḥ / atīair bahubhir buddhair mayāpy etarhi punaḥ punaḥ //*
 [MMK ch.4, 4, v.60] *etatpaṭavidhānaṃ tu uttamaṃ jinabhāṣitaṃ / saṃkṣiptaṃ vistarākhyātaṃ pūrvam uktaṃ tathāgatāiḥ //*
- (4) §3以降は「六字文殊成就法」を説く経軌と類似する内容が説かれている。主な経軌として以下をあげておく。
 (i) MMK ch.29
 (ii) 『陀羅尼集経』(大正no.901) 卷六「文殊師利菩薩法印呪」阿地瞿多訳
 (iii) 『文殊師利菩薩六字呪功能法経』(大正no.1179)失訳
 (iv) 『六字神呪経』(大正no.1180)菩提流志訳
 これらの経軌にはいずれも六字真言が説かれており、当該箇所にも説かれる六種の六字真言の中の6番目に説かれる *om vākye daṃ namaḥ* に対応している(後注(5)参照)。
- (5) 当該の六字真言は、本経の他の章や後註(4)で示した関連経軌にも確認され、数種類の異読がある。
 (i) *om vākye da namaḥ* : [MMK ch.1(Gaṇ p.3-8 Vai p.2-16)]←(森口[1977]によれば、*Mañjuśrī-jñānatantra* と題された本経第1章と第2章の前半部分に相当する写本(NGMPP. reel no.A 136/11)が現存するが、筆者は未見である。)
 (ii) *om vākyeda namaḥ* : [MMK ch.7(Gaṇ p.74-3 Vai p.51-24); ch.29(Gaṇ p.322-16 Vai p.249-14)]
 (iii) *om vākye daṃ namaḥ* : [MMK Ch.7(Ms f.2b-6); Ch.29(Ms f.12a-1)]←(作成者による読み)
 (iv) *om vākyedaṃ namaḥ* : [*Siddhaikavīratāntra*, III(p.14-14)] [*Sāadhanamālā*, no.67(p.140); no.71(p.143); no.81(p.158); no.83(p.167)]
*da*と*daṃ*の違いによって(i)(ii)と(iii)(iv)に区分され、また*vākye*をf, sg, V.の呼格にとり、*da*または*daṃ*を種子のように理解するか否かで解釈が分かれるところである。また漢訳文献は以下である。
 (a) 唵婆羅陀那摩莎訶 『陀羅尼集経』 vol.18,p.838,c19
 (b) 唵婆計陀那摩 『文殊師利菩薩六字呪功能法経』 vol.20,p.778,b12
 (c) 唵婆髻馱那莫 『六字神呪経』 vol.20,p.779,b14
- (6) [MMK ch.4, 3-2-1, v.10] *uttame uttamaṃ kuryān madhyame madhyasādhanaṃ/ itaraiḥ kṣudrakarmāṇi nikṣṭāny eva sarvataḥ//;*
 [MMK ch.6, 3, v.1] *etat kathitaṃ sarvaṃ trividhaṃ paṭalakṣaṇam/ kanyasaṃ nāmato hy etat paṭaḥ śreyo kṣudrakarmasu//*
- (7) [*Nāmasaṃgīti*, p.61, 25–26.] *yāvat sarvatathāgatasaddharmanetrīsaṃdhāraṇārthaṃ ...*
- (8) [MMK ch.4, 3-2-1, v.11-v.12ab] *tathā mūlyam tato dattvā yathā vadati śilpinaḥ/ prathame vāksamutthāne śilpinasya sa mantravit// dadyāt puṇyam tataḥ kṣipraṃ vīrakrayeti sa ucyate/ ;*
 [*Kryāsamgrahaṇāṅgikā*, 3-4-1] *tato maṇḍalesayogavān ācārya ākāśe sarvatathāgatān avalambya saṃpūjya, akṣatakanyākartitāni vīrakrayakṛitāni vā pañcapañcasūtrāṇi sitapītaraktahari-*

takṣṇair varṇakaiḥ pṛthak pṛthag rañjitāni vuṃ-āṃ-jrīm-khaṃ-hūṃ iti pañcatathāgatābījanīṣ-pannāni tair evādhitīṣṭhet/ ;

[*Vajrāvalī*, 12-1-2] ... 'kṣatakanyākartitāni vīrakrayakṛitāni vā pañcapañcasūtrāṇi pañcapā-trasthāni sitapītaraktaharitakṣṇaiḥ sugandhavarṇakaiḥ siddhārthacūrṇapañcāmṛtamiśraiḥ pṛthak pṛthag rañjitāni/

- (9) [MMK ch.4, 3-1-5] tat sūtraṃ sukartitaṃ śuklaṃ pūrvaśikṣāpitakanyayā *saṃhṛtya*(yang dag par blangs te Tib) aṣṭa pañca trīṇi ekaṃ prabhṛti yāvat ṣoḍaśamātrā palāṃ vā karṣaṃ vā supraśtagaṇanām eṭāṃ kuryān/

→ch.4において同様のコンテキストで*saṃhṛtya*が用いられるが、当該箇所*saṃhṛtya*は画布の断片をつなぐ意味で、上記のch.4における*saṃhṛtya*は、綿糸を縫り合わせる意味として理解しておく。

- (10) [*Sarvathāgatādhiṣṭhānavyūhasūtra*, p.72, 5-7.] ... śuklapakṣe nave paṭake acchinnadaśe keśāpagate śucinā citrakareṇa āryāṣṭāṅgopavāsopavasitena aśleṣai raṅgair navabhājanasthaiś citrāpayitavyam /

[*Amoghapāśakalparāja*, 45a1-2.(Cf.木村[2001]p.16)] maunīvratena pośadhikena citrakareṇa śucinā śucivastradhāriṇā bhavitavyam / tṛśuklabhukle(kte)na trisnāpi(yi)nā bhavitavyam / aśle-ṣakai raṅgair navabhājanasthair navena śucinā kūrccakena / āryāvalokiteśvaram amoghapāśam citrayitavyam /

- (11) [MMK ch.4, 3-1-2] śvetacandanakuṅkumaṃ niṣprāṇakenodakenāloḍya ...

- (12) [*Sarvathāgatattvasaṃgraha*, 1738] vicitravarṇasaṃsthānaṃ padmabimbaṃ tu lekhaḥyettatra bhāvayamānas tu *bahurūpadharo* bhavet//

- (13) [MMK ch.1(Gaṇ p.3, 4-5); ch.2(Gaṇ p.26, 13-14)] oṃ ra ra smara apratihataśāsana *kumārārūpadhāriṇa* hūṃ hūṃ phaṭ phaṭ svāhā //

[MMK ch.4, 3-1-1] oṃ śodhaya śodhaya sarvaviḥnaghātaka mahākāruṇika *kumārārūpadhāriṇe* / vikurva vikurva / samayam anusmara / tiṣṭha tiṣṭha / hūṃ hūṃ phaṭ phaṭ svāhā //

- (14) [MMK ch.1(Gaṇ p.3, 3-5)] namaḥ sarvathāgatānām acintyāpratihataśāsanaṅgāṃ / oṃ ra ra smara apratihataśāsana *kumārārūpadhāriṇa* hūṃ hūṃ phaṭ phaṭ svāhā / ;

[MMK ch.2(Gaṇ p.26, 13-14)] namaḥ samantabuddhānām / oṃ ra ra smara apratihataśāsana *kumārārūpadhāriṇa* hūṃ hūṃ phaṭ phaṭ svāhā / ;

[MMK ch.4, 3-1-1] oṃ śodhaya śodhaya sarvaviḥnaghātaka mahākāruṇika *kumārārūpadhāriṇe* / vikurva vikurva / samayam anusmara / tiṣṭha tiṣṭha / hūṃ hūṃ phaṭ phaṭ svāhā //

- (15) MMK [ch.4, 3-1-3] dhūpaṃ dahatā tasmim samaye mayūrakrauñcahaṃsasārasacakravāka-vividhās śubhaśakunayā jalasthalacāriṇo 'ntarikṣe gaccheyuḥ/ śubhaṃ vā kūjayeyuḥ/ tat sād-hakena jñātavyam/

- (16) [MMK ch.5, 3-6] ... āryamahāmaudgalyāyanaśāriputrau bhagavataḥ śākyamuneḥ cāmaram uddhūyamānau *sthitakāv* abhilekhyau //

- (17) Cf.<試作テキスト>ch.4 後註42.

[MMK ch.5, 2-2-4] bhagavataś ca śākyamuner vāmapārśva āryāvalokiteśvaraḥ *śaratkāṇḍagauro*(ston ka'i zla ba'i mdog ltar dkar ba Tib ; 如秋天滿月 天) ...

[*Sādhanamālā*, 15(Khasarpaṇa)] sa ca *śaratkāṇḍagaurah*(ston ka'i zla ba bzhin du dkar zhing Tib) jaṭāmakuṭī śirasi amitābhadhārī sarvālaṅkārabhūṣitaḥ ...

- (18) [MMK ch.4, 3-3-2-3] yad bhagavato mūlapadmaṅḍam viṭapaṃ tatraiva vinisṛtāny anekāni padmapuṣpāni anupūrvonnatāni vāmapārśve 'ṣṭau padmapuṣpāni/

- (19) Msのマージンにはkāをttaと訂正する書き込みがある。しかしこの訂正では意味不明である。おそらく、ratnottaramと訂正しようとしたが、基字naの左側につくtの子音の文字と母音eの記号を混同

してしまい(当写本においてtとeはほとんど区別がつかない), 前の1文字はtnāのまま, kāのみに訂正を加えてしまったのではないだろうか.

(20) [Divyāvadāna, ch.12, p.162, 9-17.] nandopanandābhyāṃ nāgarājābhyāṃ bhagavata upanāmitaṃ nirmitaṃ sahasrapattraṃ śakaṭacakramātraṃ sarvasauvarṇaṃ ratnadaṇḍaṃ padmam/ bhagavāṃś ca padmakarṇikāyāṃ niṣaṇṇaḥ paryaṅkam ābhujya tṣuṃ kāyaṃ praṇidhāya pratimukhaṃ smṛtiṃ upasthāpya padmasyopari padmaṃ nirmitam/ tatrāpi bhagavān paryaṅkaniṣaṇṇaḥ/ evam agrataḥ pṛṣṭhataḥ pārśvataḥ/ evaṃ bhagavatā buddhapiṇḍī nirmitā yāvad akaniṣṭhabhavanam upādāya buddhā bhagavanto paṣannirmatam/
[MMK ch.4, 3-3-2-2] adhaś ca mahāsāraṃ dvau nāgarājānau taṃ padmanālaṃ dhārayamānau tathāgatadr̥ṣṭau dakṣiṇahastena namasyamānau śuklau sarvālaṅkārahūṣitau manuṣyākārād-dha sarpadehanandopanandau lekhanīyau/

(21) [MMK ch.4, 3-3-2-14] tasya parvatasyādhasṭac chilātalopaniṣaṇṇaṃ pṛthivyāṃ avanatajānudehaṃ dhūpakatacchukavyagrahastam yathāveśasamsthānagr̥hitaliṅgaṃ yathānuvṛttacaritam āryamañjuśriyagatadr̥ṣṭiṃ sādhakam abhiliḥket //

(22) MMK ch.4, 3-3-2-10; ch.5 3-13; ch.6, 2-9

(23) MMK [ch.5, 3-12] samantāc ca tatpataṃ muktapuṣpāvākīraṇaṃ ...
Mahāvastu [, 1-211] divyāni candananacūrṇāni prakiritvā ...

(24) Ms上方のマージンにデーヴァナーガリー文字の4とおそらくtṛと判読できる書き込みがある

(25) Msにはcitrakareṇaとpoṣadhikenaの間に, 1文字分の大きさで判読できない記号のようなものが記されている.

(26) 天息災訳は散文として訳出している.

(27) √sidhはmantrarātと主述関係にあると解釈し, 当該箇所は韻律上の長母音, 短母音の制限がないため, mantrarātに合わせた単数形に訂正して提示した. ただし, Msは ... sā<rdha>dha×× mantradevatā si-dhyante mantrarāt ... とあり, v.1の終わりを示すdaṇḍaが欠落し, v.1cd~v.2abにかけて混乱している. このMSの読みであっても, mantrarātとsidhyanteは主述関係にあると思われる. したがって, いずれの梵本の読みを採るにしても, sidhyateの単数形が適切だと考えられる. またTibは, 散文として当該箇所を訳出し, mantrarātとmantradevatāを√sidhで受ける解釈だと考えられる. mantradevatāに対応するsngags kyi lhaの後ろに複数を示すdagがあることを考慮すれば, √sidhの複数形と対応した訳出になっているが, あくまでTibは散文で当該箇所を理解しており, 原文とは離れた解釈になっていることが前提になっていることを考えれば, ここでのTibの解釈は参考程度にとどめておくべきであろう.

(28) チベット訳はv.1 v.2abまでを散文として訳出している. *de ltar byas na sngags 'grub par 'gyur gyi gzhan du sdig pa'i las can gyis ni mi 'gyur te | de ltar dad pa dang de ltar gyur pas bsgrub par bya'o || sngags kyi rgyal po dang sngags kyi lha dag 'dir dad pa dang ldan pas 'grub par 'gyur gyi gzhan dag gis ni ma yin no ||*

(29) v.2cd-v.3は[Śikṣāsamuccaya, p.5, 8-11.]において類似の偈の引用が確認される.

tathāryadaśadharmasūtre pi deśitam// śraddhā hi paramaṃ yānaṃ yena niryānti nāyakāḥ/ tasmād buddhānuśāritvaṃ bhajeta matimān narah// aśrāddhasya manuṣyasya śuklo dharmo na rohati/ vījānām agnidagdhanām anikuro harito yathā//

この二偈はDaśadharmasūtraからの引用とされているため, 以下に対応する漢訳文献の当該箇所を引用しておく.

『佛說大乘十法經』[no.314 僧伽婆羅訳, vol.11, p.764b23-28.]

信爲最上乘 是以成正覺 是故信等事 智者敬親近 信爲最世間 信者無窮乏 是以信等法 智者正親近 不信善男子 不生諸白法 猶如焦種子 不生於根芽

『大寶積經』[no.310 菩提流志訳, Vol.11, p.151b12-17.]

信爲増上乘 信者是佛子 是故有智者 應常親近信 信是世間最 信者無窮乏 是故有智者 應常親近信
若不信之人 不生諸白法 猶如燒種子 不生根牙等

(30) [MMK ch.4, v.43cd-44ab] *aśrāddhānāṃ tu jantūnāṃ śuklo dharmo na rohate // bījam uṣarakṣetre kṣiptam aṅkuro 'phalo yathā /*

(31) *devatās*が $\sqrt{\text{sidh}}$ の意味上の主語と考えられるため、*sidhyanti*の複数形が適切だと思われる。おそらく韻律上、単数形が採られているのだろう。

(32) 複合語末尾の*mānasa*は*manas*の複数、属格の形*manasām*が、韻律の規則によって*mānasām*となったと思われる。またBHSdic. 8.124.には、a語幹・複数・属格の活用語尾が、類似する語尾をとる、子音語幹・複数・属格の活用語尾の形、- āṃ へと変化してしまう用例があげられている。このような説に基づけば、*manas*から派生した形*mānasa*の複数・属格の形*mānasānām*が*mānasām*へと変化したとも考えられるだろうか。

CḤ. VIII

1-1

[Gaṇ p.78-2 ; Vai p.55-2 ; Tib(D) ; 42b-6 ; Tib(P) 103a-6 ; 天 p.864b26]

atha khalu bhagavān¹ śākyamunir² mañjuśriyaṃ kumārabhūtam āmantrayate sma/
 ye te mañjuśrīḥ tvayā nirdiṣṭāḥ³ sattvā teṣāṃ arthāyedaṃ⁴ paṭavidhānavisaram⁵
 ākhyātam, te svalpenaivopāyena sādhaiṣyante / teṣāṃ arthāya sādhanopayikaṃ
 guṇavistaraprabhedavibhāgaśas⁶ karmavibhāgaṃ⁷ samanubhāṣiṣyāmi / taṃ⁽¹⁾ śṛṇu
 sādhu ca suṣṭhu ca manasi kuru / bhāṣiṣye sarvasattvānām arthāya //

1-2

[Gaṇ p.78-8 ; Vai p.55-6 ; Tib(D) 43a-1 ; Tib(P) 103a8 ;]

atha khalu mañjuśrīḥ kumārabhūto bhagavantam etad avocat / sādhu sādhu bhaga-
 van⁸ subhāṣitā te 'smadvibhāvanoddyotanakarī⁹ mantracaryāguṇaniṣpattiprabhā-
 vanakarī¹⁰ vāṇī¹¹ / tad vadatu¹² bhagavān / yasyedānīm kālāṃ manyase / asmākam
 anukampārtham //

¹ bhagavān 〕 Vai ; bhagavāms Gaṇ ² śākyamunir 〕 Vai ; chākyamunir Gaṇ ³ nirdiṣṭāḥ 〕
 corr. ; nirdiṣṭā Gaṇ Vai ⁴ arthāyedaṃ 〕 corr. ; arthāya idaṃ Gaṇ Vai ; Cf.BHSgram.4.51–56.
⁵ paṭavidhānavisaram 〕 Vai ; paṭavidhānaṃ visaram Gaṇ ; le'u'i(D; le'u yi P) cho ga rab 'byam
 Tib ; (Cf. 像法則 天) ⁶ -°vibhāgaśas 〕 corr. ; -°vibhāgaśo Gaṇ Vai ; *yon tan rgya che ba'i bye*
brag gi dbye ba Tib ; Cf.BHSgram.4.38. ⁷ karmavibhāgaṃ 〕 Gaṇ Vai ; *las rnam par 'byed pa*
 Tib ⁸ bhagavan ... te 〕 Gaṇ Vai ; om. Tib ⁹ -°karī 〕 em. ; -°karīm Gaṇ Vai ; *bdag gi tshig gi*
nus pa gsal bar mdzad Tib ¹⁰ -°karī 〕 Vai ; -°karīm Gaṇ ; *sngags kyi spyod pa'i yon tan grub*
par mdzad pa Tib ¹¹ vāṇī 〕 Vai ; vāṇīm Gaṇ ; om. Tib ¹² vadatu 〕 em. (*de bzhad du gsol*
 Tib) ; vadatu <taṃ> Gaṇ Vai

1-3⁽²⁾

[Gaṇ p.78-12 ; Vai p.55-9 ; Tib(D) 43a-2 ; Tib(P) 103b-1 ; 天 p.864c4]

atha bhagavān¹ śākyamuniḥ² sarvāvantaṃ parṣanmaṇḍalam avalokya smitam akā-
rṣīt / atha bhagavataḥ śākyamuner mukhadvārād³ nīlapītasphaṭikavarṇādayo⁴ raśma-
yo niścaranti sma / samanantaraniścaritā⁵⁽³⁾ ca raśmayāḥ⁶ sarvāvantaṃ parṣan-
maṇḍalam avabhāsya trisāhasramahāsāhasraṃ lokadhātum sarvamārabhavanam
jihmīkṛtya⁷, sarvanakṣatradyotiśailagaṇaprabhāṃ yatremāu⁸ candrasūryau maha-
rdhikau mahānubhāvau tayā prabhayā te 'pi jihmīkṛtya⁹, nāvabhāsyaṃte niṣpra-
bhāṇi ca bhavanti na virocante jihmīkṛtyante¹⁰ ca saṃdrśyante / sarvamaṇimantrau-
śadhiratnaprabhāṃ niḥprabhīkṛtya punar eva bhagavataḥ śākyamuneḥ mukhad-
vāre¹¹ 'ntardhīyate sma //

1-4

[Gaṇ p.78-21 ; Vai p.55-16 ; Tib(D) 43a-5 ; Tib(P) 103b-5 ; 天 p.864c9]

atha khalu vajrapāṇir bodhisattvo mahāsattvaḥ tatraiva parṣanmaṇḍale saṃnipatito
'bhūt / saṃniṣaṇṇaḥ sa utthāyāsanāt tvaramāṇarūpo¹ bhagavataś caraṇayor nipatyā
bhagavantam etad avocat / nāhetukaṃ⁽⁴⁾ nāpratrayaṃ buddhā bhagavantaḥ smitam

¹ bhagavān || Vai ; bhagavāṃś Gaṇ ² śākyamuniḥ || Vai ; chākyamuniḥ Gaṇ ³ -°dvārād ||
corr. ; -°dvārāt Gaṇ Vai ⁴ nīlapītasphaṭikavarṇādayo || Gaṇ Vai ; *sngon po dang ser po dang ljang
gu dang shel gyi kha dog lta bu* Tib ; (Cf. 其光四色青黄赤白 天) ⁵ samanantaraniścaritā || Gaṇ Vai
; *'od zer de byung ma thag tu* Tib ⁶ raśmayāḥ || corr. ; raśmayo Gaṇ Vai ⁷ jihmīkṛtya || Gaṇ
Vai ; *mnan nas* Tib ; (Cf. 一切魔王失大威力 天) ⁸ yatremāu ... jihmīkṛtya || || *gang 'di zla ba dang
nyi ma rdzu 'phrul che zhing mthu che ba de dag gi 'od kyang zil gyis mnan te* Tib ⁹ -°kṛtya || em.
; -°kṛtau Gaṇ Vai ¹⁰ jihmīkṛtyante || conj. ; jihmīkṛtāni Gaṇ Vai ¹¹ mukhadvāre 'ntardhīyate ||
Vai ; -°dvārāntar°- Gaṇ ; *zhal gyi sgor nub par gyur* Tib ¹ tvaramāṇa°- || Vai ; *sattvaramāṇa°-*
Gaṇ ; *rings pa'i tshul gyis* Tib

prāviṣkurvanti / ko bhagavan hetuḥ, kaḥ pratyayo smitasya prāviṣkaraṇīyaḥ² //

1-5⁽⁵⁾

[Gaṇ p.78-26 ; Vai p.55-20 ; Tib(D) 43a-7 ; Tib(P) 103b-7 ; 天 p.864c13]

evam ukte bhagavān vajrapāṇiṃ bodhisattvam āmantrayate sma / evam etad vajrapāṇe evam etat / yathā vadasi tat tathā / nāhetvapratyayaṃ tathāgatānāṃ vidyate smitam / asti hetuḥ asti pratyayaḥ / ya³ idam sūtrendrarājaṃ mañjuśrīmūlakalpaṃ⁴ Gaṇ 79
vidyācaryānuṣṭhānakarmasādhanopayikasamavasaraṇadharmameghaniśritasamanu-
praveśānuvartakaṃ⁵ kariṣyanti dhārayiṣyanti vācayiṣyanti śraddhāsyanti pustaka-
likhitaṃ kṛtvā pūjayiṣyanti candanacūrṇānulepanadhūpamālyaiḥ chattradhvajapa-
tākair⁶ vividhair vā prakārair vādyaviśeṣair⁷ vā nānātūryatādāvacarair⁸ antaśo⁹ 'nu-
modanāsahagataṃ vā cittasaṃtatiṃ¹⁰ vā pratilapsyante romaharṣaṇasañjanaṃ¹¹⁽⁶⁾
vā kariṣyanti vidyāprabhāvaśaktiṃ vā śrutvā saṃhr̥ṣyante anumodiṣyante caryāṃ
vā pratipatsyante, vyākṛtās te mayā anuttarāyāṃ samyaksambodhau¹² sarve te bha-
viṣyanti / buddhā¹³ bhagavantaḥ ata eva jināḥ smitaṃ kurvanti nānyatheti¹ //

² prāviṣkaraṇīyaḥ || em. ; prāviṣkaraṇāya Gaṇ Vai ; om. Tib ³ ya || em. ; yo Gaṇ ; ye Vai
⁴ -°kalpaṃ || em. ; -°kalpā vidyācaryā°- Gaṇ ; -°kalpavidyācaryā°- Vai ; 'jam dpal gyi rtsa ba'i
cho ga rig pa'i spyod pa ... Tib ; (Cf.今爲汝等說此妙吉祥根本儀軌真言經王令彼有情所作所求皆得成就
天) ⁵ -°samavasaraṇadharmameghaniśrita°- || em. ; -°samavasaraṇadharmameghaniḥśritaṃ
samanupraveśā°- Gaṇ Vai ; yang dag par gzhol ba chos kyi sprin la rten pa la yang dag par 'jug cing
rjes su 'brang bar byed pa dang Tib ⁶ chattradhvajapatākair°- || em. ; chatradhvajapatākaiḥ Gaṇ
Vai ; gdugs dang rgyal mtshan dang ba dan Tib ⁷ vādyaviśeṣair || Gaṇ Vai ; tshig gi bye brag gis
Tib ; (Cf.伎樂 天) ⁸ -°tādāvacarair || corr. ; -°tādāvacaraiḥ Gaṇ Vai ⁹ antaśo 'numodanā°- ||
corr. ; antaśaḥ anumodanā°- ¹⁰ -°saṃtatiṃ || em. ; -°saṃtatir Gaṇ Vai ; rjes su yi rang ba
dang ldan pa'i sems rgyud la thob pa 'am Tib ¹¹ romaharṣaṇasañjanaṃ || em. ; romaharṣaṇaṃ
sañjanaṃ Gaṇ Vai ; ba spu ldang bar byed pa Tib ¹² -°sambodhau || Vai ; -°sambodho Gaṇ ;
bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub tu Tib ; (Cf.我與彼人皆受阿耨多羅三藐三菩提記
天) ¹³ buddhā bhagavantaḥ || Gaṇ Vai ; sangs rgyas bcom ldan 'das su 'gyur bar lung bstan Tib
¹ nānyatheti || corr. ; nānyathā iti Gaṇ Vai

2-1

[Gaṇ p.79-10 ; Vai p.55-29 ; Tib(D) 43b-4 ; Tib(P) 104a-4 ; 天 p.864c21]

āḍau tāvad dṛṣṭasamayāḥ kṛtapuraścaraṇo² labdhābhiṣeko³ 'smin kalparājamūla-
mantram⁴⁽⁷⁾ hṛdayam upahṛdayam⁽⁸⁾ vā anyataram vā mantram grhītvā⁽⁹⁾ ekākṣaram⁽¹⁰⁾
vā anyam⁵ vā yathepsitam mahāranyam gatvā triṃśallakṣāṇi japet⁶ phalodakāhāro⁷
mūlaparṇabhakṣo vā kṛtapuraścaraṇo bhavati //

2-2

[Gaṇ p.79-14 ; Vai p.56-1 ; Tib(D) 43b-6 ; Tib(P) 104a-6 ; 天 p.864c25]

Vai 56

tato parvatāgram⁸ abhiruhya jyeṣṭham paṭam paścānmukham pratiṣṭhāpya ātmanā
pūrvābhimukho kuśaviṇḍakopaviṣṭaḥ⁹ śvetapadmānām śvetacandanakuṅkumābhy-
aktānām¹ lakṣam ekam bhagavataḥ śākyamuneḥ sarvabuddhabodhisattvapratyeka-
buddhāryaśrāvakānām paṭasyādhasṭān nivedayet / karpūradhūpaṃ ca yathāvibha-
vataḥ dahet / devaputranāgānām ca pūjām kuryāt yathālabdhaiḥ puṣpaiḥ //

² -°caraṇo] corr. ; -°caraṇaḥ Gaṇ Vai ³ -°ābhiṣeko 'smin] corr. ; -°ābhiṣekaḥ asmin Gaṇ Vai ⁴ -°mūlamantram hṛdayam] em. (*rtsa ba'i sngags sam snying po*) ; -°mūlamantrahṛdayam Gaṇ Vai ⁵ anyam vā] Gaṇ Vai ; om. Tib ⁶ japet] Vai ; jape Gaṇ ; *bzla bar bya'o* Tib ; Cf.BHSgram.29.12. ⁷ -°āhāro] corr. ; -°āhāraḥ Gaṇ Vai ; '*bras bu dang chus 'tsho ba'am* Tib ; (Cf.以水果子及藥等根葉.用充齋食潔淨身心. 天) ⁸ parvatāgram] Vai ; parvatāyam Gaṇ ; *re'i rtse mor* Tib ; (Cf.山峯上) ⁹ -°viṇḍako°-] Gaṇ ; -°piṇḍako°- Vai ; Cf. BHSdic. p.487 ¹ śvetacandanakuṅkumābhyaktānām] em. (*padma dkar po la tsandana dang gur gum gyis btags(D; brtags P) te* Tib) ; śvetakuṅkumābhyaktānām Gaṇ Vai ; (Cf.用白檀恭俱摩香水.浸白蓮華 天)

2-3

[Gaṇ p.79-18 ; Vai p.56-4 ; Tib(D) 44a-1 ; Tib(P) 104a-8 ; 天 p.864c29]

tato 'rdharātrakālasamaye² śuklapūrṇamāsyām prātihārapratipūrṇāyām paṭasyā-
grato³ 'gnikuṇḍaṃ kṛtvā padmākāraṃ śvetacandanakāṣṭhair agniṃ prajvālya kuṅku-
makarpūraṃ caikīkṛtya, aṣṭasahasrāhutiṃ⁴ juhuyāt / yathāvibhavataḥ kṛtaraḥṣaḥ //

2-4

[Gaṇ p.79-22 ; Vai p.56-7 ; Tib(D) 44a-2 ; Tib(P) 104b-2 ; 天 p.865a3]

tato⁵ bhagavataḥ śākyamuneḥ raśmayo niścaranti samantāc ca paṭa⁶ ekajvālībhūto
bhavati / ⁷tataḥ sādhakena tvaramāṇarūpeṇa⁸ paṭaṃ tripradakṣiṇīkṛtya⁹ sarvabuddha-
bodhisattvapratyekabuddhāryaśrāvakāṇāṃ praṇamya paṭaṃ grahītavyam¹⁰ abhītena¹¹
pūrvalikhitasādhakapaṭāntadeśe¹² //

2-5

[Gaṇ p.79-26 ; Vai p.56-10 ; Tib(D) 44a-4 ; Tib(P) 104b-4 ; 天 p.865a7]

tato grhītamātreṇotpatati¹³ / acchaṭāmātreṇa brahmalokam atikrāmati / kusumā-
vatīm¹⁽¹¹⁾ lokadhātuṃ sampratiṣṭhati / yatrāsau bhagavān saṅkusumitarājendras

² 'rdharātrakālasamaye ... prātihārapratipūrṇāyām] Gaṇ Vai ; *mtshan phyed kyi dus su cho 'phrul gyi zla phyed kyi zla ba nya ba la* Tib ; (Cf.就三長月十五日夜半子時. 天) ³ -°āgrato 'gni°-] corr. ; -°āgrataḥ agni°- Gaṇ Vai ⁴ aṣṭasahasrāhutiṃ] Gaṇ Vai ; *stong rtsa brgyad* Tib ; (八千天) ⁵ tato] corr. ; tataḥ Gaṇ Vai ⁶ paṭa] corr. ; paṭaḥ Gaṇ Vai ⁷ *sgrub pa pos gur gum dang tsandana gyis btags pa'i tsandana dkar po'i me tog gis mchod yon dbul lo* | add. Tib ; (Cf.即時阿闍梨以恭俱摩白檀水. 淹白蓮華獻闍伽水. 天) ⁸ tvaramāṇa°-] Vai ; *sattvaramāṇa°- ; rings pa'i tshul gyis* Tib ; (Cf.速天) ⁹ tripradakṣiṇī°-] em. ; *trihpradakṣiṇī°-* Gaṇ Vai ¹⁰ grahītavyam] Vai ; *grahetavyam* Gaṇ ; *ras ris gzung bar bya'o* Tib ¹¹ abhītena] em. (*'jigs med pas* Tib) ; *atītena* Gaṇ Vai ¹² pūrvalikhitasādhakapaṭāntadeśe] Gaṇ Vai ; *sgrub pa pos bris pa'i ras ris kyi mtha' ma'i phyogs nas* Tib ¹³ grhītamātreṇo°-] em. (*bzung ba tsam gyis* Tib) ; *grhītamātro°-* Gaṇ Vai ¹ kusumāvatīm lokadhātuṃ] Gaṇ Vai ; *me tog can gyi 'jig rten gyi khams* Tib ; (Cf.開花佛刹 天)

tathāgataḥ tiṣṭhati dhriyate yāpayati dharmam ca deśayati / āryamañjuśriyam ca
 sākṣāt paśyati dharmam śrṇoti, anekāny api bodhisattvaśatasahasrāni² paśyati tāṃś
 ca paryupāste mahākālpasahasram ajarāmaralī bhavati / paṭas tatraiva tiṣṭhati
 sarva-buddhabodhisattvādhiṣṭhito bhavati / teṣāṃ cādhiṣṭhānam sañjānīte / kṣe-
 traśatasahasram cākrāmati kāyaśatasahasram vā darśayati, anekarddhiprabhāva-
 samudgato bhavati / āryamañjuśriyaś ca kalyāṇamitro bhavati, niyataṃ bodhiparā-
 yaṇo³ bhavatīti //

bodhisattvapiṭakāvataṃsakān mahāyānavaipulyasūtrād aṣṭama uttamasādhanopayika-
 karmapaṭalavisarāt prathamah samāpta iti //

² -^ośatasahasrāni 〕 em. ; -^ośatasahasrā Gaṇ Vai ; *byang chub sems dpa' du ma dag kyang mthong zhing* Tib ³ bodhiparāyaṇo 〕 Gaṇ Vai ; *byang chub la gzhol bar 'gyur ro* Tib ; (Cf.此人決定成無上覺 天)

第8章 後註

(1)[MMK ch.4, 2.] tac chr̥ṇu sādhu ca suṣṭhu ca manasi kuru /

(2)以下1-3から1-5は、一部のAvadāna文献に見られる授記をめぐる因縁譚に類似したストーリー展開がなされている。詳細は平岡[2001][2002, pp.175–178].

(3)本来ならばsamanantaram niścariṭāとなるべきだろうが、caの位置を考慮して、Gaṇのcomp.の形を採ることにした。

(4)[Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā, p.180 l.30–p.181 l.2.]

ko bhagavan hetuḥ, kaḥ pratyayaḥ smitasya prāduṣkaraṇāya nāhetukaṃ nāpratyayaṃ tathāgatā arhantaḥ samyaksambuddhāḥ smitaṃ prāduṣkurvanti / ;

この他にも、世尊の微笑の因縁を問う記述は、一部のアヴァダーナ文献において定型的な表現によって説かれている授記の因縁譚の中で確認することができる。詳細は後註(1)。

(5)Cf.後註(1).

(6)[Mahāvastu, vol.3, p.77, 10–11]

dharmārthayuktaṃ śrāddhānāṃ romaharṣaṇasaṃjanaṃ / pūrvaṃ caritaṃ bhagavato śr̥ṇoṭha cittaṃ prasādetvā //

(7)[MMK ch.1(Gaṇ p.3, 3–5.)]

namaḥ sarvatathāgatānāmacintyāpratihatāśāsanānāṃ om ra ra smara / apratihataśāsanakumārārūpadhāriṇa hūṃ hūṃ phaṭ phaṭ svāhā // ayaṃ sa kumāra mañjuśrīḥ mūlamantraḥ / ;

[MMK ch.2(Gaṇ p.26, 13–15.)]

namaḥ samantabuddhānāṃ / om ra ra smara apratihataśāsanakumārārūpadhāriṇa hūṃ hūṃ phaṭ phaṭ svāhā / ayaṃ sa māryāḥ madīyamūlamantraḥ / āryamañjuśriyaṃ nāma / ;

なお、同一の真言と思われるものが『金剛頂經曼殊室利菩薩五字心陀羅尼品』(no.1173, vol.20, p.711c 23–26.)に確認できる。

(8)[MMK ch.1(Gaṇ p.3-9.)] upaḥṛdayaṃ cātra vākye hūṃ //

(9)gr̥hītvāの位置は、anyaṃ vāの後ろが適切だと思われるが、TibもGaṇの読みを支持している。

(10)本経には一字真言と称される、あるいは一字真言と考えられる真言にいくつもの種類があり、その判別は困難である。e.g.) muṃ(Gaṇ: p.26-20), kṭhṭhlhīm?(Gaṇ: p.81-4), bhrūṃ(Gaṇ: p.130-)

(11)[MMK ch.1(Gaṇ p.5-11.)]

tatra kusumāvātī nāma lokadhātu yatra sa bhagavān saṅkusumitarājendrastathāgato viharaty ...

Mañjuśriyamūlakalpa

(also known as *Mañjuśrīmūlakalpa*)

第 4 章 試訳

仏陀、一切諸仏諸菩薩に帰依致します。

1 文殊の請願

そのとき、実に、文殊師利は、普く、浄居天宮を觀察し、再びまた、かの大集会を觀察して、釈迦牟尼の両御足に頂礼し、微笑して、世尊にこのように申し上げた。

「どうか世尊よ、一切有情のために、パタの儀則は¹、真言行の成就法や儀則より取り出し流出し、法雲より雨を降らし、意のままに果報を成就させる広大な章品を有し、無上の福德を生み出し、正等菩提の種を实らせ、完全なる一切智智を成就させ、要略すれば、一切の所願を円満させるものであり、一切の真言の果報に正しく結びつけられ、果報を成就させるものであり、不空なる成就を完成させるものであり、一切の菩薩行を円満させるものであり、偉大な菩薩の甲冑によって覆われたものであり、一切の魔の力を制圧して退けるものであります。世尊は、それ(パタの儀則)を、我々に慈しみをい দিয়ে、また一切有情に[慈しみをい দিয়ে]お説き下さい。」

2 釈迦牟尼の回答

このように文殊師利童子が述べると、そのとき、世尊釈迦牟尼は、文殊師利童子に以下のように説いた。

「善きことである。善きことである。文殊師利よ、汝が多くの衆生のために世間に対する憐れみのために始め、[また]汝が如来にこの(パタの儀則)義理が尋ねられるべきだと考えるとは、汝はそれ(パタの儀則)を聞くべきであり、善く正しく思念すべきである。私は汝のために説くであろう。汝の広大なパタの儀則にして一切の真言行の成就法であり、[菩提への]入り口を、順序立てて私が説くであろう。一切の如来たちによって過去に説かれた[パタの儀則]を、私もまた今説くであろう。」

¹ 当箇所前後は m,sg,N. と n,sg,N. の形が混在しているが、文脈上、主語となる paṭavidhāna に全てかかると考えられる。

3 最勝パタ作製儀則

3-1 綿糸の作製規定

3-1-1 綿の浄化

まず始めに、塵のない清浄な地において、綿(picu)を取り、三昧耶に入った者たちによって、その綿が清められるべきである。そして清めた後、この真言によって、マンダラの阿闍梨(maṇḍalācārya)¹が、百八遍、唱えるべきである。

行く手の遮られない智慧によって前進する一切諸仏諸菩薩に帰依致します。
浄化することによって苦を滅する王、如来、阿羅漢、正等覺者に帰依致します²。

オーム。清浄にならしめよ、清浄にならしめよ。一切の作障者を殺す者よ³。
大悲を有する者よ。童子の姿を有する者(文殊師利)よ⁴。

¹ MMK 第2章では、本經における中心的なマンダラとそれを用いた灌頂儀礼が説かれており、マンダラの阿闍梨(maṇḍalācārya)がマンダラに関する種々の密教儀礼を取り仕切ることが説かれている。ただし、マンダラに描かれる諸尊の尊容は、画師(citrakara)によって描かれるべきだとしている(Gaṇ p.39, 10–14.; Vai p.27, 14–17. Cf. 伊藤[2009])。当該箇所は、パタ作製儀則の冒頭に相当することから、マンダラの阿闍梨が一連の密教儀礼に先立ち、浄化や守護の目的を有する真言を唱えると解釈できる。したがって、パタ作製儀則においても、マンダラの阿闍梨が重要な役割を担うことも注意すべきであろう。ただし、マンダラの阿闍梨の所作として明確に指示されているのは当箇所だけであり、マンダラの阿闍梨(maṇḍalācārya)と、後述される儀則に出てくる(ch.4, 3-1-2.)行者の阿闍梨(sādhakācārya)との関係は明確ではない。

² 初期密教經典所説の真言の前には、帰命句が付されることが多い(Cf. 大塚[2013 pp.802–811])

³ 「一切の作障者を殺す者」は Yamāntaka を指し、続く「大悲を有する者」は Tārā を指すと考えられる。パタに描かれるこの二尊の配置を考慮すると、行者を守護する役割を担っていると考えられる。Cf.<資料篇>テキスト ch.4, 3-3-2-19, 3-3-2-20.

⁴ 本經第1章、第2章、第7章においても、以下のような類似の真言が説かれている。[MMK ch.1(Gaṇ p.3, 4–5); ch.2(Gaṇ p.26, 13–14)] om ra ra smara apratihataśāsana kumārārūpadhāriṇa hūṃ hūṃ phaṭ phaṭ svāhā //; [MMK ch.7, 4-1] om he he bhagavan bahurūpadhara divyacakṣuṣe avalokaya avalokaya māṃ samayam anusmara kumārārūpadhāriṇe mahābodhisattva kiṃ cirāyasi / hūṃ hūṃ phaṭ phaṭ svāhā // Gaṇ の読み可依拠するならば、第1章、第2章に説かれる当該真言は-°dhāriṇa の形をとっている。したがって、-°dhāriṇa と-°dhāriṇe の両方の形を確認することができる。いずれも-°dhārin から派生した形の呼格だと考えられるが、どちらの語形を採るべきか判断し難い。-°dhāriṇa は、BHSgram.(10.3.)において言及されているように、-°in 語幹に a が付加されて-a 語幹と同様に変化する形、dhāriṇa-の m, sg, V の形だと考えられる。同様に、-°dhāriṇe は、dhāriṇā-の f, sg, V の形だと考えられる。文殊に対する呼びかけの語ということを考慮すると、女性形の変化は不自然であるが、このような女性形、呼格は真言においてしばしば見られる形であるため、否定することはできない。いずれにし

神変せよ¹，神変せよ，三昧耶を想起せよ，立て，立て，フーン，フーン，
 パット，パット，スヴァーハー。

3-1-2 童女の選定

次に，処女の童女で，バラモン族やクシャトリヤ族に生まれ，[あるいは]ヴァイシュヤ族に生まれ，[肌が]過度の黒色の種族でなく，[身体が]欠けることなく，五体満足で健全な身体を有し，両親の許可を得て，齋戒を保ち，菩提心を生じ，悲心を有し，[肌が]白色で，他の色を除いた童女を，要略すれば，女性の相のすばらしい特徴を有する童女を，白分の吉祥な日で，吉兆な惑星が見られ，煙霧が生じることなく，雨天でなく，風がないときに，清浄な場所において，前述したような童女を沐浴させて，清浄な衣服を着せることによって適切に衣服を身に付けさせて，この真言によって，大印を伴う守護をなし，白檀とサフランを虫のいない水と混合して，そして，その綿とかの童女²に対して，まさにかの浄化の真言[を唱える]とともに，灌ぐべし。そして，白檀とサフランを和合した水を四方にまくべきだと言われているが³，[この四方とは]，上方，下方，四維[にもまくべきだということ]である。そして白檀とサフランと龍腦香を一つに和合し，東を向いて焼香させるべし。あるいは[行者]自ら焼香すべし。あるいは行者の阿闍梨⁴が[焼香すべし]。そこで，以下のよ

でも呼格の形であり，文殊に対する呼びかけの語であることは間違いないだろう。なお，当箇所の子ベツト語訳は-^odhāraṇi であり，dhāraṇī-の f, sg, V の形と解釈できる。

¹ vikurva の男性形，単数，呼格という理解が可能だが，ここでは前後の文脈から，正規の文法にもとづく語形ではないものの，vi-/kr から派生した命令形の語形として解釈しておく。

² 原語は kumārī から kanyā に変わっているが，同一人物として考えて問題ないだろう。

³ 当箇所の iti は註釈的な働きを有していると考えられ，iti 前部の内容が他の密教儀礼を扱う文献からの引用である可能性も疑われる。しかし，現段階ではその出典を特定するまでには至っていない。

⁴ 行者の阿闍梨(sādhakācārya)とひとまず訳出したが，詳細は不明である。ただし，本経第2章には以下のような記述を確認できる。

[MMK ch.2(Gaṇ p.39-3)] apareṇa tu sādha-kācāryeṇa maṇḍalabāhirdakṣiṇapūrvāyāṃ diśi vidhi-dṛṣṭena karmaṇā agnikuṇḍaṃ kārayet /

この記述によれば，sādha-kācārya にはマンダラ造立過程において護摩を焚くための火炉を作る役割が与えられており，マンダラの阿闍梨(maṇḍalācārya)と区別されていることがわかる。また漢訳では「阿闍梨及同法事者」と両数で訳出しており，sādhaka を「同法事者」と訳して儀礼を補助する役割を担う者として解釈している。しかし，後述される儀則の中では，sādhaka は実際にパタを用いて密教儀礼を行う「行者」を意味することが明らかであるから，儀礼補助者を指すとは考えにくいのではないだろうか(儀礼補助者を意味する場合，後代の密教文献では uttarasādhaka などの語が一般的に用いられる。e.g. *Vajrāvalī*, 12.1.4.)。また上記の引用文では aparā が sādha-kācārya にかかっていることから，阿闍梨と称される者が複数いることを想定できるであろう。sādha-kācārya と maṇḍalācārya の関係は，現段階では詳細にはわからないが，本経所説の密教儀礼，特にマンダラやパタの作製過程には，阿闍梨と称される者が複数関わっていたことが推測される。

うな言葉によって、三度述べられるべきである。

“尊き諸仏および十地に住する偉大な菩薩たちは、このパタの [材料としての] 糸を加持したまえ。”

その[言葉]より、かの尊き諸仏が思念し、また大菩薩たちも思念するのである。

3-1-3 日時の選定(吉祥な兆候)

香を焚いていて、その機会に、水辺や陸地で生活する孔雀、シギ、ガン、鶴、ガチョウの種々の吉祥なる鳥たちが、空を飛ぶならば、あるいは、幸先よく鳴くならば、それより行者は[吉兆を]知るべきである。[すなわち]自身のためにこの儀礼行為が実を結び、尊き諸仏諸大菩薩によって、自身のためにそのパタの[原料である]糸が加持され、今生において自身がよく活性化され¹、自身の真言の悉地が不空なるものとなるだろう。あるいは、陣太鼓、大太鼓、陶製の太鼓、法螺貝、琵琶、笛、小鼓、タンバリンの音が生じるならば、[行者は吉兆を知るべきである]。男性、女性、少年、少女が、不意に、その機会に、以下のように述べるならば、[すなわち]「勝利」「悉地」「成就」「もたらされた」「与えられた」「汝は得よ」「幸福」「有益」「力強い」「豊富」などの語、あるいは他の吉祥なる語を発するならば、あるいは鈴の音が生じるならば、あるいは歓喜の音が[生じるならば]、それより、持明者(=行者)は[吉兆を]知るべきである。「これが尊き諸仏や諸大菩薩の加持である。他の機会に不空なる悉地はない(今まさに不空なる悉地がある)」と。

3-1-4 日時の選定(不吉な兆候)

一方、かの者たち(男性、女性、少年、少女)が、その機会に、恐ろしいことを述べる、[すなわち]「とらえよ」「貪り食え」「貪り食わせよ」「消滅した」「破滅した」「傷つけられた」「遠い」「非常に遠い」「ない」などのような音声が出る、あるいは²サル、水牛、ジャッカル、ロバ、猫という二足や四足の軽蔑される動物たちの声が出るならば、それより、行者は自身の悉地がないと知るべきである。今生において[悉地]が得られるべきならば、再び、

¹ 当該箇所には、何らかの混乱が疑われる。梵本の構文としては、①saphala と tatkarman の主述関係 ②adhiṣṭhita と tatpaṭasūtra の主述関係 ③sujīvita と? ④avandhyā と mantrasiddhi の主述関係、という理解が可能である。問題は③の部分である。チベット語訳によれば、当該箇所は *bdag gi skye ba(D; bo P) dam pa ni legs par 'tsho ba yin te* とあり、Gaṇ の支持する読み(sujīvitaṃ meha janmani)と逐語的に一致していない。推測の域を出ないが、現段階では Gaṇ の読みにおける meha が、もともと me iha であり samdhi の関係で ma iha となるべきところに混乱が生じ、meha と書写されたという経緯を想定して訳出を試みた。ただし、この解釈でも梵本とチベット語訳が完全に一致せず、問題の解決には至っていない。なお、天息災訳は意識であるため、逐語的な解釈の参考にはならない。

² チベット語訳('am)にしたがって、「あるいは」の語を補っておく。書写過程において vānara(猿)から始まる複合語と接続詞 vā が混同されて、元来存在していた vā の語が欠落してしまった可能性も考えられるだろう。

前行をなした後、始められるべきである。このように七遍に至るまで[行えば]、五無間罪をなした者であっても、七遍目の所作を行う際に成就するのである、と。

3-1-5 綿糸の作製

次に行者は、かの童女の守護をなし、クシャ草座に座らせるべし。[行者は童女を]東あるいは北に向かせて、[行者]自身の供物を食べて、またかの童女に供物を食べさせるべし。[行者は]事前に準備したクシャ草座に[座し]、まさにかの規則によって、その綿を紡がせるべし。その正しく紡いだ白い綿糸¹を、事前に学ばされた童女が縊り合わせて、8, 5, 3, 1乃至16パラあるいはカルシャのこのような非常に吉祥な数になすべし。

(I)²その中で、最勝[パタ]の場合、16[パラあるいはカルシャ]とし、中位[パタ]の場合、8[パラあるいはカルシャ]とし、同様に、残りの下位の成就されるべき諸々の儀礼行為の場合、1あるいは5[パラあるいはカルシャ]である。

(IIab)全て³の儀礼行為において、真言を知る者が、資力に応じてなすべし。

(1)それより、以前に犯したいかなる悪業も、パタの利益を心の中で[作意することによって]まさに瞬時に滅するのである。

(2)この綿糸を取り、清浄な器の中に入れさせるべし。からまないようにして、龍腦香によって薫ずべし。

(3)生き物の肢体から生じていないもの⁴、サフランや[白]檀などによって、あるいは快い香りの花を有するジャスミンや黄花樹などによって恭敬される。

(4)守護の儀則をなして[綿糸の入った器を]清浄な場所に安置し、真言を知る者であり、

¹ 一連の作業工程において、この時点で綿(picu)から綿糸(sūtra)となると考えられる。

² (I)(IIab)は、Gaṇ および Vai では散文となっているが、おそらく当該箇所から偈が始まると考えられる。ここでは一応の区別を図るために、ひとまずローマ数字で偈の番号を提示しておく。

³ ここでの全ての儀礼行為とは、最勝パタ、中位パタ、小位パタの作製に関わる全ての儀礼行為を指していると考えられる。

⁴ 当該箇所の正確な意味はわからない。ここでは、Vai の aprāṇyaṅgasamutthaṃ の読みを採り、「生き物の肢体から生じていない」と訳出した。供養法の中には、乳酪を始めとする生き物に由来する供物を捧げる場合が多く見られるが、当該箇所は、生き物に由来しない供物、すなわち直後に列挙されるサフラン、白檀、心地よい香りの花などによって供養することを説いていると解釈しておく。また Tib を参照すれば、aprāṇyaṅgasamutthaṃ と以下に続く Inst.の語が並立的に訳されているので、当該箇所の vā は arcitaṃ 以外の語全てにかかっていると思われる。なお、BHSdic. p.98 の āprāṇya(aprāṇya)の項目によれば、perfect の意味が提示されている。その根拠として、Edgerton は āprāṇya(aprāṇya)がパーリ語の apanṇaka に由来する点をあげているが、āprāṇya(aprāṇya)を perfect の意味に解釈しても、当該箇所の意味は判然とししないのではないだろうか。

一切の儀礼行為に精通する者が、[真言を]唱えてよく専心する。

3-2 画布の作製規定

3-2-1 織工師の選定

(5ab)次に、織工師のもとに行き、[織工師の]意のままの報酬を与えて、

(5cd)[その織工師は]五体満足で健康体であり、清浄な法を常に抛り所とする者であり、(6)病を患っておらず、年老いておらず、喘息ではなく、白髪ではなく、去勢されておらず、すばらしい種族から生まれた者であり、

(7)卑下される者ではなく、背が曲がっておらず、肢分を欠いた者ではなく、一目置かれる特徴を伴い、称賛され、美しい容姿で、

(8)すばらしい智と行いを有し、世俗の生活に身を置く者、その者に、ここに悉地を求める者は、最上パタを織ることにに関して請うべし。

(9)称賛され、よきヴァルナに[生まれ]、智を有し、よく学んだ者たちであり、きわめて勝れて秀でたパタの織工師たち¹によって[作製されるべきである]。

(10)最勝の[悉地を求める]場合、最勝[パタ成就法]をなすべきであり、中位の[悉地を求める]場合、中位の[パタ]成就法をなすべきである。その他、全ての場合に、下位である低位の儀礼行為(パタ成就法)をなすべし。

(11)そこで、織工師が述べる通り、その通りの価格の金銭を与えて、織工師の[対価に関する]始めの声の生じた際に、彼の真言を知る者(行者)は、

(12)それより直ちに金銭を与えるべきであり、それは勇ましい購入²と言われる。彼(織工師)³の要求に応じて[金銭を与えるべきであり]、持誦者(行者)においては価格につい

¹ Tib は *grogs po rigs bzang rab bsngags shing || blo ldan bzo ni mkhas ba dang || shin tu khyad par mchog gyur pa'i || ras thag bzang la bskul bar bya ||*とあり、abc 句の各々の形容句が全て *ras thag*(paṭavāyana)にかかっていると思われる。梵本は ab 句が m,pl,N の形、cd 句が m,pl,I の形であり、文法的には paṭavāyana に全ての形容語をかけることはできないが、文脈上は全ての語が織工師の条件として示される語である。

² 当該箇所において、*vīrakraya* という語が定義されている。Tanemura[2004, p.237, note52]は、その定義の要点を以下の三点にまとめている。①織工師が要求する価格で購入すること②価格交渉をしないこと③直ちに支払うこと。このような購入態度、購入方法に対して、*vīrakraya* という語が用いられているようである。なお、Tanemura[2004, p.237, note52]は、*vīrakraya* と同様の意味で用いられている *vīramūlya* の用例や、仏教文献以外に *vīrakraya* が用いられている用例を取り上げている。その他、BHSdic. p.506 にも *vīrakraya*, *vīramūlya* の項目を確認できる。

³ 当該箇所は、梵、藏、漢の読みが錯綜しており、解釈が困難である。ここではひとまず、

て交渉しないのである。

(13)なぜならば、その無上にして最勝なるパタは、速疾に悉地をなすのであり、一切の儀礼行為をなすのであり、供養されるべきものであり、天や人に安樂を与えるのであり、

(14ab)一切の者たちの最勝であり、正等覚者によって説かれたものだからである。

と。

3-2-2 織工師の浄化・土地の浄化

次に持明者は、織工師に齋戒させ、吉祥な星宿で、吉兆な惑星が見られる靈驗あらたかな白分の日、あるいは他の白分の日に、すばらしく咲き誇ったマンゴーの木の花の群れの中で最上の木の花が広がっている機会の絶好のそのときその機会に、朝日の昇るときに、前述した施食を食し、きれいな衣服を着て、頂髻が結ばれ、よく沐浴し、白檀とサフラン[の香]によってよく塗られ、[あるいは]そのいずれかによって塗られた肢分を有し¹、龍腦香を顔に薫じて、喜んだ心で、飢えや渴きのない者を、織工師になし、全ての場合で²、器や縄などの道具を土と牛糞で浄化させて、また[一つの工程の]始め[の所作]ごとに³、牛からもたらされる五種の生成物によって何度も[道具を]浄化させるべし。次に、虫のいない水で

etasya を織工師として解釈し、Gaṇ の読みからあまり手を加えないようにテキストの整理および訳出を試みた。そこで、その他の読みの可能性について簡単に言及しておく。まず Tib は、*don du gnyer med de la ni || rin du smra byed sgrub pa po ||* とあり、「要求のない彼(織工師)に対して、行者は価格を述べる」と解釈できる。この Tib の読みに従うならば、prārthana が na によって否定されているので、梵本の na の位置は不自然であり、再検討が必要である。また、この Tib の読みは vīrakraya の購入態度とは正反対の内容を述べていることから、あくまで“織工師が購入価格を要求しない、あるいは設定しない場合”という補足的な内容を提示することになるだろう。一方、逐語的な訳出はなされていないが、天息災訳は「若得前造之人。所要功價不計多少。不得怖懼恪惜依價令作。若自乏財方便求告。」とあり、行者の財力が乏しい場合には価格交渉の許される旨を読み取ることができる。この天息災訳に基づいて梵本を再検討した場合、Gaṇ の読み puṇyabhāvena jāpine を puṇyabhāve na jāpine と読むと、天息災訳の読みと一致するかもしれない。

¹ anyatareṇa は直前の śvetacandana と kuṅkuma を指していると考えられる。ここでは文脈を考慮して、訳出する際には vā の語を補い、白檀とサフランの両方を塗る場合と、どちらか一方でもよい場合の両パターンに言及していると解釈した。

² Tib には *lag cha tha ga pa la sogs pa'i yo byad thams cad kyang ...* とあり、sarvatra に対応すると思われる *thams cad* が *upakarana* に対応する *yo byad* にかかっている。したがって Tib によれば、全ての道具において浄化の儀礼をなすべきだと解釈できる。また当該のパタ作製儀則が最勝パタを始めとする三種のパタに共通することを考慮すれば、「最勝パタ、中位パタ、小位パタのいずれの場合においても」という意味にも取ることができるだろう。

³ 当該箇所 pratyagrāṇi の語によって、画布を織る各工程において、その始めの作業ごとに、器や縄などの道具の浄化をしてから作業を進めるべきだということを述べていると考えられる。

浄化させて、清浄な土地で、騒音から離れ、人里から離れ、孤独な住処で、平穏で、隠密で、花で供養されたところで、白檀とサフラン[を混ぜた水]¹をまくべし。

次に行者は、まさに浄化の真言によって²織工師に対して³108 返真言を唱えて、白芥子を四方に[とされているが]³、上方、下方、四維[にも]にまくべし。次に、[行者が]織工師に[白]芥子をたたきつけて⁴、五髻の大印⁵を結び、髻を結ぶならば、偉大な守護がなされるだろう。

3-2-3 画布の作製

もし最勝[パタ]の画布とするならば、横4肘(hasta)、縦8肘であり、織工師がその長さに正確に織り重ねるべし。中位パタとする[ならば]、横2肘、縦5肘である。小位[パタとするならば]、仏の1 揲手(vitasti)⁶の長さであり、[仏の]半肘の長さである⁷。その中で、尊き

¹ Tib には *chus* とあり、水の意味を訳出している。水に相当する語が梵本にはないが、動詞が *abhy-ā-√sic* であることを考慮すれば、香が混ぜられた水と考えるべきであろう。

² 本章 3-1-1 に説かれる浄化を行うための真言を指していると思われる。

³ 当箇所 *iti* は註釈的な働きを有していると考えられ、*iti* 前部の内容が他の密教儀礼を扱う文献からの引用である可能性も疑われる。なお、同様の *iti* の用法が ch.4, 3-1-2 にも確認される。

⁴ *√taḍ* は「打つ」「叩く」の意味であるため、勢いよく「たたきつける」と解釈した。

⁵ *Nāmasaṃgīti*(v.93cd)において、*pañcaśikha* が文殊のエピテットとして用いられていることから、五髻の大印が文殊を指していることは間違いない。また MMK 第2章のマンダラ造立儀則においても、五髻の大印を結ぶことが指示されていることから(E.g. Gaṇ p.37, 8; 26–27)、本経所説の密教儀礼において五髻の大印を結ぶことは重要な意義があったと考えられる。この五髻の大印を始めとする諸印の名称とその略説は、MMK 梵本第35章(*mudrā-vidhipāṭalavisarāḥ*)においてまとめて説かれている(Cf. 堀内[1996b])。当該箇所の五髻の大印に関する略説(Gaṇ p.358, 24–p.359, 4)によれば、「全ての儀礼行為に適用される(*prayuktaḥ sarvakarmikāḥ*)」とあることから、マンダラやパタに関するあらゆる密教儀礼の実践において用いられる印であったと考えられる。なお、頼富[1988]において、パーラ朝期の作例として五髻を有する文殊菩薩像がいくつも見出されている。五髻という数字に注目すれば、後代の文殊の主要な一形態であるアラパチャナ文殊との関係が疑われるが、作例上は、必ずしもアラパチャナ文殊が五髻を有しているとは限らないようである(Cf. 頼富[1988, 表5])。

⁶ 本経のパタの画布の大きさを説明する際に、*sugatavitasti*(仏の揲手)という尺度が用いられる。当該箇所直後の記述によれば $1\text{sugatavitasti} = 1\text{puruṣahasta}$ であることが示されている。一般的に *vitasti* は *hasta* の半分の長さの単位であることから、この換算式によれば、仏を規準とする長さの尺度は、人間を規準とする長さの尺度の倍になることがわかる。ただし、このような解釈には、諸説あるようである。平川[1993, pp.447–449]は、律文献の関連箇所を抜き出し、漢訳者や文献の帰属する部派によって、上記の換算式にも諸説あることを指摘している。その違いを要略すれば、仏の揲手を、常人の揲手の二倍とするか、三倍とするかに分けられるようであり、本経の説は、前者に合致するといえる。

⁷ 当箇所の梵本には何らかの混乱が推測される。Gaṇ の読みでは訳出は困難であり、またチベット訳と漢訳も独自の解釈をしており、梵蔵漢の読みは錯綜している。そこで第6章冒頭部(<資料篇>テキスト ch.6, 1)を参照すると、小位パタの画布の大きさは、「仏の1 揲

仏の1 搦手とは、中部地域の人のおおきさの1 肘であり、これが「仏の搦手」と呼ばれる。この尺度によって規準が説かれる。

(15)汝は立ち上られ、世間の中のすぐれた者たちによって、最勝[パタ]の悉地が説かれたのであり、過去の¹聖者が埋没したときに王位を欲する者たちは、中位[パタ]において[悉地がある]。

(16)天、アスラ、龍族の三[種族]のおおくなる享樂を求める者たちには、小位[パタ]において悉地があり、中位[パタ]において、中位の悉地が説かれる。

(17)小位パタにおいて、諸々の低位の儀礼行為が常に成就し、一切のなすべきことや一切の富が常に成就する。

(18)三種のパタにおいても、より勝れたものを求める者たちに悉地が示されたが、儀則から逸脱した者たちは成就せず、インドラであっても[成就しない]。

(19)一切の儀礼行為が速やかに勞せずして成就し、儀則としっかりと結びついた者たち(儀則に正確に従う者たち)は、低俗な者であっても[成就する]。

(20)この道は、勝れた菩薩たちによって説かれたのであり、貧しく、守護者のいない、苦しみを有する全ての有情たちに²、安寧がある。

(21)真実を見る者たちによって、全ての菩提道が顕示され、この菩提の因である法は、真言道によって顕示される。

(22)勞せずして諸々の真言が成就し、一切の世間のマンダラや諸々の出世間のマンダラであっても成就するということ³が説かれたのである。

(23)菩提の因を志す者、その者たちには常に悉地があるだろう。世間に利益をもたらさない他の者たちには、常に悉地は説かれない。

手の長さの正方形」とある。これは仏の尺度で表せば、半肘四方、人間の尺度で表せば、1 肘四方の正方形の画布ということになる。ここでは、この第6章の記述に依拠したテキスト、ならびに訳出を提示している。

¹ 中位パタの特徴の一つとして、過去仏の描かれる点があげられる(<資料篇>テキスト ch.5, 3-5)。そこで当該箇所の para は、中位パタに描かれる過去仏との関係を示唆するものと解釈して訳出を試みた。

² ch.4, 4, vv.62cd-63 にも、社会的弱者を始めとするあらゆる有情のために、パタやパタを用いた成就法が説かれたことを説いている。

³ 当該箇所の ye は、udāhrtāḥ の主語に相当する名詞節を率いていると解釈した。

(24ab)菩提を目指す者たちに、常に悉地が説かれる。

(24cd)文殊師利童真の偉大な自性が殊勝であるから、

(25ab)ここにおいて全て[のパタ]より、速やかな儀礼行為にしたがって成就されるべき目的を得るだろう。

(25cd)次に順序通りに、織工師は、熱心に画布を織るべし。

(26)5日間、8日間、16日間、2日間、4日間、まさに1日で、速やかに画布を織ることを終える。

(27)最勝の悉地を得ようとする者たちには、1日で[織り終えることが]望ましく、清浄な行を完成した織工師は、常に加持される。

(28)居住するところから遠くに行き、排泄物を捨てるべし。そして衣を着て沐浴した後、また別の衣を着て、

(29)織工師は、何度も洗い清めた後に、白衣を着て華鬘を有し、白檀[香]を体に塗り、両腕に塗り、

(30)このような[所作]を始めとする方法によって、あるいは勝者によって説かれた他の方法によって、織工師は極めて熱心に常にきれいで清潔に[いるべきである]。

(31)手順に熟達した者が、熱心に画布の全ての織る作業を[なし]、画布の作製におけるこれまでの諸々の作業の終了が示され、

(32ab)不足のない正しい長さになれば、吉兆な日に平滑に¹なすべきである。

(32cd)次に、自分の吉祥なるときに、諸々の真言[行]²に入らせるべきである。

(33)広げられて、ふちに美しい結び目を有した画布を取り、竹の棒で覆われた画布³を

¹ 次の工程である作画作業の前に、画布を平滑にすることは重要な準備作業であったと思われる。(Cf. Jackson & Jackson [1988, p.22])

² 当該箇所は Tib の読み(*sngags ni gzhus par bya*)にしたがったが、正確な意味はわからない。ひとまず「行」の語を補っておく。

³ 現在のタンカの作成法によれば、織り上げた画布を、4本のしなやかな枝木や竹を用いた枠にくくりつけて、画布の四辺を囲むように枠組みを作製するようである。おそらく当該箇所は、この枠組を作製する過程に言及しているのではないだろうか(Cf. David & Janice[1988, pp.15-23])。あるいは、当該箇所はパタを携帯して移動することにも言及しているので、*venuyasṭi* をパタの入れ物の竹筒と理解し、「竹筒によって覆われたパタを取って」という解釈も可能であろう。

取って¹、それから移動すべし。

(34)[パタの]広大な利益を分配することによって、織工師に安寧を与えて、真言行者は、善き行いと善き誓いを保持し、意のままにおもむき、

(35)よい香りの花によって供養し、清浄な場所にそれ(画布)を安置すべし。まさにこの真言によって守護の儀則をなして、

(36)前述したその[パタの]綿糸が様々な方法で何度も浄化されるべきであるのと同様に、自身と[パタの]画布の守護をなすべし。

(37)偉大な勇者である文殊[の儀軌]が、真言の形態をとって、過去の多くの諸仏によって説かれたが、今ここに再び、私によって[説かれるのである]。

(38)それ(文殊の儀軌)は、あらゆる真言の中の真言の本質を有する手段であり、偉大な勇者であり、大威徳を有し、一切の真言の利益を成就し、

(39ab)様々な守護の因となる²種々の相をなすのである。

(39cd)閻浮提にいる有情たちは、愚かな行いをなし、無頓着である。

(40)不信のてん倒を有し、誤った行為や貪欲を有する者たちは、諸々の真言や一切の富を成就しない。

(41ab)それゆえ、その者たちは輪廻の暗闇の牢獄の中をさまようのである。

(41cd)荘厳なる儀礼において、常に清らかな心を有し³、浄信を有し、

(42)常に一切の真言の獲得や保持を望み、悉地を求め、偉大な自性を有し⁴、断固たる決意を有し、活力にあふれる、

¹ 筆者は実物を見ることはできていないが、ペリオ探検隊が敦煌莫高窟で発見し、現在、東京国立博物館に所蔵されている「二菩薩立像幡」は、麻布2枚を縫い合わせて作られ、上方の縁には、棒状のものを通すための絹が縫いつけられていると解説されている(Cf.「東京国立博物館 1089 ブログ(勝木言一郎)」URL: www.tnm.jp/modules/rblog/index.php/1/2013/09/18/二菩薩立像のみどころ/)。この勝木言一郎氏による解説によれば、一連の形状の特徴をふまえて、「二菩薩立像幡」が礼拝対象としての尊像画として考えられると述べられている。この「二菩薩立像幡」の形状が、MMKの当該箇所周辺によって規定されるパタの画布と類似していることは言うまでもなく、敦煌莫高窟においてこうした作例が発見されたのは非常に興味深い。

² vicitrātrāṇahetavaḥ は、前後の文脈を考慮して、m, pl, Ac.と解釈して訳出した(Cf. BHSgram. §12.48)。

³ śuddhamanasāḥ を m, sg, N.として解釈した。Cf. BHSgram. 16.3.

⁴ mahātmānaḥ を m, sg, N.として解釈した。Cf. BHSgram. 17.39.

(43ab)そのような者たちには、勝者によって説かれた諸々の真言が¹、勞せずして成就する。

(43cd)しかし、淨信のない者たちには、清淨な法が生じないのである。

(44ab)塩分を含んだ土地にまかれた種が芽を出さないように²。

(44cd)一切の目的を知見する者たちによって、常に法における淨信の根本が説かれ、

(45ab)法の目的を日常的な規範として有するその者たちには、常に真言の悉地が説かれる。

と。

3-3 作画の規定

3-3-1 画師の選定・画具の選定

次に織工師の[作業が]完了すると、よく学んだ画師、あるいは[行者]自身が³[描き]⁴、適切な[諸尊の画像]が描かれるべきである⁵。固着していない顔料によって全ての鮮明な顔料を伴う絵具とし、前述した織工師として採用する規定のような特徴⁶を伴う画師によって、

¹ ye の率いる名詞句(*mantrā ye jinabhāṣitāḥ*)が *sidhyanti* の主語だと考えられる。

² MMK ch.7, 5, v.3 においても同様の趣旨を有する偈が説かれている。なお、ch.7, 5, v.3 と類似する偈が、*Śikṣāsamuccaya* において *Daśadharmasūtra*(=『仏説大乘十法經』大正 no.314)からの引用として示されている。詳細は資料篇<テキスト> ch.7, 後註(28)

³ *ātmanah* を m, sg, N.として解釈した。Cf. BHSgram. §17.24–25.

⁴ 下記のように初期密教経典では、画師がパタの画像を描くのが一般的なようであり、行者自ら描くことに言及するのは珍しいと思われる。

[*Amoghpaśākalparāja*, 密教聖典研究会 III, 45a1(Cf.木村[2001, p.16])]

maunīvratenā poṣadhikena citrakareṇa śucinā śucivastradhāriṇā bhavitavyam /

[*Mahāmañivipulavimānasupratīṣṭhitaguhyaparamarahasyakalparājā*, 305b3–4(D no.506)]

ri mo mkhan smyung ba byas pas snod sar par tshon spyin med pas bcom ldan 'das rgyan thams cad kyis brgyan pa / ...

[『菩提場所説一字頂輪王經』(no.950, vol.19, p.198b25–27)]

取具諸根畫匠淨信三寶者。先令澡浴清淨著新淨衣。授與八戒然後令畫。

なお、伊藤[2009]によって、密教儀礼の展開にともない、マンダラの作画者が、画師から一連の儀礼を担う阿闍梨へと転換していく過程が取り上げられている。同様のことが、当該のパタ作製儀則にも当てはまる可能性は十分に想定されるだろう。

⁵ 当該箇所の一文には、梵本に何らかの混乱のあったことが疑われる。Tib は *sādhana* を *sādhaka*(*sgrub pa po*)と読んでいるが、この読みに従ったとしても解釈が困難である。ここではひとまず Gan の読みに従い、可能と思われる訳出を試みたが、正確な意味は判然としない。

⁶ Cf. ch.4, 3-2-1, vv.5–9.

再び詳細に、前述の通りに、織工師の[浄化や守護の]儀則がなされるべきであり¹、その[画師]が、かのパタを描くべきであり、あるいは自ら描くべきである。龍腦[香]、鬱金[香]、白檀[香]などによって、身体にぬりつけるべきである。香を焚くとともに、かの真言を108返唱えて、Nāgakesara, Punnāga, Vakula, Campaka, Vārṣika, Dhānuṣkārika, Mālātīの花などによって、その画布にまき、東を向いてクシャ草座に座して、堅固なる智を有し、一切の諸仏諸菩薩に向けられた心を有し、微細な絵筆を手に持ち、倦怠のない心を有する者(画師)が、そのパタ(画像)を描くべし。

3-3-2 諸尊の作画規定

3-3-2-1 主尊 釈迦牟尼如来

まず始めに、釈迦牟尼如来を描くべし。あるゆる勝れた形相を具え²、三十二大士相によって表現され、八十種好によって飾られた身体を有し、宝蓮華に座し、普く光輝をまとい、一尋四方が飾られた姿で、法を説きつつ、はっきりと認識される姿であり、あるゆる勝れた形相を具えている³。

3-3-2-2 ナンダ・ウパナンダ・蓮池

瑠璃でできた茎の蓮華が[画布の]中央にあり、また下方に広大な池があり。二尊の龍王が、その蓮華の茎を支えつつ⁴、如来に視線を向けて、右手で恭敬し、輝いていて、あらゆる装飾によって飾られ、人間の容姿で、半身が龍の格好の Nanda と Upananda が描かれるべし。そして普く、蓮華の葉や花やつぼみであふれ、また水中に生きる生き物たちや鳥や魚などによって満たされており、余すところなく広がって永遠に美しい様相の、かの蓮華の池が描かれるべきである。

3-3-2-3 同根多枝蓮華・文殊を始めとする八菩薩(釈迦牟尼の左辺)

世尊の[座す]根本の蓮華の茎についている枝、そこより発した多くの蓮華の花が規則正しく上に向かって突起している。[釈迦牟尼の]左辺に 8 つの蓮華の花があり、そして、それらの蓮華の花の上に座す八尊の大菩薩の形像が描かれるべきである。まず第一に、聖文殊師利が、わずかに蓮華のおしべのような白色、あるいはサフランの[雄しべの]ような金

¹ 当該箇所解釈は困難であるが、文脈上、画師に、織工師に対して行った浄化や守護などの前行の儀則をなすべきだと解釈した。

² sarvākāraṅgopeta の語は、空性や仏の形像のエピテットとしてしばしば用いられる。

³ 梵本には釈迦牟尼を形容する語として sarvākāraṅgopeta が二度記されているが、同様に Tib にも二度記されていることから、削除せずにそのまま訳出した。

⁴ 同様に ch.7, 4-2-2-4 においても、ナンダ・ウパナンダによって、同根多枝蓮華の中心の茎が支えられている構図を読み取ることができる。このような構図は、Divyāvadāna 第12章所説の「千仏化現」の一節に影響を受けていると考えられる。

色で、童子の容姿であり、幼い少年の体つきであり¹、五髻を頭頂に有し、童子の装飾によって飾られて、左手に青蓮華を持ち、右手で如来を恭敬しつつ、端麗な姿で、如来を見て、平穏な容姿で、わずかに笑みをうかべて、普く光と結びつけられた後光によって包まれている。

第二の蓮華において、聖月光童子が同様に描かれるべきである。第三[の蓮華]において、善財、第四[の蓮華]において、[除]一切蓋、第五[の蓮華]において、虚空庫菩薩、第六[の蓮華]において、地蔵菩薩、第七[の蓮華]において、無罪菩薩²、第八[の蓮華]において、妙眼菩薩である。その全ての菩薩は、童子の装飾によって飾られた童子の容姿で描かれるべきである。

3-3-2-4 弥勒を始めとする八菩薩(釈迦牟尼の右辺)

世尊の右辺に八尊の大菩薩がいて、弥勒を除いて³、一切の装飾によって飾られている。世尊の近くに聖弥勒が、梵行者の装いで、宝髻を結んだ頭頂を有し、金色で、赤い袈裟をつけ、三重の線が記された幟のついた赤い上衣を着て⁴、美しい姿であり、左手に柄のついた水瓶を持ち、左肩に斑点のある羚羊の皮を垂れ下げて、右手に数珠を持ち、如来を恭敬しつつ、かの[如来に]視線を向けて、禪定を抛り所とする心行を有す。

第二の蓮華において、普賢が、栗のような黒ずんだ色で、一切の装飾を身につけて、左手に如意宝珠を持ち、右手に吉祥果を置いて施願をなし、同様に美しい姿で描かれるべきである。

第三[の蓮華]において、聖観自在菩薩が、秋季の月のように輝かしく⁵、一切の装飾で飾られ、宝髻を有し、白い聖紐をつけて、一切智者を頭頂に置き、[すなわち]十力を有し髻の中に結跏趺坐で座す聖阿弥陀を有し、美しい姿で⁶、左手に蓮華を持ち、右手で施願をな

¹ 定金[1998]は、エローラ仏教窟第8窟において、幼児体型の文殊の作例を見いだしている。なお、この幼児形の文殊は、6世紀後半頃の作例だとしている。

² 天息災による「無價」という訳語からは、anarḡha の原語であった可能性も考えられるが、チベット語訳は *sdig med* とあり、梵本の anarḡha の読みを支持している。

³ varjayitvā tu ... の語句によって、前部の内容に補足事項を加えていると考えられる。同様の用法を、ch.5, 2-1.において確認できる。

⁴ 詳細は不明であるが、トンワトゥンデン図(資料篇<参考資料>)を確認すると、弥勒の上衣には、三重線の長い帯状の幟がついている。

⁵ Cf. <試作テキスト>ch.4 後註42. 当該箇の Tib は śarakāṇḍagaurah(「葦の茎のように輝かしく」と読んでいる。しかし、MMK ch.5, 2-2-4 および MMK ch.7, 4-2-2-3.における観自在の尊容を示す記述にも同一の規定がなされており、そこではいずれも śaratkāṇḍagaurah(「秋季の月のように輝かしく」)の読みで梵蔵漢の三本が一致している。また、*Sādhanaṃālā*(no.15, Khasarpaṇa)においても、同一の規定が見られ、やはり śaratkāṇḍagaurah(「秋季の月のように輝かしく」)の読みで梵蔵が一致している。

⁶ Tib は、直後の cārurūpa を阿弥陀にかけて訳出しているようだが、ここでは cārurūpa が観自在にかかると解釈して訳出した。観自在の前後に説かれる普賢と金剛手の尊容を表す場合にも、cārurūpin が用いられており、観自在にかかると解釈する方が前後の文脈にも合うように思われる。

し、禪定を抛り所とする心行を有し、普く輝く身体を有する。

第四[の蓮華]において、聖金剛手菩薩が、左手に金剛杵を持ち、金色で、一切の装飾で飾られ、右手の中に果実¹を有し、また施願をなし、美しい姿で、柔和な眼差しで、瓔珞によって覆われた格好で、真珠のついた聖紐をつけて、輝く宝石がちりばめられた宝冠を有し、たなびいた繒綵をつけて²、白い上衣を着ている。聖観自在、普賢もまさに同様であり、遊行者のような³上衣を着た格好である。また、容姿は前述のごとくである。同様に、第五[の蓮華]において、大慧菩薩、第六[の蓮華]において、寂慧菩薩、第七[の蓮華]において、遍照蔵菩薩、第八[の蓮華]において、滅罪菩薩である。以上、これらの菩薩たちが描かれるべきである。[第五から第八の菩薩たちは]、果実⁴と経巻を手に持ち、一切の装飾によって美しく飾られて、上衣を着て、一切の飾りで飾られて、腰衣を身につけている。

3-3-2-5 八縁覚

また彼らの上に八尊の縁覚が描かれるべきである。比丘の装いで、[三十二]大土相を持つ身体を有し、赤い袈裟と衣を着て、結跏趺坐で、宝蓮華に座し、寂静な装いからなり、普く光環に包まれて、快い香りの花によって覆われている。すなわち、Mālatī, Varṣikā, Dhānuṣkārikā, Punnāga, Nāgakesara などの花によって、普く、散りばめられているパタが描かれる。

3-3-2-6 八如来

世尊釈迦牟尼の左辺、聖文殊師利の上方に、多くの宝石で形成され、とても広大な外観で、岩山の王⁵によって荘厳された宮殿のようなマンダラ⁶を、宝蓮華で覆われた山の如く描くべし⁷。

そこに住する八尊の仏を描くべし。すなわち、瑠璃の光り輝く宝石が散りばめられて一

¹ Tib は Bilva の果実(śrīphala?)としている。Gaṇ の読みには、phala の直前に sa が付されていることから、śrīphala という読みの可能性もあるかもしれない。ここではひとまず、何らかの果実を右手の中に有していると理解しておきたい。

² BHSdic.(p.226)によれば、calana を「腰衣」のように訳出することも可能なようであるが、ここでは calana を√cal に由来する形容詞として解釈し、paṭṭa にかけて訳出した。なお、Tib も calana に対応する g-yo ba の語を用いて訳出している。

³ Tib には tīrthanivāsana に対応する語がなく、Tib の当該箇所周辺の読みは、「観自在と普賢の上衣もまた同様にすべし」とある。

⁴ Tib は Bilva の果実とする。

⁵ Tib には brag gi tshogs とあり、śailarājan ではなく śailarāsi だった可能性も疑われる。

⁶ この maṇḍala の意味は判然としないが、後述される八如来が住する場所であることは間違いないだろう。「八如来が集まった空間」という程度の意味に解釈しておく。

⁷ Tib は「宮殿のマンダラを山々(brag gi tshogs → śailarāsi?)によって荘厳し、宝蓮華で覆われた山の如く描くべし」と読める。śailarājan と śailarāsi?の不一致の問題はあるが、ここでは、Tib の読みに従っておきたい。

尋四方に輝く宝頂を有し、ルビー、サファイヤ、エメラルド(marakata)などによって、瑠璃やエメラルド(aśmagarbha)などによって、種々の大摩尼宝珠によって、普く光り輝きつつ、わずかに暁の色をして、如来の形像で、黄色い衣の上衣を着て、結跏趺坐で座し、法を説きつつ、黄色い腰衣をつけ、[三十二]大土相の甲冑を身につけて、八十種好で飾られた姿で、寂靜な眼差しで、あるゆる勝れた形相を具えた¹宝頂如来を描くべし。

第二に、金色の開華王如来²を描くべし。きわめて多くの Nāgakesara や Vakula などの花によって散りばめられた³開華王如来を描くべし。聖者⁴を觀察しつつ、普く光り輝き、宝石の輝きが散りばめられた光輝によって包まれている。

第三に娑羅樹王如来⁵を描くべし。蓮華の雄しべのような[身色]であり、法を説いている。

第四に、妙眼如来を描くべし。第五に難勝如来、第六に勝者遍照如来、第七に藥師瑠璃王如来、第八に断一切苦王如来を描くべし。全ての尊格が、金色で、如来の形像で、施無畏印で描かれるべきである。

3-3-2-7 浄居天子

また如来たちの上方で、パタの隅で、両側に、雲の中に住し、花の雨を降らしている、二尊の浄居天子が描かれるべきである。一切の仏・菩薩・縁覚・聖声聞たちに恭敬し、空中に住する二尊[の浄居天子]が描かれるべきである⁶。

3-3-2-8 八声聞

¹ Cf. ch.4, 3-3-2-1.

² 本經は開華王如来の梵語名を知ることのできる貴重な文献である。なお、開華王如来とその関連文献を取り上げた研究に飯塚[2002a][2002b]があり、胎藏マンダラへの展開過程の中で開華王如来を考察した研究に田中[2012]がある。

³ abhyavakīrita の形は BHSdic. p.61(abhyavakīrati)を参照。

⁴ 天息災は、この「聖者」を「聖妙吉祥菩薩」と訳出している。開華王如来と文殊の密接な関係に基づいた訳出であろうか。なお、Tib は開華王如来の尊容に関する詳細な情報を欠いている。

⁵ 飯塚[2002, pp.79–82]が指摘するように、本經の最勝パタ、中位パタと類似の構図のパタを説く『文殊師利法寶藏陀羅尼經』(no.1185, vol.20, 804c1–2)にも、「敬禮娑羅王佛^{梵名} 娑引禮捺囉囉^引惹 敬禮開敷華王佛^{梵名} 三矩蘇^{上野}弭多」とあり、開華王如来と娑羅樹王如来の両尊は別々に登場する。しかし一方では、『大日經疏』(no.1796, vol.39, p.622c8)には、「南方觀娑羅樹王花開敷佛」とあり、両尊が同一視されていたとも考えられる(Cf.頼富[1990, p.81]). 田中[2010, p.54, 註 8]は、こうした関連文献の記述をもとに娑羅樹王如来と開華王如来が、融合して一尊となったことを指摘している。

⁶ すなわち計4尊の浄居天子が描かれると考えられる。雲中に住して花の雨を降らす浄居天子と、雲には住さず空中に住して恭敬する浄居天子の2尊がセットで、パタ上方の両側に描かれるのだろう。ただし、トンワトウンデン図(資料篇<参考資料>)には、4尊とも雲に住する浄居天子が描かれている。

また、縁覚たちの上に、八尊の大声聞が描かれるべきであり、菩薩の頂¹の位置を避けて住す。すなわち、尊者 Śāriputra, Mahāmaudgalyāyana(大目乾連), Mahākāśyapa(大迦葉), Subhūti(須菩提), Rāhula(羅睺羅), Nanda(難陀), Bhadrīka(婆捺哩迦), Kaphiṇa(劫賓那)である。

3-3-2-9 縁覚・声聞(補足)

また縁覚は以下である。Gandha(嚙駄), Mādana(摩捺曩), Candana(賛捺曩), Upariṣṭa(烏鉢哩瑟吒), Śveta(濕吐多), Sitaketu(悉多計覩), Nemi(儂弭), Sunemi(蘇儂弭)である。全ての者たちがすばらしく、寂靜な装い(veśa)で、自我をよく抑制した容姿である。

大声聞たちもまた、合掌し、世尊釈迦牟尼仏を觀察している。

3-3-2-10 天子

また上方で、浄居天子からすぐそばの別の二尊の天子が、普く、長く広がったとても美しい天蓋についたひもを引っ張り、一切の仏・菩薩・縁覚・聖声聞たちの上方で、[天蓋]支えていて、神々しい花環と衣を身につけた二尊の天子が描かれるべきである。

3-3-2-11 莊嚴・裝飾

世尊釈迦牟尼の頭頂の上方において、真珠の瓔珞やルビーやサファイヤの宝石などとながれた宝石の連なった束を描き、そしてそこに、繪綵と天蓋がつけられていて、さらに普く真珠の瓔珞が垂れ下がり飾られているものを描くべし。

3-3-2-12 情景・仙人・成就者

また世尊[釈迦牟尼]仏の蓮華座より下方で、聖文殊師利の足下のそばで、龍王 Upananda 側に、大きな宝石を有し、蓮華の池より隆起し、宝石のような芽や、洞窟、洞穴、珊瑚、つる草によって取り囲まれ、宝樹があり、大仙人や成就者が住する山を[描くべし]。

3-3-2-13 ヤマーンタカ

その山の高く盛り上がったところに、忿怒の王で、非常に恐ろしい姿を有し、[右手に]罽索を手に持ち、左手に棍棒を持ち、眉をしかめた表情で、教令を受けつつ、聖文殊師利に視線を向けて、膨れてたれた腹で、髪の毛が逆立ち、アンチモンや黒雲のような色であ

¹ この śiras の意味は判然としないが、おそらく、パタに描かれる菩薩の中で、最も上方に描かれる菩薩を避けるように八大声聞を描くという指示ではないだろうか。すなわち、この śiras は、身体の部位である「頭」ではなく、パタに描かれている菩薩のうち、「最も上の位置」にいる菩薩を指していると思われる。

り、赤褐色の長い髭と大きく開いた口で、長い爪を有し、赤い眼で、蛇の飾りを首の辺りに有し、虎の獣皮を着て、一切の作障者を殺す者であり、非常におぞましく、大忿怒王で、普く光炎を有する Yamāntaka 忿怒王を描くべし。

3-3-2-14 行者

その山の下で、岩場に座し、地面に膝を曲げた体勢(蹲踞)で、香炉を手に取り、[依頼者である行者の]装いや外見が捉えられた特徴のままに、[文殊の]信奉者のように、聖文殊師利に視線を向けた行者を描くべし。

3-3-2-15 大宝石山王

Nanda 龍王の近くで、世尊釈迦牟尼の下で、右辺に、蓮池から生起した大宝石山王を、前述したように¹、そのように描くべし。Yamāntaka 忿怒王から離れていて、神々しい花が散ぜられた[大宝石山王]を描くべし。聖観自在菩薩の下に、かの山(大宝石山王)²を描くべし。ルビーの宝石を有し、一つの隆起があり、瑠璃でできた峰のような、かの高く突き出した山(大宝石山王)³を描くべし。

3-3-2-16 ターラー

そこ(大宝石山王)に住し、天女であり、聖観自在菩薩の悲を有し、一切の飾りによって飾られ、雑色の繒綵がついた赤い上衣を身につけ、女性の飾りで全身が飾られて、左手に青蓮華を持ち、金色で、小さい腹を有し、やせ細っておらず、幼すぎず、あまり年老いておらず、禅定に入った意識の状態、教令を受けつつ、右手で施願をなし、少しかがんで、結跏趺坐で座し、聖観自在菩薩に少しく視線を向けて、普く光輪によって包まれている、聖ターラーを[描くべし]。その瑠璃宝の峰において、あらゆる方向から Purnāga の木が取り囲んでいて、[その Purnāga の木の]諸々の枝には、普く大量の花が咲き広がり、ターラー女尊を覆っていて、そしてまさに[ターラー]に対して垂れ曲がったその枝自体も、雑色の新芽で覆われ、種々の形や色の輝きを有し、ターラー天女の方を向くように描かれるべきである。

3-3-2-17 ターラー(補足)

(46)最勝の女尊(ターラー)は、一切の作障者を殺し、怖畏を滅する。行者の守護のため

¹ 3-3-2-12 において説かれる、ヤマーンタカの住する山の特徴と同様に描くべきだという指示であろう。

² 当該箇所 の tam は、世尊釈迦牟尼の下方右辺に描かれる大宝石山王を指していると思われる。

³ おそらくこの tad も大宝石山王を指していると思われる。

に、施願をなし、美しい姿を有する[ターラーを]描くべし。

(47)女尊は女性の姿をとり、悲の十力の娘であり、あらゆる者たちに幸福の施願をなす女尊を描くべし。

(48)ここにおいて、女尊は偉大な威厳を有する妙音童子の母であり、普く、行者の全ての作障者を滅するために、

(49ab)守護のために、幸福のために、支配者の娘をパタに布置すべし。

3-3-2-18 ヤマーンタカ(補足)

(49cd)山頂に住したかの者が忿怒王(ヤマーンタカ)である。

(50)[ヤマーンタカは]一切の作障者を滅するために、偉大な怖畏を有す者であり、偉大な尊崇されるべき者であり、偉大な暴悪を有す者であり、偉大な威厳ある者と勝れた勝者の息子によって語られる。

(51)[ヤマーンタカは]教法に関して、敵対する者たちを抑圧するために、行者の守護のために、一切の作障者を滅する者(ヤマーンタカ)と定められる。

(52)[ヤマーンタカは]獯猛で、瞋恚を活動原理とし、真言の尊格たちを引き寄せる者であり¹、非常に恐ろしく、また恐ろしい姿を有し、一切の非常な者たちを防御する者である。

(53)[ヤマーンタカは]空で活動する者において、あるいは地上で活動する者において、また地下[で活動する者]においても、普く、思い通りにならない者たちや罪悪や凶暴をなす者たちを支配下におく者である。

(54ab)[ヤマーンタカは]牟尼の教法に敵対する一切の悪者たちを²消滅させる。

3-3-2-19 龍族

(54cd)普く、四隅を有する四角形のパタを描くべし。

(55)また、下方でパタの端に、広大な池を住処とする龍族の体を、一尊ずつ普く描くべし。

¹ ākṛṣṭā は ākṛṣ に ṭṛ が付加された m, sg, N の形として訳出を試みた。

² ye は m, pl, N の形であるが³、sarvaduṣṭān viruddhān śāsane muneḥ を率いて、nāśayati の目的語となっていると解釈した。

(56) 白く輝かしい体で、人間のような格好によって[池より]出て¹、上方を向いて、常に虚心合掌している。

(57) 七つのかさ状に広がった頭部を有し、偉大な勇者であり、偉大な主と呼ばれ、Ananta という名であり²、如来を見ていて、大摩尼宝によって飾られている。

(58) すばらしく、そして美しい姿で、宝石で作られた飾りによって飾られ、光輪を有し、大龍王と知られる者を描くべし。

(59) 牟尼の教法において行動し、一切世間の利益をなすことに従事し、一切の作障者を滅するために、池に住す者を描くべし。

4 最勝パタの讚嘆偈³

(60) 過去に如来たちによって詳細に説かれた、この最勝のパタの儀則が、要略して勝者(釈迦牟尼)によって説かれたのである。

(61) [パタを]描くかの智者には無量の福德がある。コーティ切の間になされた非常に凶悪な悪業、

(62ab) それか、地上においてパタを見ると、すぐに滅するだろう。

(62cd) 五無間罪をなした者、誤った習慣を有す者たち、非難される者たち、

(63) あらゆる罪を犯した者たち、輪廻の暗闇の中で生活する者たち、死後の所趣や生まれの下劣な者たち、そのような者たちに⁴、パタ[を見ること]を妨げるべきでない。

(64) 彼らにとって、最勝の牟尼によって説かれたパタを見ることは有果であり、見ただけでその瞬間に、その罪から解放されるだろう。

(65) ましてや、非常に清浄なふるまいを本質とする者は、清浄な状態であることから、真言の悉地に常に努めるものたちが、悉地を得ることは言うまでもない。

¹ Tib を参照すれば、おそらく、半身が人間であり、その部分が池より現れ出ているのだと思われる。 Cf. *yan lag bzang po dkar po dang | lus phyed mi yi rnam par skyes |*

² 当該箇所は著しく Śloka の形式から逸脱している。趣意としては、龍族 Ananta の特徴を説明する箇所と理解して差し支えないだろう。

³ 最勝パタの讚嘆偈を始めとし、以下の中位パタ、小位パタの讚嘆偈には、パタを見ることによって得られる殊勝な功德が繰り返し説かれている。その中でも特に滅罪の功德が強調されており、その根底には、罪障や悪業を滅することによって良き後生を得ようとするヒンドゥー文化の功德観念を指摘することができるだろう。

⁴ ch.4, 3-2-3, v.20 も、社会的弱者を始めとするあらゆる有情のために、パタやパタを用いた成就法が説かれたことを説いている。

(66)コーティ劫の間、一切諸仏に供養して[積集した]福德、それほどの福德を、地上においてパタを描くことから、持誦者は得るだろう。

(67)ガンジス河の砂と言われるほどの量、それほどの量の諸仏、諸菩薩、縁覚たちがいる。

(68)縁覚や声聞は世間における勝者であり¹、種々の形式の恩恵を享受するが、そのような果を、人はパタを描いて見ることから得るだろう。

(69)儀軌を読誦するだけで、あるいはまた供養や歓喜することから、かの全ての儀軌において、真言の悉地が堅固にされる。

(70)勝者の弟子(声聞)たちによって、かの²縁覚によって、気高く偉大な信念を有する菩薩たちによって、どれほど世間の真言が説かれても、

(71ab)このパタ(最勝パタ)の前で、あらゆる真言が成就するだろう³。

菩薩藏華嚴大乘經典の文殊師利根本儀軌より、第4章。
 広大なる最勝パタ儀則、説き終わる。

¹ khadgin は khadgina の a 語幹の形をとっていると考えられる。したがって khadgina, śrāvaka, jitvan を m, sg, N として訳出した。

² 当該箇所 の tat は、1 音節足すための tat であろう。

³ 類似の内容が ch.6, 2, vv.6-8ab において説かれている。ただし、この小位パタ讃嘆偈の一節には、外教の神々を始めとする諸尊によってどれだけ真言が説かれようとも、小位パタの前で成就するという趣旨が説かれている。ch.4 当該箇所では、勝者の弟子や菩薩といった仏教内の尊格を確認できることから、最勝パタによって得られる悉地と、小位パタによって得られる悉地に一応のレベルの差が意識されていたのであろうか。

第5章 試訳

1 導入

そのとき、実に、世尊釈迦牟尼は、一切のかの集會を觀察して、文殊師利童子に[以下の
ように]述べた。

「文殊師利よ。さらにまた、汝の中位のパタの儀則がある。私はそれを説くのである。汝
は聞きなさい。善く正しく思念しなさい。」

2 中位パタ作製儀則

2-1 諸規定の略説

まず始めに、前に示した[綿]糸を用いて¹、まさに前述した儀則に従って、前に規定され
た織工師たちによって²、まさに前に[示した]規準の中位のパタ³が、美しく、清らかで、規
準に準じ、縁を有するものとして[作られるべきであり]、固着しておらず、毛や塵などの
ない顔料によって、最勝[パタ]のように、まさにそのように作るべきであるが、ただし⁴、[画
布の]大きさや[パタに描かれる諸尊の]尊容に関するものを除き、そのパタ(中位パタ)は後
方から⁵描かれるべきである。

2-2 諸尊の作画規定

2-2-1 淨居天

¹ Cf. 資料篇<試作テキスト> ch.4, 3-1-5.

² Cf. 資料篇<試作テキスト> ch.4, 3-2-1.

³ Cf. 資料篇<試作テキスト> ch.4, 3-2-3.

⁴ varjayitvā tu ... の語句によって、前部の内容に補足事項を加えていると考えられる。すな
わち、中位パタ作製の大綱は、最勝パタに準ずるが、中位パタに描かれる諸尊の詳細な尊
容については、これから説かれる本章 2-2-1 以降の規定に準ずるべきだという補足の内容を
示していると考えられる。なお、同様の用法を ch.4, 3-3-2-4.において確認できる。

⁵ paścāt は「背後に」「後方に」の他にも「西方」の意味があるが、パタの作画過程におい
て東西南北の方位を意識するような記述を確認できないため、ここでは「後方に」と解釈
しておく。なお、二次元のパタに対する「後方に」の表現は「上方に」と解することがで
きる。実際、直後に示される作画過程において、最初に作画を指示されているのは主尊釈
迦牟尼ではなく淨居天であり、主尊釈迦牟尼の後方(上方)にまず淨居天を描くべきだと理
解できるだろう。

まず始めに、普く輝く容姿であり、水晶や宝石からなるような容姿であり、白い真珠の瓔珞で飾られた浄居天を[描くべし]。

2-2-2 主尊 釈迦牟尼如来

その中央に、世尊釈迦牟尼が描かれるべきであり、宝獅子座に坐し、法を説きつつ、一切の容姿の中の最勝を有する。

2-2-3 文殊(釈迦牟尼の右辺)

[釈迦牟尼の]右辺に聖文殊師利が、蓮華の雄しべのような[色]、あるいはサフランのような太陽の色で、左肩の辺りに青蓮華を持ち添えて、虚心合掌し、世尊釈迦牟尼を観察しつつ、少しく微笑し、童子の体つきで、五髻によって飾られた頭頂を有し、幼い少年の飾りによって飾られて、右膝頭を地につけて(蹲踞)低頭している¹。

2-2-4 観自在を始めとする八菩薩(釈迦牟尼の左辺)

また、世尊釈迦牟尼の左側に、観自在が、秋季の月のように輝かしく²、まさに前述したように、そのように描かれるべきであるが、ただし、世尊に拂子を振り動かして、かの者(観自在)の側に、聖弥勒、普賢、金剛手、大慧、寂慧、虚空庫、除一切蓋がいる。かの者たちは、順番に描かれるべきである。最勝[パタ作成儀則]のように、そのように一切の装飾によって飾られた者たちが描かれるべきである。

2-2-5 八如来

またかの者たちの上に、尊き八仏が描かれるべきであり、立ち上がっていて、右手で施無畏をなし、黄色い衣を上衣として着た姿で、左手には衣の端が掛けられていて、少しく赤色に輝く袈裟を着て、普く光り輝き、あるゆる勝れた形相を具えている³。[その八仏とは]すなわち、開華王、宝頂、Śikhin, Viśvabhuj, Krakucchanda, Kanakamuni, Kāśyapa, 妙眼である。これらの尊き諸仏が描かれるべきである。

2-2-6 八声聞・八縁覚(釈迦牟尼の右辺)

¹ こうした姿勢の表現は、行者を描く際に用いられている(Cf.資料篇<試作テキスト> ch.4, 3-3-2-14; ch.5, 2-2-9; ch.7, 4-2-2-5)。これらの記述を参照すれば、おそらく *avanata* の意味は *jānumaṇḍala* と *śiras* の両方にかかっていると解釈でき、帰依を表す蹲踞の姿勢をとっていると考えられる。

² Cf. <試作テキスト>ch.4 後註42。

³ *sarvākāraṅgaropeta* の語は、空性や仏の形像のエピテットとしてしばしば用いられる。

尊き聖文殊師利の右辺近くに、大集会が描かれるべきである。[すなわち]八大声聞、八縁覚であり、彼らがまさに前述の通り、その通りに描かれるべきである。ただし、聖大目犍連と舍利子が、世尊釈迦牟尼に払子を振り動かし、立ち上がった状態で描かれるべきである。

2-2-7 浄居天衆

同様に、浄居天衆の天子たちが描かれるべきである。帝釈天、夜摩天、兜率天、妙化天、清浄天、無垢天、善現天、無熱天、光明天、娑婆世界の主である梵天、色究竟天、以上を始めとする色界や欲界の天子たちが、順番に描かれるべきである。[天衆は]聖文殊師利の近くにおいて、積み重なった集会として布置され、各々の姿と装いを有して描かれるべきである。

2-2-8 大宝山

世尊の獅子座の下方に、普く、大海より突き出た大宝山が、パタの端に至るまで描かれるべきである。

2-2-9 行者

パタの端の一隅に、装いや外見そのままに、膝を地に着けて(蹲踞)低頭で、香炉を手に取った行者が、描かれるべきである。

2-2-10 ヤマーンタカ

また、かの宝山において聖文殊師利の下方に、ヤマーンタカ忿怒王が前述の通りに描かれるべきである。

2-2-11 ターラー

世尊の左辺において、獅子座の下方で、聖観自在の足下の近くで、またかの宝山に坐したターラー天女が、前述の通りに描かれるべきである。

2-2-12 装飾

また普く、そのパタは花が散りばめられている。Campaka、青蓮華、水蓮華、Mālatī(ジャスミンの一種)、Vārṣika(ジャスミンの一種)、Dhānuṣkārīka、Pumṇāga、Nāgakesara などの花によって、普く散りばめられている。

2-2-13 天子

また上方で、パタの両端に、二尊の天子が多くの大花をまきつつ、美しい姿を有し、空中に住し、雨雲の中に身を入れて潜め[頭だけを]出しながら、輝いて描かれるべきである。

3 中位パタの讚嘆偈²

(1)かの中位のパタが説かれ、勝れた利益が現れる。地上における人々の中位の悉地は、かの[中位パタ]に基づく。

(2)以前にいかなる罪がなされ、輪廻の中をさまよっていても、ここにおいてパタを見ることより³、その罪がまさに瞬間に滅するのである。

(3)愚者たちは知らず、五趣をさまよう。なぜならば、中位に関する文殊のパタを見ないからである。

(4)罪をなした者や五無間罪をなした者であっても、素行の悪い者であっても、多様に説かれた真言が成就するだろう。

(5ab)誦者もまた速疾に悉地を得るだろう。

(5cd-6ab)中位のパタを見るならば、病を患う者は病から解放され、貧しい者は富を得て、息子のいない者は息子を得る。

(6cd)[中位パタを]見るや否や、そのときに広大な福德を得るだろう。

(7)人(中位パタを見た者)は、必ず天・人たちの安楽を享受する者となり、本生の終わりに、確かに仏位にある者となるだろう。

(8)描くことより、唱えることより、同じく供養や書写することより、見ることより、触れることより、一切の罪から解放される。

(9)このように、このパタの大いなる威光を請い願い、随喜することより、今生で速疾

¹ Tib には、「雲の中より頭だけを出して」とある。

² 各章末のパタの讚嘆偈には、パタを見ることによって得られる殊勝な功德が繰り返し説かれている。

³ 最勝パタの讚嘆偈を始めとし、以下の中位パタ、小位パタの讚嘆偈には、パタを見ることによって得られる殊勝な功德が繰り返し説かれている。特に滅罪の功德は顕著に強調されている。

に有益な果を得る。

(10) 千万劫の時間をかけても言葉で言い表せない程の有益な福德を、人はパタを見ることより得るだろう。

菩薩藏華嚴大乘經典の文殊師利根本儀軌より、廣大なる第 5 章。
第二の廣大なるパタ儀則、説き終わる。

第 6 章 試訳

1 小位パタ作製儀則

1-1 諸規定の略説

そのとき実に世尊釈迦牟尼は、再びまた文殊師利童子に[以下のように]述べた。
 「文殊師利よ、さらにまた、あるゆる有情が勞せずして悉地に至るために¹、「第三の小位[の
 パタの儀則]」というパタの秘密の儀則がある。まさに前述した儀則にしたがって²、織工
 師たちによって、同様に仏の一搦手の長さ³の正方形[の画布が作られるべきであり]、前の
 ように、パタが、前述した染料⁴によって描かれるべきである⁵。」

1-2 諸尊の作画規定

1-2-1 主尊 文殊

まず始めに、獅子座に坐し、幼い童子の体つきで、前のように、法を説きつつ、普く光
 り輝き、光輝より現出しつつ、美しい姿を有した聖文殊師利が描かれるべきである。

1-2-2 普賢

[文殊師利の]左側に、宝石でできた盤石に坐し、払子を[右]手に持ち、如意宝珠を左[手]

¹ 当該箇所 の yad は、目的を表す副文を率いる接続詞として解釈した。また、Tib は以下のように訳出している。 *gzhan yang khyod kyis ras ris gsum pa'i cho ga rab tu gsang(P; gsungs D) ba zhes bya ba yod de | gang sems can rnams la 'bad med par 'grub par 'gyur ba ... | gang* 後部には、'grub par 'gyur ba の主語に当たる語がないため、gang 前部の「第三のパタの秘密の儀則」と記される部分が意味上の主語にあたるのだろう。しかし、梵本を確認すると、文末の動詞は√gam の 3rd, pl, opt. の形であり、この動詞の形に基づくならば、主語も複数である必要がある。以上の事情を考慮して、梵本の動詞√gam(3rd, pl, opt.) の形に合うように、sarvasattvānām を sarvasattvāḥ に整定して訳出した。

² Cf. 資料篇<テキスト> ch.4, 3, 最勝パタ作製儀則。

³ 1sugatavitasti(仏の一搦手)は、常人の 1hasta(一肘)である。詳細については、資料篇<テキスト> ch.4, 3-2-3 を参照されたい。

⁴ Cf. 資料篇<テキスト> ch.4, 3-3-1.

⁵ 以下、√citrāya(Denominative)に由来する citrāpayitavya(causative+gerundive)の形が頻出するが、訳出する際には、causative の形を特に意識していない。

に持ち、Priyaṅgu のような黒ずんだ色の聖普賢が前のように¹描かれるべきである。

1-2-3 観自在

聖文殊師利の右側に、宝石でできた盤石に坐し、前のように²払子を[右]手に持ち、左手に蓮華を持ち、普く光り輝いた姿を有する観自在が描かれるべきである。

1-2-4 山景

また[文殊師利の]獅子座より下方に、金色の山がパタの端に至るまで描かれるべきである。

1-2-5 ヤマータカ

パタの端の隅において、聖文殊師利の獅子座の下方で右側に、Yamāntaka 忿怒王が、前のように³描かれるべきである。

1-2-6 行者

香炉を手に持った行者が、前のように⁴描かれるべきである。

1-2-7 開華王如来

聖文殊師利の上方に、16 指(aṅgula)の大きさで⁵、宝山の洞窟に身を潜めた開華王如来が描かれるべきである。

¹ Cf. 資料篇<テキスト> ch.4, 3-3-2-4.

² Cf. 資料篇<テキスト> ch.4, 3-3-2-4; ch.5, 2-2-4. ch.4 所説の最勝パタに描かれる観自在は、左手に蓮華を有し、右手で施願をなしている。一方、ch.5 所説の中位パタに描かれる観自在は、最勝パタに描かれる観自在の尊容を補足するように、主尊釈迦牟尼に対して払子を振り動かすと規定されている。それゆえ、ここでは、最勝パタに描かれる観自在と同様に描き、さらに中位パタに描かれる観自在と同様に払子を持つように描く規定を示していると考えられる。

³ Cf. 資料篇<テキスト> ch.4, 3-3-2-13.

⁴ Cf. 資料篇<テキスト> ch.4, 3-3-2-14; ch.5, 2-2-9.

⁵ Tib は ṣoḍaśāṅgulapramāṇa を直後の ratnaparvataguḥālīna にかけているようである。しかし、チベットやネパールの仏画の技法に多大な影響を与えたとされる造像量度関連文献(Cf. 清水[1974], 小野田[1995])を参照すると、後代のインド仏教では、尊像を作製する際に、大きさや身体比率などが詳細に規定されていたことがわかる。こうした文献の記述を参照する限り、当該箇所の大さの規定は小位パタの特徴である開華王如来の大きさを規定する表現だと考えるのが自然であろう。したがって、ṣoḍaśāṅgulapramāṇa を saṅkusumitarājendra にかけて訳出した。

1-2-8 山景

楼閣のようなものを有する十の山脈が描かれるべきである。また普く山の形状で囲まれたかのパタを描くべし。

1-2-9 浄居天子

また上方で、パタの隅に住し、山の斜面に沿って、飛翔しつつ、この[山々に]大量の花をまいている二尊の浄居天子、Śuddha と Viśuddha が前のように描かれるべきである。

1-2-10 装飾

また種々の花が散りばめられたかのパタが描かされるべきである。

2 小位パタの讚嘆偈

(1)この三種の全てのパタの仕様が説かれ、このパタは諸々の低位の儀礼行為に関して勝れており、「小位」と名付ける。

(2) 100 億劫の間に、なしたり、なさせられた、ひどく残酷な悪業であっても¹、パタを²見ることより解放される³。

(3ab)パタを見るや否や、まさにその瞬間に、解放される。⁴

(3cd-4ab)知者は 100 億の諸仏に供養すべきであるが、そのことは⁵、小位パタを見るこ

¹ おそらく当該箇所の子は v.2abc 句を率いて、√muc の意味上の主語となっていると思われる。ただし、註 4 においても言及しているように、v.2cd と v.3ab. は非常に類似した内容を説く記述であり、もともとは現行の梵本の v.2cd に相当する半偈はなく、現行の梵本の v.2ab と v.3ab で一偈であった可能性が疑われる。

² 韻律により paṭam の m が落ちたと考えられる。

³ 最勝パタの讚嘆偈を始めとし、以下の中位パタ、小位パタの讚嘆偈には、パタを見ることによって得られる殊勝な功德が繰り返して説かれている。特に滅罪の功德は顕著に強調されている。

⁴ v.2cd と v.3ab. は非常に類似した内容を説く記述である。もし v.2cd が記されていなかったとしても、v.2a の yat と v.3b の tat によって「なしたり、なさせられた、ひどく残酷な悪業であっても、その悪業が瞬時に解放される」という文意となり、問題なく理解できる。当該箇所には何らかの混乱が疑われる。

⁵ Tib および天息災訳を参照すれば、当該箇所の趣意は、「無量の諸仏に智者が供養することによって積まれた福德の量は、小位のパタを見ることの 16 分の 1 にも満たない」ということであろう。当該箇所の yah は v.3cd 句を率いて、v.4ab 句の意味上の主語となっている

との16分の1に至らない。

(4cd-5ab)保護者である一切の諸仏に供養をなすと、功德があるが、それほどの功德を、知者は小位パタを見るときに得るだろう。

(5cd)喜びの享受のために、ここにおいて、諸々のすばらしい行為を実行すべし。

(6-8ab)どれほどいかなる真言が、梵天や帝釈天や仙人によって説かれても、ガルダによって、水天や日天やクベーラによって¹、財宝[を与える者=クベーラ]²を始めとするあらゆるラクシャサ、ダーナヴァの王、マホーラガによって[説かれても]、月天や風天や夜摩天を始めとする者たちによって、ヴィシュヌやシヴァを始めとする者たちによって説かれても、ここに導かれた全ての真言が、[小位]パタの前で成就するのである³。

(8cd-9ab)常にここにおいて、[小位パタは]諸々の息災や同様に増益や調伏をなし、最勝の勝者たちによって、ここにおいて諸々の非難が除かれる。

菩薩藏華嚴大乘經典の文殊師利根本儀軌より、廣大なる第6章。
第三の小位パタ儀則、説き終わる。

ののだろうか。ただし Tib には yah を想定させる訳語はなく、何らかの混乱が疑われる。

¹ 本来ならば、vainateyena proctā <<ca>> varuṇādityakuberaiḥ というような形が適切であろう。韻律の制限によって、-^hkuberayoḥ の形をとっていると思われるので、試訳は前者の形を想定して訳出した。

² おそらく dhanadādyai が適切な形だと思われるが、韻律の制限によって、dhanādyai の形となったのだろうか。また dhanada は直前の kubera を指すと思われる。クベーラは葉叉や羅刹を率いる一面を有するので、直後の rākṣasa にかけて解釈した。

³ 類似の内容が ch.4, 4, vv.70-71ab において説かれている。ただし、この最勝パタ讃嘆偈の一節には、勝者の弟子や菩薩といった仏教内の尊格を始めとする諸尊によってどれだけ真言が説かれようとも、最勝パタの前で成就するという趣旨が説かれている。ch.6 当該箇所では天部や外教の神々という尊格が中心に据えられていることから、最勝パタによって得られる悉地と小位パタによって得られる悉地に、一応のレヴェルの差が意識されていたのであろうか。

第7章 試訳

1 文殊の請願

そのとき、実に、文殊師利童子は、座より立ち上がり、世尊釈迦牟尼を三回右繞し、世尊の両足に頂礼して、世尊に対して以下のように述べた。

「善きことであります。善きことであります。世尊如来応供正等覚者によって、この法門がよく説かれるとは、あらゆる明呪の実践行に従事する者たちのために、利益のために、安樂のために、世間の衆生に対する憐憫のために、菩薩たちの方便の巧みさが明示されたのであり、最上の涅槃¹に達するものであり、卓越した道に関するものであり、必ず菩提の目的に至るものであり、菩薩たちの継承であり、あらゆる成就されるべき真言の目的や行であり、この真言の秘密を全ての者たちに詳細にするでしょう。

未来世において、世間主が滅した時、如来や太陽神の種族の系統が尽きた時、全ての仏、菩薩、聖声聞、縁覚たちによって²全ての仏国土が放棄された時、器世間が³暗闇になった時⁴、聖なる道が切断された時、あらゆる明呪や真言や薬や摩尼宝が消失した時、善人がいなくなった時、有情界が光を奪われた時、有情たちは、怠惰となり、

¹ nirvāṇoparigāmin は、直訳すれば、「涅槃の上[の境地]に行くもの」という意味になるだろうが、趣意をとって訳出した。

² Tib の読み(*sangs rgyas dang byang chub sems dpa' thams cad dang 'phags pa nyan thos dang rang sangs rgyas rnam kyis mun par gyur pa dang*) は sarvabuddhabodhisattvāryaśrāvaka-pratyekabuddhair を andhakāribhūte の主語として訳出している。

³ Tib の読み(*snod kyi 'jig rten rnam par 'jig pa dang ...*) は lokabhājane を vicchinna の主語として訳出している。

⁴ 当該箇所 の Tib では、「全ての仏国土が放棄された時、全ての仏、菩薩、聖声聞、縁覚たちが埋没してしまった時、器世間がバラバラに破壊された時、あらゆる明呪や真言や薬や摩尼宝がなくなった時...」と解釈されており、筆者の提示する梵本の読点とは若干異なって解釈されている。Tib に依拠したとしても翻訳上問題なく解釈できるが、梵本の示す sarvavidyāmantraṣadhimaṇiratnopagate の複合語に対して *rig pa thams cad dang sngags dang sman dang nor bu rin po che med pa* と訳出される *med pa* については疑問が生じる。この Tib の訳語と当該の原文を比較すれば、おそらく当該の Tib の訳語は、²maṇiratnāpagate というような原語に基づく訳語だったことが疑われる。残念ながら、当該箇所は Ms に対応箇所がなく、これ以上の検証は困難であるため、現時点では二種の読みの可能性があった点を指摘するまでにとどめ、Gaṇ, Vai の提示する梵本の読み に依拠して訳出しておく。

⁵ Tib の読み(*'phags pa'i lam dang rig pa thams cad dang sngags dang sman dang nor bu rin po che med pa dang*) は、āryamārga と sarvavidyāmantraṣadhimaṇiratna を並立的に扱い、apagata で受けて訳出している。

無気力になり、信心がなくなり、乱暴になり¹、悪友によってとらわれ、嘘つきになり、虚偽を有し、詐欺を行うだろうが、その者たちが、この法門を聞くと、恐怖に陥るだろう。怠惰で無精でいる²者たちは信仰せず、愛欲を求める者たちは信頼せず、邪見にとどまる者たちは多くの不善を生み出すであろう。正法を誹謗する者たちは阿鼻地獄に落ちる運命にあり、この上ない恐怖に陥るのであるが、そのような苦しめられた者たちの利益のために、支配されない者たちを支配下にするために、支配下にある者たちに無畏を与えるために、巧みな方便を集成することによって、諸々の真言やパタに関する儀則を世尊は説きたまえ。今やそのときと汝は思いたまえ。」

2 釈迦牟尼の回答

そのとき、世尊、釈迦牟尼は、文殊師利童子に称赞を与えた。

「善きことである。善きことである。文殊師利よ。汝が、如来に対して[この法門の]意義が尋ねられるべきだと考えるとは。文殊師利よ、汝の最勝で最上秘密の明呪の実践行や成就法に関する行の章品よりパタの儀則が流出したのであり、諸々の最勝の心呪の中の最勝の目的であり、最上の秘密であり、多大な利益を有し、あらゆる真言を内に含むものである。これら六つの六字最勝心呪は、確かに³そのときに、悉地に到達するのである。かの有情たちを調伏するために、巧みな方便を集めた真言[の法門]に入らせるということのために、確実に菩提を獲得するということのために、76 俱胝の諸仏によって過去に説かれたこと⁴を私もまた今このときに説くであろう。未来の衆生たちのために、汝はそれを聞くべきであり、善く正しく思念しなさい。[そうすれば]私は汝に説くであろう。またそれ(真言の法門)とはいかなるものか。」

¹ 当該箇所は、Gan, Vai の支持する khaṇḍakā ではなく khalakā と読むべきだと推測した。というのも、①当該箇所は末法の世において衆生が乱心する様子に言及しており、khaṇḍakā では、衆生の心理状態を表すような意味には取れず、前後の文脈と合致しないと思われる。②Tib 訳の *mi srun pa* は「荒々しい」「悪意のある」というような意味であり、khaṇḍakā の訳語とは思えない。以上の二点をふまえ、綴りが類似し(ṅḍa と la の字体は非常に似ている)、Tib 訳の *mi srun pa* の原語として想定できる khalakā を当該箇所原語として推測して訳出した。

² 当該箇所の *abhiratā* は～の状態にあるという意味に解釈した。なお、Tib 訳は *abhiratā* の意味を明確に訳出していないようである。

³ 当該箇所の *avikalpam* を Tib は *the tshom med pa* (「疑いなく」と訳出している。テキスト後註で示したように、MMK ch.2 においても、同様のコンテキストにおいて「間違いなく」「確かに」というような意味で *avikalpataḥ* が用いられている。したがって当該箇所を「確かに」という意味で訳出した。

⁴ テキスト後註で示したように、類似の表現が MMK ch.4 においても確認できる。果てしない過去から膨大な数の諸仏によって説き明かされてきたことを強調することで、これから説き明かされる法門の偉大さ、重要さを誇張する意図が見てとれるだろう。

護という目的を達成するだろうが、その者たちは(六字真言に関する)根本の行のみによって、偉大な王国の偉大な享樂の支配という目的を達成するのであり、その者たちは、直ちに、そのときその機会に、悉地に到達するのであり、ついには[六字真言の悉地を]知ろうとするためであっても、[悉地に到達するだろう]。なぜならば、これらの最勝の心真言は成就されるべきだからであり、要約すると、唱えられれば唱えられるほど、容易に悉地に至るであろう。[それゆえ(Cf.Tib)]これら(六字真言)のパタの儀則がある。そのときその機会に、大いなる怖畏のある五濁のときに、有情たちの福德は少なくなるであろう。身分の低い者たち、短命の者たち、恵まれない者たち、弱者たちは、あまりに詳細なパタの儀則の場合、儀礼の所作を行うことを始めとする諸々の儀礼行為を始めることができない。[そこで]彼らのために、私は非常に要略して説くであろう。

4 第四パタ作製儀則

4-1 画布の作製規定

まず始めに、勇ましい購入²によって綿糸を買い、1パラあるいは半パラの重さで、縦1肘(hasta)、横半肘の長さで、縁を有する布地が織工師によって織られるべきである。あるいは³、毛羽立ってなく他の新しい布地の断片を、[布地の断片の]前部(上部)の辺ごとに(pratyagram)⁴、これ(織工師がつなぎ合わそうとしている当該の布地の一辺)より上方に、望

¹ 当該箇所は、samavasaraṇa が複合語前部の saddharmanetra にかかると考えて上記のように訳出した。しかし、そのような解釈をする場合、samavasaraṇam と saddharmanetrāraṅgaṅgārtham を複合語として考えた方が自然であることから、この二語が複合語だった可能性も十分に考えられるだろう。また、テキスト後註で示すように、Nāmasaṅgīti に類似の表現を確認することができるが、当該箇所を Davidson は「一切の如来たちの正法を実践することの保持のために(for the sake of preserving the practice of the True Dharma of all Tathāgatas)」と英訳している。この Davidson の解釈と同様に、本経当該箇所の複合語末尾の-artham を「～のために」と解釈すれば、「集会した正法の指導者の守護のために」という訳も可能であろう。

² テキスト後註に示すように、vīrakraya という語は MMK[ch.4, vv.11-12ab]において定義されている。Tanemura[2004, p.237, note52]は、その定義の要点を以下の三点にまとめている。①織工師が要求する価格で購入すること②価格交渉をしないこと③直ちに支払うこと。このような購入態度、購入方法に対して、vīrakraya という語が用いられているようである。なお、Tanemura[2004, p.237, note52]は、vīrakraya と同様の意味で用いられている vīramūlya の用例や、仏教文献以外に vīrakraya が用いられている用例を取り上げている。

³ vā の位置が不自然であるが、当該箇所の趣意は、新たに画布のために縦1ハスタ・横半ハスタに織った布地を用いるか、あるいは、もともと行者が持ち合わせていた新しくて(いずれの目的にも使用されていない)毛羽立っていない布地の断片を、行者の望むままの大きさに縫い合わせるという意味に理解した。

⁴ おそらく、パタの画布となる布地の断片の四辺を、一辺ずつ、つなぎ合わせていくのだと考えられる。したがって、織工師がつなぎ合わそうとする布地の前部(上部)の辺(agra)ごとに(prati-), 布地の当該の一辺より(atas), 上方に、意のままの適切なハスタ分をつなぎ合わせることを指示する一文であると解釈した。

むままに、2 肘や 4 肘、あるいは、6 肘、5 肘、10 肘、あるいは 8 肘にきれいにつなぎ合わせて¹、意のままに、パタ[の画像]が、画師によって、白檀香、龍腦香、サフラン香の香りがつけられた固着していない染料を用いて描かれるべきであり²、そして白檀香やサフラン香や龍腦香を一つにして、虫がいなく塵のない水と混ぜ合わせて、新しい容器の中で、画布を洗い流して³、三日間、適切な覆いで覆って安置させるべし。清浄な場所で[画布の]守護をなし、自身を清浄にして、白分の満月のときに、[行者は]画布の入った容器の前で、東を向いて吉祥草座に坐して、これらの真言が 108 遍唱えられるべきである。

「オーム。ヘーヘー。世尊よ、多種多様の姿を有する者よ、天眼を有する者よ、私を観察せよ、観察せよ、三昧耶を想起せよ、童子の姿を有する者よ、偉大な菩薩よ、汝は何をためらおうか。フーム。フーム。パット。パット。スヴァーハー。」

この真言を唱え、まさにそこで眠るべし。夢の中で、悉地の有無を告げるのである。そこで、起き上がり、悉地の兆候のある夢を見たならば、速やかに⁴、かのパタ[の画像]を⁵描かせるべし。もし悉地の兆候の夢を見ないならば、かの画布をかの容器から取り出して、日向で乾かすべし。そして乾かした後、再度、新しい容器に安置すべし。極めて人目につかず守護された[画布]を安置させるべし。次に再び、それらの最勝心呪のうちのいずれかの真言を選んで、願望に応じて、六字[真言]のうちの一字につき 10 万返繰り返して唱えるべし。それより、速やかにかのパタ[の画布]が完成する⁶、と[世尊が述べた]。

¹ sam-√grah の意味を考慮すれば、「集める」というような意味になるだろうが、前後の文脈を考慮して「つなぎ合わせる」と訳出した。なお、テキスト後註で示すように、MMK ch.4 のパタの画布を作成する儀則の中で、綿糸を適切な重量に縊り合わせる場合には、sam-√hr が用いられている。

² citrayitavya が正規の形だと思われるが、citrāpayitavya の形が本経には頻出し、さらに他の密教文献においても、パタを作成する際の儀則の中で、しばしば citrāpayitavya の形が用いられている(Cf. テキスト後註)。これらの用例を参照する限り、使役の意味は含意されていないと思われる。

³ 現代のチベット人の画師も、タンカを制作するための綿布を事前に水洗いし、乾かす作業を行っているようである。もっともその背景には、工業用の糊を落とすという近代的な理由があるようだが、インド以来の伝統的な手法が伝承されている可能性も否定できないだろう(David&Janice[1984, p.16])。

⁴ māvilambitaṃ は Tib のように likhāpayet にかけるべきだと思われる。

⁵ 以下、しばしば作成中のパタを指して、taṃ paṭaṃ の場合と、tatpaṭaṃ の場合が確認される。文脈上、前述されている作成中のパタを指しているのならば、後者の形の方が理解しやすいが、他の用例を見る限り、意図的に両者の形を使い分けているとは思えない。したがって、訳出する場合も同一の形として理解しておく。

⁶ Tib は、当該箇所を aśubhaṃ paṭaṃ api sidhyati と読んでいるように思われる。おそらく t を bh と誤読したためか、訳出する際に用いられた梵本が転写されていく過程ですでに誤写されて伝承されていた可能性がある。こうした誤読あるいは誤写の箇所と、当該箇所前部の文脈を整合させるために、āśu から aśubhaṃ に訂正された可能性や、api に相当する yang が付加された可能性がある。

4-2 作画の規定

4-2-1 日時の選定

まず始めに、画布を取り、靈驗あらたかな白分の日、あるいは他の白分の日の日中において、あるいは、吉祥なる星宿に当たる吉祥な日¹白分の日の日中において、非常に壮麗な鳥たち²[を見ること]によって吉兆だとみなされた日の夜、[特に]真夜中に、齋戒した画師にかのバタを、清浄な場所で龍腦香を焚きながら描かせるべし。

4-2-2 諸尊の作画規定

4-2-2-1 主尊 文殊

まず始めに、幼い子供の容姿で、五髻を頭頂に有し、幼い子供の飾りによって飾られて、金色で、黒ずんだ腰衣をつけ、黒ずんだ上衣を着て、法を説きつつ、獅子座に半跏坐で坐し、右足を宝石でできた足台に置き、左足を(Cf. Tib)獅子座に置き、あらゆる飾りを有した素晴らしい外見で、少しく笑みをうかべて、行者に視線を向けた文殊師利を描かせるべし。

4-2-2-2 普賢

[文殊の]右側に、[右手で]白い払子を振り動かしつつ、黒い芥子のような黒色で、左手に如意宝珠を持ち、体全体がすばらしく、あらゆる飾りで飾られていて、黒ずんだ腰衣を着け、真珠が連なった飾りのついた祭紐を着け、立っていて、白い蓮華座の上にいる聖普賢が描かれるべきである、

4-2-2-3 観自在

聖文殊師利の左側に、秋季の月のように輝かしく³、黒ずんだ腰衣をつけ、体全体がすばらしく、あらゆる飾りで飾られていて、真珠が連なった飾りのついた祭紐を着け、左手に白蓮華を持ち、右手に、振り動かされている白い払子の金色の柄を持ち、寛容な容姿で、聖文殊に視線を向けている、聖観自在がいる。

まさに同様に聖普賢がいて、白蓮華座に住するその二尊がまた描かれるべきである⁴。

¹ śubhāyām は女性形、単数、処格の形だが、Tib を参照する限り、前の śubhanakṣatra-saṃyukte(男性形、単数、処格)を受けていると考えられる。

² ch.4, 3-1-3 では孔雀、シギ、ガン、鶴、ガチョウなどの種々の水鳥たちが吉兆を告げる鳥だと示されている。

³ Cf. <試作テキスト>ch.4 後註 42。

⁴ この一文は、普賢・観自在の両脇侍の尊容の特徴が説かれた後に付される一文である。

4-2-2-4 同根多枝蓮華・ナンダ・ウパナンダ

一つの蓮華の茎に、三つの蓮華座があり、真ん中の根本の蓮華の花芯において、聖文殊師利の獅子座と宝石でできた足台がある。第二の蓮華に聖普賢がいて、第三の蓮華に聖観自在がいる。また、かの蓮華の茎は壮大であり、エメラルドの宝石のような形状で、無数の蓮華の花のつぼみを有し、葉をそなえていて、開敷していたり半開敷している花を有し、大池 Anavatapta¹から生じている。八[大龍王]より二尊の龍王がいて²、その蓮華の茎はナンダとウパナンダによって支えられている³。また、かの二尊は、白色で、七つのかさ状の頭部⁴を有し、あらゆる飾りによって飾られた身体で、人間の半身を有し、龍のかさによって特徴付けられた外形で、聖文殊師利を観察しつつ、水中に半[身]を潜めていて、摩尼宝によって飾られた衣を身につけた二尊(ナンダ、ウパナンダ)が描かれるべきである。

4-2-2-5 行者

また普く大きな池が広がっていて、[文殊の]右側下方のパタの端の隅に、聖文殊師利の顔の辺りを観察しつつ、柄香炉を手を持ち、低頭で肘⁵と膝を曲げた行者が、装いや姿のま

普賢が白蓮華座に住すことはすでに 4-2-2-2 で説かれており、重複する情報である。両脇侍が白蓮華座に住することを強調したい意図があったのだろうか？いずれにしても、挿入的に付された一文である印象を受ける。

¹ Anavatapta は種々の経典の中で、池の名前や龍の名前として登場する(e.g. *Suvarṇabhāsa*, p.85, v.23; p.87, v.43; *Divyāvadāna*, p.344, 13; p.399, 14)。特に *Divyāvadāna* では、Anavatapta 池は行者が居住したり、修行する場所として記されている。

² Ms の当該箇所は、一部欠損しており、判読が難しい上に、判読可能な箇所も文脈や文法的に解決できない部分がある。Gaṇ の読みにも混乱があり、Gaṇ の提示する読みでは全く意味を理解できない。そこで、一つの可能性としてこのような読みを提示した。aṣṭa の Ab の形(aṣṭabhyah)から何らかの原因で ḥ が落ちてしまい(本経には、不規則な連声がしばしば確認される)、aṣṭabhya で Ab の形として考えた。なお、当該箇所の Tib には「大池 Anavatapta から現出した龍王 Nanda・Upananda の二尊が蓮華の茎を支える」とだけあり、梵本の混乱箇所に対応する訳語は見当たらない。また、前部の mahāsarānavataptotthitam を龍王 Nanda・Upananda にかけているようであり、梵本と Tib も一致していない。

³ 同様に ch.4, 3-3-2-2 においても、ナンダ・ウパナンダによって、同根多枝蓮華の中心の茎が支えられている構図を読み取ることができる。このような構図は、*Divyāvadāna* 第 12 章所説の「千仏化現」の一節に影響を受けていると思われる。

⁴ 当該箇所の sphāṭa の用例は、本経独自の形のようにであり、phaṭa あるいは phaṇa の形が一般的なようである。BHSdic. p.612 に当該箇所の用例があげられているが、sphāṭa の形に関する言及はなされていない。

⁵ テキスト後註で示すように、類似の表現を確認できる文献には、パタに描かれる行者の姿勢に関して、肘に言及する記述は確認できないが、korpara は、BHSdic. p.194 によれば、kūrpara(肘)から派生した形と考えられる。当該箇所の行者の姿勢に関する一連の記述を総合的に見れば、いわゆる蹲踞の状態では合掌している姿を描写していると考えて差し支えない。

まに描かれるべきである。

4-2-2-6 天子

聖文殊師利の上方でパタの両隅に、鬘をつけて、華鬘を持ち、飛びながら、雲の中にいて、大量の花をまき散らして、すばらしい姿の二尊の天子が描かれるべきである。

4-2-2-7 補足¹

また、[画像]全体にわたって Nāgakesara などの花がまき散らされたかのパタを描くべし。

また、望みのままに、あるいは、規定された(adhiṣṭhita)²三つの[尊容に関する]特徴を有した[三尊]を描くべし。[すなわち]法を説いている聖文殊師利、払子を手に持つ聖普賢と聖観自在が、描かれるべきである。

[前述の通りに]あるいは、行者の好みのままに三つの特徴が必ず描かれるべきである。[すなわち]行者の³、望んだ色形のままに⁴、あるいは、[望んだ]姿勢の状態のままに⁶、あるいは行者の思うままに、そのように描かれるべきである。

また中央に聖文殊師利、そして[文殊師利の]両側に聖観自在と普賢が、思うままに必ず描かれるべきである。

[前述の通りに]あるいは⁷、得られたままの布片の l vitasti、あるいは l hasta[四方]の大きさにおいて、自身によって、または他の画師によって、[さらに画師の中でも]齋戒を保つ画師、または齋戒を保たない画師によって、あるいは、信心ある画師、または信心のない画師によって、あるいは、清らかな画師、または不浄な画師によって、あるいは、素行の善い画師、または素行の悪い画師によって[であっても]⁸、描かれるべきである。

いだろう。

¹ 4-2-2-7 は、これまで述べられてきた第四パタ作製儀則の補足事項やオプションが述べられている。断片的な尊容に関する情報の補足や、パタ作製者の置かれた状況に合わせて柔軟に対応すべきことが説かれていることから、おそらく後代に付加された内容だと考えられる。

² 当該箇所 *trirūpakādhiṣṭhitam* の語は、梵本のみを確認できる。この *adhiṣṭhita* は、*vā* で並列的に接続されている *yatheṣṭatas* と対照的に用いられている語句と考えられるため、「規定された」「決定された」の意味で解釈した。具体的には、直後に後述される三尊の尊容に関する言及を指しているのであろう。

³ *sādhakasya* は後述される三つの要素の全てにかかると思われる。

⁴ おそらく *ākāra* は、行者の体格や衣の色などを指していると思われる。

⁵ 梵本には *yatheṣṭa* の語はないが、Tib には *'dod pa* があり、さらに前後の文脈を考慮して、「望むままに」の意味を補った。

⁶ おそらく *saṃsthāna* は低頭・合掌・蹲踞などの姿勢やポーズなどを指していると思われる。

⁷ 当該箇所の *vā* は直前の内容を受けているのではなく、4-1「画布の作画規定」の記述内容を受けていると思われる。va と ca は判読が困難であることから、ca であった可能性も否定できないが、梵本二本および Tib(*yang na*)も *vā* を支持している。

⁸ 梵本には *api* の語はないが、Tib は *gyis kyang* と意識しているようである。おそらく Tib

行者自らが、必ず、事前の準備を行い、浄信を伴い、菩提心を生じることによって、間違ひなくされるべきである。

5 第四パタの讚嘆偈

(1)このように、諸々の真言が成就するが、他の悪業を有する者たちには[諸々の真言は成就し]ない。浄信¹ある者には、そのようになり(諸々の真言が成就し)、諸々の真言の尊格たちが成就されるべきである。

(2)かの浄信ある者のみに対して、ここに真言の王が成就するのであり、他に方法はない。なぜならば、浄信は最勝の乗り物だからであり、それゆえ、指導者たちが現れるだろう。

(3)浄信のない者には、清らかな法は生じない。火で焼かれた種の芽が出ないように²。

(4)浄信のある者には、儀礼行為によって菩提に向かい、その者(浄信のある者)³には、[真言の]尊格たちが成就する。浄信のない者には、[真言は]成就しない。

(5)浄信のない者には、あらゆる真言が様々な方法で成就せず⁴、いかなる世間・出世間

の *gyis kyang* は、当該箇所において対照的に列挙されている各形容句の後者にかかると考えられる。筆者も文脈を考慮して、Tib に倣って訳出した。

¹ 以下、ch.7, 5 に説かれる偈では、浄信の重要性を強調する意図が強く認められる。本経 ch.4, 3-2-3, vv.41cd-44ab などにおいても、浄信の重要性を説く記述を確認できるが、ch.7 の当該箇所はその特徴が顕著である。また *Amoghpaśākalparāja*(密教聖典研究会[2000, 45b3-4])中のパタ作製儀則においても、本経と同様に浄信の重要性を説く一節がある。

saha darśanamātrena ayam duṣyapaṭaṃ janmaśatasahasram avīcisañcitam pañcānantaryakāraṃ te sarve naśyanti vinaśyanti / sattvāṃś ca tān sarvān parimucyanti / prāg eva śuddhasatvānām / śraddhādhimuktikānām ratnapūjārthikānām ta ihaiva janmani mahāphalaṃ mahānuśamsā pratikāṅkṣitavyā /

² テキスト後註で示すように、v.2cd-v.3 は、*Śikṣāsamuccaya*[p.5, 8-11]において、*Daśadharmasūtra* からの引用とされる偈と類似している。*Daśadharmasūtra* には、僧伽婆羅訳『佛説大乘十法経』(no.314)、菩提流志訳『大寶積経』(no.310)「大乘十法会」の漢訳二本が現存する。このうち、僧伽婆羅の訳出活動の期間は、『開元録』[vol.55, p.537c7-26]によれば、506年(天監五年)~524年(普通五年)と推定できる。したがって、*Daśadharmasūtra* の成立年代は5世紀後半頃まで遡ることができるため、本経の当該箇所の偈よりも *Daśadharmasūtra* の偈の方が先行すると考えるのが妥当であろう。なお、同様の趣意の偈は、ch.4, v.43cd-44ab にも確認できる。

³ 当該の *tasya* は a 句の *śraddhe sthitasya martyasya* を受けて、次の語の *śraddhasya* と対立させた構文であると解釈した。

⁴ v.5a 句は、直前の v.4d 句とほぼ同一の語句であったために、脱落してしまったと推測される。梵本は v.5a 句を欠き、Tib は梵本の v.4cd に相当する部分を欠いて梵本 v.5ab に相当

の[真言の]尊格であっても、同様に[成就しない].

(6)汚れを遠離しているために、浄信のある者には全て[の真言]が成就するのである。それ(浄信)に向かった心¹を有するかの者たちには、速やかに、堅固な悉地があり、菩提がある。

(7ab)他の、この教説に排除された者たちには、悉地は説かれない。

(7cd)非常に小さい、あるいは勝れた、あるいは中位のパタが説かれた²。

(8ab)今、私は一切の儀礼行為に関して、成就法を説くであろう³。

菩薩藏大乘經典の聖文殊師利根本儀軌の広大な章品より、第7章、
第四の広大なパタ儀則、説き終わる。

する部分のみを訳出している(すなわち Tib は *aśrāddhasya na sidhyati/sidhyanti* に相当する語を一度しか訳出していない)。したがって、いずれの文献資料も v.5a 句に相当する語句を欠いているため、写本を書写していく過程の中のかなり古い段階において、v.5a 句が脱落してしまった可能性が疑われる。

¹ 複合語 *tadgatamānasām* の末尾 *mānasām* の解釈は、テキスト後註で示す通り、*manas* の複数、属格の形が韻律の制限を受けて *mānasām* となったと思われる。おそらく、この *tadgatamānasām*(それに向かった心を有する者たち)と、*anyeṣām* および *śāsane 'smin nivāritāḥ* が対照的に扱われていると思われる。

² *viśeṣa*, *madhyama* は、各々、最勝パタ、中位パタを指していると考えて問題ないが、*svalpa* に関しては、問題があるだろう。第4章から第6章に各々説かれる最勝パタ、中位パタ、小位パタは、本論文の研究篇<本論>第3章で指摘するように、明らかに三種セットで扱われていたと考えられる。このような三種のパタのみが本経に説かれるならば、*svalpa* は第6章所説の小位パタであるとして問題ないだろう。しかし、本章所説のパタは、章末のコロフォンに示されるように、「第四パタ」として位置づけることが可能であり、その特徴や構図は、小位パタと多くの部分で共通する。したがって、当該箇所の*svalpa* は、第7章中に説かれた「第四パタ」と見るのが自然であろう。おそらく、本章の第四パタと第6章の小位パタは、同一系統にあり、本経において元来セットで扱われていた三種のパタのうちの小位パタと代替可能なパタとして、本経の第7章に組み込まれたのではないだろうか。

³ v.8ab は、明らかに不自然であり、おそらくパタ成就法を説く次の第8章に接続するために、後代に挿入された一節であろう。

第8章 試訳

1 最勝パタ成就法説示の因縁譚

1-1 釈迦牟尼による成就法説示の提案

その時、世尊釈迦牟尼は、文殊師利童子に[以下のように]仰せになられた。「文殊師利童子よ、誰であれ、汝によって教化される有情、その有情たちのために、この広大なパタの儀則が説かれたのであり、その者たちは、まさにわずかな方便によって成就するであろう。彼らのために、成就法の方便を功德の大きさや区別に応じて、私は儀礼行為の区分を説こう。汝はそれを聞きなさい。そして正しく善く思念しなさい。[そうすれば]一切有情のために私は説こう。」

1-2 文殊の請願

そのとき、文殊師利童子は、世尊にこのように申し上げた。「善きことであります。善きことであります。世尊よ、汝のすばらしき言説は、我々の認識を明らかにするものであり、真言行の功德の成就を明示する言葉であります。世尊はそれ(パタの儀則)をかのかの者にお説きください。今やその時です。我々に対する憐れみのために。」

1-3 釈迦牟尼の微笑と光明の出現

そのとき世尊釈迦牟尼は一切集会マンダラを見て微笑した。そして、世尊釈迦牟尼の口から青色・黄色・水晶色などの光明が現れた¹。そして光明が現れるや否や、一切集会マンダラを遍く照らし、三千大千世界や一切の魔宮を遮り、その光明によって[照らされた]一切の星宿の輝きや山々の光明、大神通力や大威神力を有するこの月天と日天、それらもまた遮られて、輝かされず、また光を奪われ、照らすことなく、また遮られたと認知される。[光明は]一切の摩尼とマントラと薬と宝石の輝きを奪い、再び、世尊釈迦牟尼の口の中に吸収されたのであった。

¹ 仏の微笑と放光を契機として聴聞者が授記される一連の流れは、しばしば仏典において確認されるが、平岡[2001, 「有部系説話文献に見られる授記の定型句」]によれば、有部系の部派に帰属できる説話文献に顕著に確認できる定型表現だという。さらに平岡[2001]によれば、一連の定型表現は「ブツダの微笑と放光」→「光明の巡回」→「光明の帰入場所と記別の種類の説明」→「アーナンダの質問」→「ブツダの回答」の五項目に整理できるようである。本経ではアーナンダに代わり、密教經典に対告衆として頻繁に登場する金剛手が微笑の因縁について尋ねているが(Cf. ch.8, 1-4)、授記されるまでのストーリー展開には、類似点が指摘できるだろう。

1-4 金剛手による微笑の因縁に関する問い

そのとき、金剛手菩薩摩訶薩は、まさにその集会マンダラの中に集会していた。坐していたかの金剛手は立ち上がり、急いだ様子で世尊の両足に頂礼して、世尊にこのように申し上げた。「尊き諸仏たちは、因なくして縁なくして、微笑を示すことはありません。世尊よ、何が微笑の因縁であるか、明らかにされるべきであります。」

1-5 金剛手に対する授記

このように[金剛手菩薩が]申し上げると、世尊は金剛手菩薩にこのようにおおせになられた。「金剛手よ、その通りである。その通りである。汝が述べる通り、その通りである。因縁なくして如来たちの微笑はないのである。因があり、縁があったのである。誰かある者たちが、この經典の王であり、明呪行の実践、儀礼行為、成就法の方便を集めた法雲の抛り処に入り随順する文殊師利根本儀軌を行じ、受持し、読誦し、信受し、經典書写をして、供養して、[すなわち]白檀香を塗ること、焼香、華鬘によって、あるいは様々な傘蓋と幢と幡によって、あるいは種々の殊勝な音楽によって、あるいは種々の鑿・鉞によって、同様に、歡喜を伴い、あるいは不断の心で念誦し、あるいは身毛を逆立て興奮し、あるいは明呪の威徳と威力を聞き、身震いして喜んで、あるいは行を成就するであろう、その者たちは、私によって、その全ての者たちが無上正等菩提に達するだろうと授記されるのである。それ故、まさに仏陀世尊である勝者たちが微笑したことに他ならないのである。」

2 最勝パタ成就法

2-1 前行

まず始めに、三昧耶を觀察し、前行をなし、灌頂を受けた者が、この[パタ成就法]において、儀軌王の根本の真言や心呪、あるいは随心呪、あるいはいずれか一つの真言を受持して、一字[真言]あるいは他[の真言]を¹意のままに、広大なアランヤにおもむいて三十洛叉遍誦すべきであり、果実や水を飲食とし、あるいは根と葉を食すことは、前行をなすこととなる。

2-2 パタに対する香華の供養

¹ 本經第2章には、マンダラの造立法の説示に先立ち、種々の真言が説かれている。これらの真言は、本經所説の様々な密教儀礼において使用可能な真言だと考えられることから、おそらく本經第2章所説の真言を指していると考えられる。なお、最勝パタ作製儀則を説く本經第4章(資料篇<テキスト>ch.4, 3-1-1)には、パタの原料となる綿糸や、それを織り上げて作製する画布などを浄化するための真言が説かれているが、パタ成就法のための前行となるような真言行は説かれていない。

次に[行者は]、山頂に登り、最勝のパタを西方に向けて安置して、自身は東方を向き、クシャ草座に坐して、白檀とククマを塗った白蓮華を一洛叉遍、世尊釈迦牟尼および一切諸仏・菩薩・縁覚・聖声聞たちのいるパタ¹の下に供養すべし。樟脳香もまた資力に応じて焚くべし。天子や龍たちに対しても得られる限りの花で供養すべし。

2-3 護摩

次に、真夜中の時分で、神通円満する自分の満月のときに、パタの前に蓮華の形の火炉を作り、白檀の乳木を用いて火を燃やし、そしてククマと樟脳を和合して、八千遍、供物を火中に捧げるならば、威力に応じて守護がなされる。

2-4 光明の出現

すると、[パタに描かれた]世尊釈迦牟尼から諸々の光明が現れ、パタが遍く一つの光輝となる。そして行者は、すばやくパタを右に三匝して、一切諸仏・菩薩・縁覚・聖声聞を礼して、目の前の描かれた行者のパタの端より、恐れずにパタをつかむべきである。

2-5 悉地の獲得

そこで、[パタは]つかまれるや否やすぐに上昇する。弾指程の間に梵天界を過ぎ、開華世界に趣くのである。かの世尊開敷華王自在如来が住し、[仏国土を]保持し、時を過ごし、また法を説き、[行者が]²文殊師利を目の前に見て、法を聞き、数十万もの菩薩をもまた見て、そして³その菩薩たちに恭敬し、大千劫もの間老死のない享樂者となる所、まさにそこにパタがあり、一切諸仏諸菩薩に加持されるのである。また⁴[行者は]彼ら(諸仏諸菩薩たち)の加持を理解するのである。また十万の仏国土に行き渡り、あるいは百千の身を現して、多くの神通力や威神力を生じる者となり、また文殊師利が善知識となり、必ず菩提の目的に至るだろう。

菩薩藏華嚴大乘經典より、第8章。

広大なる最勝成就法に関する事業より、第一[パタ成就法の儀則]終わり。

¹ 当箇所にあげられている諸尊は全て、第4章の最勝パタ作成儀則において描かれる指示がなされており、明確な対応関係が確認できる。

² 行者を示唆する語が見当たらないが、文脈を考慮して行者を主語として補っておく。

³ Tib は、*de dag bsnen bkur yang byed de bskal pa chenpo stong du rga ba dang 'chi ba med cing gnas par 'gyur ro* | とあり、Tib は下線部の *de* によって行者を当該箇所の主語として示唆していると思われる。しかし、梵本には *de* に相当する代名詞は見当たらない。

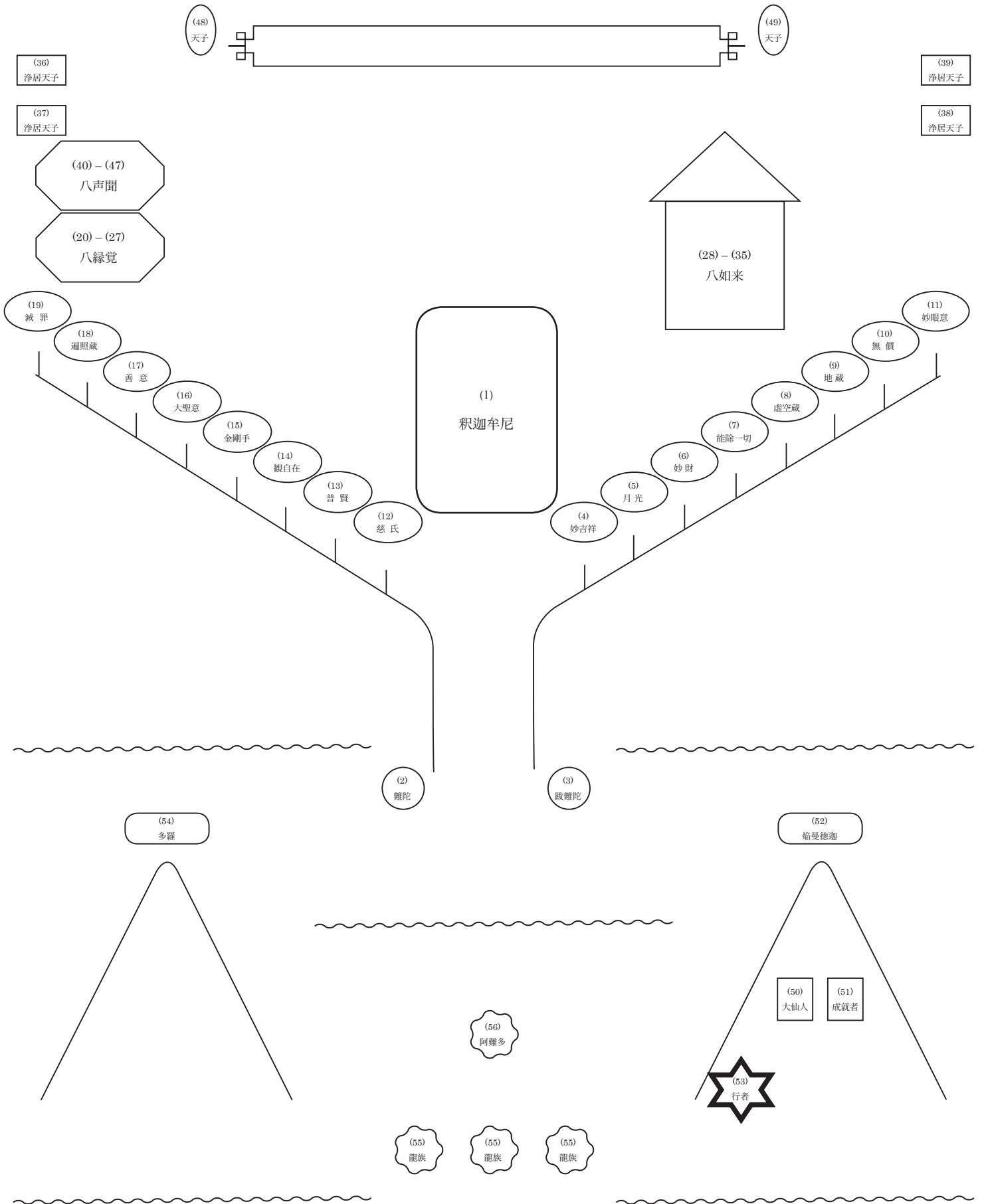
⁴ *ca* の位置を考慮して、前部の *bhavati* の主語をパタ、当該箇所の *sañjanīte* の主語を行者と理解しておく。

<復元図試案>

「最勝パタ」諸尊表

| | | | | |
|----------------|---------|-----------------------|--|----------|
| 主尊 | 1 | Śākyamuni | Śākya thub pa | 釋迦牟尼佛 |
| 龍王 | 2 | Nanda | dGa' bo | 難陀 |
| | 3 | Upananda | Ñe dga' | 跋難陀 |
| 八菩薩 (主尊の左辺) | 4 | Mañjuśrī | 'Jam dpal | 妙吉祥菩薩 |
| | 5 | Candraprabha | Zla ba'i 'od | 月光菩薩 |
| | 6 | Sudhana | Nor bzañs | 妙財菩薩 |
| | 7 | Sarvañīvaraṇa | sGrib pa rnam par sel ba | 能除一切蓋菩薩 |
| | 8 | Gaganagañja | Nam mkha' mdzod | 虛空藏菩薩 |
| | 9 | Kṣiṭigarbha | Sa'i sñin po | 地藏菩薩 |
| | 10 | Anagha | sDig med | 無價菩薩 |
| | 11 | Sulocana | sPyan bzañ | 妙眼意菩薩 |
| 八菩薩 (主尊の右辺) | 12 | Maitreya | Byams pa | 慈氏菩薩 |
| | 13 | Samantabhadra | Kun tu bzañ po | 普賢菩薩 |
| | 14 | Avalokiteśvara | sPyan ras gzigs dbaṅ phyug | 觀自在菩薩 |
| | 15 | Vajrapāṇi | Phyag na rdo rje | 金剛手菩薩 |
| | 16 | Mahāmāti | Blo gros chen po | 大聖意菩薩 |
| | 17 | Śāntamāti | Blo gros źi ba | 善意菩薩 |
| | 18 | Vairocanaḡarbha | rNam par snang mdzad snyiñ po | 遍照藏菩薩 |
| | 19 | Apāyājaha | Ñan soñ spoñ ba | 滅罪菩薩 |
| 八緣覺 | 20 | Gandha | sPos | 嚩駄辟支佛 |
| | 21 | Mādana | Ñad ldan | 摩捺曩辟支佛 |
| | 22 | Candana | dMan pa | 贊捺曩辟支佛 |
| | 23 | Upařiṣṭa | Ñe ba'i 'chi ltas | 烏鉢哩瑟吒辟支佛 |
| | 24 | Śveta | dKar po | 濕吐多辟支佛 |
| | 25 | Sitaketu | dKar po'i tog | 悉多計觀辟支佛 |
| | 26 | Nemi | Mu khyud | 彌弭辟支佛 |
| | 27 | Sunemi | Mu khyud bzañ po | 蘇彌弭辟支佛 |
| 八如來 | 28 | Ratnaśikhi | Rin chen gtsug tor can | 寶頂如來 |
| | 29 | Samkusumitarājendra | me tog yañ dag par skyes pa'i dbaṅ po'i rgyal po | 開花王如來 |
| | 30 | Sāleṅdrarāja | 欠 | 娑陵捺囉王如來 |
| | 31 | Sunetra | sPyan bzañ po | 妙眼如來 |
| | 32 | Duḡprasaha | bsÑen par dka' ba | 擣鉢囉娑憾如來 |
| | 33 | Vairocana | rNam par snañ mdzad | 遍照如來 |
| | 34 | Bhaiṣajyavaidūryarāja | sMan gyi bla baiḡūrya'i 'od kyi rgyal po | 藥師琉璃王如來 |
| | 35 | Sarvaduḡkhaḡraśamana | sDug bsñal thams cad źi bar byed pa'i sḡyan gyi rgyal po | 斷一切苦王如來 |
| 淨居天子 | 36 | Śuddhāvāsa | gNas gtsaṅ ma'i lha'i bu | 淨光天子 |
| | 37 | | | |
| | 38 | | | |
| | 39 | | | |
| 八声聞 | 40 | Śāriputra | Śāri'i bu | 舍利弗 |
| | 41 | Mahāmaudgalyāyana | Maudgala gyi bu chen po | 大目乾連 |
| | 42 | Mahākāśyapa | 'Od sruñ chen po | 大迦葉 |
| | 43 | Subhūti | Rab 'byor | 須菩提 |
| | 44 | Rāhula | sGra gcan 'dzin | 羅睺羅 |
| | 45 | Nanda | dGa' bo | 難陀 |
| | 46 | Bhadrika | bZaṅ ldan | 婆捺哩迦 |
| 47 | Kaphiṇa | Kapina | 劫賓那 | |
| 天子 | 48 | Devaputra | gNas gtsaṅ ma'i lha'i bu | 淨光天子 |
| 49 | | | | |
| 大仙人 | 50 | mahaḡṣaya | Drañ sroñ chen po | 大仙人 |
| 成就者 | 51 | Siddha | Grub pa | 欠 |
| ヤマーンタカ | 52 | Yamāntaka | gŚin rje gśed | 焰曼德迦忿怒明王 |
| 行者 | 53 | Sādhaka | sGrub pa po | 持誦者 |
| ターラー | 54 | Tārā | sGrol ma | 多羅菩薩 |
| 龍族 | 55 | Nāgabhogā | Klu yi gdeñs ka | 大海龍王 |
| | 56 | Ananta | mTha' yas | 阿難多 |

梵本に基づく「最勝パタ」復元図試案



「中位パタ」諸尊表

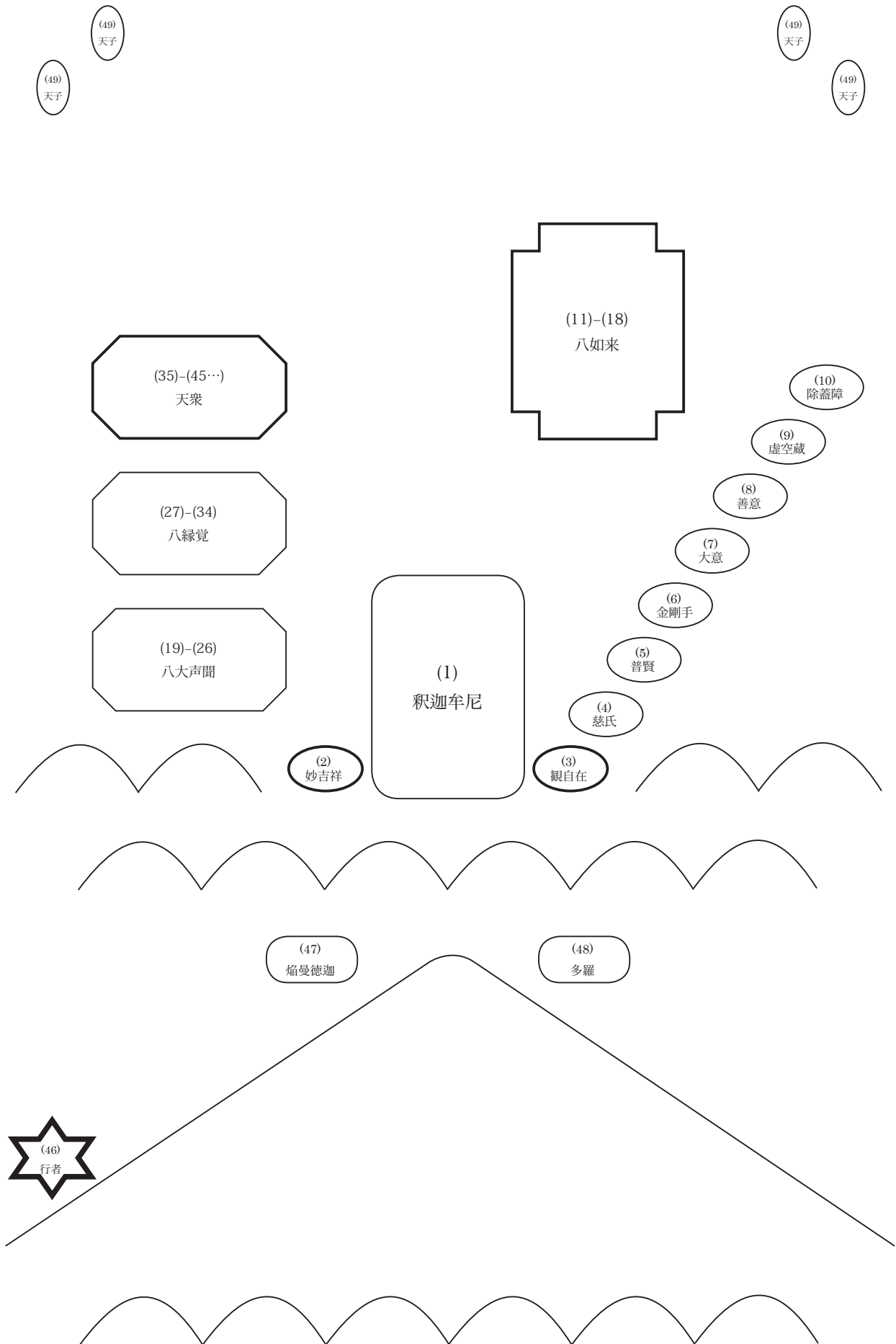
| | | | | |
|----------------|----|--------------------------|--|------------|
| 主尊 | 1 | Śākyamuni | Śā kya thub pa | 釋迦牟尼佛 |
| 文殊 | 2 | Mañjuśrī | 'Jam dpal | 妙吉祥菩薩 |
| 八菩薩 (主尊の左辺) | 3 | Avalokiteśvara | sPyan ras gzigs dbaṅ phyug | 觀自在菩薩 |
| | 4 | Maitreya | Byams pa | 慈氏菩薩 |
| | 5 | Samantabhadra | Kun tu bzaṅ po | 普賢菩薩 |
| | 6 | Vajrapāṇi | Phyag na rdo rje | 金剛手菩薩 |
| | 7 | Mahāmāti | Blo gros chen po | 大意菩薩 |
| | 8 | Śāntamati | Zi bar gśegs pa | 善意菩薩 |
| | 9 | Gaganagaṅja | Nam mkha' mdzod | 虛空藏菩薩 |
| | 10 | Sarvanīvaraṇaviśkambhina | sGrib pa thams cad rnam par sel ba | 除蓋障菩薩 |
| 八如来 | 11 | Samkusumitarājendra | Me tog yaṅ dag par skyes pa'i rgyal po'i dbaṅ po | 開華王如來 |
| | 12 | Ratnaśikhin | Rin chen gtsug tor | 寶頂如來 |
| | 13 | Śikhin | gTsug tor can | 欠 |
| | 14 | Viśvabhuj | Thams cad skyob | 毘舍浮如來 |
| | 15 | Krakucchandaka | Log par dad sel | 羯俱伐羅如來 |
| | 16 | Kanakamuni | gSer thub | 俱那含牟尼如來 |
| | 17 | Kāśyapa | 'Od sruṅ | 迦葉如來 |
| | 18 | Sunetra | sPyan bzaṅ | 妙眼如來 |
| 八声聞 | 19 | Śāriputra | Śā ri'i bu | 舍利弗 |
| | 20 | Mahāmaudgalyāyana | Maud ga la gyi bu chen po | 大目乾連 |
| | 21 | (Mahākāśyapa) | ('Od sruṅ chen po) | (大迦葉) |
| | 22 | (Subhūti) | (Rab 'byor) | (須菩提) |
| | 23 | (Rāhula) | (sGra gcan 'dzin) | (羅睺羅) |
| | 24 | (Nanda) | (dGa' bo) | (難陀) |
| | 25 | (Bhadrika) | (bZaṅ ldan) | (婆捺哩迦) |
| | 26 | (Kaphiṇa) | (Ka pi na) | (劫賓那) |
| 八縁覚 | 27 | (Gandha) | (sPos) | (嚧駄辟支佛) |
| | 28 | (Mādana) | (Nad ldan) | (摩捺曩辟支佛) |
| | 29 | (Candana) | (dMan pa) | (贊捺曩辟支佛) |
| | 30 | (Upariṣṭa) | (Ne ba'i 'chi ltas) | (烏鉢哩瑟吒辟支佛) |
| | 31 | (Śveta) | (dKar po) | (濕吐多辟支佛) |
| | 32 | (Sitaketu) | (dKar po'i tog) | (悉多計覩辟支佛) |
| | 33 | (Nemi) | (Mu khyud) | (儺弭辟支佛) |
| | 34 | (Sunemi) | (Mu khyud bzaṅ po) | (蘇儺弭辟支佛) |
| 天衆 | 35 | Indra | lHa rnam kyī dbaṅ po brgya byin | 帝釋天主 |
| | 36 | Sayāma | 'Thab bral | 夜摩天主 |
| | 37 | Samtuṣita | dGa' ldan | 觀史天主 |
| | 38 | Sunirmita | 'Phrul dga' | 樂變化天主 |
| | 39 | Śuddha | Dag pa | 淨光天子？ |
| | 40 | Vimala | Dri ma med ps | 欠 |
| | 41 | Sudṛśa | 'Jam pa ? | 欠 |
| | 42 | Atapa | Mi gduṅ ba | 欠 |
| | 43 | Ābhāsvara | 'Od gsal | 欠 |
| | 44 | Brahman | Tshaṅs pa | 大梵天王 |
| | 45 | Akaniṣṭha | 'Og min | 色究竟天 |
| 行者 | 46 | Sādhaka | sGrub pa po | 持誦者 |
| ヤマーンタカ | 47 | Yamāntaka | gŚin rje gśed | 焰曼德迦忿怒明王 |
| ターラー | 48 | Tārā | sGrol ma | 多羅菩薩 |
| 天子 | 49 | Devaputra | lHa'i bu | 淨光天子 |
| | 50 | | | |
| | 51 | | | |
| | 52 | | | |

※ () 内の尊格は第4章の最勝パタ作製儀則の記述より補った。

※ 「行者 (46)」は、パタの端の一隅に (ekasmin paṭāntakone) 描くべきだとされており、具体的な位置が示されていない。したがって、中位パタ復元図試案では、中位パタのベースとなる最勝パタの作成儀則を参考にして、釈迦牟尼の右辺 (文殊側) のパタの隅に配置した。

※ 「天衆 (35)–(45)」は、儀則の中で固有名詞があげられている尊格のみをあげている。儀則によれば、(35)–(45) の天衆を始めとする色界や欲界の天子たちを描くべきだとされており、実際の作例には、(35)–(45) 以外にも多くの天衆が描かれていた可能性がある。

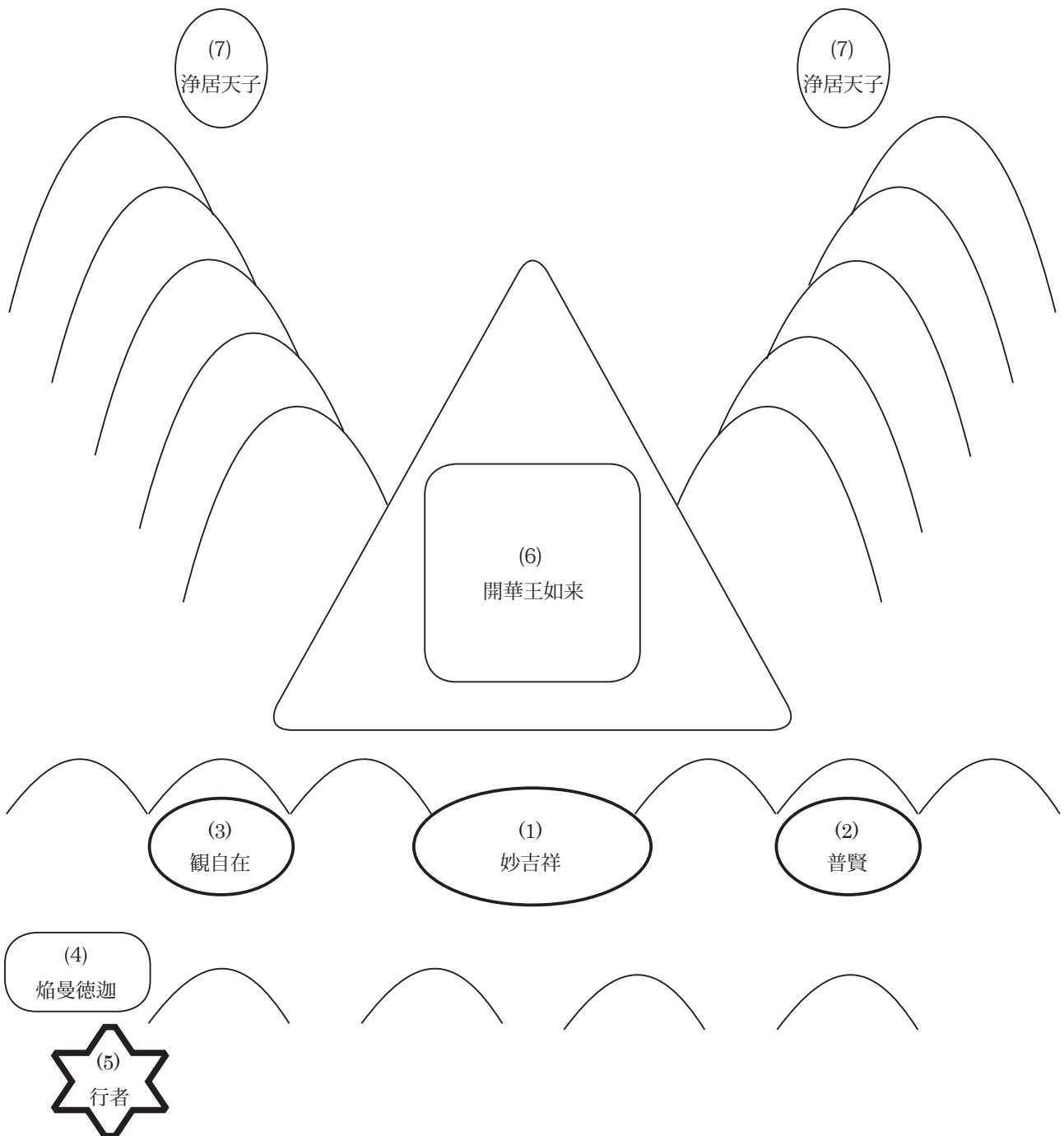
梵本に基づく「中位パタ」復元図試案



「小位パタ」諸尊表

| | | | | |
|--------|---|---------------------|--|----------|
| 主尊 | 1 | Mañjuśrī | 'Jam dpal | 妙吉祥 |
| 脇侍 | 2 | Samantabhadra | Kun tu bzañ po | 普賢菩薩 |
| | 3 | Avalokiteśvara | sPyan ras gzigs dbañ phyug | 觀自在菩薩 |
| ヤマーンタカ | 4 | Yamāntaka | gŚin rje gśed | 焰曼德迦忿怒明王 |
| 行者 | 5 | Sādhaka | sGrub pa po | 持誦者 |
| 如来 | 6 | Samkusumitarājendra | Me tog yañ dag par skyes pa'i dbañ po'i rgyal po | 開華王如来 |
| 浄居天子 | 7 | Śuddha | lHa'i bu dag pa | 清浄 |
| | 8 | Viśuddha | rNam par dag pa | 妙浄 |

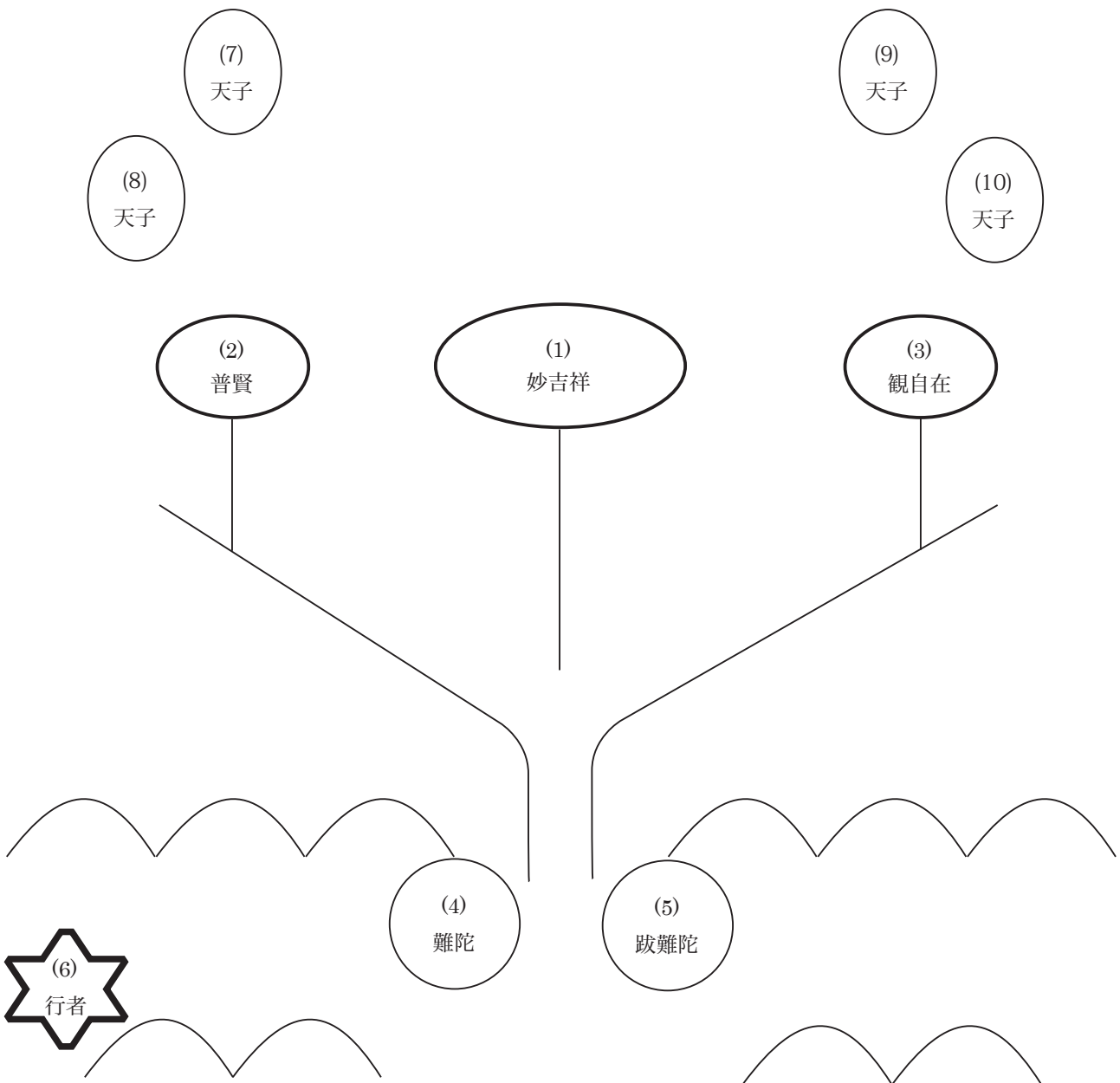
梵本に基づく「小位パタ」復元図試案



「第四パタ」諸尊表

| | | | | |
|----|----|----------------|----------------------------|-------|
| 主尊 | 1 | Mañjuśrī | 'Jam dpal | 妙吉祥 |
| 脇侍 | 2 | Samantabhadra | Kun tu bzañ po | 普賢菩薩 |
| | 3 | Avalokiteśvara | sPyan ras gzigs dbañ phyug | 觀自在菩薩 |
| 龍王 | 4 | Nanda | dGa' bo | 難陀 |
| | 5 | Upananda | Ñe dga' | 跋難陀 |
| 行者 | 6 | Sādhaka | sGrub pa po | 持誦者 |
| 天子 | 7 | Devaputra | lHa'i bu | 天子 |
| | 8 | | | |
| | 9 | | | |
| | 10 | | | |

梵本に基づく「第四パタ」復元図試案



< 参考資料 >

トンワトウンデン図

